



第一章 不眠症の憂鬱

よく晴れた昼下がり。私はそんな景色を望んではいない。

真っ暗な夜が好きだし。どんよりと曇った空が大好きだ。

真っ黒な感情ばかりが湧き上がってくる。

私はゴス。死や負の芸術に魅せられた者だ。

幻想文学、シュルレアリズム絵画を好み。

生きる時間を止めた球体関節人形や、異界を象徴する吸血鬼などのフリークス。

それらを私は愛しく思う。

たとえ、ちゃっちなメロディを鳴らしていたとしても、退廃的なヴィジュアル系ロック・ミュージシャンを愛し、デス・メタル。ゴシック・メタル、ブラック・メタル、まあ暗黒系の音楽ならば何でも好む。

此の世界の住民とは明らかに違う質量を持って、私は存在しようとしている。その感性は別に、他者に理解などされなくともいい。

「オレはクラシックと形而上学書が好きだ」

相棒の甘名は、そう告げた。

私達は、仕事の依頼を待っている。

高層ビルの最上階、蒼褪めた景色を眺めながら。私は陰鬱な気分にあふれる。太陽光が気持ち悪く、私の肉体を刺す。

私達は、バウンティ・ハンター。所謂、賞金稼ぎ、という職業をしていた。

アミュレット・コーティングという、魔術によるコーティングのされたゴシック・パンク・ファッションに包まれながら、私は右腕のエネルギーの調整をしていた。

甘名は男であるにも拘らず、胸元がシャーリングの黒いロリィタ・ファッションに包まれながら、煌びやかなクリスタルの施されたヘッド・ドレスを身に付け。胸元には小さな十字架のペンダントをいくつも下げていた。幾重にも穿いたパニエによって下半身はカボチャのように肥大化している。

私は上着に、穴あきの。血液の飛沫の柄が付いた黒いブラウスを着て、両手には鉤と鎖の付いた腕輪を幾つか嵌めている。下は、パンツスカートとラバーソールだ。

これは、特に私達が奇矯な格好をしている、というわけではない、私達の所属する組織、『ドーン』の人間は、大体、このようなスタイルを身に纏っている。

私は死や死の芸術に見せられた、だから、ドーンに入った。おそらく、私のような理由でドーンに入った人間などどれくらいいるのだろうか。

世界に対しての、立ち位置を決めようと考えていた。私達は、おそらく何者でもない。だからこそ、着地する場所を見つけなければならないのだ。

私、柏木否睡は始末屋だ。

『ドーン』という組織に属している。所謂、世界にとって都合の悪い存在を始末する仕事をしている。

八階建てのビルの最上階、灰色の雲に混ざる光が街を灼いている。

此処から見下ろす景色は、何処までも美しい。

私は一般市民に紛れ込み、今日も所謂、学生としてそれなりの大学に通っているのだが、本業は裏家業と奴だった。もっとも、私からしてみれば、この世界の方が世界の裏側なのだが。

私の相棒は、甘名という名前だった。

こいつが、本当に面白い奴で、男なのに、いつも女装をしていた。

スレンダーな肉体。

彼はオレンジ色の髪を撫でながら、私に対して悪態を返した。

私達は、ドーンからの指令で能力者狩りをしていた。

さて、任務を始めようか。私は携帯のメールを見て、溜め息を吐いた。

忘却した世界が、何よりも美しい。

学生生活は非常に馬鹿馬鹿しかった。もう、数年も前になるだろうか。今では、連絡を取り合っているのは、友人であり、同業者の甘名くらいしかいない。私は記憶の断片を辿りながら。穏やかな時空を思い出す。

血生臭い世界の不条理との対面など何も知らず。殺人や殺し合いや、テロリズムや。もう、光には戻れない。

私の主観で見た、聞いた物事と。お前らの主観で見た、聞いた物事は違うのだ。

廃墟のゴミ袋を並んだ海岸のような、エピソードで始めさせて貰う。

さて、私は一応、自身の姿形に付け込んで、学生なるものをしている。

学校には一応通っているのだが、勿論、カモフラージュだ。

そろそろ、標的を始末する為に動かなければならない。

私達は、8階のビルディングを飛び降りた。

敵が現れたからだ。

そうして、今日も賞金首を追う。

.....

.....

十

いつも、狩りに興じている私だが。日常は至って普通だ。

普通の女子学生なのだ。

友人などと一緒に会話などもしたりする。

彼女の服装は、いつもの彼女お気に入りの白いパーカー。

肩で切り揃えた茶髪の少女が言う。どうやら、私の友人らしい。私は友人など作ったつもりなど無いのだが、彼女はどうやら私に懐いているみたいだった。

「ひいちゃんはやっぱり普通の女の子だよ」

と彼女は告げる。

う……、今、こいつ。

さらりと、とんでもない事を断言しやがった。

「ほ、本気で言っているのか……？」

私は少し仰天する。

「本気だよ」

「マジか……」

こいつ馬鹿じゃないのか？

ていうか頭がどこかおかしいのだろうか。病んでいる所があるのだろうか。それならば、昔、自分も通っていた病院を紹介しようか？

それとも何かの悪い冗談なのか？

あるいは宇宙より電波を受信したのだろうか？

と。

何の感慨もなく私はそう思った。

絶対、今の私の顔は引き攣っている。

「睦月、それは何をもって私を普通だと認めるのかな？」

午後の教室。

単位制の高校で、たまたま私達二人は誰もいない教室で冷房を勝手に付けながら、何をするでもなく雑談に花を咲かせていた。

私の名は否睡。

十七歳のゴス少女。身体は色白、痩せ気味、小柄。ヴィジュアル系大好き。球体関節人形大好き。内臓大好き。シェイクスピアと澁澤龍彦、寺山修司、江戸川乱歩の大ファン。と、適当な事を言っておいた。

とまあ、動揺の余り軽く脳内で自己分析が行なわれた。分かりやすいカテゴライズに当て嵌まる人物像を私はしていた。

ちなみにこいつは睦月。救い難いオタ女。

私の中のオタクというイメージはこの女であり、この女で完結している。

「貴様は貴様の中の認識という螺子がどこか外れている事にそろそろ気付かないのか？ 外れているのなら、早くプラスドライバーで撒き直した方がいいんじゃないのか？ でなければ洩れだすぞ、脳漿が」

「へっ？ というത്？」

「例えるならばだ。貴様の頭には虫が湧いているのではないか？ それとも、腫瘍か何かが膨れ上がっているのか？ それとも認知障害なのか？ あるいは地球外生命体に何か銀色の機械でも埋め込まれたのか？」

思い付く限りの罵詈雑言を並べてやる。

「な、何かこの私めが貴女様のお気に召さぬ事を申したのでしょうか？」

きょとんとした顔で、睦月は首を傾げた。

こいつ、やっぱり天然で言ってやがったのか。

「そうだな。この私がまともじゃないのは承知している。それは、どうしようもなく手遅れな事も認識している。だが、お前がまともじゃないのは心配だ。お前には私と同じような道を歩んで欲しくない。それは友人として至極気にかけるべき事じゃあないのか？」

「分からないって。もうちょっと、分かりやすく説明してよ」

私は苛立たしげに、首にかけられた六芳星のデザインをしたシルバーを弄びながら、呟いた。

「何を持って、この私を普通などという戯けた表現を使うのだ？　もし」

「えっ、そんな事言われても、ひいちゃんは普通なんだもん」

.....おのれ、よくもそのような事を抜け抜けと。

貴様は私の何を知っているというのだ。

そんな風に、絶句している私の肩を叩いて、彼女は満面の笑みを浮かべる。

「だってさ、普通だから仕方無いじゃん」

「ううっ、そうだな.....」

反応に困った至極困った。

「なあ、この世界が百人の村であったとする。当然、老若男女様々だし、その経済力も様々だ。極端な話、同性愛者もいれば、エイズ患者だっているし、生涯生きながらにしてベッドの上から起き上がれない人間もいる。百人の村の統計に、頭のおかしな人間のランキングというものがあったとしたら、この私は紛れもなくトップクラスに入る自身があるのだぞ？」

「ひいちゃんは話が飛躍し過ぎなんだって」

睦月は溜め息を吐いていた。

「それにもうちょっと、素直に生きてもいいんじゃないかな〜、と睦月は思うんっすけど」

「東雲睦月という名をした腐れ女子は余りにも素直過ぎてそれはそれで問題があるのは決して私だけではないと思うのだが」

「へっ？　そんなに睦月って腐女子してるかな？」

「してる。さながら冷蔵庫に一年間放置したコーヒーストックのごとく、どろどろと」

「ええ、そんな。私のどこが腐れているの？」

「はいはいはいはいはい。ええっと、まずだなあ。始めて会った人間に、同人やおい鬼畜系十八禁本を薦めるのはやめろ、このド変態っ！」

「えっ、そんなの普通でしょ？　ほら、馴染みのサークルの紹介も兼ねて.....」

睦月は満面の笑顔でそう言った。

私は肩を竦めながら嘲笑う。

「.....そんな発想が出てくる時点で、もう貴様の脳には虫が湧いてるんだよ、この変態。変態、変態、オタ、オタ、末期オタっ！」

我ながら言いたい放題だ。

.....まあいいか、睦月だし。

睦月だし。

「ううっ、酷いよお」

こいつ、気持ちいいぐらい、容姿と中身がズレてるからなあ。

「でもさあ。それいったら、ひいちゃんも同じだよ」

一瞬、心の中を見透かされたと思った。

「暗黒系退廃髑髏十字架ゴシック少女が何を言いますかって感じだよ」

「私はいいんだよ、私は。狂っている人間らしく取り繕っているだけだから」

私はニヒルっぽく笑ってみた。

「ああ、もうこんな時間か」

時計は五時半を回っている。

家までは大体一時間ちょいか。

「どうしたの」

「ちょっと、今日の夜に仕事が入っていてさ。今から、家に帰って、飯食ったり。仮眠を取ったりする時間が欲しい。それに仕事着も洗濯しなきゃならないしな」

「へえ、大変だねえ」

「割りのいいバイトなんだ。なんせ日給が高くてさ」

「そうなんだ」

「まあ、それはいいんだけど。たまに死にそうなくらいしんどい時がある。人数が多い時とか、夜通しぶつつづけでさあ。まあ、大体、そんな日の次の日は、家で立ち上がれなくて寝てるんだけどな。学校なんか行けるかっての」

「ホント、大変だねえ」

「マジで誰か替わってくれねえか、ってよく思うよ」

私は溜め息を吐く。

「睦月もさあ、バイト選びは考えてやれよ」

「分かった。ひいちゃん、頑張ってるね」

私は彼女と一緒に教室を後にした。

睦月と分かれた後、私は繁華街を歩いていた。

「ちょっと、いいかい？」

うん？ ナンパか。

「君、モデルとかって興味ある？」

.....ナンパよりタチ悪いし。

「ちょっとさ、ウチの事務所で若い子の数だ足りなくって。

ああ、どうせ実はヤバイ仕事なんだろう、ハイハイ。そうやって、適当な顔のいい女に声掛けて、騙して事務所に連れて行って。色々搾り取るんだろう？ 分かっているよ。死ね、死ね死ね死ね、この社会のダニがっ！

口に出してそれを言おうと思ったが、少し面白い事を思いついたのでそれをする事にした。

私は彼のシャツのポケットから伸びているボールペンをもぎ取る。

「私に声を掛けたのは、私の顔が綺麗だからか？」

男は、何を当たり前の事を、といった感じの顔で返す。

「ああ？ そうだよ。我が社は、是非、君の魅力を

「ふうん」

私は奪ったボールペンを自分の方に向けると。

力をこめて左頬に突き刺した。

血飛沫が上がる。

貫通したペンの先っぽが奥歯に当たり、カチカチと音を鳴らす。

そのまま傷口を引き伸ばすと、私の左頬はノの字を描くように裂け、そこから鮮血がボタボタと溢れ出していた。

ついでに、左目にペンをねじ入れ、眼球を引きずり出す。

飛び出した視神経が、右目の網膜に映った。

ぷらぷらと、私の目玉はブランコのように揺れ動いていた。

「私、綺麗？ こ、れ、で、も、おぉ？」

顔を近付けて、私は囁いた。そして、そのまま目玉を引き千切ると、コンクリートの地面に投げ捨てて、靴の裏でぐりぐりと踏み潰してみせる。

ふふっ、怖がってる、怖がってる。おもしれえ。

彼は奇声を上げながら、千鳥足で私から遠ざかっていった。

途中、通行人にぶつかりながら、悲鳴を上げられている。

「ふん、他愛も無い」

ああ、楽しい。

楽しいな、楽しいな。馬鹿を虚仮にするのはなんて楽しいのだろう。

それにしても、片目で見える世界もまた一段と面白い。

距離感が余りつかめないし、身体のバランスが取りにくい、まあ、なんとかなるだろう。

私は服のスカートを顔半分に巻き付けると、それで顔の傷を隠す。

スカートの下は、ズボンを着ているのでなんら問題はない。あるとすれば、止血した顔半分が少し不恰好で、少々、恥ずかしいのだが。まあ、気にしない気にしない。

傷口を見られて、下手に人を呼ばれるよりはマシだ。

「ああ、余計な時間くったなあ。早く家に帰らないと」

私が下宿しているアパートに辿り着く。

私は万年布団の上に入ると、そのままうつ伏せに横になった。

しばらくして目が覚めると、外は少し暗くなっていた。

「ああっ、よく寝たなあ」

夕方食べた、すき焼きと五目チャーハンの残り物を冷蔵庫へと仕舞う。

「さて、今日も仕事しねえとな、っと」

私はクローゼットを開ける。

結局、洗濯していた方は乾かなかったのと、汚れが落ちなかったのとで使えないため、予備のものを着る事にした。

「行くとしますか」

夜の闇に溶け込むような私。

両肩を露出させた黒服。

首から下げた、魔力遮断器のアミュレット。

顔には退魔力のメイクを施す。余り化粧は得意ではないがそれなりに見栄えのある顔にしあがった。

今日は少し装備が弱くて不安だ。

しかし、本来の仕事着はこの前の闘いで血染めになるわ、泥塗れになるわで正直、着て行きたくない。

「今日は楽だといいなあ」

私は月を見上げた。

「ていうかアホだ自分。今、片目じゃん」

仕事に差し支えなければいいのだが。

私のアパートの前では、白装束のようなスーツの男が私を待っていた。

髪は塗りつけたワックスが光り輝いている。ネクタイはブランド物だ。ブランド名は知らないけれど、何やら沸々と成り金趣味の臭いがする。

サングラスの奥に隠された瞳の色は青。

「二分の遅刻だ」

「悪い、悪い。ちょっと、寝過ぎた」

「貴様の代わりなどいくらでもいるのだぞ？」

「ふうん、そんな事言っているのかな？ 本当は人材不足の癖に」

「まあいい、乗れ」

私は真っ白に塗装されたベンツに乗った。

相変わらず、こいつの車は、十円傷をめいいっぱいに付けてやりたくなるなあ、と考えながら私は彼に訊ねる。

「今日の敵は」

「ああ、今から向う所にいる」

この男の名は“J”。本名は不明だ。興味も無い。年齢は二十代後半ぐらいだろうか。まあ、若作りっぽいから実は四十代なんて事も在り得るのかな。だが、私は彼には何の興味関心も持てないのでどうでもいいんだ、そんな事は。

「片方の眼はどうした？」

「ノリで潰しました。えへっ」

「仕事に支障は……」

「きたさねえよ」

「ならいい」

興味を無くしたらしく、経緯などは聞かないらしい。

「しかし気を付けろよ。今回の敵は手強い、貴様の他に二人ほど向ったが、彼らは消息を断っている」

「それを先に言えよ」

「心配するな。報酬ははずむ」

「ならいい」

しばらく町中を走っていると、ふいにJは唇を噛み締め、舌打をした。

私はその理由をすぐに察し、心を引き締める。

「どうやら、罠に嵌められたようだぜ」

「ああ」

「目的地に向うルートそのものが、罠のようだな」

がくん、と車体が揺れた。

窓越しに外を眺めると、タイヤに何か張り付いているのが見えた。

「先ほどから、ブレーキが効かないのだよ。ついでに言うならば、ハンドル操作もギアチェンジもな」

「このままだと、壁に正面衝突してお陀仏じゃねえ？」

「そうだな」

スピード・メーターがどんどん上昇していた。

私達二人は、ドアを蹴破って外に出た。

時速八十キロは出ていたが、そんなスピードで怪我を負うような私達じゃあない。

車は壁にぶつかり、慣性の法則に従って粉微塵に爆裂した。

ベンツがペシャンコだ。素晴らしい程に滅茶苦茶に芸術的に潰れている。

ていうか炎上してやがる、もう修理不可能だ。爆笑しながら私は指を刺す。

私達は地面に着地する。

燃え盛る炎の中。

ネオンライトに照らされながら、そいつは姿を現した。

赤犬の額のような頭に、鳥の頭蓋骨が乗っている。

背中からは巨大な人間の両手が生えて、それが翼となり空を飛んでいる。

焰の中から、そいつの体のパーツが戻ってくる。おそらくベンツのタイヤか何かに張り付いていた奴だ。

緑色をしたザリガニの腕だった。甲殻部分はぬめぬめと光って、灰かに不気味な体液を垂れ流していた。

「合成獣かよ。楽勝だな」

「いや、ゴーレムの類だな。体のどこかに刻まれたシエム文字を削らない限り、倒すのは少し億劫だぞ」

ゴーレムはおげぼおげぼ、と奇声を放つと、口から、濃い緑色をした液体を吐き出す。

私達はそれを難なくかわした。

Jは懐から幾本ものナイフを取り出した。

私は右腕を握り締めて詠唱にかかる。

「エクゼキューショナルの始まりだ」

そういつて、彼は大量のナイフを敵に向かって……放り投げた。

まるで放り捨てるように敵に向かって投げつける。

刺すつもりは微塵も無いのか。

ナイフは八方に飛び散って、敵の周りに落ちていく。

斜めに刺さった。

敵はどうやら呆れている。彼は自ら己の武器を投げ捨てたようなものだ。

Ｊは笑い出した。

「ふふっ、実はこの私、ナイフ投げは下手糞なのだよ。素人以下だ」

「嘘付け、どこの世界に投げた刃物をそのまま地面へと突き刺せる、ナイフ投げの素人が存在するんだよ」

茶々を入れてやった。

彼は肩を竦める。

「それに、敵を動かしている魔力源の文字を消して倒すんじゃあなかったのかよ」

ゴーレムというのは、体のどこかにシエム文字という動力源となる魔力を帯びた文字が刻まれている。これに手を加えれば、ゴーレムは直ちに元の泥人形へと還るのだ。

「やはり止めた。面倒だろう？」

「だろうな。あの方が手っ取り早いしなあ」

バラバラに切り刻んで、動けなくする方が手っ取り早いのだ。

ゴーレムは犬の口を歪めて、私達の元へと向かってきた。

「角度はいい。その位置なら、避け切れまい」

Ｊは笑う。

ゴーレムは私達に、炎の玉を飛ばしてきた。

私達二人は、それも容易く避けた。

「公開処刑っ！」とＪは叫んだ。

ざくざくざくざく何かが突き刺さる音が聞こえる。

次の瞬間、敵は全身を穴だらけにして断末魔の叫びを上げていた。

ぽとり、ぽとりと鉄の処女によって潰されたような肉塊が地面に向かって落ちていく。

それらはやがて、色彩を失い、ただの泥へと変わっていった。

「ナイフは回収しないのかよ。もったい、ない」

「面倒だ。大体、武器なら幾らでも服の中に仕込んでいる」

あ〜、そうですか。金持ちはいいいですねえ。今投げつけたヤツ、全部、輸入物でレアモノじゃあないですか。

「で、あれを操っていた本当の敵を探さなければならないな」

彼は帽子を被り直すと、気障っぽい仕草で顎をいじる。

相変わらず、ウマが合わなさそうな奴だ、と私は思った。

しばらくすると。

倒した敵の腹から、何体もの蝙蝠の翼を持った蚯蚓が現れた。

「へえ、あれはラルヴァっていう怪物じゃねえ？ 夢魔の一種である」

「ああ、そうだが」

「ひいちゃんは物知りだろ？」

「普通だ」

彼はくいつ、とサングラスを上を上げた。

相変わらず、何となく嫌な奴だ、と私は思った。

彼は、くっくっ、と敵に向かって嫌味な笑みを浮かべる。

「ふふっ、なぜナイフを斜めに刺したか分からんか？」

私は彼に合わせて、言った。

「ああ、そうだな、」の言うとおりの前ら。その位置がいいんだよ。その位置が最高。角度的にすごくいい。くっ、お前らも、寄生者のゴーレムと同じ末路を辿る事になるなあ。そういうの、間抜けって言うんじゃないか？」

私達二人はうつ伏せに倒れる。

ぶしゃあ、と蚯蚓達は体液を撒き散らして地面へと散っていった。

「こいつら本当に、お前の能力の正体に気付いてないようだよ」

しゅああっ、と何かが焼け爛れる音が聞こえる。

ラルヴァの一匹は口から酸を吐き散らして、」のナイフを全て焼いていた。刀身は朽ちて、錆だらけになっている。

「懸命な判断だなあ」

「否睡。どうせならお前がやれ、給金分は働いたらどうなんだ？」

「はいはい」

残ったラルヴァは三体、はっきりいって私の敵では無いな。

「じゃあな、お前ら。全員まとめて死の舞踏を踊らせてやるよ」

私は自身の能力を、発動させた。

十

中世ヨーロッパのような、地平線が見える高原のような場所に出た。

勿論、こんな場所は現代日本には存在するはずはなく、別世界の一つである事は明白だった。

「そろそろ、敵の巣窟に入る」

心してかれ、と彼は言っている。

しばらく歩くと、塔のように聳え立つ、岩山があった。

否、それはもう察そう、建物と形容した方がいいのかもしれない、周りの岩壁から孤立して積み上がっていた。

崖から生えた木々の枝につかまると、懸垂の容量で、上へ上へとよじ登っていく。

途中、特に新たな襲撃も無いまま敵の場所へと辿り着いた。

あの程度の使い魔では私達に傷一つ負わす事が出来ない事に、十分に気付いたのだろう。

山の上だった。

樹。巨大な磯巾着のようにうねりながら、大地に根を張っている。

人。幹の中には、胎児ほどの大きさをした人間が収まっていた。

「ドリアード、とかか？ にしては少し邪悪過ぎないか？」

「知らん。とにかく、こいつを始末する事が我々に課せられたミッションだ」

私は頷く。

敵の射程に入ったら、蔓の鞭が飛んできた。

迂闊に近付けない。

「.....こいつ、強いぞ」私は少し顔を引き攣らせる。

「.....」Ｊは黙ったままだ。う〜ん。

「左目、潰すんじゃないか」

「.....阿呆.....」

奇怪な音声が辺りに響く。

「おおおお、お前らああ。ここここおにい、何しにい来たああああ」

うん？ こいつ喋れるのか。

発声は不明瞭だった。元々、声帯器官が発達していないのだろう。

「あ、か、か、か。な、何、しに、来た.....？」

「なるほど、元は人間のようだな」

「なんで、あんな姿になってるんだ？」

「おそらく禁断魔法にでも手を出したのだろう。合成獣の作成に失敗したのか。それとも、次元転移にしくじったのか。いずれにせよ、こいつは大量殺人者として指名手配されていたんだ。一思いに、楽にしてやるべきだな」

「ふうん、黒魔術であんな身体になったのか。愁傷様って感じだな」

「自業自得というのではないか？」

「それじゃあ幾らなんでも可哀相だろう。どんな相手にも慈悲の念は必要だぞ」

Ｊは懐から数本ものナイフを取り出す。

「何れにせよ、『ドーン』は貴様を始末する事に決定した。潔く、この世から消えてくれ」

「.....あ、かか、か、か、.....」

Ｊは二、三本のナイフを投げて、敵に牽制を掛けた。

その何本かは、敵の身体に刺さったが、Ｊがもう数本のナイフを懐から取り出す瞬間に、敵の方から逆襲の一撃が来た。

片目の死角からしなやかな鞭が飛んできた。

私の腹は切り裂かれる。

私はそのまま崖の下へと転落していった。

木の一本に背骨が当たり、ようやく私の体は静止する。

「ふう、Ｊ一人で大丈夫かな」

腹の傷を触る。どうやら内臓までは届いてないようだ。

しかし、落下の最中にどこかの枝にひっかけて、細かい傷は大量に付いている。そういえば足

首も少しおかしい。捻挫ぐらいはしたか？

「上までは四、五十メートルってところか」

少し休めるな。ゆっくり行くか。

歩いてみて気付いた。

肋骨が肺に突き刺さってやがる。

口からは大量の血が吹き出た。

「うぐお、い、痛え。……や、やばい。涙出てきた」

これは結構、キツイぞ。立っているのがやっとだ。

しかし、未だに歩行が可能だという事は、それほど大した怪我でもないのかもしれない。

頂上へ戻ると、Jは敵の植物人間相手にかなり苦戦していた。

しばらく、私は傍観を決め込む事にする。

彼の『ハイペリオン』は鏡面を使った能力だ。

鏡状の物質に魔力を込めて、反射光を弾丸に変えて敵を攻撃する。

彼はコンパクト状の四角い鏡を取り出す。

四角の光芒が敵の身体を爆散する。

木の破片が飛び散った。

鞭がしなるたびに、彼は跳躍したり、身体を捻ったりしてそれを必死で避けていた。ごくろうさん。

しばらくの間、彼らの攻防は続いた。Jが放つ鏡の光弾を、ドリアードは全身を変形させて避けながら、蔓による反撃を繰り返していく。

Jは私に気付くと、怒鳴り散らした。

「そこで黙って見物しているとは何事だっ！ 少しはこの私の支援をしてはどうなのだ？」

はいはい、っと。

私は崖の上に立ち上がる。

やばいなあ、やはり無茶な動きは出来そうに無い。早く倒して、傷を治さなければ。

「じゃあな、とっとと死んでくれ」

私は跳躍して、敵に重い蹴りを入れる。

人間の部位にクリーン・ヒットして、相手は苦悶の声を上げた。

瞬間、押し殺すような悲鳴と共に、

Jの右腕を根っこに掴まれてもがいていた。

ぐしゅり、と嫌な音が響いた。

Jの腕が一回転したのだ。

まるで雑巾でも絞るかのように、彼の腕はくるくると振れていく。

「ううううああああああああああっつつっああああ！！！！！」

彼は叫喚の叫びを上げる。傷口からは剥き出しの骨が幾本も伸びていた。

だがJはどうか持ちこたえと、敵の二撃目を避ける。

「だ、大丈夫だ、まだ闘える。……し、しかしクソッ。これ、直せるか？」

「とりあえず、日本の医療機関じゃあ無理じゃねえ？」

冷静に返答してみた。

さらにJは右足を掴まれて、腕と同じような末路を辿った。

私が助けるのも間に合わず、彼には無数の触手が襲い掛かる。

Jの全身に枝と根が絡み付いた。

ぼきよりぼきよりと、彼の全身の骨がへし折られる音が聞こえた。

上半身だけとなった彼が、私の元へと飛んでくる。

その瞳は何も映してはいなかった。

私は彼の目蓋を閉じる。

仕方無いなあ。

「一人で倒すしかないか」

私の本領は敵軍の殲滅だ。味方がいると、逆に巻き込む怖れがあるので、どうしても加減が必要になる。

私は片手を掲げた。

どれ、ミンチにしてやりますか。

しゅぱん、と枝が唸って、私の横腹を薙ぐ。腹から何か大変なものが撒き散っていたが、それを戻している余裕は無い。

さらに返し様に精髓を叩き折られた。

私は堪らず、地面に突っ伏す。

駄目だ。起き上がれねえ。

ていうか背中の骨って、結構、重要な器官じゃあなかったっけ？ 折られたら不味いんじゃないか？ 止めといわんばかりに、勢いよく敵は棍棒のごとき枝を振り下ろして、私の腰骨を叩き壊した。

発狂しそうなほどの痛みで、一瞬、意識が途切れる。

大きな負傷は腹。背骨。腰骨かあ。

うん、どうしよう。これは、普通は、死ぬんじゃないかな？

まず、死ぬほど痛いんだもんなあ。

私は混濁していく意識の中で考える。

少し、身体が冷えてきた。体温が失われていくのがよく分かる。

まあ、仮に私が死んだとしても、後を継ぐ奴が現れるだろうけど。

敵はどうやら満足したようで、勝利の笑みを讃えていた。

まあいいか、なんか面倒臭いし。少し、休もう。

ていうか眠ろう。なんか疲れたし。

ぼんやりとした意識の中で視界に映ったのは、Jがべちゃりくちゃりと音を立てて食べられている光景だった。ドリアードの幹の一部が裂けて巨大な口へと変わっている。牙の生えた乱杭歯によって、Jは血も肉も骨も彼の餌になっていた。こりこりこりこり骨は齧られ、ぐちゅぐちゅと肉がもがれて胃の中に収まっていく。うとうと私は途切れていく思考の中でただただ、その光

「ははっ、あははははははは。あははっ、死ねよ。死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ

私はフィロソフィア・ストーンからストリームの脈動を照射する。
植物繊維が弾けて撒き散っていく。
後には。

私は彼を持ち上げて吊り下げる。

私は愉悅の笑みを浮かべる。

「こいつは他者の“狂気”を喰らうんだ。病んでいる部分、って言った方がいいのかな？ あくまで、薄れさせるだけだが。効果は絶大だぞ。下手な薬剤よりもよっぽど聞かぬ。しかも副作用ゼロ。カウンセラー完全に顔負けだよ。まっ、その代償として私はその狂気の一部を自分の中に流し込む事になるのだけだな」

「……なんだ、お前も軽度ノイローゼか。鬱やPTSDと同じぐらい、よく出会うぞ？ 美味くもない。どうせなら、もっと病んだモノを、もっと壊れた病巣をいつか喰ってみたいなあ」

そして、右腕を構えて勢いよく爆撃した。

「ん、任務完了」

眼下には、餡色の大地が広がる。

うふふ。このままだと、ぐちゃりと挽き肉だな。再生するのに、多少、手間暇がかかりそうだな。それに、ちょっと痛そうだな。

「出て来い、『スキゾ・フレニア』」

所々が苔むして朽ちた肢体。

三つ首のドラゴンゾンビが翼を広げて、私を乗せる。まあ、ドラゴンといっても、どちらかというとワイバーンに近い形態だ。飛竜ってヤツだ。

「このまま、夜が明ける前に帰って、一眠りするかねえ」

東を見れば、オレンジ色の朝日が昇り始めていた。

どうしよう、寝る暇ないぞ、自分。学校、行きたくねえ。

ううう……。ふあつく。ゆ〜、って感じだ畜生。

「まあ、栄養を大量に摂取すればなんとかなるかな」

今日も大量に血を失い過ぎたなあ。

学校で居眠りするしかないか。あ〜あ、今日の数学の授業は聞いておきたかったんだけどなあ

。

コンビニで適当な食べ物を買って、腹を満たさないとな。

Ｊとのいつもの落ち合い場所には、彼の代わりに奇妙な人物が佇んでいた。紫の衣から、筋肉質の両腕だけを出した小男だった。

「ジェイナスはどうした？」

奴は本名をジェイナスと言うらしい。

「死んだ」

単刀直入に告げた。

彼は何の感慨も無さそうに、そうか、と呟く。

「それでは、今日からは私が君に指令を下そう」

私はＪの遺品であるナイフを彼に渡す。

「まあ、それを墓にでも埋めてくれや」

そうか、と彼は何の感慨もなさそうに呟いた。

「仕方無い。貴様にはこれから、別の人物と一緒に任務を共にしてもらおうか。その人物が、次回から貴様の上司兼相棒に当たる」

「了解、でそいつの名はなんていうよ」

「“新約言語”と呼ばれている。詳しい詳細は本人から聞け」

私は軽く、欠伸をする。

新しい相棒の名前など、どうでもよかった。

どうせ、仕事上の付き合いだ。それに、いつどちらかが死ぬか分からない。私にはどうでもよかった。

「これが今回の報酬だ」

私は彼から小切手を受け取る。

だが私はそれを破り捨てた。

「人死が出たら、受け取らない事にしてるんだ。これ、私のポリシーね」

小男は珍しそうなものでも見るような視線を浴びせる。もっとも、衣越しなので、本当はどんな顔をしているか分からないが。

「意外に引きずるタイプの人間なんだな」

「そうでもないぞ。Ｊの顔とか、もう忘れたし」

「……………」

私は苦笑いを浮かべる。

「それに十分、楽しめたからいいや。金の使い方も思いつかないしね。そうだなあ、.....肉体を新たにカスタマイズしようか、とも考えたけれど、これ以上人間離れしてもね.....。友人達に合わせる顔がないしな。別に、私は車も家も欲しくは無いからね。ああ、本代と服代は別だ。でも、本読むための賃金や服着るための賃金は前回や前々回とかで、余って腐るほど貰ったから、金に執着とかないな」

「そんなに、使うものは無いのか？」

「どうせ、明日死ぬかもしれないだろ？ だから、余計な財産なんて、興味無いね」

紫紺の衣を身に付けた男は、抑揚の無い声で言った。

「退廃的な考えは関心せんが」

「まあ、どうでもいいじゃん。所詮、生きている間にする事なんて、すべて、死ぬまでの暇潰しだし」

どうせ生きる事なんて、死ぬまでの暇潰しなんだし。ああ、いい言葉だ。

「ああ、そうそう。お前、なんて名だ。一応、覚えておくよ」

小男は、少しだけ声のトーンを上げて言った。

「“ケガレ”。そう呼んでくれ」

「ふうん。ケガレ、それじゃあな」

私は彼に手を振ると。自宅のアパートへと戻る事にした。

アパートで手早くシャワーと着替えを済まして学校へと向かう。

早く新陳代謝を済ませて、肉体の機能を全回復させないとなあ。

校門には、見知った友人達の姿があった。

「よう、睦月」

「あっ、ひいちゃん、おはよう。あれ？ どうしたの？ 顔色悪いけれど」

「ん.....そうか。顔に出ているか。.....う〜ん、やっぱり、今日は昼頃まで保健室で休むよ私」

「単位大丈夫？」

「さあて。ヤバイんじゃないかな、それなりに」

「留年しても知らないよ」

「その時は哀しいから、そうだ睦月、一緒にさぼってくれよ」

「う〜ん、.....一時限は数学、二時限中国語、三時限英会話、四時限書道.....。よしっ、OKだよっ！」

睦月は親指を突きたてた。

不真面目な友人を持つと助かるなあ。重畳、重畳。

「そうだ、ひいちゃん。昨日、尊敬している漫画家の画集買ったんだ」

「ふうん。どうせまたボーイズ・ラブだろ？」

「酷い.....。私のイメージはそんなのなんだ。酷い、酷い。酷いよお。ていうか、本当にそうである事がまた困るんだけどね。コピックの色使いがとっても上手な作家さんでさあ、肌艶の再現がとても.....」

「もういい、黙れ。そして、これでお前の図式は覆せなくなってきたな。睦月イコールホモ好きって事を。絶対定理だ」

「撤回してっ！ 撤回してえ、お願いっ！」

「なら、買うんじゃないよ。あと、いつものお前の発言も問題なんだよ」

「いえいえ。睦月は睦月の道を貫き通しますともさ」

「もう勝手に通してろっ！」

ああ、それにしても。

だらだらと、私の日常は続いているな。このまま普通の学生をやり続ける事だって出来るのだ。まったく、本当に、どうでもいい事だよな。

「ひいちゃん。保健室の顔馴染みだね。常連さんだよ」

「病弱少女ってえ事で通しているんだ。ほら、私って見た目が細くて白くて病的じゃん？」

実際、休む時は本当に体調が悪いし。

ていうか、半分死に掛かっている時ばかりだし。

「睦月はなんて言って仮病使おうかな。風邪で熱があるじゃあ、体温計でバレバレだしね」

「じゃあさ」

私は悪意満載で告げる。

「思春期妄想症二次元電波受信癖発作的同性愛見聞発情病ってえ事で」

「……はっ？ ……なんて？」

彼女はしばらくの間、私の言った事を吟味しているようだった。

「ししゅんき、もうしょうしょう……にじげん……でんぱ……ほっさ…… どうせいあい……はつじょうびょう……。……っ！」

十数秒後に怒り出す。

「酷い、私の悪口全開でしょっ！」

「いや、だって全部本当の事だし」

「それはそうだけどお。認めるけれどお。でもさあ……やなんッスよね。う～ん。……せめて、もう少し短く出来ないの？」

「じゃあ分かった、分かり易く“末期オタ”で。立派な病気だ」

「そ、そのまんまでしょ。それ」

私達二人は笑い転げた。

あたかも。本当に普通の、十七歳の、少女のように。

ろくでもない青春送っているよなあ、自分。 私は口元を押さえる。

大量の血液が掌にはこびり付いていた。やばいな。ちょっと、肉体にガタがきているかもしれない。そういえば、足元もかなりふらついてきた。指先も小刻みに痙攣している。

まあいいか。今更、死ぬ事なんて怖くはない。

それにどうせ。私は眠りを殺した者。だから。

不眠症は続いていく。ああ、鬱々、鬱々、鬱気味だ。何故だか死にたくなってきた今日この頃だが。死ねないけれども。隣では睦月が心配そうな顔で私を見ていた。

「なあ、肩、貸してくれないかな？」

「分かった。他ならぬ、ひいちゃんのためだもの」

睦月は満面の笑みを浮かべてくれた。

私も少しだけ、笑った。

ああ、それにしても、 目蓋が重い。足元も、まともに立ってられない。

そう、私にも睡眠時間は訪れるのだ。だが、私は眠る前に、いつも思う。

きっと、次こそは目覚めないのかもしれない。それはそれで、いいのだろう。いや。それは少しだけ、私の願望であるのだから。どうせ、これから辛い日々が続くのならば。私は目を醒ましたいとは思わない。それだけなんだ。

そこまで考えて。私の意識はそこで途切れていた。

.....

私の日常は最高にして最悪だった。不出来なまでの非日常らしきものの中で、私は考える事を嫌っていた。考えれば、考える程、不可思議で迷宮的な観念の中へと沈んでいく。何処までも何処までも終わりの無い非日常の世界。

そして、また少しの時間が経過する。

.....

私は実態のよく分からない組織「ドーン」とは何なのかを考えた。そして、気付いた。

そう、これは世界の不条理を統合したものなのだ。世界という不条理の中に浮かび上がった、一本の髪の毛。私はドーンというよく分からない組織を通して、世界との不条理と対決しなければならない。

私の意志はそうやって、目覚めた。

世界は分からない。だから、私は世界を探しに行った。

第二章 新約言語の行動様式

バーだった。夜はダンス・クラブをやっているらしい。

『ケガレ』からの伝言では。

ここが、今日、私と共同戦線を張る人物との、落ち合い場所だ。

私は適当なカクテルを注文して人を待っていた。

正直、空気が好きになれない。元ひきこもりにはこんな所、長くいられるわけがない。飲むんなら、一人で影背負って飲むのがいいに決まっているのに。私は椅子をギィギィギィギィ揺らしながら注文したアイス・ティーをかき混ぜる。あれ？

なんだ、ダンス・パーティーでも始まるのだろうか。まだ真っ昼間だってのに、ご苦労な事だなあ。昼間でこんなノリなら、夜はどれだけ居心地が悪いんだ？

ああ。なんで私はこんな場所なんかいるんだろ。せっかくの休日なのに。私は大好きなロック・バンドのライブでさえ、群集が怖くて行けない人間なのだぞ。対人恐怖症と群集恐怖症の精神的ミックスジュースなのだぞ。かなり痛い人間だぞと。それに、こういう場所には負が無い。負が無い場所には私の居場所など存在しないのだ。

帰りたい、帰りたい。もう幻聴すら聴こえてきそうな気分だ。

私は気晴らしにアルコール濃度の高い酒をロックで頼んだ。

咽た。当然だ。

氷結やビールばかり飲んでいる私が、いきなり手を出していいものではなかった。

涙目になってきた、ううう、キてる。人体改造によって急性アルコール中毒になる事はまず無いが、そもそも味自体を楽しむ事が出来ない。というか、私はアルコールが完全に効かない体質なのだ。いや、体質というよりも人体の構造上、そのように作られているのだ。つまり、私が酒を呑む理由なんて作る必要が無いのだ。だから、純粹に味を楽しむしかない。しかも、私は苦いものはどうも苦手だ。

私はそんな感じで悶絶していると。

おまたせ、と後ろから声を掛けられた。

肩まで伸ばした金髪。所々には赤色のメッシュを入れている。どこことなく中華民族系とのハーフを思わせる顔立ち。美貌だ。格好いい。唇には二個の顔面ピアスが付けられていた。腕に嵌めた金属性のブレスレットが光輝いている。背中には巨大なギター・ケースを背負っていた。肩にはドラム・バッグ。一見、スタイリッシュなバンドマン風の人物。

そいつは、さわやかな笑みを浮かべていた。

「やあ、君が柏木否睡かい？ インソムニアの柏木否睡？」

「ああ」私はそっけなく言う。

「あっはは。私はネオ・ロギスム。“新約言語”のネオ・ロギスム、っていうんだ。勿論、本名は秘密だ。そうだな、外に出ないかい？」

「助かる」

「いやあ、君が嫌そうにしていたからさっ！ ここの空気。私はなかなか性に合うんだけどね」

.....う〜ん。テンションがおかしい。

何だこいつ？ 何かかなり怪しいぞ？ 新手の宗教勧誘者か何かか？

今から、何らかの説法を説かれるのか？ 私は。

「眩しい、お前眩し過ぎ。うざい、キモい。気色が悪い。去ね。いつか殺す」

思った事を全部、言いたい放題言ってる。これで人間関係が悪くなるかもしれないが、別に知るもんか。どうせ、仕事仲間なんて友人にするつもりはない。

しかし返ってきたのは、やはり眩しいばかりの反応だった。

「やっぱりそう？ 私は少し、躁病なんだ。あっははは。いつも多少、はっちゃけて無いと呼吸が停止してしまう。ああ、私の事はネオって呼んでくれ。私はこれで、衝動性も強くてね。買い物依存症でもあるかなあ。ほら、この前、コーヒー・カップを買いに行ったら、コーヒーポットとワイン・パーラーと小型冷蔵庫まで買ってしまったんだ、それほど必要ないのにさ。いやあ、高かったなあ、結構。私のマンションは、狭いからさあ、今、置き場所に困っている」

.....知るかよ。聞かれてもいない事を喋りまくるなよ。うぜえよ。

私はしばし、頭を抱えた。

.....。

だが、ふいに私は口元を緩める。

「.....前言撤回。お前気に入ったよ」

「あはは？ そうかい、それはありがとう」

ネオは私の右手を握り締め、激しく腕を上下させると、ウインクをする。

私は、どっか病んでいる奴が大好きなのだ。初対面でこんな言動された日には、好きにならない方がおかしいに決まっている。

まあ、ウザい事には全然変わりはないが。

「ところでさあ、一つ聞きたい事があるんだけどな」

「なんだい？」

「お前さ、性別、どっち？」

ネオはくすりと笑って、そら惚けたような顔をする。

「さあて。どっちでしょう？」

十

気付いたら、私達二人はカラオケ・ボックスで一緒に歌いまくっていた。

なんか、異様に歌の趣味が合った。

「ここのギターの使い方がいいよな。キーの出し方っていうの？」

「所々に入っているノイズもいい味だしてるよなあ」

「煙草は吸うかい？」

「いんや。.....ああ、別に煙なら気にしないよ」

「すまないね。ああ、アルコールはどうだい？ メニューにさ、スクリュー・ドライバーの下に

マムシ酒ってあるんだけど、笑っちゃうよね」

「仕事前に飲むなよ。アルコールは脳の働きを妨げるぞ。そのただでさえ、左脳が停滞している脳髄で物を考えるのかよ、お前は」

「いや。こう、つねにテンションを上げなければ仕事に差し支えるのさ」

なんか、こいつといると、どんどん自分の口に毒が含まれてくる。

いるんだよな、何言っても気にしない奴って、馬鹿だからだろうか。

「人間消失～♪ 人体蒸発～♪ 人間膨張～♪ 人体暴発～♪」

「畑に撒いたパーツ達～♪ バラバラバラバラ植えられた～♪」

「新宿二丁目の愛しいホモセクシャル～♪ ファッカー！ ファッカー！ ぶちまけろ！ 中身の全てをぶちまけろ！」

「両足に鋏を差し込んで、両耳に硫酸を流し込む～♪ 破滅的自傷～♪」

頭のイカれた歌詞を連発する、カルト系のミュージック。

たまに白目剥きながら、発狂したような声で歌いまくり、いきなり、マイクを床や壁に叩き付けたり、歌いながら床下を這いずり回ったりする私達をたまにサービスに現れる従業員や嫌でもノイズが届く隣室の人間はどう思っているのやら。

いやあ、こいつと私、波長が合う、合う。

四時間後にカラオケ・ボックスを出ると、お互いに爽快感を漂わせながら私達二人は手を叩き合っていた。

「で、今回の仕事なんだけど。インソムニア」

「うん？」

「“胎内感応奇譚”って分かるかい？」

「……………聞いた事がある」

ある種の信仰でさえある伝説だ。昔、医学が発展していなかった頃、人々の間では、妊婦が頭の中で、強い何かに怯えたり、家畜などに強い思いを馳せたりすると、牛や豚などの家畜の顔をした子供が生まれる。

その起源は極めて古い。旧約聖書の実例にも引用が在る程だ。

「最近の奇病なのだが、それに類似する現象が起きているのだよ。何人もの妊婦が、自分の子供が異形へと変化する夢を見る。そして、それが現実となって、生まれた子供は異形となって生まれ出るんだ」

「なるほど」

「で、患者の入院している病院へ私と一緒に向かって欲しい」

「ところでお前、年齢いくつ？」

「二十三だけど、それがどうしたんだい？」

「いや、車とか持ってないかって思って。前の上司が移動に使っていたからさ。ベントだぞ、ベント。殺してえって感じだった。死んだけど」

「車ね。持っていたけれどこの前、廃車にしちゃった」

「ふうん」

「あのね。真夜中の自動車国道で百七十キロ出してたらさ、カーブを曲がりそこなって、こうグシャッ、とね。アルコール度九十度を超える酒で、スピリタスってあるでしょ？ あれを炭酸で割ったり、紅茶で割ったり、たまにロックで飲んだりした後に運転したから当然といえば当然なんだけどね」

……う〜ん。

……こいつ、馬鹿過ぎる。絶対、こいつの車には乗らねえ。

幾ら、この不死の肉体を持っていたとしても、そこまでダイハードな事をされてしまえば、簡単に死に至るんでは無いか？ 私は。

「ナイス、馬鹿」

取り敢えず、褒めてみる事にする。こういう事はもはや、楽しんだ方がまだマシだ。

「私は勿論、無傷だったんだけど、カローラが潰れたのはショックだったな。車検終わったばかりで塗装も済ませておいたんだけどね」

「それいつだよ」

「昨日」

「……………」

もう笑い転げるしか無かった。

タクシーで私達二人はある場所へと向かった。

う〜ん、こんなハイ・テンションの人間は、私の友人には余りいないタイプだ。みんなどっちかっていうと鬱気質だもんなあ。

目的の場所に着いた。

私達は病院の中に入る。

産婦人科は三階だった。

受付に来ると、ネオは何やら名刺を見せる。

「『ドーン』からの使者が来たと、ここの院長に伝えてくれないかな？」

「……………はい……？」

彼女は不可解そうな顔で、私達を値踏みするように見つめる。

「だから、『ドーン』だよ『ドーン』、日本支部、命令が行き渡っているはずだろ？ 上層部からさ」

ネオは躍起になってまくし立てる。

「ほら、院長に電話連絡継いでくれよ。今、私が言った事を伝えれば、すぐに取次いでくれるからさ」

看護婦はかなり渋っていた。……いや、明らかに不審者を見る目付きに変わっている。

片やパンク系ゴスロリ。片やハードロック風バンドマン。私達二人の格好も格好なので、訝しがられるのは当然か。

多分、これ以上ここにいたら、変な場所へと電話をかけられかねない。それは不味い、非常に不味い。

私はネオの手を握って、受付から離れる。

「どうもすみませんでした、ツレは昨日の夜、ドンペリをシャワーのごとく浴びてまだ酔いが醒めて無いようなんです。これから、頭蓋骨にヒビ入れるぐらいブン殴って酔いを醒まさせますから、勘弁してやってください」

「連絡行き渡ってねえじゃねえかっ！」

私は近くの自販機を叩く。軽くケースが割れて、飲料水のサンプルが床に散らばったが、敢えて気にしない事にした。

「どうするんだよ？」

私は苛々しながら、ソファーに腰掛ける。

他の患者達が、私達を訝しげな目で見ていたが、確か、この病院には精神科病棟もあったはずだ。彼らが私達を単なる、分裂気質の人間だと認識してくれば、この上なく申し分無い。

「面倒臭いから、一号、一号、室内を回って、例の患者を探すってのはどうだい？」

「ああもう、それこそ面倒臭い」

「あははっ、何とかなるって。ほら、なるようになるって誰かが言っていただろ？」

ネオは軽快に笑っている。ちょっとだけ、鼻柱を叩き折りたくなった。

まったく、何で私の周りには、こう、頭の悪い異常人間ばかりが集まるのだ？　そういう連中を引き付ける磁力でも放っているのか？　私は。

「.....はあ、まあいいや。エレベーターで三階に行こう」

「なあ、どうやって、問題の被害者かどうか調べるんだよ？」

考えていなかったとか言いやがったら、迷わず延髄蹴りを入れてやろう。

頸椎を破壊するぐらいの打撃を与えてやろう。

「それなら大丈夫。私の能力を使わせてもらうよ」

「何だ？　占いでやるのか？」

三階に着くと、私はネオに毒付いた。

それを聞いて、ネオはにんまりと

「そうだね、その通り。ご名答。名探偵の素質でもあるのかい？　君は。そうだ、君にはまだ、私の能力を言っていなかったね。私の能力は主に二つあり、その中の一つが、」

ネオは指を鳴らした。

「“降霊術”だ」

ネオはエレベーターの隣に貼られている、院内の地図に目をやる。ネオはズボンのポケットから何か糸状のものを取り出して、地図の前にかざした。

「これは“フーチ”という道具だ」

糸の先には菱形の針が結わえられていた。

「簡易的な占い道具ではあるが、この程度の事ならこれで十分だろう」

ネオは口の中で、何かの呪文を唱えている。

何か霧状のようなものが、ネオの周りに漂っていた。それは次第に、フーチの菱形の針へと吸い込まれていく。

柱時計の振り子のように、フーチは左右に揺れ始めた。

ネオはそれを、地図の周りにかざしていく。

三十五号室の所で、振り子は激しく回転した。

「……ここか……」

新生児病棟である。

私達は、その場所へと向かった。

降霊術といったか、おそらく、これがネオの能力の全てではあるまい。あくまでも能力の一端に過ぎないだろう。

ネオの能力、二つあるといったか、残り一つの方もそれなりに気になった。まあ、多分、どうせろくなものでは無いだろうが。

どうやら、一人部屋のようだった。

私達はノックもせずに入る。

中には、白いカーテン越しに、一人の女性がベッドに横たわっていた。

彼女の顔は酷い、憔悴の色を帯びている。

「こんにちは、起きていますか？」

ネオは訊ねる。

「私はとある機関よりお前を診察しに来た」

「聞いています」

何だよ、本人には伝わっているじゃねえか。私は改めて組織のいい加減さにうんざりした。早く、壊れてしまえばいいのに。

「あなたは先日、一人のお子さんをご出産なさいましたね。おめでとうございます」

「……私の、子じゃないわ」

「そうですか。別に、我々としてはあなたの感想はどうでもいいのです。重要なのは、あなたはとある妄想に取り付かれ、その妄想が生まれてきた胎児に影響を与えた、という事実の方が実に問題なのですよ」

「“あれ”なら、未熟児の入れられる部屋にいるはずよ。保育器の中に納められているはず……。ねえ、お願い。今すぐ、出て行って頂戴。貴方達も厄病神にしか思えないのよ。あれの始末は、そちら側で勝手に行ったってかまわないわ」

「まあ、そうですね。そうします」

彼女はカーテンの中ですすり泣き始めた。

私達は母親の部屋を後にする。

本来の病棟からは、少し隔離された場所だった。

一つの保育器が置かれていた。

保育器の中には、奇形としか言い様がない赤ん坊が入れられていた。

思わず、私は口元を押さえていた。

まずは両目。突起物となっており、さながら蛞蝓か蝸牛を彷彿させる。

次に口。

頭部。胴体の倍以上はあるのではないかというほど膨れ上がっている。

胴体。へその緒が触手のように幾つも幾つも生えている。

四肢。それは手足と呼んでいいものだろうか、指の長さはバラバラで、吸盤のような形へと変わっていた。

そして何より奇怪なのは、その皮膚。甲殻類を思わせるような、質感をしていた。しかし、半分溶解しているかのようにどろりどろりと外殻のありとあらゆる隙間から粘液を流している。

そいつはもぞもぞと全身を動かしていた。

「何なんだよこいつは……」

「フリークスだよ。何だ、恐怖を感じているのかい？」

ネオは聞く。

「いや、これを作った奴の脳構造はどうなっているのか、と思ってな」

少し、触れてみる。

ぷしゅ、ぷしゅ、と全身から粘液を垂れ流していた。

「で、こいつはどうするか」

「始末するのか？」

「いや、取り敢えず持ち帰って組織に処理を任せる。私達の独断で処分する事は出来ないよ」

持ち帰るのかよ、勘弁してくれよ。

私は相変わらず、吐き気を覚えながら壁に寄り掛かった。

吐き気。そう、吐き気だ。

何だか、気持ちが悪い。

……まさか、何らかの攻撃を食らってしまったのか？

その生き物は少しずつ、少しずつではあるが、肥大化しているように見えた。

「なあ、こいつ。成長している」

そいつは、急激に膨張を始めた。

「ヒスイ、気を付けろ。こいつは体液から何か神経ガスのようなものを出しているぞ。それが気化してここら一体を覆い始めている」

ネオは喉元を押さえる。

「私に大抵の毒は効かない。代謝機能で排出してしまうからな。多分、酸だ。気化した酸が体内に入って、内部で炎症を起こし始めているんだ。……だから、気持ち悪い……」

胎児の身体がびきびき、と変形していく。身体から牙のようなものが生えてきた。

……喰われる。そう感じた。

私は咄嗟に右手を掲げて、能力を発動させる。

部屋のみを破壊するだけのキルリアン・ストリームをそいつに向けて、放った。

ぶっちゃけて言えば、加減がうまく出来ずに、病室の窓や壁もぶち抜いてしまったのだが、一般人の被害者は特に出ていないようだった。

わざわざ、この場所を隔離してくれた病院側の配慮に感謝する。

「なあ、ネオ。最悪だ」私は告げる。

「キルリアン・ストリームを放つ前に逃げられてしまった最悪だ」

どうしようもない失態だった。

「いや、致命傷は負った筈だ。直撃は避けられたとはいえ、完全には避けていなかったよ」

「とにかく、探し出そう」私は舌打ちする。

悲鳴が聞こえた。

方角は、新生児病棟の正規の保育室。

近付くにつれて、嫌な音ばかりが耳に入った。

ネオは唇を噛み締める。

私は頭を抱えた。

床には看護婦の死体が二つ程、転がっていた。彼女達の身体は所々、どろどろと溶解していた

。

そして。

その肉塊は先ほどよりも、肥大化していた。

「お、お、こ、こいつ。何て事を……」ネオは怒りを抑えきれないようだった。

赤ん坊だった。まだ、生まれたばかりの者達だった。

肉塊は、部屋中の赤ん坊を食べ尽していた。

痛ましい、な。ネオは呟いた。私は何も言わなかった。

……一般人並の感覚で情に流されるわけにはいかなかった。私は至って、何にも感じない振りをした。

「ヒスイ、お前は後ろに下がっている。こいつは何が何でも、私が始末する」

ネオは床に唾を吐き捨てた。明らかに怒りを露にしていた。

そして、肩に担いでいたギター・ケースを地面に下ろす。

中からは、巨大な剣が現れた。

「こいつの名はギター・エッジ『アクアリウム』だ。お前のようなゲスを叩ききるための処刑道具だ。存在しない神にでも祈るんだな」

ごきり。

彼の右腕が膨張した。身体中の骨格も太くなっていく。

ネオの肉体が変形していく。

筋骨逞しい身体、精悍な顔立ち。

そう、胸板の厚い男性の姿へと変わっていた。

ふむ、ずっと性別不明だったのだが、男だったのか。こいつ。

大剣を振り回すたびに、音が何度も反響していく。

音楽だった。確かに、音楽が聴こえた。

大剣の中で、音楽が演奏されていた。

それと同時に、彼の肉体は加速し、斬撃の威力が上がっているようだった。身体機能も明らかに上昇している。血管が脈打ち、全身から浮き出ている。

怪物の肉体は彼の斬撃によって叩き潰されていく。

途中、粘液を吐き出しながら、ネオを牽制していたが、彼はそれを難なくかわして、剣を振るい始めた。音楽は鳴り止まない。最初はロックポップスだったものが、いまや激しいラウドパンクへと変貌していつている。

ついに、ネオの音楽はグロテスクな魔物を頭部だけの姿にしてしまった。

頭部だけになった怪物は、最後の抵抗を試み始めた。

顔全体から粘液を噴出し始める。

それに気付いて、私も加勢しようとフィロソフィア・ストーンを掲げたが、この位置だと確実にネオにも命中する。別にそれでも一向に構わなかったが、後で揉めるのも面倒なので止める。

粘液の壁がネオを包んだ。勿論、彼はそれを物ともせず、簡単に避けた。

だが。その隙を突いて、怪物は窓を破って、外へと出る。

敵は窓の向こう、何処へと消えた。

「屋上に向かっていているようだ。先ほど、探索用のゴーストを憑けておいた」

ネオは冷静な口調に戻って、そう言った。

私達は屋上へと向かう。階段を登るのがもどかしいので、民間人が見ていないのを確認すると、私のスキゾ・フレニアで屋上へと上がった。

「止めを刺すのは待て。ヒスイ」

めきめき、と彼の身体が変形していく。

「ゴースト・トランペット『カロン』だ。これで、敵の本体を探し出す」

彼は肩に背負ったドラム・バッグを下ろす。

中から、白い衣を纏った幽霊達の装飾が施された大きなトランペットが現れた。

彼はそれを吹き始める。

すると、彼の厚い胸板は曲線状に膨らみ始めた。

彼の全身は丸みを帯びていった。

筋肉質な身体はスレンダーなボディになっていく。

シャープな顎に対して、頬はふっくらと膨れている。

美貌なのだが、どこか尖った印象を受けた。

どこか、妖艶ささえあった。

何と、彼の身体は彼女へ。

ネオ・ロギスムは男から女へと変身していた。

私はぼかん、と口を開く。

「お前の性別、って結局、どっちなの？」

「よく聞いてくれた」

彼女は嬉しそうに言う。

「私……俺は、両性具有。半陰陽。つまり、アンドロギュノスなんだ。能力によって、片方の性別に完全に性転換出来るんだ。男性時は“音”。女性時は“ゴースト”と呼ばれる精神体の残滓を操る事が出来る」

ほう。面白い肉体をしているんだな。

「普段は両性具有の肉体なんだが。その時は一応、男女時両方の能力が使用出来る。

ただし、ものすごく劣化した能力しか使えない。本来の能力を引き出すためには、完全に性別を変えないと。引き出せないんだ」

「なるほど」

「ゴーストは、敵の本体を完全に突き止めたみたいだ。行くぞ」

私達は八階建ての屋上から、飛び降りた。

十

まず、してやられた。

ネオのゴーストで探り当てた地点には何も無く、結局、何度も、撒かれた。

二手に分かれて行動しよう、と言った矢先、そいつは私の元のみ姿を現した。

ずぶずぶ、と先ほどの奇形児が肉体の中に入っていく。

奇形の胎児を集めて造った肉体。

それはもはや、おぞましいという生易しい言葉では言い尽くせないほどに異様な姿をしていた

。

女性だった。それも極めて、醜かった。

彼女が喋るたびに、彼女の口からは蟄蛙や百足などの生き物が溢れ出してくる。さながら魔女の呪いを掛けられた西洋童話の悪女みたいに。

「私の名はコープス・ラヴァー。死体を愛する者さ」

その気味の悪い彼女の下僕達は、私の周囲を取り囲んでいた。

「目的は何だ？」私は問う。

「それを私に問うのは愚問だと思わない？」コープスは笑う。

「酸素を吸う。食事を取る。排泄をする。たとえば、一般的に人間はそうなの。それが脳に組み込まれた宿命であるかのようにね」

「成る程、もっともな答えだ」

コープスは嘲笑する。

「まあ、どうでもいいさ」私には興味が無い。

「薔薇バラにしてやるから。バラバラにぐちゃぐちゃに綺麗な薔薇に変えてやるから、かかってきな」

私の背後に死神の大鎌が現れる。

私は右手を掲げる。掌から紅い宝石が現れた。

「切り刻んで、その後、粉みじんにしてやるよ。いくぜ」

コープス・ラヴァーは笑った。笑うと気味の悪い顔がなおも気持ち悪く映る。

「そんなもので私を殺せると思うの？」

聞く耳は持たない。

私のダンス・マカーブルの大鎌は風車のように回転して、コープス・ラヴァーの身体を刺身に変えていた。すばすばすば、と下から上まで分けられていく。

更に追撃として、私の掌から放出される光弾が切り刻んだ肉片を灰へと変えていく。

「喋っている暇があれば、命乞いでもするんだったな」

頭の弱い決め台詞を吐いて、私は中指を灰へと立てる。

それにしても今回はどうにか、楽に倒す事が出来た。

私はネオを探しに行く。

「お前、インソムニアでしょ？ あんたの悪名はそれなりに耳にしているわ」

耳元で囁き声は聞こえてきた。

「……不死の身体を手に入れたのはお前だけじゃないのよねえ」

私の首筋には、先ほどコープスが撒き散らした蟲の一匹が張り付いていた。百足だった。

私の能力の弱点は小回りが殆ど利かない事だ。飛び道具にせよ、鎌にせよ、どうしても大技になってしまう。それゆえに、敵は間合いを詰めれば有利に持っていけると言う事が多らしく、不死身の肉体を利用しての、自身の身体ごと、敵を鎌で切り刻む、という捨て身の方法もよく使うのだが。

鎌で自身の肉体事、百足を引き裂こうとしたが、百足はくるり、と回転して、私の肉体傷付ける。背中に激痛が走った。酸のようなものを擦り付けられたらしい。脊髓だった。脊髓に穴を開けられたようで、たまらず私は直立している事が出来ずに地面に倒れる。

「ああっ、畜生！」

さらに追撃として、百足は私の右手の腱にも忍び寄る。とっさに私はマカーブルの鎌で百足を切り裂く。……その際に自分で自分の手首も切断してしまった。

「ああ、間抜けか私は！」裏返った声で私は悪態を付く。

最低だ。これで立てない上に、キルリアン・ストリームも撃てない。

再生にどれ位の時間が掛かるだろうか。脊髓の方はまるで再生する兆しが見えなかった。穴を空けられた時に、消化液か何かでも流し込まれたのかもしれない。

「あたしの身体は、一匹でも分身が生き残っていれば復活出来るのさ。残念だったねえ」

いつの間にか集まっていた蟲達が私を取り囲みながら、一声に哄笑する。

「仲間は助けに来ないよ。もう一人の方も同じように分身体に囲まれて戦っているからね」

私は転がっている、己の手首を見る。

「これだけの数を、そんな大降りの鎌一本で相手に出来るのかい？」

幸運な事に手首はこちら側を向いていた。

キルリアン・ストリームを私の全身に注ぎ込む。

何だか、自爆テロリスト、スーサイド・ボマーの気持ちを少しだけ理解したつもりになった。どんな信念を持っていたとしても、爆発する瞬間には、己が嫌になるのかなあ、と。

威力を多少抑えたつもりなのだが、それでも肉体の損傷は大きい。

無機物に魔力を縫い込む行為である、アミュレット・コーティングを施した服やアクセサリを身に付けていなければ、もっとダメージは大きかっただろう。やはり、この能力は威力調整が

ろくに出来ない。

「.....はあ、くう.....今でダメージ量が増えたが。まるで問題は無いな」

私は左手で取れた右手を握り締める。再生させるためにくっ付けようかとも考えたが、光弾を撃ったときの衝撃で吹き飛ぶだろうから止めた。

「これでしばらくは持つぜ。全滅させてやるからよ」

私は小さな光弾を連発していく。相変わらず、どうも威力がまちまちだったが、敵の一部を殺傷するには十分な攻撃を打ち込む事は出来た。

しばらく時間を稼いでいると、ネオがこちらに到着した。

私の惨状を見て、ネオ嘆息を付く。

ネオはギター・ケースを開いた。

中には、先ほども見せてもらった組み立て式の巨大な刃物が入っていた。

巨大剣。漫画、ベルセルクの主人公が持っているような巨大な長剣は筋骨隆々とした彼の獲物に相応しい。あるいは、FF7のクラウドかな。

「取り敢えず、何度でも刺身になれや。そのたびに切り刻んでやるからよ」

巨大な大剣はコープス・ラヴァーの右肩から腰まで一刀の元に、切り伏せた。

剣は回転する。もう一度、コープスの身体を両断した。

三回、四回、何度も、何度も、切り刻んでいく。

「おい、ネオ。そんなんじゃ、こいつは死なないと思うぜ」

「ああ。“本体”がきっとあるはずだ。本体を探さないと俺達に勝機は無いな」

ネオはアクアリウムをケースにしまうと、変形した肉体を元に戻す。

「だが、既に本体の居場所は俺のゴースト達が探し出している。見つけるのは時間の問題だな...
...だが、」

念には念を入れておこう、とネオは言った。

「再び、女の肉体へと変身して、カロンを使う。これで、ゴーストの量や性能を上げて、発見率を上げさせてもらう」

再び、ネオの身体が変形していった。

十

「やはり、お前達二人では荷が重かったらしいな」

三時間程、コープス相手に苦戦しながら、無駄な体力を削られ続け、結局、本体を見つけられない事に苛立ち始めていた時の事だ。

「コープス・ラヴァー。ドーンC級クリミナルだ。こいつは、妊娠中の女の肉体にいる胎児を変形させて、自身の下僕へと変える能力を持っている。被害者の数が無視出来ない人数になってきたので、そろそろドーンも本腰を入れて始末しようと思っていたところだがな、いやしかし、三名足らずで倒せてよかった。二人への報酬は弾むぞ」

ケガレ、が現れた。

ケガレは私達二人の司令官だった。

ケガレは紫紺色をしたローブを頭からすっぽりと被っていた。

くぐもった声のため、男とも女とも分らない。

ケガレの袖からは、筋骨たくましい両腕が伸びていた。

二つの腕は、何か、小さな生き物を握り締めている。

それは小さな胎児だった。腹がやたらと膨張していた。

「こいつが屍愛好者の本体だ。こいつを潰せば、この女は死ぬ筈……」

胎児はぎゃあぎゃあぎゃあぎゃあと喚いて、両目を動かしていた。

「君達二人はよく頑張ってくれた。君達がこいつの戦力を大幅に削いでくれたおかげで、私は楽に捕まえる事が出来た。感謝している」

ケガレはそいつが逃げられないように、固く拳を握り締めていた。

しかし。

先ほどから幾度も私達を虚仮にしてきたこいつの事だ。

このまま、簡単に捕まったままでいるのだろうか？

胎児は両目をぐるぐる動かして、周囲を伺っている。私は舌打ちをした。

「気を付けろ、ケガレ、そいつはまだ何かを隠し持っている」

……忠告するのが遅かった。

コープスの両目がぐるん、と回転する。そのまま二つの眼球が抜け落ちた、黒い穴の中から、大量の生物が現れた。

それは白い蟲達だった。コープスは大量の蛆虫を両目から吐き出したのだ。

蛆達は弾け飛ぶ。ケガレの両手が、どろどろと溶解していく。

どうも、人体を溶かす分泌液を出しているらしい。

ケガレの両手は、骨へと変わっていく。

醜い胎児は、蛆の海の中で嘲笑っていた。

ケガレのマントが開かれた。

紫紺のマントの中から、大小、無数の腕が現れる。どれも一対になっていて、十、いや、二十はあるだろうか。

「錬金術によって、このような身体へと変わったが。大抵の者は驚くようだな」

ひらひら、と風に乗って、ケガレの衣は宙に舞っていった。

胎児は口から、蟲達を吐き出していく。

大量のカエルや百足達がケガレのマントを覆っていく。

どろどろと、マントは溶解していく。蛙や蟲達の群れは凄惨な賛美歌を歌っているようだった。ああ、そうだ。これはレクイエムなのだ。地獄へ連れ去る、死者達のミサ。

断末魔、だった。

紫紺のマントの中から、両腕の無い小男が現れた。彼は身体中が溶解していて、顔は完全に潰れていた。男はそのまま地面へと落ちていき、ぼきっ、と嫌な音をして絶命した。

このままだと、コープス・ラヴァーに逃げられる。

ネオが前に出た。

この女だけは、俺が全力で殺す、彼はそう告げた。

大剣を宙で振り回す。

激しいメロディアスメタルが掻き鳴らされた。

そして。

ぱちり、と音が弾け飛んだ。

「俺のギター・エッジ『アクアリウム』の本当の能力は」

剣から放たれる音の音質が完全に変わっていた。

「電気を生み出す事が出来るんだよ」

ぴり、ぴり、と小さな放電現象が起きた。

それは、ほんの一秒にも満たない時間帯であったのかもしれない。

蛙や蟲達の神経系統は麻痺して、四肢を動かさせられないようだった。

コープスの本体も感電してしまい、地面に伏せたまま、起き上がれないようだった。

私は右手を掲げる。

全力のキルリアン・ストリームを叩き込んでやった。

コープス・ラヴァーの本体はぐちゃぐちゃに四散していく。

ネオは新生児病棟での事をぶつぶつ、と呟き始めた。よほど、ショックだったのだろうか？

そういえば、赤ん坊が何人も殺されていた。

けれど、私にはネオほどの感慨は無かった。どうせすぐに忘れるだろう。

私は紫色のぼろきれの持ち主である小男の死体を見据える。

「また、死なせてしまった」

多分、これからもこういう光景ばかりを目の当たりにするのだろう。

これは宿命なのだ。

「ヒスイ……」

ネオは言った。

「止めを刺す必要がある。本当に何処までもしぶとい奴だよ」

下半身を引き摺っている醜い胎児が、物陰へと向かっていた。

ネオはゆっくりと近付いていく。

「今度こそ、死んでくれ」ネオはアクアリウムのケースを持ち上げた。

「ま……て、……ネオ……ロギスム……お前に、伝えたい事がある」

途切れ途切れ聞こえない声で、血塗れの醜い異形は言った。

伝えたい事か。どうせ、油断を誘うためのものだろう。案の定、ネオも聞く耳などもってはいない。コープスへと重いギター・ケースを振り下ろそうとした。

「……『女皇』からの伝言だ。貴様に会ったら、伝えてくれと……。『アイス・エイジ』にて待つ。帰ってきたら、是非、私の顔を見に来てくれ。だ、そうだ……」

ネオは露骨に嫌そうな顔をした。

「そういえば、お前は『アイシクル・ナイツ』の一人だったな。取り敢えず、早く死んでくれ」

ぐしゃあ、とトマトが潰れるような音がした。

大きなギター・ケースの下半分は、どろりとしたもので濡れていた。

ネオはギター・ケースを派手に地面に叩き付けた。

「アイシクル・ナイツ……思い出だけで嫌な奴らだったよ……」

私はケガレの死体を見ていた。

彼の溶解した顔に、マントの切れ端を被せる。それ以上の弔い方法を私は思い付かなかった。

今回も報酬は貰えそうに無い。

私は深く溜め息を吐いた。いい加減、ドーンなんて実体の無い組織から抜きたい。

十

ネオはポケットの中から、鍵を取り出すと、病院地下の駐車場へと向かった。

ネオは車の一つの鍵を開けると、エンジンを掛ける。

「悪いけど、これから行く場所が出来た。お前との仕事はしばらく出来そうにない」

ネオはそう言って、私に手を振った。

「"アイス・エイジ"へと向かっているんだな？」私は聞いた。ネオは答えなかった。

「待てよ、相棒になったばかりだろ？」

「ああ。でも、ドーンの仕事とは関係が無い」

これまでのネオとは変わって、苛立たしげに頭を掻き耂りながら、酷く狼狽していた。

私は無理矢理、ネオの車へと入る。ドアが閉まる瞬間に、助手席へと転がり込んだのだった。
がこん、と背中をしたたか打ち付ける。痛みには慣れているのでまるで気にしない。

ネオは呆れた顔で私を見ている。

「なあ、覚えておいてくれ。私と共に行動している人間の殆どは死ぬ」

私は笑顔でネオに人差し指を突きつけて告げた。

誇張ではない、事実を。

「どうも私は自身の肉体に過信し過ぎている。だから、仲間や協力者を持って戦う事は苦手だ。
なので、お前も私と一緒にいれば、すぐに死ぬかもしれん。そういうわけで、宜しく頼む」

それを聞いて、ネオの顔は何とも微妙な表情になった。

「お前、阿呆か？ 入ってきて、いきなり死の宣告をするのか？ もっと、他に言う事、あるんじゃないのか？」

「気にするな、だって、もう決まっている事だろ？ 私も行くって」

それよりも、とネオは無言で言う。

思いつきり、私の両足がネオの膝の上に乗っかかっていた。

助手席に無理矢理入った後、そのまま体勢を変えていなかったというわけだ。

早く足をどける、とネオは訴えていた。

私は助手席へと座り直す。

車はアクセルを踏まれ、地下駐車場を後にする。

「なあ、俺が何で、アイス・エイジへと向かっているのか分かっているのか？」

「どうでもいいし。理由なんて私には関係が無い。ただ、面白そうだ。それだけだ」

「だろうなあ。君の場合」

「そういうこと」

「死ぬかもしれないぜ。というか、そのつもりで俺は行く」

「ああ。じゃあ、私はその光景を見届けに行くよ。お前の死に様を後世へと伝えたいんだ」

「嬉しい事を言ってくれるんだな。是非、そうしてくれ」

何だか押し売りの友情のようなもの。

「これからもよろしくお願い出来ないかな？」

「そうだな。お前とは何となく、長い付き合いになりそうだ」

私達はお互いの手を叩き合った。



私はノートPCをインターネットに繋げる。

ドーンの仕事で何か良い稼ぎになるものは無いか検索する所だ。

ドーンの公式サイトは複数あり、それぞれ、小さなブログサイトの管理人室などにパスワードを入力したりすると、辿り着く事が出来る。

一見、何でもない不人気なブログ等が、ドーンの公式サイトへの入り口だったりするから、一般人を如何に寄せ付けずに、表側のインターネット社会に根を下ろすか凝った作りをしている。21世紀に入ってからの大いなる進歩だ。

パスワードの入手方法は、ブログ内のフェイクモデルの記事等に目を通し、一つ一つ、こちら側でしか決して手に入らない情報などと照らし合わせていくと、簡単に暗号は解ける。

暗号を解いていくと、指名手配犯等の顔写真等の載せてあるサイトに辿り着く。

最近の裏社会内での猟奇犯罪の傾向を記した記事などに目を通す。

相変わらず、性犯罪の増加傾向は多発しているようだ。

私は小さな溜め息を吐いた。

数世紀前から性犯罪率は一向に少なくなる気配は無い。

むしろ増加の傾向にあると言っていい。

強制猥褻、ストーカー、監禁、猟奇犯罪は毎日、絶えず起こっている。

主な性犯罪の犠牲者層の大部分は何と、男性だ。

表社会では、世間的に女性が性犯罪の被害者になりやすいようであるが。

ここドーンを中核とした裏社会ではまったくの逆だ。

被害者の八割近くが男性である。これは数世紀前からまるで変わらない。

裏社会に身を置いて、女性の容姿を持つという事は必然的に凶悪犯罪の被害者となる確率が著しく減少する事を意味する。

何故なら、裏社会において、力を持つ者や上層部に位置する者は女性の容姿を持つ者が多いからだ。

表社会の常識は、ここでは根本から覆る。

さて。

表社会における裏社会の呼称は、ヤクザやギャング、マフィアなどを指すようで、あの辺りを裏社会という認識はあくまで一般社会の認識だ。

私達から見れば、所詮、生身の人間の集団だ。たとえ、刃物や銃器で武装したところで、元より、相手になるような連中ではない。

だが、私達の世界ではその存在自体が凶器であるような連中はさほど珍しくもない。

S級犯罪者とされているものは、都市一つの人口を簡単に殲滅出来る程の能力を持っているらしい。誰よりも血を好み、誰よりも人体を細かく切り刻むのが好きで、誰よりももっとも虐殺行為を好むようだ。返り討ちにあった者は一人として人の形をしていない。復元出来ない程に細切れにされてしまったのだから。そいつはありとあらゆる刃物を操り、ありとあらゆる刻み方を

知り、ありとあらゆる相手を血の海へと変えてきた。人体の何処をどう刻めば、より多くの血が噴出すのかを知り尽くしているという。

.....性犯罪増加の話に思考を戻す。

何故、これ程までに男性の被害が多いのか？

私はそれが不思議で不思議でならない。

「イヴを誘惑した蛇が女性であったように。また、アダムに林檎を与えたイヴが女性であったように。悪魔となるのは、聖書の頃からの伝統なんかなあ」

私はカフェオレを飲みながら、そう呟いた。

表社会、日本の街路を歩く。街を見渡せば、コンビニにはビニールに包まれた十八歳未満閲覧禁止のアダルト雑誌が並んでいる。

最近では、ああいうものが置かれているのを見ると少しほっとする。

フェミニズムが大人気のようで、皆が、女権拡張を叫んでいる。最近ではある政治家が、女性の性における役割について、一言多少過激に口にただけで大問題になっているようだ。下らない。

こちら側では、むしろ男権の拡張を普及させようとする活動が何百年も前から行われている。防犯グッズも安く購入出来るように署名も集まっている。だが、統計的に見ても、一向に犠牲者の数は減る気配はない。

最近はここ十数年の間、特にその傾向は強まっている。それも急速に。

それが何故かは知らないが、少なからず私は不審に思っていた。

しかし、まあ。

一概に表社会も平和とは言えないようだ。

元々、私は表社会での幼児虐待の被害者である。

表社会から排斥されて、裏社会に身を置く事になったため、あちら側もあちら側で相当、病んでいるのだろう。

あの頃、ながらく疑問に思っていた事が、ネオ・ロギスムという人物と出会って以来、氷結する事となる。

その日、私は帰り際に、本屋で沼正三の家畜人ヤプーを買った。マンションの部屋でそれをばらばらめくると、しばらくして壁に投げ付けた。

十

ネオに無理矢理付いていく事をせがんだ私は、その後、わざわざ家まで送ってもらい、十分な装備へと着替えた。

取り敢えず、私はいつものようなゴシックパンクの格好で行く事にする。

髪の毛に整髪料を入れ、青色のエクステンションを取り付け、両目に黒のアイカラーを塗り、同じように唇に黒い口紅を塗る。

服は全体的に黒ずくめで、血糊のような柄のカットソーに、袖が無くチェーンの付いたライダ

ーズジャケットを上から羽織る。ショートスカートの下に、伸縮性のあるサスペンダーでレッグウォーマーを吊り、両腕には髑髏や十字架型のブレスセットを嵌め、胸には、アミュレット・コーティングされたヴィヴィアン・ウェストウッドのペンダントを下げた。

両指の爪に塗った黒、赤、白のマニキュアが乾いた後、私は例の場所へと向かった。

以前、会った奴とは旧知の仲でも無いのだが、何だか気が合う。

いや、難を言えば、かなりの馬鹿なのだが、そこがまた面白い。

場所は、スラム付近16番街。荒廃手前の路地ではあるが、それほど治安は荒れていない。スラム街を西へ西へと進み続け、十数キロ先の山岳地帯へと道が続いていく。

山中の一角にある次元のゲートより、その場所は口を開いていた。

ネオ・ロギスムは新車のBMWを走らせていた。

先ほどから二時間ばかり車を走らせている場所は、荒涼とした砂漠地帯だった。

何故だか、腐臭と混沌の匂いがした。

BMWのカーステレオからはMarilyn Mansonを流している。先ほどから、何度も繰り返しリピートさせている曲の名前は『THE NOBODIES』。どこまでもどこまでも暗く深く落ちていく曲調と詞の世界はまさにこの朽ち果てた荒野に相応しい。

今日のオレは汚らしくて Today I am dirty

素敵になりたいと思っている I want to be pretty

わかってるさ 明日になればオレはただのゴミ Tomorrow, I know that I'm just dirt

名も無いオレたちは We are the nobodies

ひとかどの人物になりたがっている who wanna be somebodies

オレたちが死んだら when we're dead,

みんなオレたちが何者かわかることだろう they'll know just who we are

「J」の時は、一ヶ月ちょっとだった。ケガレに至っては、数日。ところで、お前はいつまで私の傍にいるんだろうな？」

私はさりげに不吉な事を隣のネオ・ロギスムに訪ねてみる。

暗鬱な経験ばかりを重ねてきたので、今回も同じ事が起こるように思えて仕方が無い。

「みんな脆弱過ぎる。死にやす過ぎる」

砂漠は広く広く広がり続けていた。場所によっては、一帯が黒く変色している場所も多く、ネオはそこ場所は汚染区域だと告げた。

「私は不死の化け物だからな。生命の脆さにはほとんど、悲嘆に暮れざるを得ないんだ」

風の臭いも酷い。油臭く、慣れないうちは劇薬の入った溶液でも嗅いでいるみたいだった。

「ドーンの上層部は下の人間の事を何とも思っちゃいない。それこそ、歯車だとか、道具だとかいうレベルを完全に超えている。まるで、いないものと思っているかのような節がある」

「当然だろ？ ドーンは会社でも企業でもなく、また統率性の取れた組織でもないんだから。ど

うも上層部同士が熾烈に仲悪いらしいんだよねー。それから、ドーンって、採用試験とか何もなくて。関係者と繋がって、登録したりすれば、それで組織の人間になれるわけじゃん」

それにしても、ネオの運転は相変わらず下手糞だった。

時折、がこんがこん、という音がする。勿論、地形的なものもあるがそれを引いても、ネオはわざとがたがたの道ばかりを選んでいるようにしか思えない。

「ちなみに、俺は実績あるぜ。八年ドーンで勤めているからな」

「Jは10年以上。ケガレは数十年の実績はあったかと思うぞ」

それを聞いて、ネオは手で車の窓やハンドルを叩きながら笑い転げる。

「知らね。年数だけ重ねて実質上、弱かったんだよ。実戦じゃさ。俺、分かるんだよ。そいつの実力がどの程度のものか」

大した自信だ。私は溜め息を吐いた。

私は簡単には死なない。死ねない、不死の身体を持っている。それ故、他の者達の脆さについて配慮が足りない。私は他人と共闘すると、自分自身の肉体の強さ、他者との差異を無意識的に忘れがちになってしまうため、結果として、共闘相手を死に追いやしやすい。

私には幾らでも生命のストックがあるが、大抵の場合、他人にはそれは無い。

友人等から、その点をよく指摘されるが、実際、戦場ではその様な事をつねに念頭に置きながら戦うのは難しい。意識がそればかりに向くと、実力を出しきれないからだ。

ネオは唇を緩め、私の肩を叩いた。

「あんまり、気にするなよ。俺も俺で、マイペースにやっていきたいからさ。俺もよく、仕事仲間から協調性ゼロ、って罵られるのな」

.....だろうな。

「お互い、単独で戦った方が明らかに効率いいんだよ。中層部の頭固い連中が、権威とか体裁とか、そんなどうでもいいのに拘るから勝手に自滅して死んでいくんだよ。指示して纏めたいんだよ、奴等は」

「そうだな。死んでいったヤツらは、勝手に死んでいっただけだな」

「そうそう、忘れろ」

こいつ相手なら、長続きしそうだ。

当分、死なないタイプだろう。良いパートナーになれるかもしれない。

ネオ・ロギスムは現在、女性形態となって霊体操作能力を上げ、周囲にゴースト・ロードという霊の通り道を張り巡らせ、己が使役する霊達を監視人にして、何者かの攻撃や、トラップの感知をさせている。

「俺はあの町から追放された身だからな。一応、こういう風に念入りに念入りを重ねないといけないのさ」

一体、何をやらかしたのだろう。こいつなら、何でもやりかねない気がするが。

私は笑った。

しばらくすると、汚染区域の酷い地形が現れる。

この場所が見えてれば、目的の場所はもうすぐだ、と彼は言った。

私達の目的は、この街の頂点に立っている『女皇』に会う事だった。

昨日の出来事であった。

私達はある人物と邂逅する。

十

その場所は、ぼつりとした小さなベッドタウンの路地裏に設けられた喫茶店だった。

次元の歪みが生じない。という事は、ここは現世、現実界であるようだった。

服の意匠は、さながら昔のヨーロッパ貴族階級が身に付けていたドレスのように見える。

暗黒を更に黒色に塗り潰した黒。

喪服のような出で立ち。

その顔は、何の感情すらも理解出来ないかのような、無機物的なものを思わせる。

髪はうねった波のような金色色の縦ロールだ。

その螺旋をした形状の髪型は、奇妙な幾何学模様にも見えた。

ただ、黒く。黒い。夜よりもなお暗く深い。

「それで」

静かに。

「私に何の用だ」

その人物は言った。

訊ねる、というよりは呟くような物言いだった。

事実、その言葉を口にするその人物は私の方向を見ていなかった。

ただ、暗闇の向こうを見つめ、何者をも、どのような存在をも意に介さないかのような凜然とした口調だった。

空間と暗黒。闇より、更に黒い。

決して、巨軀ではない。だが、その人物そのものが、さながら巨城のごとく聳え立っているかのようなのである。

「お前、本当に私に興味が無いんだな？ よおおく、分かった」

その瞳は何者をも見据えているかのように、おそらくは何物をも見てなどいない。

「なあ、インソムニア。何者なんだ、この人は？」

ネオは私に聞く。

「ああ、こいつはな」

私はさも何でも無い事のように言った。

「ドーンの中のトップにいる、中枢の人間の一人。ドーンにて、ある程度、比較的能力のある者にとっては、その名を知らない者など存在しない、円環の魔王『メビウス・リング』だよ」

私は軽やかな口調で疑問に答える。

瞬間。

ネオの顔は一瞬にして、蒼白するのが分かった。

「おい……、ヒスイ、悪い冗談はやめ……」

ネオは言葉を止める。余りにも分かりきっていた事だろうから。

私達二人の前に対峙している。

その圧倒的な存在感を放ち。威圧的なオーラを放っている人物が、何であるのかを知った時。

ネオは絶句していた。

普段は軽薄かつ、脳味噌詰まっていけないんじゃないのか、って感じの奴が。

真剣な眼差しでそいつに魅入っていたのだ。

「紅茶を飲み終えたら、私は行く」

金色の魔王はそっけなく告げた。

「まあ、急ぐなって、そう生き急いだって、人生楽しめないぜ。もっと、楽うーに、緩やかに生きてればいいんじゃないの？」

「私はお前達に構っている程、暇では無いのだぞ」

淡々とメビウス・リングは告げる。

こいつは、本当に私達ごときには何の興味も抱いていないのだろう。

「お、おま、ちょ、ヒスイ、お前、少しは言葉を慎めよ！」

いつもは傍若無人な筈のネオは、更に蒼白になりながら必死で私を宥めていた。

「今、ここでキルリアン・ストリームをお前の顔面にぶち込んだって良いんだぜ。なあ、私の話を聞けよ」

メビウスの隣で紅茶を入れていた青い服の付添い人が眉を顰め、私を睨み付けた。

メビウスの方はなおも無表情だ。

「温度。質。どれを取っても、まだ口に出来るレベルではない」

静かな口調で、付き添いのお茶汲みの者に叱咤する。

メビウスと似たような衣装の。サックス・ロリィタの服装を身に纏ったその人物は、少し陰鬱な顔に変わる。

「すみません。もっと精進するように勤めます」

メビウスは一瞥すら返さなかった。

私は少し苛立ちを覚える。こいつらは本当に私達の事なんて気にもしていない。

「そそ、メビウスさんさー、インターネット情報はお前の武勇伝ばかりだぜ」

「おそらく、そのネットワーカーはメビウス様の支持者か何かだと思うよ」

付き添い人が答えた。

メビウス・リングの名がサイト内に浮上した瞬間、対となって現れる、その名。

私はずっと疑問に思っていた事を口にする。

「『リフリジレイター』ってのは何なんだ？」

ぴくり、とメビウスの顔が動く。

「ネットのドーン情報を幾らかき集めてみても、そのリフリジレイターっていう存在の概要がまったく見えてこねえ。それで、私は知ってそうなアンタに直接、聞きにきたってわけだ。なあ、答えろよ。おそらくあのサイトの利用者の多数が聞きたがっている疑問だと思うぜ。そして、こ

れは有力情報として、アイス・エイジの女皇は、そのリフリジレイトーとの何らかの関わりを持っている、……いや、違った。“女皇はそのリフリジレイトーという存在を、執拗に崇拝している“という書き込みが多い」

「答える義務は無い」

傲岸不遜としか思えない態度に、私は完全に頭に血が上ってきた。

私は右手をメビウスに向ける。

「発射するぞ？ 前々から、私はお前をぶっ倒したい、って思っていたんだよ」

「ふむ？ お前に私を倒せるのか？」

メビウスは静かに紅茶を啜る。

「止めるなよ、新約言語。こいつはこうでもしないと、本当に私達なんて、ビルの隙間で落ちた菓子に集まっているアリ程度にしか思っていない！ 思えない、んだよ！」

私は全力のキルリアン・ストリームを解き放つ。

「そうだな……。その程度の力量ならば、」

メビウスは静かに紅茶を啜る。

「辿り着けるかもな。もし仮に、リフリジレイトーの影響を受け、何らかの支配下に置かれているものとの接触を試みて、好成績を残せたのならば、“あれ”についてお前に教える事にしよう」

ことん、とカップを置く音が聞こえた。

「では、私は行くぞ。時間だ」

メビウス・リングの飲んでいた紅茶のカップを、付き添いの者がしまう。

放った筈のキルリアン・ストリームは。

黒い衣装の女に当たる前に、虚空で消えていた。

何らかの攻撃によって。

完全に消滅していたのだ。

私は舌打ちをして、なおも問いたです。

あいつの能力『ウロボロス』ってのは、本当に、腹立たしい。

「なあ『女皇』ってのは、そのリフリジレイトーとの何らかの関わりがあるのか？ それだけは教えてくれよ！」

「多分、そうだろう」彼女は、それだけを答えた。

彼女は振り替えらずにそう答えた。

深い漆黒の闇の中。

メビウスの姿は完全に消えていた。

一緒にいた付添い人もいつの間にか消えている。

「い、い、生きた心地がしねえよ！ 何て事、するんだよ、お前は！」

「心配するな。あれは、私達程度じゃ本当にああでもしないと、相手にしないんだからな。私達は、殺すに値する程の存在には為りえないんだよ、少なくとも現時点では」

私は悪態を付く。

「しかし、本当に無駄な行動をまったくしないんだな、すげえな……」

生きた球体関節人形。

言ってみれば、アンドロイドみたいな奴だ。

「リフリジレーターってのは、一体、何なんだ？」

今度は、ネオ・ロギスムの方に訊ねる。

「お前なら、知っているんだろ？」

「.....済まない。今は答えられない。ただ、俺と一緒に、『女皇』と会ってくれないか？」

私達もその店を出る事にした。

そして、今現在、私達はアイス・エイジに入り、女皇の下へと向かっている。

十

「なあ、ネオ。ふと、疑問に思う事があるのだが」

しばらく車を走らせていると、やがて都市が見えてきた。

「今、見えてきた都市部の岩山の中央に浮いているあれな。あれも、お前が操作しているゴーストの一体なのか？」

砂丘の上には岸壁があった。岩々の節が大きく窪んでおり、それははっきりとした、ある形状をしていた。

それは顔だった。

「それにしては、やけに大きいな」

ネオは眉を顰める。

「俺はあんな巨大なものを召喚した覚えはない。あれはなんだ？」

「だろうなあ.....なあ、ネオ、何かがおかしいぞ」

私達のいた一体が消滅していた。

四角状の空間だった。

四角状に挟れた空間が、地面にぽっかりと開いていた。

長方形の形に綺麗に挟り取られた地面は、少しずつ私達の乗っている車の後を辿るかのように幾つも幾つも作られて、近付いてきていた。

ネオは車の速度を少しずつ上げる。

「糞、これ以上、速度を上げれば車体が転倒してしまう。ジープにでも乗ってこればよかったぜ。いつの間にか、オレの召喚したゴーストの大多数が消滅している。何が起きているのか分からない。とにかく、一秒でも早く対処しないと、.....死ぬぜ」

ネオは頬から冷や汗を流していた。

なおも、四角い空間が現れる、という現象が続く。

「なんだよ、あれ。U F Oの着陸したミステリー・サークルみたいに綺麗な穴が開いているぜ。サークル.....丸じゃなくて、四角だが」

「そうだな。こいつの名は取り敢えず、『スクウェア』と呼ぼう。なあ、おい、引き返すぞ、ヒスイ！」

多分、敵は空間を喰らいながら私達を攻撃しているようだ。

長方形の裂け跡は、少しずつ速度を上げながら私達に近付いていた。

おそらく、まともに攻撃を喰らえば、たとえこの身体とて、いとも簡単に消滅してしまうだろう。

「いや。このまま行く」

私は窓から車の上に上がりこむ。

「出て来い、スキゾ・フレニア」

私の首筋にあるタトゥーがベリベリと音を立てて剥がれていく。

三つ首の身体中を破壊されたドラゴンが姿を現した。

私は右腕を天に掲げる。右の掌から、びきびきい、という音を立てて埋め込まれた、フィロソフィア・ストーンが姿を現した。

がたん、といきなりネオは後部座席に置いてあった、アクアリウムという武器が入っているギターケースを私の座席に放り込む。

なあ、おい、これが邪魔で私が座れないだろ。私はネオのギターケースの上に乗っかる。

前方の砂上が四角状に埋もれて窪んでいた。

「なあ、ヒスイ。ちょっと言うぞ？」

ネオは唇を噛み締め、舌打ちをする。

「どうやら、追い越された、ようだ」

振り返ると。

後部座席が無くなっていた。

私達の座っているシートも、その半分が削られ、何処へと掻き消えている。

「咄嗟に、俺のもう一つの武器の方は守ったが……。あいつ、俺のBMWを……。赦せねえ」

私は半分に分けられた前部座席だけとなった車体から、飛び退いた。

ネオはギターケースを地面に置くと、勢いよくトランペットを吹きつけた。

辺り一面を無数のゴースト達が飛び回る。

ネオは何かを感知したようだった。

「ヒスイ、非常に言い辛い事がある」

空中でいくつものゴーストは消滅していく。

「おそらく奴は、四角いスペースをブロック状に敷き詰めて、前後左右全ての方角をガードしているみたいだ」

つまり、事実上、私達の攻撃はまるで通らない。今の私達が奴を倒す術は皆無だと、ネオは言っていた。勝てる手段が分からなくなる。

「逃げるか？ 私はどう言われようが……」

「いや、待て」

ネオはいぶかしむ。

「ゴーストが数秒間だけ、通り抜けられる位置がある。どうも、抜け道が存在するらしい。……おや、もしかして、あそこから、生み出した四角い消滅空間を私達に送り込んでいる

のか…………？」

ネオは私の右腕を握り締め、動かす。

「あの位置に対して、めいいっぱい、ぶち込んでやれ！　ヒスイ！」

「ああ、了解だ」

私はキルリアン・ストリームの放出する。

私の右の掌の肉が盛り上がり、紅い鉱石が出現する。

“顔”はぐちゃぐちゃに装甲が破損し、そのまま地面に墜落する。砂漠一帯に巨大な爆発音が響いた。爆風で残骸の破片が飛び散っていき、私達は巧みにそれらを避けていく。

私は溜め息を吐いた。

「なあ、どうするよ？　私はキルリアン・ストリームを打つためのエネルギーを全て使い切ってしまったぞ。もう威力の低い奴の一発も放てねえ。……それどころか、自己再生も殆ど残ってないと思う。今、肉体が四散すれば、そのまま死んでしまう気がする」

「お、俺も、ゴースト操作はしばらく出来ない。というよりも、体力的に正直キツイ。というよりも、この身体を酷使し過ぎて、もう一つの音の能力の方もしばらく使えそうにないな」

ネオはトランペットを地面に下ろした。

ネオの肉体が変化する。

女性形態を止め、いつもの両性具有型へと姿を変えていた。

お互い肩を竦めあうと、苦笑とも自嘲ともつかない声音で溜め息を付き合った。

「俺達って、どうして、こうスマートに戦えないんだろうな」

「しらね、あったま悪りいーんだろ、私達は」

どう考えても、今の戦いは敵に向かって、頭の悪い自己アピールをかましてしまったようなものだ。そんな私達に隠密行動なんてきつと不可能だ。

ネオは未だ、壊されたBMWを未練たらたら眺めながら、頭を抱え込んでいた。

私はネオの肩にそっと手を置くと、落ち込むネオを慰めるフリをしながら、フォリ・ア・ドウでネオから、負のエネルギーを吸い取ろうとする。

……残念ながら、脳がスポンジ状になっているとしか思えない程、ごく微量の感情媒体しか吸収する事が出来なかった。さては、こいつ、いつも悩みとかさほど無いに違いない。

……しばらくキルリアン・ストリームは撃てそうになかった。

十

「意外と追撃は何も無かったな」

「ああ。もしかすると、俺達の事を実は歓迎しているのかもしれない」

ネオはくくっ、と軽口を返す。私は舌打ちした。

錆び付いた看板を見上げる。“アイス・エイジへようこそ”。

ここの住民からしてみれば、次元砂漠全体ではなく、この町の事をアイス・エイジと呼んでいるらしい。

次元砂漠アイス・エイジ。

ここは大体、日本の北海道程度の面積がある。

多次元世界の一つであり、全土の約七割型が砂漠か乾燥した荒野となっていた。

その一角に、大体、東京と千葉を合わせた程度の面積の街が存在した。

人口約六十万人。ただし、どこからが人と換算していいかどうかは不明だが、一応、言語能力があるか、人間に近い形態を保っている者達は人口数には加えられている筈だ。

この街は、様々な地域の、胡乱な錬金術やら、黒魔術研究機関によって廃棄されたスクラップや人口生命体が流れ着く場所だった。放射能や汚染物質が蔓延しており、奇形生物達が増殖している。また、様々な新種の病原菌の温床ともなっているらしい。表舞台から、ペキング・オーダーされた者達が、独自の生態形を作り出す場所。

「俺はこの町で生まれ育ったんだ」

ネオは屈託の無い笑みを浮かべる。

スラム都市。

鉄パイプで出来た家。何かの死骸を集めて固めた家。廃材ばかりが、要塞のように積み上げられている。

下水からは、散乱された鉄屑や何かの肉片が大量に流れていた。

通りを見渡すと、何人もの空ろな目をした少年達がこちらを食い入るように眺めていた。よく見ると少年は老人だった。彼らは異常な程に萎縮した矮躯を引きずりながら物乞いをしていた。彼らの手足を見ると、ちゃんとパーツは揃っていなかった。ネオいわく、生きていくために身体を切り売りするのだと。たまに、追い剥ぎにあって臓器や四肢を取られる事も多いんだと。

通りから離れると、農場があった。畑には上半身だけ地中から出た腐乱死体や人骨から、様々な野菜や茸が生えていた。たまにまだ生きている奴もいて、そいつは顔を苦悶に歪ませて悲鳴を上げながら、何やらこちらに助けを請うかのような視線を投げ掛けていた。何でもネオいわく、主に食料泥棒などをこうやって人体に寄生する植物の種を植え付けて、食料に変えていくのだと。

農場の遥か向こうの丘の方では、汚いくすんだ灰色の鬣をしているハイエナとライオンを組み合わせたような生物によって、人間が頭から食べられていた。その生物は一通り周囲の人間を食い終わると、今度は共食いをし始めた。見る見るうちに、血肉と骨を撒き散らしながらお互いを食い合っていた。ネオは小さい頃は、あのような肉食獣に襲われるから、居住区から離れた場所には行くな、って大人によく言われたっけ、と苦笑いをしていた。

瘴気。

そう、瘴気とでも呼べるものが確かに渦巻いている。

ああ。

力が漲ってきた。

この渦巻く負のオーラは、私の失われた力を取り戻すには充分だった。

私はスキゾ・フレニアの能力の一部である“フォリ・ア・ドウ”を使って、力を取り戻していく。この能力は、他者や空間に充満した負のエネルギーを取り込む事によって、それを私自身のエネ

ルギーへと置換していくものだ。

キルリアン・ストリームはスキゾ・フレニアの能力であるため、フォリ・ア・ドウによって、たびたび補充していかなければ能力切れを起こしてしまう。

私がエネルギーの補充を行っている間、ネオはこの街について語り始めた。

「大体、この街の表層部はこんな感じのスラム街になっていてな。中心に向かうについて、歓楽街へとなっている。その歓楽街の中央に、我々が目指すべき「女皇」の宮殿があるのさ」

「しかし、すごいな、この街は。何っていうか、……壊れている。そう壊れているとしか表現出来ない」

「いやいや、俺の育った場所なんだってば。順応さえ出来れば、そのうち楽しいとさえ思えてくるさ。だがまあ、君の言っている事は否定しないし、出来ないよ」

「永遠に順応出来ない気はするけどな」

「そうか。俺はこれで気にいっている。自然界の弱肉強食の模範を示しているんじゃないかな。大きくなって、ここを出て、色々な地域を回って、比較してみて、ふと思った事なんだけどさ。ここがグロテスクであるってのは、価値観や倫理観における驕りだと思うぜ」

「まあいいんだけどさ。私はここに居住するつもりは一生、無いし」

正直、とっとと用件を済まして帰りたかった。

「それから、一応、安全地帯と非安全地帯、二つがあるのだが、ちなみにここはまだ安全地帯の部類ね」

露店ではホルマリンか何かの薬剤に浸されている人体のパーツが並べられて売られていた。先日あった、抗争の犠牲者達の肉体を使用しているものが主な目玉商品のようだった。

人体パーツは、食事代三回分程度の値段のようだった。何でも、ペットの餌、可愛いオブジェとして、服飾の原料として、等等、様々な使い用途があるらしい。

それよりも、人糞を漢方薬とし売っている店の方が個人的には気味悪かった。しかも、その店の店主とその家族達から生成したものらしい。そこの店主の目はどす黄色く濁っていて、何だかよく分からない草と菌糸と腐葉土をぐちゃぐちゃに一緒に混成したものに、火を灯し。それからくゆりくゆりと揺らめき出た煙を吸っていた。彼の子供達は、主人の作った漢方薬製の飴玉を取り合って喧嘩を始めていた。

「うーん。……やっぱり、一生慣れそうにないなあ」

私はようやく、キルリアン・ストリームを撃つための補充を完了させる。

しばらく通りを歩いた後、私達はレストランへと入った。特に私は頻繁に肉類を中心とした栄養の供給もしなくてはならない。能力の構造上、血肉をより凝縮して体内に溜めておかなければ、再生する速度が遅れるからだ。

「一応、この店は信用出来るはずだ。奥にいるコックから調理師免許を確認させてもらったからな。偽造でなければ、まともに食えるものを出してくれるはず」

メニュー表を見る。

文字が解読出来なかったので、諦めた。メニューごとに親切に一つ一つ料理の写真まで載っていたが、それでも一体、何を材料に作っているのかがまるで分からない。

厨房からは、ポーク、チキン、ビーフ。ロブスター。……あとは何だかよく分からない動物の匂いが立ち込めてくる。

ネオは私からメニュー表を奪い取ると、一つ一つ解説してくれた。

「そいつは蛇、こいつは猫。そっちは蛙かな。ここは良心的な店だよ。もっとも手軽に手に入る人肉を食材に使っていないからね」

「ちなみにお前は食った事あるの？ 人の肉」

「いや、俺は歓楽街出身者だったから。人肉は人間以下の畜生の食べ物だって教えられたんだよ。このスラム街へはよく遊びに来ていたけどな」

「いや、真っ当な正論じゃないかよ。畜生以下の食べ物って。倫理というものを信じているわけじゃあないが。一般論から言えば倫理的に見てその通りじゃねえ？ たまには良い事も吐くんだな、連中も」

「いえいえ、人間の肉を食らうここの住民は貧民街の被差別市民でしたから。歓楽街の住民にとっては、ダニ以下なんだよ。差別意識で言っているのよ。あ、でも赤ん坊の料理は高級料理だったか、あそこでもな」

「……そおすか」

「胎児と胎盤を混ぜた薬味スープが最高なんだとよ。俺は食べなかったけどね。嫌いだったから」

ネオは少し、吐き捨てるように呟いた。

ぱく、ぱくっと、ネオは注文した料理が運ばれてくると、それを何の躊躇もなく口に放り込む。

「おお、美味しいじゃねえか。これって幾ら食っても、安全だよな？」

「ああ、勿論。まあ、せいぜい胎児の肝や胎盤ぐらいは隠し味で入っているかもしれんが」

私はネオを睨み付ける。そして、地面に歯に詰まっていた骨の欠片を吐き出した。

「冗談だよ、冗談。このレストランは歓楽街方面に本館を持つ政府目押しのレストランだ。食材に人体やそれに類する物質。放射能汚染のあるものなどの混入を禁止されている」

「じゃあ、他の食堂では違うっていうのか？」

「ああ、毎年、他のレストランでの食中毒による死者数は二百人を超えている。衛生管理が極めて悪い上に、そこら辺で調達した安上がりの食材を使っているからね」

食堂の窓から見える光景は、相変わらず食欲を減退されるものばかりで、正直、言って耐えられるものではない。

まあ、気にしなければそれまでなのだが。

「ただ調味料は使うなよ。調味料にまで規制が入っているわけじゃないからな。本当に何が入っているか分からねーよ」

そう言いながらも、ネオは赤や黄色、紫の粒の詰まった調味料をクロコダイルのフライとサボテンステーキの上に振り掛ける。調味料の事をいぶかしんでおりながら、現金なものである。

私は十数本もの大型チキンを片っ端から骨にしていった。

チキンを一通り食べ終わると、次は、特盛りの焼豚チャーハンを卵餡かけスープに入れて、口

に放り込む。ニラ餃子が添えられていたので、

デザートには、西瓜と梨を大量に入れられた杏仁豆腐と、ここの砂漠で取れるらしい、匂いのキツイドリアンを口にする。

食事代はネオがぼん、と出してくれた。こいつは人に奢るのが好きなようで、以前も、バーで数十万を湯水のように使ってくれた。いや、数百万だっけ？

どうもこいつは貯蓄する事が嫌いらしい。

ネオはどうせ、長生き出来る保障も自信も無いし、巨額な金が必要になるようなものには手を出したくないのだと。……もっとも、ドーンの賃金は、表側社会の人間のそれとは比べ物にならないから、車だのブランド物だのはぼんぽんを買えてしまうのだが。

金を背負っているなんて人生の重荷を余計に背負っているだけだぜ。

ネオいわく、そういう事らしい。

昼食が終わると、ネオは歓楽街方面を案内すると告げた。

赤ん坊の死体が大量に鉄棒に刺さっており、それらの周囲を炎が覆っていた。

何でも、人間の身体から出る脂を発火用の固形燃料として使っているらしい。つまり、石炭や木炭と同じ扱いだ。死蟬って奴だ。

そんな、……そろそろ感性が麻痺してきて見慣れてしまった猟奇光景を私は少し含み笑いを浮かべながら眺めていた。住んでみると案外、居心地の良い場所なのかもしれない。

『屍廓人蝕香料館』

館状のドームで覆われている居住区である。

スラムの住民がここに入るには通行税がいるようだった。

私は守衛に通行税を渡すと、あっさりと中へと入れた。先ほど、砂漠にてガーディアンを倒したので、私達はマークされていると踏んだが、どうも守衛の見る限り、そのような気配は一切、しない。

窓口に記された金額を放り込むと、ゲートが開く。

泳がせているだけかもしれないが.....。

どちらにせよ、私は考えるだけの頭を有していない。

「ああ、そうだ。ちなみに、非安全区域ってのは、今から向かう歓楽街方面の事ね。絶対に一人で行くなよ」

なんと歓楽街の方が危険地帯なのか。

毒々しいまでの華やかな看板が添えられた店が並んでいた。

「厭な香りが立ち込めているな」

私は言った。

「ああ、ここは世界有数の風俗街だと言っていい。廃棄された者達が造り上げたアイス・エイジのもう一つの顔さ」

「どっちかといえば、貧困街の方が私好みではあったぜ」

性の匂いが充満していた。

看板には色取り取りのあどけない少女達の写真が貼られていた。

ネオは苦笑する。

「ヒスイ、良い事を教えてやろう。あの写真の少女や、店で立っている女達はな。全部、男だ」

私は眉を顰めた。

「ホモなのか？ それとも、性転換したカマ？」

ふと、友人の顔を思い出す。元々、私がドーンで仕事をする時の相棒は、男なのだが女の格好をするのが趣味。というよりも、アイデンティティーである奴だ。本人いわく、性同一性障害ではなく、いわゆる服装倒錯者、クロスドレッサーであるらしい。

ネオは先ほど貧困街の工場地帯にて、車屋に預けてきた、半分にカットされたBMWの修理がそろそろ終わる頃だから、取りに戻ると告げた。

こんな異様な町で私一人になってしまった。

私はここに来た目的に思いを馳せる。

『女皇』

かつて、闇組織の人体実験被験者、人工生命の失敗物を廃棄するために作られた、次元・砂漠”アイス・エイジ”。荒廃したスラム街と奇形住民しかいなかった屍廓にて、数十年で莫大な権力を築き上げ、スラムの中心部に『屍廓人蝕香料館』という巨大歓楽城砦都市を建て、アイス・エイ

ジを己の支配下に収めた女。

.....どんな人間か、会ってみたかった。

否、人と呼べるものなのかどうか分からない。

女皇の名は、ネット上で度々、見かけた。その存在の殆どは、不可視のヴェールに包まれているが、その影響力は各方面に及んでいる。

能力の一切が不明。

配下には、コープス・ラヴァーのような者を何人も置いているという。

また、“フロスト・マンサー”と呼ばれる専属の親衛騎士隊が存在するらしい。

そして。

女皇は表世界において、悪質な事件を引き起こしているドーンにおいてのA級犯罪者でもある。しかし、何人もの人間が女皇討伐へとアイス・エイジへと向かい、変わり果てた姿となって死体を送り返されてきた。勿論、言って戻って来ない物も相当数多い。

.....さて、我らが寡黙の魔王、メビウス・リングは女皇をどのように見ているか分からない。一切の放置か、あるいは何らかの処置法を考えているのかもしれない。

「ネオはこの際、放っておくか」

いつもの破滅願望が私を襲う。くらくらとした。

私は。

たった一人で、女皇の宮殿へと向かった。

十

「女皇について知りたいのなら、こんな逸話があるぜ」

先ほど、ネオは言った。

「ある男が香料館に入った。女皇を倒すための偵察としてな。彼は数名の仲間とチームを組んでいて、そいつは間諜タイプのバウンティ・ハンターで。彼のチームは、ドーンにてそれなりの好成績を残していた奴なんだが、結局、簡単に捕まった。女皇は訊ねた。“お前の仲間は何処にいる？”と。そいつは答えなかった。それから拷問されて無理矢理、吐かされるだろうと覚悟して、どうにかして速やかに自殺する事を考えていたんだが、女皇は彼を拷問するどころか丁重に持て成して、ぼろぼろだった彼に新たな衣服を与えて、宮殿内の大浴場にまで入れてくれたそうだ。その後、宴会に誘ったらしい」

「それで？」

「で、宮殿の給仕係達が豪勢な料理を目の前に運んできた。女皇は再三、彼に訪ねた。“お前の仲間達は今、どうしている？”と。男は答えなかった。女皇は笑いながら、言った。教えてやるよ、お前の仲間達は、今、ここ目の前にいるよ。お前の両目に映っているものがお前の仲間達だ、と」

「へえ。なるほどねえ」

私は笑った。

「みんな調理されていたのさ」

ネオは嘆息を付いた。

「偵察役の男の仲間、とっくに身元も割れて攫われて、彼が女皇の館に来た頃には、とっくに皆殺しにされていて料理の食材になっていた、というわけだ」

.....ネオよ。いかにもおどろおどろしい話をしました、と演説ぶったわりには、大して面白い話でもなかったのだが。

「おいおい、人肉料理は被差別民の料理なんだろ？ 女皇がそんな事、するかねえ？」

私は笑って答えた。

「いやあ、まあ、確かに、これはアイス・エイジの住民を評価する逸話の一つとしてジョークに使われている部類の話でもあるんだけどさ」

異常嗜好の人間なんてドーンには腐って飽きる程いる。この程度で驚き竦んでいるようではドーンで戦っていく事なんて出来はしない。

「まあ、とにかく、慈悲の欠片も無い奴だから、用心してくれ」

私は回想から現実へと戻る。

さて。色々この街に付いて知っているネオがいらないのは危険が倍増しているが、私はそんな事には気にもしない。

私は女皇の宮殿『老生艶魚』へと着いた。貧困街方面からもよく見えた巨大建造物だったので、迷う事無く一直線で辿り着く事が出来た。

門番は全身を黒い布で覆い隠し、額から呪いのような文字の書かれている札をぶら下げていた。コープスとの戦いで死んだケガレを彷彿させた。.....。

「インソムニアさんですね」

人間には出せそうにない酷く濁った音階でそう告げ、老生艶魚の門番はあっさりと私を通した。どうも歓迎されているようだった。

しかも、素性までばれればれた。毘だ、っと気持ち良いぐらい断言出来る状況なのだが、私は気にせず入る事にした。

橋の前には老生艶魚の地図を書いた札が立てられていた。

『水淵庭』人間の体液を沈めたプール。人間の脂と海水を混ぜた池らしい。

『迷遊螺旋』どこまでもどこまでもどこまでも続く、階段によって造られた街路。

『縊死白猿塔』対峙する二つの塔の右側である首を吊った巨大猿の彫像が吊られた塔。

『糜爛雲龍塔』対峙する二つの塔の左側である苦悶の顔を浮かべる人の顔をした龍が巻き付いた塔。

そしてそれらの中央にあるのが。

『疫炎閻羅』女皇の住まう内裏。

私は水淵庭に掛けられた橋を渡って疫炎閻羅へと向かう。焼け爛れた皮膚を再現したような外壁。.....いや、おそらくは本物の人間の皮で造られているのだろう。

疫炎閻羅まで快く通してくれるという。私はすぐにでもキルリアン・ストリームを打てるように右手の掌から紅玉を出現させる。

宮廷の中は中国を模しているようであったが。

何処か、文化がごちゃごちゃと混ざっていた。

飾られている美術品は奇妙な意匠をしている物ばかりだった。主に多いものは剥製。老若男女、人種を問わず置かれているが。どれも、苦悶の表情に満ちていた。

置かれている装飾品などで、ティーカップなどの陶器は、悪趣味な作品群とは対比的にそれはそれは綺麗な朱の色をしていた。朱か.....血液を原材料に使っているのかもしれない。

頭部のみが髑髏となっている鳥が大量に飾られている鳳凰の間へと入る。

周囲は鼻に付く、官能的な香料が炊かれていた。

私にとってこういう空間は極めて不快だった。

身体中をすっぽり覆う、黒いマントを纏った集団だった。

入り口の門番と同じ姿である。

数十名はいるだろうか。前列にいる彼らの何名かは私に向かって上半身を下げて、お辞儀の格好をする。彼らに囲まれた形で、部屋の中央にその人物はいた。

髪の長い女だった。腰まではあるのではないだろうか。

身体の形状が蛇のような印象を受けた。

凄惨なまでの美貌をしていた。目蓋は固く閉じていて、口元は緩やかな笑みを浮かべていた。明らかに嘲弄を含んだ笑み。私は不快に思い、眉を顰める。

いわゆる、真紅を基調としたノースリーブのチャイナドレスを着ていた。所々に鳳凰や龍の図柄が施されており、胸元から腰に掛けて曲線美を描いており、豊満な肉体を有していた。

そして。

両手両足が無かった。

両肩の先から完全に消失しており。スリットの先には何も存在せず。下腹部を覆う布だけがひらひらと靡いていた。

両手両足が無い代わりに。

彼女を取り囲む腕があった。

そう、腕だった。数本。いや、数十本はあるだろうか。様々なポーズをしていた。

千手観音のようにその腕の数は多い。遠目からでも分かった。

質感を見る限り、それらは紛れもなく人間の腕だった。腕達はオブジェとなって彼女の周囲を囲んでいる。

この腕が何なのかを確かめる。目を凝らしてよくよく見てみると、それは彼女の背もたれのようなだった。

そう。

それは椅子だった。

足。

椅子の足となっているものは、これも紛れもない人間の足だった。

奇怪なオブジェで出来た安楽椅子に座っている彼女は、その容貌だけで私の心を慄かせた。

「お前が、『女皇』だな？」

私は死神を召喚する準備へ取り掛かった。

容姿が、どうかではない。

この女は……。

「誤解しないで欲しいが」

女は笑う。

「貴様を歓迎しているんだよ。あたしの所に部下や屍人以外の客人が来るなんて久しぶりだからねえ。いつもいつも退屈でねえ。嬉しい限りさ。貴様は……。何のために私の所にやってきたのか何てどうでもいい」

……底知れない邪悪さを間違いなく抱えていた。そこに存在しているだけで、呼吸するのが辛くなる程の圧倒的な負のエネルギーが、彼女の全身から発せられていた。

「ほお？」

私は彼女から放たれているドス黒い瘴気を跳ね返すように、強い声音を返す。

何か、罵詈雑言でも捲くし立ててやろうかと考えていると、私がやってきた場所の背後から目の前の女を呼ぶ声が聞こえた。

顔を黒布で覆い隠した者達が新たに数名程入ってくると、“貢物で御座います。”と告げる。彼らは大きな布で覆われた何かを牽いていた。何かやたらと重そうだった。

ごくろう、と女皇は言った。

布は開かれる。

中から現れたのは。

大量の人間の手足だった。

人間の両手両足が大小様々な大きさの容器に入って、薬液に漬けられていた。

「客人。これが何か知りたいかい？」

女は舌をむき出しにして微笑んだ。

やはり何だか蛇みたいだな、と私は思った。

「そうだな、……………何らかの刑罰だろう？」

「違うなあ」

蛇女はますます舌を伸ばして笑う。

「これはあたしの信者達からの贈り物なのさ。みんなみんな、あたしに憧れて、あたしのようになりたがる。そして、彼らは勝手にあたしに向けて、このようなプレゼントを贈ってくれるのよ。あたしが今、座っているこの椅子は全部、あたしの狂信的なファンからのプレゼントを組み合わせただけ。処刑や拷問なんかで、あたしのような身体にするわけじゃない。あたしはこの身体を本当に誇りに思っているからねえ」

蛇女は身体をくねらせて、椅子の肘掛の一つに寄りかかる。大きく指を広げた腕だった。彼女の背中がちょうどよいぐらいに収まって、揺り籠にでも揺られているように、気持ちよさそうだった。

「ちなみに、罪人の処刑なら、こうしているよ」

女皇は近くにいた黒衣に顎で指図する。

すると、黒衣は被っていた布を取る。

布の下には。

何も無かった。

本来ならば顔があるべき場所が消えていた。

首の根元部分は何か平たい機械のようなものを埋め込まれていた。

多分、人口知能か何かではないかと思う。

「そうだな……そいつら、頭が無い身体だから……その、こいつも、ヘッド・レス、とでも言うのかい？」

私は茶化すように訊ねた。

ヘッド・レス。

市販にも出回っている、首の無い自動人形だ。

何処かの大きな企業が開発して、金持ち連中がこぞって使っている自動人形だ。

何でも言う事を聞く。

この女は、生きた人間を使って、ヘッド・レスを作ってやがるのだ。

「名前か……実は付けてないのよね。こいつらをも呼ぶ時は、“こいつ”“こいつら”“隊列から何番目の奴”って呼んでいるわ。全てのものを“奪い去る罰”。まず顔と脳を奪ってしまい、そして名前を消し去る。そしたら、そいつがこの世に存在した意味なんて無くなっちゃわない？ それを受けたのがこいつらなのよ。アイス・エイジの重罪人は脳、顔、名前を奪って、私の手足代わりに働いてもらうことになっている」

頭の無い者達。

手足の無い蛇女。

私は少し眩暈がした。グロテスクな混血物とは、これなのか。

蛇女は身体をもう一度くねらせて、私の方へ向き直る。

「ドーン・バウンティ・ハンター、インソムニアだね？ コープス・ラヴァーから資料は既に行き届いているよ」

異形はにたにたと笑う。

そして、対面した直後と同じ事を告げてきた。

「歓迎するよ」

「歓迎、というത്？」

女皇はくっ、くっ、と笑う。

「何、食事に付き合って貰おうって言っているのさ」

私は露骨に挑発するような口調で悪態を付く。

「余裕ぶっこいて苛立ってくるが、あのな。私はお前を始末しに来たんだよ。正々堂々と、正面からな。というわけで、死んでくれよ。死ねや」

私は有無を言わず、大鎌を右手に掲げた。

ダンス・マカーブルの召喚は既に完了していた。

「くっくっ、くっはは、あたしは暗殺や謀略などを使わずに、そうやって正面から来た事に敬意

を評しているよ。だから、歓迎しようと思ったのさ。だから、」

どじゅうん。

それは狙撃音だった。

部屋のどこからか、その音は聞こえてきた。

しかも、おそらくは複数の位置から。

私は大鎌を取り落とす。

どうやら腕の神経に損傷を与えられたようだ。

私の右肩から横腹の辺りに何かが打ち込まれていた。

蛇女はますます唇を真横に結ぶ。そのまま裂けていきそうだ。

「ひとまず、会食、という形を取ってもらえないか？」

取り落とした鎌は、勢い余って、女の付近にいた黒マントの身体を両断していた。

私は不承不承、女の用件を承知する。

.....畜生、当然、羽織っていたジャケットにも穴が開いている。お気に入りのデザインなのに。

「.....わかったよ」

今、どうやって攻撃されたのか分からなかった。肩の神経の傷が治り次第、相手からの追撃を無視して、再び大鎌を振るうなり、キルリアン・ストリームを放っても構わないが。

.....どうも不可解だ。

相手の出方を見るという形で様子見を選択する事にする。.....どうせ罠だろうが。

「それにしても、貴様はイカれているわね。自分の身体を顧みずに、標的を殺そうとするのよねえ？ そうだ。治療がいるだろう？ 今、医務室から医者を呼ぶわ」

女皇は言う。

「いや、構わないでくれ。放っておいたら治るんだ」

へえ？ と女は奇妙な顔をした。以外そうに。

惚けているのは分かっていた。私の肉体的構造を知らない筈がない。どうも、終止虚仮にされているようでそれも腹立たしい。メビウス・リングとはまた違ったムカつく相手。

女の座っている椅子を黒マントの者達が数人掛かりで牽いていた。

私は彼らの後を付いていく。

食堂だった。

なるほど、会食と言っていたからには、本当に歓迎会を開いて、御馳走でも振舞ってくれるらしい。部屋全体には幾つもの椅子と円形状のテーブルが置かれており、彼女はその一つに腰掛けるように指示してきた。女もそこに対面して自慢の安楽椅子を止める。

黒衣の者達が私達の元へ、幾つもの料理を運んできた。

そのどれもが得体の知れない食材ばかりだったので、当然、私は手を付ける気にはなれなかった。

「言うておくが、私には人肉嗜好は無いぞ。胎盤料理とかは勘弁な」

「.....それは残念。ここの郷土料理には、主に使われているんだけどねえ。歓楽街の阿呆共は、あれは卑しいとのたまわっているけれど。あたしからすれば、差別主義の下劣な感性としか思え

ないわ」

目の前に置かれていた青紫色のソースをかけられた変な肉の塊を私は目の前からどける。

「私はアイス・エイジ出身では無いんでね。屍廓人とは食生活が合わないんだよ。アレルギー反応を起こしてしまう。ひき肉状にしたヤツもソース状のヤツも勘弁してくれないか？」

「じゃあ、その蝦料理とワインを」

「毒物が入っていないだろうな？」

もっとも、私の肉体は、毒物はおろか向精神薬や抗生剤を含む薬物の類が一切効かない。法律で麻薬とされているものも利かない。それどころか煙草もアルコールも効かないので、便利と言えば便利だが、人からはよく不便だとも言われる。

「毒か……。あたしを暗殺しようと料理に毒を盛る輩は何人もいてねえ。そのたびに見つけ出して処刑するのに苦労する。見つけ次第、そこにいる連中。貴様が言うところの、ヘッド・レス……。 “頭無しの身体” に変えていっているがね」

「だろうなあ。ところで、私は今すぐ処刑しなくていいのかよ？」

「貴様の処置に関しては、今は置いておこう。そうだ、それよりも、その右半身に出来た幾つかの傷は本当にいいのかい？」

まだ言うか。私は呆れ顔で女を睨み付ける。

既に私の傷口は少しずつ塞がり始めていた。女はそれを見ると、物珍しそうな顔をする。

なるほど、確かに聞いていた通りだね、と彼女は呟いた。

「なあ、女皇、私をどうするつもりだよ？」

「あたしの名は『炎猫』と云う。女皇、ってのは、あたし自らが名乗っているわけではないわ。以後、その名で呼んでくれると嬉しいわね。親しみを込めて」

女……炎猫は気持ち悪いぐらいの柔和な笑みを浮かべた。

「貴様の知っての通り、あたしは、この屍廓人の街と次元砂漠アイス・エイジ全体の最高権力者であり、ここ人蝕香料館に席を置くアイス・エイジの主だ。貴様が何者であって、何を隠していたとしても、今のところは、あたしは貴様を歓迎するよ」

そうか、と私は呟く。

「こちらで一応の自己紹介を。私はお前の知っての通り、ドーンに所属していて、バウンティ・ハンターをやっている柏木否睡だ。女皇帝、炎猫。通称、女皇。お前はドーンにおいては、A級クラスの賞金首なんだよ。私は名を上げる事と、多額な報酬のために今からお前の首を狩りに来たってわけだ」

ちなみに、コープス・ラヴァーはC級犯罪者。

その前に倒した何とかっていう植物化した自称・錬金術師はF級犯罪者だった気がする。よく覚えていないが。

勿論、私がやっている行為は頭がおかしいくらい無謀だ。間違いの域だ。だが、そんな事は別にどうでもいいだろう。私は生になど執着しない。

会食は始まる。

私は言われたとおり、蝦料理だけ食べ続けた。

「あたしがここまで申し上がる事が出来たのには、ある理由がある」

頭無し達が炎猫の食事を彼女の口へと運んでいく。

「リフリジレイター、という名前を耳にした事はあるかい？」

.....

私は無言でワインに少しだけ口を付けた。

「当時、私がこの女皇帝の座につく数年前。“あれ”は行われた」

「あれ、というと？」

「リフリジレイターのパフォーマンスだ。それはアイス・エイジ中のＴＶで放映された。映りの悪い、ガラクタばかりで無理矢理作ったＴＶでね」

汚い家屋の中で、空ろな目でＴＶを見ていた者達の顔を思い出す。

彼らに希望というものが存在するかどうかは、正直、不明だ。

「小汚い道具ばかり揃っていたもんなあ。あの町は」

私はワインも不味くて吐き出す。

「あれのパフォーマンスは本当に素晴らしかった。あたしは今でも夢に見て、感動の涙を流す事がある」

「ほう？」

私は少し興味が湧いて、相槌を打った。

「クレイ・アート、あるいはクレイ・アニメーションというものを知っているかい？」

「粘土をくねくねとＣＧで動かして、色々な形へと変えていくやつだろ？」

「そうそれね」

「ああ、それがどうかしたのかよ？」

「健康状態の人間を大量に並べてね。映し出されていたのよ。そこはどこかの町だったんだけどね。とても平和そうで、みんな幸せそうだったのだけは覚えている。みんな、ぐちゃぐちゃにされていったけどねえ」

私は口に引っ掛かっていた蝦の殻を穿り出す。

いい加減、席から立ち上がりたかった。

先ほどの狙撃手達を見つけて倒したら、即座にこの女の首を切ろう。

「人間の身体が。粘土になっていったのさ。綺麗だった。あたしはあの時ばかりは興奮していたよ。人間の身体という身体が崩れていく映像。それを継ぎ足して、どろどろにして、変形させていく映像。何時間ぐらい放映されていたんだろう。明らかに電波ジャックか何かをして、アイス・エイジ中に流したようだけどね」

「.....」

くっくっ、と押し殺した笑い声が響く。

「あたし達のような奇形者、屍人にとってはとても爽快な光景だった。人間の身体には、意味が無い、って突き詰められているようだったわ」

きりきりきり、と彼女は奥歯を噛み締めていく。

「あたしには夫がいてねえ。彼はぶよぶよと膨らんだ体系で、手足も短く、半分白痴の気があっ

たよ。脳の何割かが先天的に欠損していてね。発声器官にまで異常を来たして、唸り声と吃音ばかりだった。その癖、性欲と食欲ばかりは旺盛でね、どうしようもない男だった。それでも良い男だった。顔なんて肉饅頭のようなのに、それでいて、のっぺりとしていた。でも、あたしはその夫を愛していたんだ」

「……それで？」

「翌日、夫は死んだよ。自殺だった。リフリジレイターのアートに感動する余り、自身もアートになりたかったのさ。食肉解体屋に頼んでバラバラにしてもらったのよ」

「これが夫よ」炎猫は顔無しの黒子に命じて、椅子の肩掛けをいじらせる。すると、中が開いて、何か瓶に詰められたものを取り出した。

それは、ホルマリン液らしきものに漬けられた。親指だった。

彼女は、その親指を、とても愛おしそうに撫でる。

「夫は唯一、己の親指だけは醜いだけの好きなパーツの中で愛していた。出来損ないばかりの肉体の中での唯一の取り柄だったのさ。実際、性技の際にもあの親指の指使いはとても良かったわ。だから、彼は親指だけの存在になったのよ」

奥歯に引っ掛かっていた蝦の殻がようやく取れる。どうも私には、こういった食材を丁寧に食べられるスキルが欠落しているらしい。しかし、まあ何だかんだ言っても。

炎猫から出された食事は正直、美味かった。

ワインも最高だ。甘い果実の味が、また舌先に残っていて、それをしばらくの間は楽しめそうだ。

「なあ、ちょっといいかな？」

なんだい？ と炎猫は返した。

「あの、この料理おかわり貰えるかな？ マジで美味かったぜ。それだけは評価する」

「そう……嬉しい限りだ。後でコックにそれを伝えておくわね」

私はワインの最後の一口を飲み干した。

十

がこん、と背後から音がした。

「おい、何やってんだよ。ヒスイ」

扉を開けて、ネオが入ってくる。

ネオも簡単にこの宮殿に入ってこれたという事は、阻む者は誰もいなかったようだ。あるいは私の時みたいに案内人が積極的に通したのかもしれない。

「一人で行くなって言っただろ。耳ついてんのかよ？ それとも脳か？」

「五月蠅いな。私の勝手だろ。それよりも車は直ったのかよ」

ネオは私を無視して、前に出る。

「……久しぶりだなあ。炎猫」

ネオはギターケースを床に置いて、中身を取り出した。

「女皇、炎猫、俺が知る限り、お前は这个世界で知る限り、もっとも最上のゲスだった。頭の中には痰壺が詰まっていて、心臓の代わりに糞汁が固まっている。体中の血管という血管にはドブ水が流れてやがるのさ」

「あたしを罵った奴の中には、もっともっと褒めちぎってくれた奴はいたぞお？ 貴様は実におせじが下手なんだねえ。言語能力が低いのは、元々の生まれが原因かねえ？ やっぱり、貧民街出身はクズばかりだ」

炎猫は口を開いて舌を出した。やはり、蛇に似ている。

彼女の舌はよく伸びて、胸元にまで届いていた。

「新約言語。取り敢えず、貴様は火刑になれ」

炎猫は哄笑する。

彼女の閉じていた両目が開いていく。

真っ赤だった。

炎の瞳は燃えるような真紅をしていた。

「『黒詩猫』」

炎猫が何事かを呟く。

すると。

ネオの右半身が一瞬にして燃え始めていた。

ネオは悲鳴を上げる。

「……ああ、畜生！ 咄嗟に、左目を瞑った。だから、致命傷にはなりえなかった。ああ、もう一遍、やってみろよ。その両眼でよ！」

「外したのさ。すぐに死んじゃあ面白くない」

炎猫はネオを舐め腐っていた。

それにしても一体、何が起きたのか私には分からなかった。

……一体、いつ、ネオは何をされたのかまるで分からない。

炎猫は、一体、ネオに何をしたというのだ？

ネオは転がりながら、必死で身体中を焦がす焰を消していく。

「ヒスイ！ 絶対にあいつの両目に目を合わせるなよ！ 俺は今、咄嗟に片目を瞑った。だから、“身体半分だけで済んだ”。だから、すぐに火を消せた。内部まで炎上せずに済んだ。あの女の両目は“邪眼”だ、見つめられると、何らかの暗示にかかって何かをされるんだよ！」

炎猫は舌打ちする。

が、すぐに口元は愉悦へと変わっていく。

「フロスト・マンサーになりたかったんだろ？ でも、アイシクル・ナイツにも選ばれなかった。今更、出世出来なかった恨みかい？」

「死ね。それはお前に近付きたかっただけだ。お前は俺の大切な奴らを悉く殺してきたんだからな」

「貴様の友人ねえ。そうだねえ。もしかしたら、私の椅子になった者がその一人だったのかもねえ？ いや、それとも、壁絵の彫刻や絵の具になった奴だったかい？ ああ。もしかしたら、

この中の頭無しの一がお前のかつて仲間だった奴かもねえ」

「殺してやる！」

ネオの肉体がびきびき、と変形していく。

男性形態になって、筋力を上昇させて、ギター・エッジを振り回す気でいるらしい。

そのとき。

かちり、と撃鉄を引く音が確かに聞こえた。

「はあ？ アイシクル・ナイツ一人倒せなかった、貴様がかい？ 面白い、やってみせてよ」

「ああ？ オレ達で、てめえの下っ端のコープスって奴を倒したんだよ。アイシクル・ナイツなんざ、何人いたってオレのアクアリウムで叩き潰してやる……」

言い終わらないうちに、ネオは。

身体中に穴を空けられて、床へと倒れた。

まただ。

また、どこからか狙撃されている。

それと。

あのなあ、ネオ。……三人だ。コープスを倒したのは、ケガレと……。

コープスにも苦戦していた私達が果たして、こいつに勝てるのかよ？

私はしばらく、傍観する事にした。勿論、ダンス・マカーブルとスキゾ・フレニアが既に召喚済みなので、臨戦態勢にはいつでも移れる。

「アイシクル・ナイツなんて、あたしにとってはポーンのようなものさ。見栄えのために結成させたものだからねえ。本当なら、三名のフロスト・マンサーさえいれば、あたしには充分なんだよ。兵隊の代わりなんて、幾らでもいる。どうせ、この荒野にやってくる奴を、適当に仕立て上げればいい」

再び、銃声が響いた。

何度も何度も。

今度はネオではなく。

私が対象とされていた。

時間にして、おそらく十数秒。いや、数分程度はたっていたのかもしれない。

……………。

……………。

……………。

どうやら、私は撃たれたショックでしばらくの間、昏睡していたようだった。

気付くと。

室内の温度が異様に上昇していた。

壁が熱を放っている。床も酷く熱い。

いつの間にか、頭無しの黒子達の姿がない。

そして、炎猫の姿もない。

黒い煙が所々で発生している。

そう。

食堂とは名ばかりで、ここは人間オーブン処刑場だった。

よくよく見てみれば、壁という壁は鋼で出来ているし、ドアはかなり重厚に作られている。

床は焼け爛れて、私の周囲を覆っていく。

このまま高熱を発し続けられれば、頭蓋骨が溶解してしまい、私の弱点である脳も、特に脳幹も破壊されてしまう。このままでは非常に拙い。

何処から打ってくるか分からない銃弾。その位置さえ見分けられれば、何とかなるかもしれないが。

ネオは座り込んで、トランペットを吹いていた。肉体は女性の姿へと変形させていた。

「なあ、どうする？ 敵は何処に隠れているんだろうなあ」

「分かった事はいくつかある。この部屋に隠れている人間は二人。おそらく、銃を撃ってるのは、一人。相手は何らかの形で複数の位置から、俺達に弾丸を撃ち込んできている」

ネオはトランペットから口を離した。

そして、呟いた。

「ヒスイ、あのテーブルと椅子が密集している場所へと光弾を叩き込め」

ネオは既にゴーストを張っていた。敵の本体の位置を掴むために。

私は言われたとおりに、キルリアン・ストリームを打ち込む。

煙を撒き散らして、派手に家具が吹っ飛んでいく。

その後。

スプリンクラーから大量の水が撒かれた。

部屋全身に渡っていた高熱は消えていた。猛烈な水蒸気が大気に漂ってくる。

キルリアン・ストリームの奔流の一部が、命中したようだった。

現れたのは黒髪の男だった。鴉の濡れ羽のように黒い。

野生的な美系ではあるが、その両目はどんよりと濁っていた。

彼は壊れた椅子の破片が肩に突き刺さっており、苦痛で顔を歪めていた。

「う、……手前、顔、忘れないからな。手前は必ず、俺の手で殺してやるよ」

男は憎悪の眼差しを私へと向けてくる。

「面倒臭いから今、死ねよ。私が楽に殺してやるよ」

私は大鎌を振り上げた。

だが。

何か、風を切る音が聞こえる。

私の右手の半分が切り裂かれていた。

そのため、うまく男に命中せずに光弾は天井へと放たれた。

そう。二人いるうちのもう一人の方に、どうやら邪魔されたようだ。

「……朽闇、この女は俺が殺す。止めろ」

銃弾が二つ程、私の身体を貫通させる。

一度目は脇腹。二度目は首の辺りを撃たれた。

やはり、この男が銃を撃つ仕草がまるで見えない。早撃ちの名人だろうか？

一体、どこに隠匿しているのか分からない。

「覚えておけ。俺はフロスト・マンサーの一人、黒い呪文“ブラック・スペル”だ。お前だけは俺が必ず殺してやるからな」

彼の右手には、いつの間にか拳銃が握られていた。

名称は忘れてしまったのだが、確かそれほど致命傷を与えられるタイプの銃器ではなかった筈。事実、先ほど撃たれた私の腕は吹っ飛ぶ事は無かったし、身体中に銃弾を浴びたネオはぴんぴんしている。

「取り敢えず、地下の拷問室に入っていて貰うとするぜ。安心しな、生命活動を可能にさせ続ける最低限の待遇はしてやるからよ。もっとも、お前の場合は半分ぐらい不死身の身体みたいなんで、他に類を見ないぐらい苦しめられるんだろうなあ。今から、楽しみだ」

「拷問ね、正直、言う。私にはかなりの痛みの耐性がある。生半可な拷問では、私に苦痛を与えられる事なんて出来ないぜ」

「馬鹿が……精神的拷問、ってのもあるだろ？ 俺は女を色々な手段でいたぶるのが何にも勝る快樂なんだ」

思わず、溜息を吐いてしまう。

こいつは小物だな。私は思った。

やれやれ、新手が増えてくる前に逃亡を図るとするか。

早く、目の前の阿呆をぶち殺して逃げるとしよう。

私とネオは、炎の宮殿の内部を片っ端から破壊しながら逃走するという算段をアイコンタクトで確認する。取り敢えず、攻撃を撒き散らしながら逃げれば何とかなるだろう。

二手に分かれてもよかったが、そんな小細工で逃げ仰せられるとはとても思えない。というわけで、二人で一斉に強行突破だ。

その前には、目の前の男をどうにかしなければならないんだが。

私は、再び、死神の鎌を両手に持った。蒼褪めた世界を見て貰う。

「じゃあ、今から死の舞踏を踊ってもらうぜ」



弾丸。幾つもの弾丸。

黒髪の男。

こいつの身に纏うファッションを言で言えば、退廃的。

穴だらけで卑猥な文字が大量に書かれたＴシャツを着ており数本の細いチェーンが付いている。下は薄汚れたダメージパンツ。劣化して穴が広がり過ぎた場所は安全ピンで留められている。ベルトのバックルは口蓋を模していて、歯並びは酷く歪。口腔から舌が伸びていた。そのファッションは、ピストルズに原型を持つ、典型的なパンクファッションという奴だった。セックス・ポット・リヴェンジが一番、近いのではなかろうか。

だが、特異なのは服装ではなく、その容姿の方にあった。

美形である。

だが、そんな事は気にもならないだろう。

肩まで伸びた黒髪。両サイドと前髪を逆立てて、いわゆる鷲のようだ。不思議なのは、毛髪の生え際。白髪、である。ブリーチで髪全体を鴉の濡羽のように漆黑にしているが、元々の髪の色は白なのである。

その瞳は空ろで虚空を眺めているようだ。

ああ。どこか似ているな。私はそう感じた。

違うか。どうしようもなく。決定的に違っていてもいるな。私はそうも感じた。

私はネオに言った。こいつとは一対一で戦うと。

.....

十

老生艶魚.....否、アイスエイジから逃げてきた私はマンションで一息付いていた。

黒い呪文、ブラック・スペル。的確な射撃能力により敵を強襲するガンマン。

大勢を整えるべく、逃げ帰ったが、果たして奴は勝てる相手であるだろうか。

私はオレンジ・ジュースを片手に先ほど注文したゴルゴンゾーラピッツァを食べながら、ＴＶゲームをしていた。どうもラスボスの前のボスが倒せない。

さて、ブラック・スペルを相手にするのは面倒だし、圧倒的に私は不利だし、炎猫討伐は諦めるべきかどうか。

やっているゲームは昔懐かしのスーパーファミコンで、ソフトは聖剣伝説Ⅲ、はっきりいって紅蓮の魔導士に勝てないわけだが、いかんせんマーマポトの油が足りない。

.....ゲームでも現実でも負け続けると色々な意味で自分の駄目さ加減を思い知らされるものだ。コントローラーを床に叩き付ける。

「ああ、.....畜生、おもしろいことないかなあー」

私は乱暴にピッツァを口に放り込むと、オレンジ・ジュースで無理矢理、胃の中に押し込める

。

逃げるは恥ではない。ドーンにおいては、負けない事よりも生き残る事を考えないといけないわけで、こうして五体満足で逃げ帰った分、幸福であるのだが、どうもつかえたもやもやが取れそうになかった。

気を紛らわしていても仕方無いので、潔く疲労回復のために眠る事にした。

私は寝台に横たわる。

私はいつも断頭台をベッドに改造したもので寝ていた。

私の寝台はベッドとギロチンが合成されていて、天蓋の部分に刃が付いているのだ。ちゃんと刃の柄の部分には紐が通されており、先は取手の部分に巻き付いていた。

鍵の外れた首枷に頭をはめて、枕を敷く。ちゃんと寝台としての機能も果たしており、本来は首を置くための台座が広がっており、身体を伸ばすには十分なスペースがあった。ついでにスプリング付きのクッションにもなっており寝心地はかなり良い。私はそこでちゃんと羽毛布団を被って眠る。

このギロチンベッド、普通はゴム製のセーフティー装置を刃部分に掛けて、上の刃が落ちてこないようにするのだが、私はその装置を外して眠っていた。つまり、紐が解けてしまえば剥き出しの刃は私の首を落としてしまうのだ。

一応、朝起きてみたら、首が胴体から外れてしまっていたという経験はまだ無い。

私は、これまでの疲労を癒すべく、深い眠りに付く事にした。

ぼごり、という音がして。天井の一部が外れる音がする。

私はそれと目が合った。

開けられた穴から銃口が覗いていた。

性格に頭蓋の脳幹の辺りを狙っていた。

.....まさか、ここまで追ってくるとは。

ダンス・マカーブルやスキゾ・フレニアを召喚している暇など無かった。

加えて、首枷によって、私の身体は固定されていた。枷をどけなければ、銃弾を避けられない

。

私は一瞬のうちに判断を決めた。

左手の脇から下がっている紐を強引に外す。

どじゅーん、という音がした。

同時にすぱーん、という音がした。

弾丸は私の頭部があった場所に命中する。ベッドの上部には幾つかの穴が開いていた。

私の首はくるくる、と胴体から離れて飛んでいった。

刃が下がった後、バネで自動的に刃が戻る仕組みになっていたため、半永久的にギロチンの刃は上下運動を繰り返し続けていた。

ブラック・スペルは天井から、フローリングの床の上へと降りてくる。

くるくると首を回して、私は小型冷蔵庫の裏へと回った。

私の首は転がり続ける。どうにかして、胴体の所へと戻らなくては。

銃弾が冷蔵庫を弾き飛ばす、中に詰め込んでいた缶ジュースが弾けて液体が四散する。パックに入っていた生卵が割れて、黄色い中身が私の頭上に降り注いだ。

がこん、と私の頭部に林檎が乗っかる。

私は首だけの状態で、殻の付いた生卵に塗れながら、頭に大きな林檎を乗っけている、というかなりシュールというか、馬鹿馬鹿しい姿になっていた。

「おお。いいな。これからウィリアム・テルごっこをしよう。勿論、頭の林檎の方に、当たらないように正確にお前を撃ち殺してみるよ」

ブラック・スペルは、傑作だ、と哄笑した。

私は口に含んでいた卵の殻をブラック・スペルの片目目掛けて飛ばす。小さな破片だったが、物の見事に突然の反撃に黒い呪文は動揺して、数ミリ程度、彼の射撃位置をずらす事が出来た。頭の代わりに林檎が弾け飛ぶ。

ブラック・スペルは銃を連射する。そのたびに、私は首を転がしながら、必死で弾丸を避け続けていた。TVの液晶画面が破壊される。スーファミが砕け散る。畜生。

窓ガラスが弾けて、破片の雨が降り注いでくる。

筆筒が倒れて、私の頭蓋を潰そうと迫ってくる。

ブラック・スペルはなおも銃を連射した。

気付けば。

両脇は障害物で挟まれていた。

背後には黒い呪文が空けた穴が広がり、暗い闇が浮かんでいた。

絶体絶命だった。

頭部が地面に叩き付けられれば、死んでしまう。

私は床に敷かれていたカーペットを噛み締める。そのまま、首を思いっきり後ろに引いた。放たれた銃弾を避けるために。私の首は宙へと浮いていた。カーペットを必死で噛み締めて、夜の闇の空に浮いている。

カーペットは勢いよく、ずれ落ちていく。

カーペットの上に立っていたブラック・スペルは転倒して、後ろにすっ転がる。彼はそのままギロチンベッドへと転がっていった。がこん。がこん。特注で付けたバネのせいで今だに上下運動を繰り返すギロチンの刃が彼の首を両断しようとしていた。

どんどんどんどん、と必死で銃弾を打つ音が聞こえた。ギロチンの刃はそれでもなお、無情にも彼の頸動脈へと向かっていく。

私はくるくる、と首の筋肉を動かして、華麗に部屋の中へと戻っていた。

彼は銃身で刃をガードしていた。

肌から冷や汗が垂れて、ぷるぷると唇が歪んでいた。

「遅かったな。間抜け」

声帯器官は再生していた。

首と胴はやがて完全に繋がるだろう。

私は全力のキルリアン・ストリームを背後から、ブラック・スペルへと撃ち込んだ。

私の部屋は滅茶苦茶になる。ああ。ギロチンが、ＴＶゲームが、畜生、殺してやる。

十五階建てのビルの十三階から私達は共に落下する。まあ、私にはスキゾ・フレニアの翼があるから全然問題は無いのだが、こいつの方は挽き肉だろうな。

そう思った。

だが。

何と、彼は頭から落下しながら、ビルの壁に背中をこすりながらも、本来なら背中が裂けるはずなのだが、致命的なダメージを負う事なく、がりがりがりがり、という音を立てながら、ゆっくりと落下していた。途中、ベランダに激突しそうになっていたが、どうにか身体をずらして、落下しながら障害物を避けていた。

まるで、背中に吸盤でも張り付いているようだった。

私はゆっくりと着地する。

スキゾ・フレニアの甲殻が、そのまま私の身体を覆う。

ブラック・スペルも地面に降りた。うまくダメージを何らかの方法で緩和させたようだが、それでも、多少の負傷はしていた。

彼の身体から、銃身が削れて使い物にならなくなった拳銃が幾つも落ちる。何らかの方法で、これらの拳銃を背中に付着させて、落下のダメージを減らしていたらしい。

私はキルリアン・ストリームを打つ準備をする。

ブラック・スペルは叫んだ。

「くらえ、『アイアン・ランス』！」

ブラック・スペルの背後から、何体もの透明な腕達が現れた。

その腕達はみな、拳銃を握っていた。

弾丸は一直線に走っていた。数発の弾丸が角度と発射時間をずらして、同じ位置へと打ち込まれたのだ。

私のスキゾ・フレニアの肉体には大きな穴が開いていた。

私の頭蓋骨も、ちょっぴり削り取られる。

私は戦慄を覚え、即座に、一旦、彼の目の前から逃げる事にした。

その際には、私は大鎌を投げ付けていた。

それは黒い呪文の両足に命中し、肉が裂けていく。

彼は絶叫した。切断するまでには至らなかったが、これでしばらくは行動に制限を掛けられるだろう。

十

私は夜のベッドタウンを走っていた。

路地裏や地下街などを使って、何度も、黒い呪文の元から逃れようとしているのだが、何故だかブラック・スペルの姿は無いのに、弾丸だけが追ってきた。

何故、弾丸だけが追ってくるのだろうか？

炎猫の宮殿から逃げたときもそうだった。彼の姿は見えないのに、弾丸だけが永遠に追ってくるのだ。

銃弾の一発が道を歩いていた犬を連れた主婦の頭を弾き飛ばした。

脳漿の雨が私の身体に降りかかる。

おいおい、ここは表世界だぜ。リストに載ってバウンティ・ハンターに狙われ続けるぜ。ああ。もうこいつは載っていたっけか。

私までブラックリストに載せられるのは嫌なんでね。

私はとっとと終わらせようと、逃げながら、色々と考える。どうすれば、うまく弾丸を避けられるのかを。

路地を抜けると怪しい人影が現れる。

私は飛んだ。

思いっきり、一般人の一人に飛び蹴りをかましてしまった。

「……あ、ああ悪い。ブラック・スペルだと思った……」

どうやら、若い女性のようにだったが気にしないで忘れるようにしよう。

とびゅん、とその女性の頭部が砕け散って、脳漿が巻き散っていく。

どうやら、私に向けて発砲してきた筈が、運悪く、その女性に命中してしまったらしい。

「……そうか、身代わりになってくれたんだな。お前の分まで生きるとするよ」

私は踵を返して、違う路地へと逃げ込んだ。

気付くと。

どうやら、公園に誘い込まれてしまったらしい。

周囲にはビル群などの隠れる場所が無かった。

公園に着くと、私はダンス・マカーブルの大鎌を構えた。

何処から襲撃してくるか分からない。目立つ場所には危険なので、私は取り敢えず、隠れる場所を探す。

それにしても幾つか負傷しているのが極めて拙い。血の跡で簡単に居場所がバレてしまう。

私は飛んでくる銃弾を目で追う事なんて出来ないし、向けられた銃口の位置が分からなければ、避ける事すら出来ない。

取り敢えず、スキゾ・フレニアの外殻で頭部周辺を覆う。だが、奴のアイアン・ランスは三つ首竜の身体に孔を開けたのだ。

一つ分かった事がある。一本一本の腕の持っている銃から、銃弾を連射する事が出来ないみたいだ。だからこそ、奴には直線状に腕を並ばせて、あたかも銃を連射するような形式を採る『アイアン・ランス』という技が存在するのだ。

無数の透明な腕達を召喚した事から、複数の位置から狙撃してきたというのも説明が付く。だが、私は逃げている間に、また新たな疑問が浮かんだ。

ブラック・スペルの弾丸は、異様な速さで私を追ってきていた。

足に負傷を負っているはずなのに、彼はこんな速度で動けるのだろうか？

糞、何処から銃弾が飛んでくるのか分からない。

奴の能力の正体をもっともっと知らなければならない。

まず分かったのは、銃弾を撃ってくる位置がおかしい。

あの無数の腕達は瞬間移動するのか？

思い出せ。何かが引っ掛かっている。

私の左耳が今度は吹き飛ばされていた。

私はすぐ傍にあったジャングルジムの中に潜り込む事にした。自滅行為かもしれん。奴はスナイパーらしいが、もしかしたら防弾代わりにはなるかもしれない。

当然のように、銃弾のみが追ってきた。

何発かは私の肉体を貫き、ジャングルジムの鉄棒にめり込んでいく。

幾つかのめり込んだ弾丸を手にする。

私はそれを眺める。勿論、こんな事をしている場合ではない。

ぼごっ、と弾丸は動いた。

何と、銃弾が変形していき、歪み、伸びていき、五本の触手へと変わる。何と、それは腕へと変形していた。掌から銃身が生まれてくる。

私はその腕から銃を奪いとして、腕に銃弾をぶち込んだ。弾丸は貫通して地面に埋め込まれる。

何と、その弾丸も銃を持った腕へと変わっていく。私はまたも、銃を奪い取って、その腕を踏みつけた。

腕達は形を失い拳銃もろとも消滅していく。どうも、一度撃てば、すぐに死んでしまうらしい。

「……なるほど、こういう能力か」

私は銃身を調べる。中には一発の弾丸が入っていた。私はそれを大鎌の柄で砕いた。

……さてどうしたものか。本当にやっかいな相手だ。

ブラック・スペルの能力は幾つもの腕を召喚して、それに拳銃を持たせる。

おそらくは、ネオのゴーストと同じタイプの精神生命体なのだろう。

拳銃から弾丸が発射され、着弾すると、その弾丸の中には腕の形をした精神生命体が詰まっていて、その腕は拳銃を持った状態で生まれてくる。

一体の拳銃を持った腕を一個の弾丸に変えて、またその弾丸の詰まった銃を一体の腕に持たせて、それを繰り返していく。

彼の複数の位置から狙撃してくる能力の秘密はそういう構造だったようだ。

まるで、玉葱やキャベツ、レタスを連想させた。

銃弾が、また連発される。

私はジャングルジムを脱出すると、捨て身で公園を抜けた。

十

ネットでドーンのサイトで検索してみた。

ブラック・スペルについて幾つか分かった事がある。

ドーンA級クリミナル。

驚いた事に、A・A級クリミナルの炎猫に注ぐクラスだった。

ただし、ランクが上だからと言って、必ずしも殺した数や残虐性と比例しているわけではない。

名目上は、彼が殺したと見なされている犠牲者の数は百人にも満たないが、推定されているだけでも二万人は殺している。その残虐性はドーンという組織においても、認知を高めていつて

いる。

彼の特徴としてもっとも挙げられるのは、民間人を好んで殺す快楽殺人者だという事だ。

ドーン全体がいい加減な組織だといっても、それなりに秩序は保たれている。

二、三人ぐらいまでなら何とか隠し通せたりする事や、目を瞑られる事もあるのだが、それ以上ならば、必ず刺客を送られて殺される。賞金が賭けられるからだ。大体、Gランクが最低ランクで、捕まらず、犯罪を重ねていけばランキングが上がっていくという図式だ。

ついで特徴的なのは、彼は女子供を好んで凌辱する事だ。

徹底的に性的に黽った後、死体の性器を破壊する、という傾向もよく見られる。典型的な異常快楽殺人者だという認識が強かった。

しかし。

彼をA級クリミナルと見做すのに懐疑的だという意見もある。

ブラック・スペルを倒すために放った刺客は悉く返り討ちにあって、殺されている。

ブラック・スペルの実質上の実力はさほど大した事はなく、せいぜいC級クリミナル程度の実力しか持ち合わせていない、という意見もある。

だが、何らかの手段によって、彼は生き残り続けて、A級クラスにまで上がってしまった。それには、バックにいる炎猫が手を回して、刺客を葬っているのではないかとされている。

何故、そこまで炎猫は黒い呪文を轟負しているのか。

答えは簡単だった。

ブラック・スペルは炎猫の情夫なのだ。

十

二人組みの若い女性が頭を打ち抜かれて死んでいた。バッグの化粧品が大量に散乱している。先回りされていた。

すれ違うたびに、たまたま通っていた人間を撃ち殺している。

その女性二人は何故か、下半身の辺りにも執拗に狙撃を受けていた。一人は両足が飛び散って、散乱していた。

……繁華街に逃げ込んではいけない。

こいつは間違いなく、どれだけの民間人犠牲者が出ようがおかまいなしに襲撃してくるだろう。肉の壁を使うという発想はある意味でいえば、戦略としては申し分ないが、私としては決して

、それをやりたいとは思わない。

.....他人の行う冷酷非道な行いに対してはそれ程の感慨を受ける事は無いが、自分自身で行う行為ならば、猛烈な自責の念に駆られてしまう。どうも駄目だ。精神衛生上よろしくない。

私は工事現場へと逃げ込んだ。

骨組みのみの建造物が姿を現す。

.....これで、勝機に繋がるに違いない。

能力の正体が分かったので、私は弾丸が命中した場所に気を掛けて、必ず弾丸を粉々に砕く事にしていた。腕に姿を変えた場合、腕を切り刻んでやった。

ゆえに、本人が直接、私の元へと来なければならなくなる。

黒い呪文がやってくるまでの間、数分の時間が過ぎただろうか。

ブラック・スペルの両目は血走っていた。

周囲の事なんてまるで気付いてなんていやしない。

どうやら、私は追い詰められた事になっているらしい。

「撃ってきてみろよ」

私は中指を立てた。

私は蜂の巣へとされていく。

暗闇に包まれて、なおかつ私の背によって、それは彼の死角となっている。

詰みだ。私は笑った。細工はとくに完了していた。

こいつは、ここがどういう場所だか気付いていない。

地形を有効利用するのは、古典的な戦法だ。馬鹿が。

大量の材木と鉄骨がブラック・スペルへと降り注いだ。

私の横腹にも小さな鉄骨が飛んできて致命的なダメージを与えるが、私の破壊された組織はすぐに再生を始める。

衝撃で、骨組みの家がどんどん崩れていく。辺り一面に鉄槍が突き刺さっていく。

私はスキゾ・フレニアを召喚した。ベきベきベき、と首筋の刺青が剥がれていく。

三つ首竜の翼が、私の背中から生えた。

私は急いで、鉄骨の隙間から脱出する。途中で、片足の折れる音がしたがまるで気にしない。

私は念のためダンス・マカーブルを構えて、頭部を覆った。

「.....まだ、来るかな.....？」

先ほどから、急激に負傷が連続したので、再生速度が遅い。

暗闇の中から、銃身が現れた。私は舌を打つ。

ブラック・スペルは半ば、朦朧としながら、そこに立っていた。

内臓を損傷しているようで、どくどく、と取り留めなく口からも血を吐いていた。

彼の脇腹には、幾つもの腕がしがみ付いていて、傷口を無理矢理塞いでいた。

腸があふれ出してもおかしくないダメージを受けているようだった。

額からも、大量の血液が溢れている。そこにも腕達がかっ付いていた。

頭蓋骨が割れて、中身が溢れそうになっているのかもしれない。

「最低だ……お前は、絶対に俺が殺す。いいな？　俺が殺す……。俺が殺す……。俺が殺す……。俺が殺す……」

うわごとのようにそう言いながら、黒い呪文は地面へと倒れた。

即座に、腕達が、彼の身体を担ぎ上げる。

……だが、元々、彼の召喚する無数の腕は、銃を握る事以外の動作が極端に苦手らしい。のろのろと、蚯蚓のような速度で這い回っているようだった。

腕に支えられながら、彼は指先を地面へとこすり付けて、血で文字を書いた。

“今はひとまず、逃げる。だが、お前は殺す。覚えておけ”。

どうにか、そう書かれている事を判読する。

「私がお前を逃がすとも思っているのかよ？」

黒い呪文は不敵に頷く。

何か人影が、私の周囲に現れた。

「俺は逃げる。そう言っているだろ？　……ヘクセアイズ、ヒュプノアイズの二人に時間を稼いでもらうさ」

新手？

私の顔に何かが掛けられる。

焼け爛れて、私の顔を焼いていく。両目の中が猛烈に熱かった。

酸か何かだろうか……？

「畜生、……ブラック・スペル、こんな奴ら無視してでも、お前だけは…！」

目蓋をこじ開ける。

眼は見えた。どうやら、視力は失っていないみたいだ。

ブラック・スペルの後姿が見えた。

取り敢えず私は大鎌を振り上げる。投げ付けて、彼の胴体を両断するために。

「お前の相手は俺らだよ」

しわがれた声が聞こえた。

無視して私はダンス・マカーブルを黒い呪文へと投げ付けた。

大鎌は黒い呪文に当たる前に、何も無い妙な金属音と共に空中で弾けて、地面へと落ちた。

「俺の名はヘクセアイズ。透明になる能力だ」

「そうかよ。取り敢えず、声や足音が聞こえる辺りを攻撃しておけばいつかは当たるな？」

「そう簡単にいくもんじゃないぜ？」

大鎌は回転しながら、私の手に戻る。私は足音のする方角に向かって、何度もそれを横に薙いだ。

私の振るったマカーブルの鎌は何度も空を切る。

しばらく、そうしていると滑稽に思えてきて、私は頭を捻る事にした。

その間、私の肉体部位の幾つかが切り刻まれていく。

……私は相手の能力の正体に気付いた。

すぱん、と大鎌が回転する。

目の前には片腕を切られた男が倒れていた。特に特徴の無い、民間人と同じ服装をしていた。
「透明になる能力なんかじゃ無かったな」

おそらくもう一人の方の能力だろう。私の網膜に何かを細工して、ヘクセアイズとかいう奴の姿を見えなくしたのだ。視神経は脳と直結している。脳神経に何かを働きかける能力なのかもしれない。

私は抉り取った片目を、ヘクセアイズに投げ付けてやった。

「本当に嫌な光景だ。そこまでする。そこまで出来る、お前は最悪だ。俺の能力は、初めから、一定時間、視神経を操作する事しか出来ないんだよ」

「ああ、こういう身体だってちゃんと聞かされていたはずだろう？ 何度も。じゃあ、取り敢えず、それがお前の最後の言葉でいいな？ ばいばい」

大鎌は死の舞踏を踊り始めた。

男の全身は切り刻まれていく。

そして、即座にもう一人の男を捜す。

ヘクセアイズは虫の息だが、まだ生きているようだった。

「あのなあ。血の臭いで分かるんだよ。逃走先ぐらい。お前、私の身体に傷を付けただろう？ そのときの刃物をとっとと捨てるんだったな」

私はヒュプノアイズの背中に鎌を投げた。彼も特に特徴の欠落した容貌をしていた。

「分かった。お前の能力は音を移動させるんだな？」

なるほど、完全にこの二人。逃走用の能力者だ。

「黒い呪文には完全に逃げられたかな……もしかしたら、まだ、この辺りに隠れているのかもしれない。探してみるか」

回復されて、再度、襲撃されたらやっかいだ。今、ここで必ず倒しておく必要がある。

今の奴ら、対した使い手ではなかった。もし、追撃を掛けられれば、今度こそ、死んでしまう。

「取り敢えず、もうあのマンションには帰れないな。潜伏先をどうするか……」

戻ってみると。

点々、と血の痕があった。

これを追跡すれば、黒い呪文へと辿り着けるかもしれない。

その前に、再生能力を上げるために蛋白質や糖분을摂取しなくては。

再生能力はダンス・マカーブルの能力だ。霧状のマカーブルは大量摂取した栄養分によって作られている。私はそれで肉体の修復を行っていた。

この大鎌は私の肉体の一部と連結している。つまり、この鎌を構成しているのは蛋白質やアミノ酸、カルシウム、少量の鉄分だ、これが。敵を切り刻む時は、刃の部分にスキゾ・フレニアの肉体の一部を付属させている。本来は再生能力の派生能力が死の大鎌なのだ。

……そろそろなんとか食事を取らないとまずい。いや、その前に敵に止めを。

私はのろのろ、と血の痕を辿っていく。

「ブラック・スペルを助けるのが気に食わないが」

風鳴りが聞こえた。

「炎猫には恩を売っておく必要がある」

空耳かと思うほど、か細い声。

「朽闇、という」

風が声を発しているようだった。

風は人の姿へと変わる。

「宮殿で会ったな。食堂の中に、黒い呪文と一緒にいただろう？ お前もフロスト・マンサーかよ？」

「違うな。俺はフロスト・マンサーを降格された。今はアイシクル・ナイツを統率している身だ」

完全に人の姿へと変わっていた。

あるいは、初めからその場所に立っていたのかもしれない。

風使いのようだった。ということは。

大気を操作して、姿を見えなくしていたのだろうか……。

ころころ、と。

私の足元には、先ほど倒した二人の男の首が転がってくる。ちゃんと止めぐらい刺せ、と言いたいらしい。

「喜べ。この二人だが。雑兵ではなく、れっきとしたアイシクル・ナイツの内の二人だ。お前は中々、強いようだ」

「何で、氷術士を止めさせられたんだよ？」

「一度、ブラック・スペルを半殺しにしてしまった事がある。一応、正当な決闘という形でやったのだから。炎猫が怒り狂って、俺を氷術士から引き摺り下ろした」

男は針金のように細身の美形だった。

そして、どこか野卑な趣があった。

「まず、俺の能力を説明しよう。俺の能力は空気だ。空気を飛ばして、敵を切り刻める」

「強そうだな。今の状態の私ではとても勝てそうにないな」

いつの間にか、足の腱を切られていた。

私は地面に膝を付く。

「こんなことしても、十数秒で治るぜ」

嘘だ。十分近くかかるかもしれない。今の私は本当にやばい……。

「分からないのか？ どれだけの力量を俺が持っているかを教えるためにやったのだから」
……確かに、攻撃の起動すら読めなかった。

「先に言っておく。俺は何の小細工もしない。こう指先でな、軽く円を描くように宙を切る。それだけで大気を切り裂く事が出来るんだ」

崩れた工事現場の鉄骨達が粉みじんに解体されていく。

サイコロ・ステーキのように変わっていった。

「ビルでも真っ二つに出来る。俺は事実上、フロスト・マンサー最強だった男だ」

「そいつはご愁傷様」

私はどうやって目の前の男を殺そうか、真剣に悩む。

実力は圧倒的に負けている。切り抜けなければ、確実に殺される。

「一時間、ここにいて何もしないで置いて貰おうか。俺からの要求はそれだけだ」

男は意外な事を口にした。

「お前が私を殺さなくていいのか？」

「俺もそうするのが一番のベストな選択だと思うんだが。黒い呪文は粘着質な性格でな。あいつはお前を自らの手で殺したがるだろう。奴の機嫌を損ねるという事は、炎猫の機嫌を損ねる事にも繋がるからな」

「そいつはご愁傷様」

私は地面に唾を吐いた。

「放蕩息子のケツを持ってやがるのか。お疲れ様、って感じだな」

「まったくだ」

朽閻は苦笑した。

私は片手を付いて、夜の空を眺めた。

星空だった。

月が雲によって、飲み込まれようとしている。

私は。アイスエイジで敗北していた。

ネオ・ロギズムを。

見捨てて……見殺しにして。

逃げ帰ってきてしまったのだから。

……………。

老生艶魚の戦いでも、私は一度、ブラック・スペルを破っていた。

私達を焼き殺すために熱の引き始めた食堂で、私は見事、完膚無きまでにブラック・スペルを打ち負かしたのだった。

そのときは、彼の能力がどういう構造をしているのかなど、一切関係無く、距離を詰めたダンス・マカーブルによって、一瞬にしてズタズタにしてやった。

ブラック・スペルはそれをずっと恨んでいた。

ブラック・スペルは炎猫の情夫なのだ。炎猫が動じない筈が無い。

黒い呪文を一度、倒してしまった事がやはり炎猫の逆鱗に触れてしまったようで、当初、遊び程度で私達を虚仮にしていた炎猫は、本気で私達を殺しに掛かるようになってきた。複数の部下達を使ってまでも。

だから、アイスエイジを抜けた後も、私はしつこく追われる羽目になったのだ。

家に帰るまで、何度襲撃に合った事か。

アイシクル・ナイツという奴らに、何度も追い掛けられる羽目になった。

そして、その過程で。

私はネオ・ロギスムを失ってしまった。

少しだけ、時間を遡る。

.....

貧民街まで逃げ失せた後、私達はしばらく身を隠すために地下の酒場に潜んでいた。

酒場の主人を殴って気絶させた後、私達はそこに身を隠していた。店の前には『閉店中、という看板を掲げた』。

ネオは慌てず騒がず、ひたすらアルコールを口にしていた。

銘柄はジャック・ダニエル。ネオの大好物のウイスキーだった。

酔って馬鹿騒ぎしながら、私に絡んできたりしたので、取りあえずどうやって黙らせようかと真剣に悩んだりしてしまった。ネオは新たな瓶に手を出す。

「このリキュール酒は最高だぞ、ヒスイ。かなり甘いからお前も飲んでみろよ」

泥棒が、私は毒づいた。

「酒は興味が持てないんだ。ただの苦味を帯びただけの水なんて誰が飲むか。甘いだけならオレンジ・ジュースの方がマシだ」

それから数時間程立っただろうか。

私達は、二人目のフロスト・マンサーに会った。

フロスト・マンサーとは、アイシクル・ナイツの上に立つ、炎猫直属の親衛隊だ。

こつりこつり、とそいつは階段を降りてきた。

いや、足音がしたかどうかは覚えていない。

ただ、圧倒的な密度の気配がやって来る事は知った。

私達は、即座に戦闘の態勢へと入った。

そいつの容姿。

奇妙、奇矯。

私はそれらの言葉が余り好きではない。

たとえば、変形するネオの肉体を見ても特に驚きを感じなかったし、正直、どうでもよかった。炎猫を見た時は一瞬、怖れ慄いたが、それは彼女の容姿、というよりも纏っている圧倒的な負のオーラが気持ち悪かったからだ。

だから、奇妙、という意味としては違うのだろう。

それでも私は、その感覚を感じ取ってしまう事になる。

その男の容貌は奇妙だった。人目で何らかの気持ち悪さを感じ取る事が出来た。

男は顔の下半分を布で覆い隠していた。

全体的な印象は鳥類、そう鴉に酷似していた。

そして、全身が異様な程に細かった。まるで枯れ木のような。

まあ、言ってしまうえば、至って普通の何処にでもいる変質者だ。

なので、この男を奇妙だと感じたのはおそらく視覚的な要素ではない。音、臭い、おそらく視覚以外の別の五感が何か不可解さを受信したのだろう。

酷い麻薬中毒が見る怖い幻覚を感じ取る時、このような感覚に陥るのかもしれない。

決して、今までに無かった事ではない。そうだ。似ていた。質こそ違うが、重度の統合失調症が感知する幻覚を体感する時の気持ち悪さを。あれに似ていた。

「フロスト・マンサーが一人、テトラ・フォビアと云う」

いつの間にか、降りてきた足音の主は。カウンターの前にある椅子の一つに腰掛けていた。

その男は毒々しい色をした酒を飲んでいて。

纏っている服は紫色のボンテージの上から汚らしい布製のマントを羽織っていた。どういう感性のファッションセンスか理解に苦しむ。

「アルコールはやらないのか？」

そう言うと、テトラ・フォビアはブランデーの入った瓶の栓を抜くと、一口で飲み干した。

.....うん？ 一口？ 開けたばかりのはずの酒の中身は空っぽだった。

「酔えないんだ。ちなみに麻薬も煙草も向精神薬も駄目でね」

私はカシスドリンクを口にする。

「炎猫と黒い呪文は元気かい？」

「御陰様で、女皇様はご立腹だ。氷術者にして夜伽役も兼ねているブラック・スペルに傷を負わせたのだからな」

「そうかい、それはそれは結構だ。あの蛇女が悔しが顔は私は是非、見てみたい。今度、高いワインを土産に持って行くよ。それから あいつは人肉のミートを運んでくるだろうが、私はそれを蹴飛ばして、今度は奴の頭蓋の中に詰まっているものを調理してやるさ。きっと大量の蟲が混入しているんだろうぜ」

いつの間にか。

鳥の嘴状の武器を、男は両手に持っていた。

多分、カタールという武器だろう。

ネオはギター・エッジ、アクアリウムを引き抜く。

どんどんどんどん、と音が溢れていく。アクアリウムの胎動だ。

男はカタールを振るう。

ネオの右肩と左頬から鮮血が噴き出す。

早い。テトラ・フォビアは回転しながら、両手の刃をネオに打ち込んできた。

仲間が入ると加勢しにくいのが私の欠点だ。能力の性質上、周囲を巻き込まずに攻撃するのが極めて難しい。

私は見物客にされてしまった。

「この身体でいるのは苦痛だああああああ。お前らを八つ裂きにするのに苦勞するからな」

ぷしゅ、ぷしゅ、と男の身体から蒸気が噴出していく。

「炎猫の飼育豚共はどいつもこいつも品性の欠片も無いよな。本人が下衆で作られているんだから、仕方がないか」

加勢出来ない代わりに、私は懸命に敵を挑発する。

いっそ、ネオ・ロギスムごとキルリアン・ストリームを打ち込んでみるか？

私はカウンターの向こうに行って陳列している大量の瓶を手取る。そして、それを次々と投げ付けていった。

べき、と男の首が折れる音がする。

「あああああああ？ 寄生体が死にまううじゃああねえかあああ？ こおおお、この身体には結構、愛着があるのによおおおおおお」

テトラ・フォビアの背中が割れて、何か巨大な磯巾着のようなものが現れた。

「ほう？ 寄生系モンスターか？ どうだ？ 今度は私達の身体を狙えばいいんじゃないか？」

私は中指を立てる。

「そうさせて貰うとするよおおおお」

磯巾着の腕が伸びた。それはネオのアクアリウムに巻き付く、そのままネオの左腕に付着した。ずぶりと、肉と同化していく。

「ネオ、腕切り落としてやるよ。取り返しがつかなくなる前にな！」

私は死の舞踏の鎌を渾身の力を込めて振り下ろす。

手応えは無かった。

ネオの左腕はすでに切り離されていた。

断面図は磯巾着状になっていて、うねうねと蠢いている。

腕はテトラ・フォビアの顔半分を覆っている、布の中へと吸い込まれていく。

ネオの身体全体は呑み込まれていった。

私はキルリアン・ストリームを放つ。

店内は粉々に吹き飛んだ。

ばっ、と肉片が周囲に巻き散っていく。

テトラ・フォビアの肉塊らしきものも散らばっていた。

肉の塊の幾つかは、排水溝や天井の隙間を通して、即座に逃げていく。

ネオの死体は無かった。代わりに、ネオが愛用していた武器、アクアリウムとカロンが楽器ケースごと転がっていた。私はそれらを拾って、背負う。

数週間の付き合い。長かったようで、短かった。いつもの事だ。

「パートナーって相性があるからな。私なんかと組まなければ死ぬ事はなかったよ」

残念なのは、趣味の合う人間がまた周囲から減った事だった。

また、一緒にカラオケに行って他の客や店員の迷惑になるくらい暴れたり、ドライブしながらマリリン・マンソンの曲を口ずさめない相手がいないのは非常に残念だ。

私一人が取り残された。しかし。

.....これからも狙ってくるだろうな。

ネオを失った今、私一人で炎猫やブラック・スペル達を倒すのは難しい。しばらく頭を抱えた挙句、私はある場所へ向かう事にした。

十

ドーンS級賞金首の筆頭である、青い悪魔『ブラッド・フォース』。

彼はドーン最高の犯罪者であると共に、何故か、ドーンの中枢であるはずのメビウス・リング直属の親衛隊を勤めていた。

それも紅茶淹れ係り。

しかし、彼が紅茶を淹れる以外にメビウスの役に立っているとは思えなかった。そもそも青い悪魔は勝手にメビウスの傍に付いているのだが。

私がブラッド・フォースと出会ったのは、閑散とした古い映画館だった。

ホラー映画しか上映しないというマニアックな映画館で、固定客が妙に多く、三十人程度の座席しか置かれていない場所だ。儲けがあるとは思えないのに、どうやって経営しているのかは分からないが、別にどうでもいい。もしかしたら金持ちの好事家の娯楽かもしれない。禁煙であるにも関わらず、煙草の紫煙があちらこちらから充満していた。たまに前の席にいるヘビー・スモーカーのせいでスクリーンが見えなくなる事があったが、そこら辺に何故か散乱しているビール瓶で、死なない程度にそいつの頭を叩き割ってやった。

上映されていた映画は三本立てで、そこで初めて彼を見たのは、確か『ヘルレイザー』『悪魔のいけにえ2』『サンゲリア』だった気がする。

「好きなんだ？　こういうの」

ブラッドは最初、私には何の関心も示していなかった。

私はダイエットコーラを片手に、キャラメルポップコーンとアルフォードチョコレートを食べながら、彼から一つだけ開けた座席に座っていた。スクリーン一面のグロ映像。最高だ。私のような人間は、たとえまがい物とはいえ、死の色彩を網膜に焼き付けた時、生に対する安堵感を強く覚えることが出来るのだ。

「作りが実に雑だし、血はああいう風には飛ばないぞ」

「それでも、僕はここに来て。映画を観続けるつもりだよ」

彼は淡々とした声で答えた。

最初、出会った時、人形が映画館の座席に置かれている、のだと思った。

淡い水色をしたロリィタ服。大量のフリルがひらひらと舞っていた。

同じく揃えた水色の帽子。

整い過ぎて、まるで人間味を帯びない顔立ち。

小柄だった。百五十センチを少々、超えた程度だろう。

ロリィタ服の所々に縫い付けた、一、二センチ程の黒色をした幾つもの鋭く尖ったナイフが紐に通されて、鉄線のように巻き付いている。

十六、七歳くらいの少女に見えるが、彼は男である。

さらに、推定年齢は最低でも五十は超えていたはずだ。

ネットでの詳細の通りだった。

私はまるで躊躇せずに、その人物に声を掛けた。

「お前、ブラッド・フォースだろ？ S級犯罪者がこんなところにいていいのかよ？」

「そうだけど。僕がここで映画を見てはいけない理由なんてあるのかい？」

さすが、噂に聞いている通りに、イカれっぷりが半端じゃない。こいつの頭の中ではバウンティ・ハンターなんて人種なんか、そもそも存在なんてしていやしないんだろう。

そんな連中は、こいつにとっては一秒で肉塊に変わるだけの羽虫だ。そもそも、こいつほどのクラスになると、首を狙う奴どころか名前を騙るような奴だっていない。すでに崇拝の対象にされるほどの化物の名を騙ろうものなどいるものか。殺人者の名を騙る奴がいても、神話の怪物に成り済ます奴など何処にいる？

「僕を狙いに来たのかい？」彼は訊ねた。

「映画を見に来ただけだ」私はそう答えた。

興味の無い映画が上映されている時は、ブラッドは寝ていた。寝息などほとんど出さずに、まるで人形のようなだった。本当に人形なのかもしれない。私はというと、暗い中、無理矢理、持ってきた中井英夫やカフカを読みながら、イヤフォンを繋いだiPodでシンフォニア・メタルのドラゴン・フォースを聴いていたりした。ブラッドは怪物映画には興味が無かった。私は性描写の多い官能系の内容が多く含まれている映画は、本と音楽に没頭する事にした。お互いの苦手な分野は異なっていたが、私達が共通して最も好んだジャンルはサイコホラーとスプラッターだった。

「最近は殺人行為をしていない。だからだよ。よく映画を見るようにしている。確かに、これらの映像は作り物でリアリティは欠如している。だが、そんな事は関係が無いからね」

そんな発言を周囲に聞こえるように堂々と話す私達。

この映画館の常連には、自称、死体コレクターだとか連続刺殺魔だとかいう奴らもいて、私達がどれだけ常軌を逸した会話をしようが、不審がる人間など一切いなかった。ドーンや裏世界とは関係の無い表世界の施設であるにも関わらず、ここには頭のおかしな人間が大量に生息していた。

ああ、今、首の飛び方がおかしかった。硫酸では、ああいう風には焼け爛れない、斬れた筈の

腕がよく見れば映っている。などなど、私は時折、映画の内容を小馬鹿にした発言を連発したが、ブラッドは特に賛同の声を上げる事も、眉間に皺を寄せる様子も無かった。

私達は人間の死に触れたがる麻薬中毒者だ。その薬物の純度がどれ程低くとも、私達は死の光景を求めて止まないジャンキーだ。止めると禁断症状である破壊衝動と、生きる事に対する絶望感がふつつつと込み上げてくる。

ブラッド・フォースは、楽しそうに私に解体行為の全容を話す。

人体の何処をどう切り刻めば、どれだけの量の血液が流れるか、性別や年齢、体重によってどう変わってくるかを事細かに私に教え聞かせてくれる。

その時の、彼の瞳は一点の曇りもないくらい、輝いていた。

口調こそ淡々としていたが、自慢や欲情といった一切の不純物も混ざらない、標本の蝶でも自慢するかのような、好きなものを熱心に語る子供のそれだった。

私はいつも報酬として、彼からメビウス・リングの行き先の情報を教えて貰った。メビウスの出現場所は彼の推理に基づくもので、間違える事も多かったが、メビウスを探し出す場合、私はよく彼の助言を耳にしに、映画館に赴いた。

基本的には、閉館の時間まで私達はいた。

開館から閉館まで映画を見ている、そういったコアな客は何人もいて、何時間も映画を見ながら評論を続けている私達が浮いているわけではなかった。

映画館を出ると。

一緒に出てきた筈なのに、ブラッドは何処へと消えていた。

「音楽は聴くか？」

「クラシックを少々、でも基本的には余り興味が無いかな」

「人間の悲鳴を表現したデスメタルやブラックメタルを教えてやるよ。歌詞もこの上なくグロい」

取り敢えず、私のお気に入りには『スレイヤー』というバンドだ。7thアルバムのジャケットが、どこことなくヘルレイザーに出てくるピンヘッドを彷彿させるような容姿が気に入っている。顔面から針を抜いたピンヘッドだな。ん、全然似ていない？ うーん、ピンヘッド崇拜者の私はどうも過剰な脳内変換を行ってしまう。

ま、ゴシック系の雰囲気ってのは。似通っているってのは、否定しないけどな。

「ああ、ヘルレイザー・シリーズは最高だね。稚拙な作り物の中にも居心地の良さを感じ取ってしまうよ。あれも血がよく出る映画だからね。うーん。僕は映像じゃないと駄目なんだ。僕は人間の苦痛が分からない。苦痛に対しての共感も出来ない。僕は血が見たい。ただそれだけなんだ」

「やっぱり、お前、最高だよ」

真っ赤な色をした血が見たい。たったそれだけの願望のために、こいつは何十もの都市の人間を虐殺し、何十万もの人類を平均数百個のパーツへと変えていった。彼に付き纏う伝説のほとんどは実話だ。ドーンの情報では能力の一切が不明。私は本人からその能力の全容を聞かされていた。実に傑作だった。羨ましく思ってしまった。

「なあ、頼みがある」

先ほどから何度も懇願しているのだが、ブラッド・フォースは答えない。

「仲間が、敵に殺されてしまった。私はその敵に今も狙われている。最悪だ」

ブラッド・フォースは眠そうな顔になった。

映画が中絶みを始めたのだ。

「しばらく、お前と一緒にいていいか？ 私一人で対抗出来る相手とは思えない」

「君の首を狙っている敵を僕に殺して欲しいのかい？」

彼は訊ねた。

「ああ、出来ればな」

「君の敵を殺すのは幾らでも構わないのだけれども。たとえば、映画を見ている間に、君がどこかへ行ってしまえば。僕は君の敵を殺す事は出来ないと思うのだけれど？」

通訳すると。

彼の行動は誰にも制限出来ない。彼は誰にも従わないし、誰の意志も聞こうとはしない。

だから、私と一緒に行動を共にするつもりは無い、と言っている。

もっとも、私が彼の行動に合わせて動くとするれば、守る、と訳する事が出来るだろう。

その二重の意味合いを理解して、私は苦笑する。

「そうだ、これから行く場所があるんだけど君も来るかい？ そろそろ身に纏うものを検査しておこうと思ってね」

「ああ、着いていくさ……。地の果てだって無限地獄の底だってな」

十

奇妙なパラドックス現象が起こった世界というものは数多に存在する。

私が最近知った場所に向かおうと思う。勿論、自力で発見したわけではなく、口コミだ。ドーンのサイトにその情報が掲載されているわけではないが、その筋ではかなり有名な場所であるらしい。

行ける時間帯。季節によって多少の変化はあるが、大体、朝の八時頃から午後の三時ぐらい。天候は晴天に近ければ近いほど良い。

原宿の竹下通りに入り、横道には、パンク系の服を売っている店がぽつりぽつりと並んでいる。

その辺りの路地をある一定の法則と歩行法によって歩いていくと、周囲が段々と暗くなっていき、霧が立ちこみ始め、いる筈のない者の気配まで感じ取れてしまう。

一応、路地をぐるぐるするだけで、普通の人間でも行けてしまうのだが。

如何せん、この時に使う歩行法というものが、陰陽道で言う所の禹歩に近い歩き方なのと、何十回単位で路地を回り続けなさいといけないという理由で、一般人が偶然に入ってしまうという事はまず起きない。

店の景色は変わらずとも、周囲が暗くなるに従って、今まで無かった筈の街灯などが出現し

始め、闇路を照らし始めるので歩行に関しては特に問題は無くなる。

霧は次第に濃度を増し、何処からか蝙蝠の飛ぶ音が聞こえてきて、壁などには蜘蛛の巣が現れ始める。それでも、気を抜けば現世に戻り始めるので、回る路地の手順を間違えたり、歩行法を止めたりしてはいけない。

やがて、それまであった原宿の店々が消えて、完全にまったく違って景色に移り変われば、その場所によりやく踏み込んだ事になる。

そこは、『裏原宿』と呼ばれていた。

まず見えて来るのが、大きな橋。その橋は、まるで人間の肋骨のようなデザインをして、下には鰐鰯のような頭部をした魚や蛙が泳いでいる。

空は酷く暗く淀んでおり、時折、雷鳴の遠吠えが聞こえてくる。

所々にある家々の殆どが廃墟となっており、蜘蛛の巣と埃に塗れて、時折、黒猫や蝙蝠の群れ、墓蛙が姿を現す。

家々の中には、小綺麗なものがいくつかあって、此処へと来る人間はそういった家に入る事を目的として、この場所へ訪れるのである。

私は燭台の明かりが灯され。窓硝子が鏡のように磨き上げられた家へと入る。扉は開いており、隣には看板が置かれていた。

「いらっしゃいませ」

店内から、くぐもった声が反響し、何度も耳の奥へと響き渡る。

「何かお探しの品はありますか？」

この店の店員だった。

そう、ここはファッション街なのである。

ほぼ、この一帯でしか売っていないような服やアクセサリ一類を求めて、様々な者達がこの世界へと訪れるのである。

ここでは、表世界の原宿で売っている商品が十分の一の値段で。ここでしか売られていないものは、表世界の相場の、十倍以上の値段で売られている。

ここにあるアクセサリ屋は、アミュレット・コーティングの技術も高く、ドーンの関係者の間でもかなり人気が高い。

少々、困った事といえば、世界有数のファッション街であるために、ドーンによって懸賞金を掛けられている者達、特にB級クラス以上の怪物達もよく此処を利用するため、それを狙うバウンティ・ハンターの数もやけに多いという点だ。

そのため、街を歩いていると、さながら紛争地域のような物音を時折、耳にする事がある。だが、そういった捕り物劇も見慣れてしまえば気にする程のものでもない。抗争に巻き込まれないように多少の気を使わなければならないが、狩る側も狩られる側も、暗黙の了解の上で、この世界自体に対しての破壊を最小限に留めようとする。店を壊したくないからだ。

一説によれば、この裏原宿は何重もの階層に分かれた多次元空間らしい。まるで、ダンテの作り出した名作『神曲』にある地獄構造のように地下へ地下へと暗鬱とした世界が日六がっているのだ。

二階層より先が、どうなっているのか。

初心者の私としてはそんなことは知る由もない。

もしかしたら、神曲のように、下半身氷付けのルシファーがユダとブルータス、カシウスを啜えているのかもな。

ちなみにここを知ったのは、友人からの情報だった。

ちなみに、私が良く愛用しているブランドはヴィヴィアン・ウェストウッドだが、私の一番、好きなブランドはヴィヴィアン・ウェストウッドではない。

ここ、裏原宿から発生したブランドであるゴシック・パンクブランド、『デッドリー・コンプレックス』だ。

まずロゴマークが血に塗れた死神。可愛らしいデザインの中にも、攻撃的な意味を含んでいる。というか普通にロゴがグロい。可愛いけれど、やたらとグロい。

他にも有名所でいえば。

ヴィヴィアン・ウェストウッドやゴルチェにあたる高級ブランドでいえば、『アザトース』。『ホーリー・テイル』。『ゴッド・ブレス』。

単純な人気ブランドには。

ゴシック系・ブランドなら『メルクリウス』『アントワヌ』『ローズ・ブレイド』。

ロリィタ系・ブランドなら『ウィンディーネ』『ジルフィール』『セフィロト・ロード』。

パンク系ブランドなら『ホイール・オブ・フォーチュン』『パンプキン・フレア』。

等がある。

それぞれ、裏原宿に生息する異形達からは絶大な支持を得ていた。ドーン関係者達も戦闘服や礼服に改造して着ている事が多い。

ブラッド・フォースは、いつもは折畳んでいる日傘を差していた。

暗い裏原宿のどこに彼の肌を焼く太陽があるのかどうかは不明だが、それが彼のスタイルなんだから仕方がない。ちなみに、彼は『セフィロト・ロード』というブランドを好んで身に付けていた。ロゴマークはセフィロトの円環だ。

さて、私達は今、尾行されていた。

途中から撒いたつもりでいたのだが、追跡者は先回りしていたようだった。

だが、どうも私の付添い人がいるおかげで、決して、手が出せないようだった。

しばらくして、気配は止んだ。

ブラッド・フォースと一緒に店の一つ一つを回る。

彼は特定のブランドしか身に着けないのだが、私が施すと、それに応じて一緒に店の中に入ってくれた。

映画を見るときもそうなのだが、彼は好むジャンルのものならば、たとえそれが、徹底した彼なりの流儀とは違うものでも、ある程度は付き合ってくれる傾向があった。

そういえば、新しい装備を整えて置いた方がいいかもしれない。

ゴシック・パンク系のセレクトショップだった。

私はそこで店員らしき人物から話しかけられた。

毛糸で編んだ白黒の柄をしたジャンパーを羽織った女だった。

顔は少しふっくらとしており、頬に塗った桃色のチークが少し濃い。

ジャンパーに付属しているフードを前髪が露出するように、頭から被っていた。フードのデザインは兎の耳で、それはカチューシャのように彼女の額から垂れ下がっていた。

そしてさらに、何故かフードの上に更に黒いシルクハットを乗せていた。

「こんにちは。君もこの店のブランドがお好きなんですか？」

彼女はシルクハットを下げて、店のカウンターの上に置く。

シルクハットからは大量の蝙蝠が出てきた。

「へえ、すごいな」

「ただの手品ですよ。まず、カウンターの中に仕掛けがあります。ぎゅうぎゅうに詰めた蝙蝠の入った檻を置いておいて。帽子の奥に見えないように穴が開けられていて、穴の蓋を取り。カウンターの上に置かれているコースターを外すと、檻へと続く管があります。さも、シルクハットのみから飛び出したように見せたんです。……あっ、ここのお店の人には内緒ですよ？ 勝手にコースターの下に穴を開けたのは」

白々しく言う。おそらく……この女は。

「で、お前は何者だ？ 本物の店員はどうした？」

私も白々しく返した。

「店員さんにはちょっと眠ってもらいました。ちなみに、私は炎猫様の下で働く者ですが」

女は言った。

「お前もフロスト・マンサーの一人かよ？」

「いえ、私はアイシクル・ナイツの一人で、名をフレイム・タンと申します。インソムニア様ですネ？」

「そうだけど、私を殺しに来たのかよ？」

「いえ、そんな事をすれば、私がブラック・スペル様に殺されてしまいますよ。本当に、お怒りになられていて。絶対に御自分の手で蜂の巣に変えたいのだとおっしゃってました」

「へえ、ところで服は好きかい？」

彼女は首を立てに振った。

「このブランドは？」

「ええ。でも私が一番好きなブランドはデッドリー・コンプレックスですね。死との複合。私にはどうも着る分には似合わないブランドですが、お洋服を目にするだけで恍惚とします」

「そうか。あんたと趣味が合いそうだ。で、用件は何だ」

フレイム・タンは笑みを浮かべる。

「最後のフロスト・マンサー、ヘイト・クライム様に会って貰えますか？」

私はこめかみがぴくり、と動いた。

ちなみに、カウンターの奥を覗いたが、蝙蝠の入っていた檻らしきものも、例のコースターの下に穴も管も無かった。まあ、手品師が本当の仕掛けを教えるわけがないか。

「十四名いるアイシクル・ナイツの内、コープス・ラヴァーとヘクセアイズ、ヒュプノアイズが

死にました」

「そうだな。それで」

「まず、先に申し上げますね」

フレイム・タンは散々もったいぶってから、それを口にする。

「私はこれ以上、炎猫様に付いていけません」

ほう？

「私が本当に使えているのはヘイト・クライム様のつもりでいます。彼はずっと前から、炎猫様の元を去る事ばかりを考えていました。ちなみに、私はブラック・スペル様も嫌いです。二人で歪なエデンの園のアダムとイヴになっていればいい」

「じゃあ、取り敢えずお前がガンマンと蛇女の気違い二人を倒してくれよ」

彼女は首を横に振った。

それが出来れば、貴方に協力を申しません、と呟く。

「私はヘイト・クライム様を自由の身にします。貴方は私の手を借りて、炎猫様を討つ。この取引で如何でしょうか？」

「断る」

フレイム・タンの舌打ちが聞こえた。

「と、言いたい所だが。敢えて、信用しよう。仮に騙されたって構わない」

破滅願望の塊だなあ、私は。

彼女は満面の笑みを浮かべた。

「だが、一つだけ条件がある」

私は身体に付着した、二つの刺青を動かしていた。

「お前がどんな能力を持っていて、どれだけの力量、破壊力、変則性があるのかを知っておきたい。寝首をかかれた時に対処も出来るし。諦めも付くからな」

ダンス・マカーブルとスキゾ・フレニアの召喚はもうすぐ終わる。

彼女は腰に下げている筒を取り出すと、それを口に当てた。

「実力はコープス・ラヴァー以下でヘクセイイズ達以上……です」

筒からしゅごーしゅごー、という音が聞こえる。

「炎の吐息、ファイヤー・ブレス。それが私の能力です。多分、貴方のキルリアン・ストリーム以下の威力……ではないかと」

筒から、小さな焰が、ちろちろ、と噴出してきた。

数秒後。

マカーブルの大鎌は、フレイム・タンの首筋に食い込んでいた。

このまま力を込めれば、彼女の首を落とす事が出来る。

「OK、今、ここでお前は殺せた。これで、後で裏切られ、寝首をかかれたとしても、それは私に非があったって事で納得出来るさ」

私は大鎌を下げた。

私の戦いの中では、お互い無傷で終わらせた、というのは初めての事じゃないだろうか。

「では、ヘイト・クライム様に会っていただけますか？ カフェで貴方様をお待ちしておりますので」

「僕には関係の無い事だから」

先ほどからずっと退屈そうにしていたブラッド・フォースはそう告げた。

そしてそのまま、いずこへと行ってしまった。

さすが、メビウス・リングの配下だけある。

本当に、徹底して己の行動パターンに一欠けらのノイズも含ませるつもりはないらしい。

メビウスと違っている点は、例外的に、気まぐれか何なのか、稀に融通が効いたりする点はあるのだが。

フレイム・タンに連れてこられた場所は、大きな穴の前だった。

私はフレイム・タンに案内されるまま、その穴の中に入る。

螺旋状になった階段をどれ程、降りただろうか。

途中、曲がりくねっていて、明らかに降りていた筈が、いつの間にか上っているような錯覚を覚えた。ねじれた輪のように。

ぐるぐる、と。

下りながらにして、上っているそれは。

あるいは、メビウスの輪を描いているのかもしれない。

黒い寡黙の魔王の顔を思い出す。

その場所へと辿り着いた。漆黒の鍾乳石が生える洞窟だった。

広い洞窟だった。地底湖が広がっている。

高さは三十メートル程だろうか。

天井にまで伸びて、

地底の中に生えた巨木。

巨大な樹木と樹木の中は部屋となっていた。

その男には、表情を読み取るための顔の皮膚が無かった。

声帯器官も存在しなければ、言の葉を紡ぎだす赤い舌も無かった。

戯言や罵声を与えるための聴覚器官も存在していない。

心音を奏でる臓器も無い。

おそらくは、神経系統や記憶回路を司る大脳も存在しないのかもしれない。

ヘイト・クライムは骨だけの怪物だった。

服も着る事は無く、白骨のみが玉座に座り、こちらを眺めていた。

「ここがカフェかい？」

私は訊ねた。

「今から、紅茶を皆様方にお出ししますね」

フレイム・タンはそう答えた。

セイロンのアップルティーが出されたカップに注がれていく。

「ブラッドの淹れる紅茶より、何倍も美味しいな」

私は言った。

「……皮肉ですか？　これは雑貨店で取り寄せた安物ですよ」

フレイム・タンは言った。

「ブラッドな。メビウス・リングの給仕係をしていて、いつも紅茶を運んでいたが。壊滅的なまでに紅茶を淹れる才能が無いんだよ。私も一度、彼の淹れた紅茶を口にした事はあるが……本当に酷い味だった。温度、砂糖のさじ加減、どれを取っても最低だ。コンビニや自動販売機で売っているものに少々、毛が生えた程度だよ。メビウス・リングはよくもまあ、ブラッドを解雇しないものだ。時折、紅茶を口にする時に嫌そうな顔が垣間見れる事がある。そうだな、皮肉にも、あれだけがメビウスの唯一、人間らしい部分だと言っていい。ブラッドは人形に命を吹き込むパペット・マスターなんじゃないのか、って思う時がよくあるよ」

「貴方も紅茶の味にはとても煩いタイプなんですね？」

「ああ。人類の文化遺産だからな。煩くなるさ。コンビニのやつは、決して飲めない」

ヘイト・クライムには、赤く濁った液体が渡された。

彼はそれに指を浸す。少しずつ、血が彼の身体に浸透していく。

……実は、こいつただの死体なんじゃないのか？　と先ほどから疑問に思っていたのだが、そうではなかったらしい。フレイム・タンの悪質な冗談に付き合っているのかとひやひやしていたところだった。

……………。

「喋れるのか？　こいつは」

私は訊ねた。

白骨はこちらに両の眼孔を向ける。

「お前は確か……不眠症、インソムニア、と言ったかな……？」

声帯器官が無いためか、何らかの周波数を出して、それを音に変えているようだった。それにしても、よく通る声だった。

私は首を縦に振る。

「ふむう、余は十数年前に炎猫に敗れて以来、彼女の配下として動き、この身体にされてしまったのだが」

かちり、かちり、と上顎と下顎が動き、骨の鳴る音が聞こえてくる。

「元は名のあるヴァンパイアでな。何十もの軍団を従えていたのだが、炎猫の配下に全てやられてしまった。今では、この身体だ」

ふうん、と私は相槌を打つ。

「一応、それなりの実力を有していてな。フロスト・マンサーという役職にまで付いているのだが、いつも寝首をかこうと思っているのだよ」

そうか、と私は言った。

「そうかい。そんな事よりも、私がおっぱら気になるのは、あんたが一体、どういう構造で動いているのか？　って事の方が重要なんだ。好奇心としてな」

私は無意味に挑発してみる。もはや、これは癖と言っていいのかもしれない。

.....下らない挑発に応じる程度の馬鹿だったら、信頼に値する人物だとは言えない。私はそう考えていた。

どうも、私の性格は把握されているのかどうか分からないが、二人は動じる事なく、涼しげな顔をしていた。

「血だな」

骸骨は呟くように言った。

「骨の中に血液を大量に酌みこんでいる。これが動力源となって、余の身体を動かしている。吸血鬼というものは、伊達ではないのでのう」

そう言いながら、彼はカップの中に手首を入れる。

中の血液が全て、彼の指の骨に吸い込まれていった。

「それで、何故、私に協力を仰ぐ？ 別に私じゃなくても、炎猫を恨んでいる人物ぐらい、掃いて捨てる程、いそうだけどな」

「既に、候補は何人も上がっていた。十四名いるアイシクル・ナイツの中にも炎猫の首を欲しがっている奴は多い。だが、どれも出来損ないばかりでの。肝心な時に、尻込みし、裏切り、白旗を掲げそうな役に立たない奴らばかりだ。そこのフレイムタンぐらいかのう。信頼出来るのは、余にも忠義を尽くしているようだしのう」

「共通の敵を持っているのだから、協力しましょうよ」

フレイムタンは美味そうに自分で淹れた紅茶を飲んでいた。

「炎猫を倒した後、どうする気だ？ 失った肉体は戻るのか？」

私は訊ねた。

「戻る、とは思う。.....だが、余の肉体を奪ったのは、正確には炎猫ではない。既に会ったと思うが。テトラ・フォビアというフロスト・マンサーだ。奴の能力を見たか？」

「ネオが食われていった.....」

「成る程のう。多分、まだ生きている筈だ」

骸骨は、かたかた、と顎を震わせる。笑っているのかもしれない。

私は、一瞬、放心状態に陥った。

「.....生きているのか？ ネオ・ロギスムが」

「ああ、生きておる。生かされておるだろう。奴の能力『フォビア』人間の肉体と肉体を分離させ、自身の肉体と融合させる事によって、生命活動を繋ぐ能力だ」

「.....成る程な」

私は息を大きく吐き出した。

「紅茶を新たにお注ぎしましょうか？」

炎舌は訊ねる。私は手を振って、拒否反応を示した。

「作戦が色々あるのだろうが、ほんの一時間だけでいい。休ませて貰えないか.....？」

「私達に協力してくれるのですね？」

「ああ、答えはイエスだ。だが、少し休ませてくれ」

私は突き出た樹木の一つに腰掛けた。

「言い忘れていましたが、私にはもう一つだけ能力があります。もっとも、つまらない力なので、先ほどは言いませんでしたが」

暗い穴の出口までフレイム・タンは案内してくれた。

「私の髪の毛の一本は、蝙蝠に変える事が出来るんです。攻撃力がありません。ただし、探索能力があります。それで、お役に立てるかと思います」

迷うと出られなくなりそうな迷宮なのだ。

「ていうか、私は数回ぐらい炎猫様の神経を逆撫でする事をしちゃったんですよね」

「ほう？」

「ブラック・スペル様のお顔に向かって炎の唾を吹き掛けたり」

にやにや、と彼女は唇を歪める。

「お前も、かなり頭がおかしいな」

「私の権謀術が無ければ、とっくに処刑されていますよ。有り得ないぐらい残虐な方法で」

「豪胆っていうか、果敢っていうか、すごいな」

フレイム・タンは自身の携帯の番号を私に教えると、また後で落ち合う段取りを決める。

作戦会議の末、私に課せられた命はブラック・スペル、テトラ・フォビア、朽闇の三名のうち、最低でも二人……いや、一人は倒す事だった。

もうそろそろいいでしょう、と彼女は私と別れた。

先ほどの、兎の穴のところに来ると、ブラッドがいた。

「私を待っていてくれたのかい？　すげえ、嬉しいんだけど」

「いや、ちょっと別件でね」

そうか、と私は笑う。

「そうだ、断頭台型のベッドが売られている家具店に一緒に行ってくれないか？　ブラック・スペルの馬鹿がぶち壊してくれたから、新しいものを購入しないといけないんだ」

私達は裏原宿の暗闇を歩いていた。

「何だか、先ほどよりも、嬉しそうだね。何かあったのかい？」

「ああ、ちょっとな」

ブラッドは既に目的を済ませていたようで、少し古くなった帽子を新調していた。

私達は裏原宿の出口へと向かっていく。

しばらく歩いていると。

私達を襲撃してくるものがあった。

私の傍らにブラッド・フォースという怪物がいようがいまいが、関係が無い、といった風情だった。

もしかしたら、炎猫に脅されているのかもしれない。何処にいるのか分からなかったが、酷く恐怖で焦燥しているのを感じ取れた。

それから多分、先ほど私達を尾行していた奴らとは違うメンバーだろう。体勢を立て直して、

勝てそうな面子を揃えてきたのかもしれない。

四名かな、ブラッドは呟いた。

じゅるじゅる、と遠くで何かが蠢く音が聞こえた。

毒々しい色をした黄土色の煙が、その場所から少しだけ上がっていた。

その位置に向かって。何かが高速で飛んでいく。

遠くから、悲鳴が聞こえた。

ブラッド・フォースが、既に能力を行使していたのだろう。

「やっかいな相手だったのか？」

私は訊ねた。

「多分、何か病気とか毒を撒いていく奴なんじゃないかな。だから、何かをやってくる前に殺したよ。音がした場所には行かない方がいいよ。死んだ後、体内の毒物を撒き散らしている虞があるから」

「他の奴らは？」

「やってくるのを待っているんだ。しばらく殺人行為は止めていたけれども、襲ってくる相手だけは殺すようにしている」

ブラッドは、身体にアクセサリーとして付けた、ワイヤーで繋がれた小さな無数のナイフを触る。ワイヤー部分が消滅して、ナイフは宙へと飛んでいく。それは大気に溶けるように消えていった。

いつの間にか。

甲虫の群れが私達の周囲を取り囲んでいた。

その隙間から、小さな針のようなものが飛んでくる。

「針は蛋白質みたいだね。先に猛毒を含んでいるのかな」

それらは一つとして、私達二人に命中する事は無かった。

ブラッドが宙へと溶かしたナイフ達が、向かってくる、針の全てを叩き落しているのだろう。

続いて、羽虫達が距離を詰めてきた。

突然、羽虫の一匹が破裂する。

続いて、羽虫の群れが次々と爆発していった。

「この虫達は、触れたら弾け飛んで、それによって、敵の肉を裂くようだよ」

ブラッドは淡々と言った。

ブラッドは、千以上の飛んでくる毒針と、数百匹は浮いている爆弾虫達を悉く、潰していったのだった。

廃墟の所々の壁が破壊されていく。

蜘蛛の巣だらけの窓ガラスが砕け散り、煉瓦が吹き飛んでいく。

私達の前には巨躯の大男が現れた。

わざわざ姿を現したのは、どんな攻撃を食らっても、自身の肉体に多少の自身があったのだろう。

確かに、そいつの肉体は鋼のように硬そうだった。

そいつは巨大なサソリだった。百八十センチ程だろうか。

上半身部分は、サソリで、両手はオオバサミになっており、下半身は人間だった。

異様に肥大した上半身部分に全体重をかけて、ブラッドに押し掛かってくる。

彼は持っていた日傘を振りかざし。

大サソリを一瞬にして地面へと叩き付けた。

まさに、虫でも払い落とすような仕草だった。

「お前の名前は何て言うんだ？ 一応、聞いておいてやるよ」

私が訊ねる。

サソリは尻尾を振って、毒針を飛ばしてくる。その全ては私達に命中する前に、宙で見えない何かによって叩き落されていった。

「.....ジュエル・ボックス.....だ。.....おれの肉体は、ダイヤモンドの鉱石が幾つも埋め込まれていてな、おれを倒す事など.....！」

ブラッドはぐりぐり、と宝石箱.....ジュエル・ボックスの身体を傘で押し潰していく。

「これから行われるのは、情け容赦の無い拷問だ。色々と炎猫に付いて聞きたい事がある.....」

私は言う。

サソリは身体の中で、未だ自由になっている毒針の付いた長い尾を振るった。

すぱん、と乾いた音がして。2メートル近くある尾は切られて、地面に落ちた。

傷口から、緑色の液体がどくどくと流れていく。

「君は、血が赤くないんだね」

ブラッドは残念そうに呟いた。

「なあ、おい。今からこいつから色々な事を吐かせようと.....」

ごべぎゅり、ぎゅり、ざしゅざしゅざしゅざしゅ、と甲殻を砕いて、ゆっくりゆっくりと肉を引き裂いていく音がする。

ブラッドの持っていた傘が変形して。骨組みが四メートル程に肥大化して、中から大量の刃が生えていたのだ。それがドリルのように回転していき、ジュエル・ボックスの身体を猛烈な勢いで破壊していく。

緑色の液体が飛び散り、甲殻が大量に舞っていたが、広げた傘によって私達にその飛沫が付着する事は無かった。

「なあ、こいつを生け捕りにして.....」

「赤色でなければ、いけない」

物哀しげに彼は呟く。

ごべぎゅり、ぎゅり、ざしゅざしゅざしゅざしゅ、どじゅうううううう、と日傘の回転速度は速まり、サソリの怪物の命は消えていった。

「どうしよう。注意していたんだけど、やっぱり体液が少し服に付いてしまったよ。不愉快だな」

ブラッドは溜め息を吐いた。

「落ちそうか？」

「この服は全身アミュレット・コーティングが施してあるから、液体や汚れが染み込む事は無いよ。洗えば綺麗さっぱり落ちるんだけど。やっぱり、憂鬱だな」

そのやり取りの直後。

地面が激しく破壊された。

岩々が粉微塵に碎け散っていく。

「すごいな……」

無人となっている、裏原宿の建造物が次々と崩れていく。

衝撃波が連鎖していき、私達の周りを取り囲んだ。

大量の瓦礫が積み上げら、私達の周囲を覆っていく。

「俺の名はディザスター・ロアーだ、覚えておいてくれ」

瓦礫の上には一人の男が立っていた。筋骨逞しく、鋭い眼光をしていた。

「アイシクル・ナイツでは朽闇の次に強い。これで、お前らも百年目だな」

しゅぱん、と小さな音が聞こえた。

男の頬から、赤い血筋が流れ出る。

ディザスターと名乗った男が少し、動揺する。

ブラッドが何かを飛ばしたのだろう。攻撃の軌道はまるで見えなかった。

やはり、彼が何かをした仕草の一切は見えなかった。

ブラッド・フォースは少しだけ、唇を歪ませていた。

十

二人で映画を見ていた記憶を思い出す。

「殺すって何なんだろうな？」

「その答えを僕は持ち合わせてはいないよ。僕は殺したくて殺人を行うわけじゃなくて。僕は血が流れるのが見たい、という願望を満たした結果。人が死んでしまうだけなんだから」

「なら死ぬって何なんだろうな？」

「君らしい質問だと思うよ。君は人よりは物理的に不死に近いからね。死ぬっていう感覚が人よりも分からないんだろう？」

「私は、私自身は死の恐怖が分からない。たとえば、私はスキゾ・フレニアの能力である、キルリアン・ストリームを発動させるためには、フォリ・ア・ドウ、という人間の負の精神を吸収する必要がある。どうも、病的なものほど威力が上がっていくみたいだ。そして、もっとも威力を上げるのは、死の苦痛だ」

「僕は殆ど傷を付けられた事が無いんだ。少年時代以前を除いたらね。ブラッド・フォースという名前を自分に付けて以来、傷を負った記憶が無い。心の傷も含めて、だよ。多分、無いんじゃないかな。僕は戦いが好きじゃないし、進んで戦おうと思った事は無いんだけどね。人は簡単に傷付いていくね」

「私達は何のために生きている？」

私はポップコーンをくちゃくちゃと食べながら訊ねた。

「僕は人の血を見るため。そして今はそれに加えて、メビウス様の行く末を見届けるため。メビウス様のために紅茶を作るため。それだけかな」

なら、紅茶を作る技術をもっと上げろよ。

確か、メビウスはその動力源の一部を、紅茶に含まれる物質から摂取しているため、定期的に飲まなければならないのであって。本来ならば、味などは関係が無いのだ。

私達が一緒にいて居心地が良かったのは、もしかしたら、幼少期が似ていたからという理由もあるのかもしれない。

私達二人は表世界で生まれて、育った。

私達は二人共、形こそ違えども虐待を受けて育った経緯がある。

私の場合は露骨だった。両親が精神科入院歴もあり、貧困でもあった。

最後に、私は両親から村上龍の小説みたいな事をされた。コインロッカーベイビーという奴だ。もっとも、私の場合は小さな冷蔵庫だったのだが。そして私は村上龍の小説を一冊も読んだ事が無い。

ブラッド・フォースの場合は間逆で、過保護な両親だった。欲しいものは何でも与えられた。その代わりに、彼を人形であるように誓わせた。彼は徹底的な程、感情を殺されていった。

四歳の時、彼の姉が死んだ。彼は目の前で姉の死体を見てしまった。

十歳の時、彼の両親や他の兄弟は死んだ。家に侵入してきた殺人鬼に、全員、彼の目の前で解体されていった。隠れ鬼ごっこをしていて戸棚の中に隠れていた彼だけが助かった。やがて、その殺人鬼は警察機関に逮捕されて、終身刑になった。何でも、三十名以上の強盗殺人、強姦殺人を行っていたらしい。そいつは、刑務所内で他の囚人達の怒りを買って、死んだ。逮捕時に薬物でがりがりに痩せこけていて、筋肉質だった身体は骸骨人間みたいだったために、抵抗出来ずに他の囚人に輪姦されてしまい、腸内に重大な損傷を起こして死んでいった。

ブラッドは復讐する相手を永遠に失ってしまった。

色々なカウンセラーの所を訪ねたが、ついにブラッドから人間らしい感情が戻る事なんて無かった。

不老の肉体を手に入れるべく、人間を止める際にブラッドは手術者にこのような事も頼んだ。“もう人間らしい感情が戻る事は諦めてきたから、ついでに本当にまともな感情を植えつける事も出来ないように施してくれ”と。

そして、青い悪魔は誕生した。

それまでのブラッドには、感情というものがまだあったのだ。人を殺してはいけない、という無意識のセーフティー装置。人の苦痛を怖れるためのストッパー。

それらは無くなった。

無くなって、ブラッドは完全に精神的な自由を手に入れた。

ただ、人間を切り刻む事。人間の身体を損壊する事。

それだけが、彼の生きる目的となった。

「随分、私の人生と似ているじゃないか」

ドーンの他の殺人狂や異常者達と決定的に違う理由は。

私達は従来の快楽殺人者ではない、という点なのかもしれない。

少なくとも、私達にサディズムは無い。人の苦痛が気持ちいい、人の泣き叫ぶ声を聞きたい、
というようなタイプではないのだ。その点では、黒い呪文のような典型的なタイプとは違っ
ている。私達がライフワークとして見るホラー映画。その中のジャンルの一つであるサイコホラー
のダークヒーロー達とも違っている。

.....。

.....。

.....。

ディザスター・ロアーの両目には、完全な絶望が浮かんでいた。

ブラッド・フォースは歓喜の声を上げるわけでもなく、快楽の表情を浮かべるわけでもなく、
ただただ無表情、無感情のまま、非情にその能力を使っていた。

出刃包丁。

柳刃包丁。

サバイバルナイフ。

バタフライナイフ。

あらゆる種類、あらゆるデザインの小型刃物が舞踏していた。

回転木馬や観覧車のようなようだった。くるりくるりと回っていく。造形美。

刃達は刺さった瞬間に服も切り少しだけ広げていく。血液がうまく噴出しやすいように。でも
ぽつりぽつりと血の染みが衣服に広がる様もまた、荘厳だ。

体内に入って内部を破壊していく刃もあった。

力の込め方も様々なのだろう。すっぱりと切れる時もあれば、ごりごりと骨を磨り潰す音も聞
こえた。

赤い花が咲いていた。赤い服を着た妖精のようだった。

ブラッドはくるり、と円舞する。

彼の澄んでいるような水色の服は赤く赤く染まっていく。

それは音楽だった。

オペラ歌劇を奏でるような光景だった。グレゴリオ聖歌隊の少年達の歌声を聴いているように
美しい。舞い降りる天使が羽を広げた。翼からは羽が散っていった。

.....。

.....。

.....。

金属の支配者。

それが血液支配ブラッド・フォースだった。

ブラッド・フォースを最強で最悪だと言われているのはこういう処だ。

まず、能力が最悪だ。

制約がまったくといっていい程、皆無なのだ。

たとえば、ブラック・スペルならば、無数の拳銃を持った腕を召喚出来ても、一つの腕が撃てる弾丸は一発。腕が弾丸を撃ち続けていかないと、遠距離攻撃として伸びていかない。たとえば、ネオ。ネオのギター・エッジは演奏を行わなければならない。剣を振って、音楽を演出しないといけない。一定量の剣舞を行わない限り、肉体加速も電気発生も出来ない。そして、私の場合、キルリアン・ストリームを撃つにはネガティブ・エネルギーを溜めないといけない。

ブラッド・フォースは違う。

金属さえあれば。あるいは鉄分さえあれば、それをありとあらゆる刃物に変える事が出来る。

勿論、ブラッドが作り出せるものは必ず刃物でなければならない、という制約があるのだが。そんな事はまったく制約になってはいない。何故ならば、彼は殺人行為以外に能力を使わないのだから。

加えて威力が有り得ない。

音速並じゃないのか？　と思うような速度で彼の生み出した刃は対象に向かって飛んでいくし、この世で切れない物質なんてないんじゃないのか？　と思う程、切れ味が鋭い。高層ビルだろうが数トンの金剛石だろうが豆腐のように両断してしまう。

柔軟性も酷い。刃物でさえあれば、金属を、ほぼどんなものにでも変形させられる。

ナイフ、カッター、鋏、剣、鉈、斧……。釘や槍、矢も作り出せるようで、彼の能力の中では尖って突き刺せるものも刃物と見做されるらしい。

そして決定的に、殺人行為に対して何の躊躇も持っていない。

メビウス・リング並に感情が欠落しているのではないかと思う程、極めて機械的に人を殺す。

こいつはもはや、聖書の頁から抜け出してきた神話の怪物なのだ。

アザゼルとカルシファーとかいう奴らが転生してきたとか、聖書に出てくる666の獣の落とし子とまで言われている。

堂々とドーン指名手配犯のトップの座に座り続けている、こいつの圧倒的な能力の右を歩ける奴なんて私は殆ど知らない。

こいつの首を狙うバウンティ・ハンターは最初の頃はかなり存在したらしいが、すぐに年数を重ねるごとに減少していったという。

何故ならば、勝負にならないどころか勝負とすら受け取ってもらえないのだから。

こいつを殺そうとする次の瞬間、百個以上のパーツへと変わっている。その繰り返しが延々と続いて、ドーン中の人間を戦慄させた。

こいつのために、当時のドーンの最強クラスであるバウンティ・ハンターの半数以上が死んだ。全員が全員、勝負にならなかった。無駄に人間パズルが増えるだけだった。

正面切って立ち向かうタイプではない変則的な能力を持つ能力者ですら駄目だった。追い込みをかけるかのように、この男にはもう一つの能力があった。

そう、危険を察知する能力だ。

刃物を作り出して自在に操る、という能力が目立ちまくって、彼のもう一つの特技を見逃しがちであるが、彼は直感が異常な程に極めて高い。

勿論、ドーン在籍者にはこの天性の感を持って生き残り続けている者も多いが、彼らの大部分は賞金首リスト者ではないか、賞金首者であっても、身を隠し、表舞台には余り姿を現さないのが常識だ。

だが、ブラッドは堂々と色々な場所へ闊歩し、私ですら簡単に出会えてしまった。そう、ドーン至上最悪とまで謳われた血液支配も、私の前ではただの猟奇映画鑑賞家に過ぎなかった。お互い、友人とまでは言わないが、それなりに見知った仲ではある。

「何故、人を殺さなくなったんだ？」

「殺さなくなったわけじゃないよ。無益な解体を止める事にしただけだよ」

「へえ、それは何故？」

「メビウス様に出会ってさ」

「ああ、メビウス・リングと戦って負けたからか？」

「いや。僕はメビウス様と戦った事なんてないよ。ただ、メビウス様が敵を殺す場面を見た事がある。それを見て、僕は円環の魔王に付いて行こうと思った」

それほどまでに彼を歓喜させたメビウス・リングとは何者か……。

「とても綺麗だったんだ。メビウス様が敵をぐちゃぐちゃにひき潰す光景が。すごくすごく美しく。この世のものとは、とても思えなかった。あんな風に血を飛び散らせる事が出来るんだな、って感動して。生まれて初めて、その時、僕は人間らしい感情を持ったんだと思う。泣いていたんだ。この世界にこんなに綺麗なものがあっていいのかって思って」

ブラッドはわずかに悲しそうな顔になる。

珍しく見せた彼の人間らしい表情だった。

「メビウス様は言った“お前が必要以上に殺し続けるのは、お前は自分自身の中にある虚空を埋めたがっているんじゃないか？”ってさ」

私は何も言えなくなる。彼の悲しみには共感出来た。

「それから、僕は必要が無い時は人を切り刻むのを止めたんだ」

それから何となく、私達は気が合った。というよりも、話が合った。

主に殺し方について語り合った。後は映画の批評等だった。

何故、人は人を殺したがるのか、などという話題になどは決して発展しない。不純物が一切、混ざらない会話だった。純粹に殺人行為について。勿論、死体の処理方法や隠蔽行為などの話はしない。

お互いに歪み具合や壊れ方が似ていたのかもしれない。

私も人間らしい感情なんてきっと持ち合わせてはいない。ドーンの基準からしてみてもだろう。……………。

ブラッドは、まず彼は相手を切り刻む時、真っ先に標的の喉を潰す。

彼曰く、犠牲者の悲鳴は好ましくないらしい。ただの雑音でしかないとのことだ。

彼にとって、解体した後の人体には興味が無かったし、地面に落ちた後の血の大河にもあまり関心を示していないようだった。

血液が宙に舞って、花のように咲き乱れるその一瞬に、芸術を感じているように見えた。

メビウス・リングに会って、バラバラにする事を余りしなくなった。血は噴き出して、咲き誇る、その瞬間が美しい。短命で果敢なく。地に落ちるまでの命。

解体の方もまたやってくれ。私は言う。

伝説の続きが見たいんだ。メビウス・リングから美の洗礼を受ける前の絵画も、また描いてくれよ。私は言う。実はお前の大ファンだったんだよ。強烈なリスペクト、インスパイアを忘れて、また描いてくれよ。お前自身の昔の絵を。

考えておくよ。ブラッドは、そう答えた。

さて、人間の人体について私の頭の中で少しだけ講釈を述べる。聞く立場のもう一人の私がそれを分析してみる。

通常、人体には約4リットルから5リットルの血液が詰まっている。彼はどうにかして、可能な限り、全身の血液を噴出させてみようとする。人間は総血液の半分以上を失えば、完全に失血死する。

決して、先に急所は狙わない。血液を身体中に送り込むためのポンプの役割をしている心臓が止まってしまうと、血液が循環しなくなり、出血の量が減ってしまうからだ。

彼は動脈を狙う。肢肪部分や骨は狙わない。

失血死かショック死にて死に至る。

血管という血管に穴を開けて、内部から血を抜く。

上腕動脈。上行大動脈。鎖骨下動脈。頸動脈。腕頭動脈。肺動脈。冠状動脈。下行大動脈。総腸骨動脈。大腿動脈。各種毛細血管。穴を開け、穴を開け、穴を開け、穴を開け。穴を開け、穴を開け、穴を開けていく。

サディズムが起因としているものかどうかは分からない。

私は、こう理解している。

彼はアートを作りたいのではないだろうか？

私の知る限り、ブラッドは徹底したストイシズムの持ち主だった。少なくとも、私はそう解釈していた。

ブラッドにとって、生きた人体とはただの加工道具でしかなかった。

ただの石から魂を込めた作品を作り出す彫刻家に似ていた。

血液を絵の具にする画家なのかもしれない。

波。森の木々。大地。森羅万象のありとあらゆるものを、人体を解体する事によって、彼は表現していた。輪切りにして。千切りにして。サイコロにして。図形にして。図面にして。時には、円状に。時には菱形に。

幾何学。様式美。

それは曼荼羅にも見えた。釈迦は掌を広げて、此の世界を包み込む。

私は思う。人体の全てに宇宙が詰まっているのではないのかと。

ブラッド・フォースは殺人者である前に芸術家だった。そして、彼はどちらの分野でも天才だった。私は彼の精神から、純粋さを感じていた。

私も、何かに憧れていた。生と死を司る者になりたかった。

私が死神を模したスタイルになったのは、そのようなイマジネーションが働いたからなのだろう。

平均全長二百五十七センチ。重量約三キロ。私の精神状態と共に多少の変動あり。
「ダンス・マカーブルは武具じゃない。防具のつもりで創り出したものだ。もっといえば、これは大型のアクセサリーなんだ。首に下げていうブランド品のペンダントと同じものだ」

鎌を武器として扱った歴史は確か無かった筈だ。勿論、武器の代用品として使われた事ぐらいはあっただろうが、それならば鍬やヘラも一緒だろう。

単純にこれは人を切り刻むのに適した形状をしていない。

第一、武器として用いるには機動力、扱い安さが劣悪だ。これはそもそも農具なのだ。

大型の得物が必要ならば、単純に大剣や斧を選べばいい。

故に、私のダンス・マカーブル。

本来は武器として使おうと考えたものではなかった。

単純な攻撃力、応用力のみならば、スキゾ・フレニアのキルリアン・ストリームがあれば充分だった。

単純にタロット・カードの大アルカナである『死神』のカードに憧れを抱いていた。

ダンス・マカーブルを振るう度に想いを馳せる。私が私の武器を大鎌にした理由を。

死と再生。農業の道具である大鎌。

私が不死の肉体へと変わった時、武器は死神の持つ道具にしようと思った。

死と再生の両方の象徴である『死神』を象徴したもの。

死とは新たなる始まりだった。私が人間の肉体を止めたその瞬間から、これまでの私は死に、私は新たなる生を得た。

私は死の象徴になりたいのだ。

「青い色を塗り潰したいんだ。青い青い空を真っ赤に赤く染め上げたい。だから、僕は青い服を着る。澄んでいる雲一つ無い透明な青空のような服を」

青い悪魔はそう言った。

私達の根底にある思想はとても酷く類似しているようだった。

.....

.....

.....

ディザスター・ローアの処刑は数分の間に済まされていた。

苦痛なんて乗り越えていたのだろう。途中からは、何が起きているのか分からない、といった顔で彼は延々と切り刻まれていた。

ただの骨と皮だけの破けた袋となって、彼は絶命した。

「駄目だね。やはり骨も刻んでしまう。血液を噴出させる事だけをしたいのに」

身体中の血液を可能な限り、抜き取られたらしい。

所々から、折れた骨が突き出ていた。ブラッドがうまくいっていない、という箇所はその辺りらしい。さすが、アーティストなだけあるな。殺害行為にはポリシーがある。

「なあ、また、お前らしいアートを見せてくれよ」

懇願すら含む口調で私は言う。

「僕は……メビウス・リングのようにになりたい。だから、止めたんだ」

私の中に、かつて崇拝していたアーティストの曲を久々に聴いて、音楽性を変えてしまった事を知ってしまい失望した時の気持ちが溢れていた。

ああ。そうだ。

そういえば、確か、虫を使って爆撃してくる奴だっただろうか。

もう一人いたが、私は気にする事は無かった。

ブラッドに聞いてみても、そういえば殺すのを忘れた、と答えられた。

圧倒的なまでの強さでブラッドは君臨していたので、どうせもう、戦う意志なんて残っていやしないだろう。

しばらくして、ポケットにしまっていた携帯が鳴った。

名前表示はフレイム・タンだった。

「あの、すみません。そこに四人程、向かっていると思うんですよ。アイシクル・ナイツの面々が、名前は、それぞれ、災厄咆哮ディザスター・ロアー、疫病媒体ボックス、金剛甲石ジュエリーボックス、殺害周波バイオリズムの四人でして。それぞれの容姿と能力の詳細を………まずは、ボックス。こいつはぶよぶよに膨らんだ大男でして、触れたものを壊死させたり、黄色の煙を巻いて死の風を吹いたりします。こいつの能力は、もっとも貴方の身体を危険に晒すので覚えていて下さいね。次に危険な奴はディザスター・ロアーでして、こいつの破壊力は、あの朽閻の次に………」

そこまで聞くと、私は無言で携帯を切った。

「疲れた。また、映画でも見に行くか？」

私はブラッドに訊ねた。

彼は首を縦に振って、頷く。

「たまにはアメリカン・ニューシネマでも見れよ」

私は言う。

「まだハリウッド映画の方が見ごたえがあるシーンが多いよ」

ブラッドは答えた。

さて、食人族でも見に行こうか。

あの映画館の館主は、割と客のリクエストに答えて上映映画を決めてくれるのだった。

………。

私は青い悪魔の顔を見つめる。

綺麗な顔。綺麗な男。

私は幼馴染の、友人と重ね合わせた。



第五章 汚辱の浸食

青い悪魔が清純無垢な少女の姿をしていると比喻ならば、そいつの場合は、冷淡で邪悪さを帯びた少女のようだと評する事が出来た。

頬にも口にも紅を差し、長い睫毛をさらにマスカラで伸ばし、ただでさえ大きな両目をアイカラーで莓のようにふっくらとさせていた。

全身を、黒白のゴシック・ロリィタのワンピースで纏っている。彼は服装に強い拘りがあるらしく、病的なまでに黒か黒白の衣装ばかり身に付けていた。アクセサリーの類は余り身に付けない。面倒臭いから、ってのが彼の主張だった。

彼がズボンを着ているのを見た記憶が無いのだが、それは私の記憶回路の失調などではないだろう。

「私の友人でブラッド・フォースというのがいるのだが、そいつは水色のロリィタ服を身に纏っていて、スカートをひらひらとさせているのだが、極めて自然体であるため、私はそいつの行為を“女装”などとは思えない。そもそも無性であるフランス人形が生きて動いている事自体の方が不思議なんでな」

その男はポーチの中へと手鏡をしまう。

こんな容姿をしているのに、何故か、男よりも女の方に多くモテる。彼のどの部分に男性的魅力があるのか完全に不明だが、とにかくある特定の女は彼に盲目的な恋をする事があるらしい。聞いた話によれば、何でも女の扱い方が巧いのだと。そんな彼だが、未だ女性経験は皆無だ。

そして、一部のボーイズ・ラブという怪しげな書物を好む女にも何故かモテた。男とも褥を共にした事など一度も無い、と彼は必死で強調していた。彼自身は、そんな境遇が大嫌いだと告げていた。

「……『裏原宿』や映画館以外で最強の番犬が私を守ってくれるとはとても思えない。私一人ではどうも心もとない。だから、こうしてお前を頼っている」

私の相棒である霧咲甘名は繭を嚙めて不機嫌そうな顔をした。

「まあ、単刀直入に言えば、オレもアイス・エイジに行って欲しいわけだな」

濡れた唇が震える。

「そういうことだな」

甘名はポーチから小さな小瓶を取り出して、中に入っている向鬱剤を数粒口に含んだ。確か、結構強めのやつだったはずだ。恋人の形見のように持ち歩いているそれを、私も一度、口にしたりした事があるのだが、ラムネのような食感がするだけで、何がよいのかまるでわからなかった。

彼は慢性的な鬱病が酷いため、キルリアン・ストリームの動力源が切れたとき、よく彼からフォリ・ア・ドウでネガティブ・エネルギーを貰っていた。

「否睡。お前は、自分の仕事の後始末ぐらい、自分でやるって言ったな？ オレにどうしろというのかな」

「事情が変わる時もある」

彼の物言いはいつも、何処か不遜だ。

私はそんな彼を面白がっているのだが。まあ、嫌がる人種もいやがるだろう。

甘名は身体に匂いのキツイ香水を振り掛ける。特に何の仕掛けがあるわけでもないそれは、敵地に行くときは不利になると何度も言い聞かせているのだが一向に止めようとはしない。何でも、ロリータ・レンピカとかいう香水らしい。

「心を落ち着かせる事が出来るのさ」

甘名はととてもとても、情緒不安定そうに、そう言った。

「じゃあ、どんなファッションで行こう？ そうだね。メビウス・リングか.....じゃあ、このファッションが最高だな。対抗して、黒尽くめでいくのもいいかもしれんな」

「ああ？ お前に全身黒尽くめは正直似合わない」

かつて、彼は、舞踏により敵を薙ぎ倒す。

何とかといった武道の流派に所属していたのだが。それは壊滅してしまったためにもはやどうでもいい。彼も特に気にしていないようだ。

「否睡の服が既にドス黒いんだよな。正直、お揃いっぽくしたくないし」

彼は小さな鞆を開く。

この中は彼の衣装筆筒になっていて、様々な衣服が入っていた。

「おい。アミュレット・コーティングぐらい施せよ、阿呆か。これ全部、ただの服じゃねえか。防具無しで戦うのかよ？ お前はRPGでレベルが低い状態なのに魔王を倒すために冒険始めの初期装備で行くのかよ？ 今から、裏原宿まで行くぞ。この自殺志願者が」

「馬鹿だな？ アンジェリック・プリティーだぞ？ イノセント・ワールドだ？ これを着ずに一体、何を着るのかと。戦闘服といえばロリィタ服に決まっているだろう」

「頼むから会話を噛み合わせろよ。そういうのをいくら着ても一向に構わないが、せめて防具として加工してくれと私は言っているんだ。若年性痴呆症を発露させるなよ、頼むから」

駄目だ。こいつ。

向精神薬の飲み過ぎでラリってやがる。

急激な躁状態のため常軌を逸した行動をいくら取ってもおかしくない。

「トランス・ヴェスタイト.....服装倒錯者の女装至上主義者は何でこんな気違いなんだ？」

「クロスドレッサーと呼んで欲しいものだな。それに、オレの場合は女装ではなく、少女装だ。その区別ははっきりと付けるべきだと思うのだが。それに、その方が耳障りがいい。言葉ってものにはアイデンティティーを伴う。たとえ同じ表現でも使用する単語によって美的センスとか印象が全然違ってくる」

甘名は鞆の中に片手を突っ込む。

するする、と長い棒状のものが全長三十センチ弱の箱の中から出現した。

ロング・ソードだった。

するする、と彼はもう片方の手を突っ込んで、再び棒状のものを抜いていく。

二刀流。ツイン・ソード。

「取り敢えず、これでネオ・ロギスムの首を叩き落して。炎猫を救出すればいいんだな？」

かなり本気の口調で彼はそう言った。

「お前の鼓膜はもはや破れていたらしいな。あるいは前頭葉に腫瘍があるのかもしれない。頼む、外科医か精神科医の元へと入ってくれ。入院費なら、この先、十年ぐらい負担してやるから。しばらくは出てこなくていい」

私は呆れた声で呟くと、椅子から立ち上がった。

「真面目だぞ？　オレはさっきから、お前に苛立っているだけだ」

彼はにやにやと嘲る。

「あー、分かった。分かった。では、敵を倒しに行くとするか」

彼は鼻歌交じりで、両手の剣を振り回して歩き始めた。

このサイコ野郎が。

躁病ってこんなに弾け飛んでいたっけ？　会うたびに酷くなっているのは分かるが。それとも薬の副作用かな。

最近の向精神薬は脳を蒸発させるのかね。

「じゃあ、甘名、アイス・エイジに向かうぞ」

彼の頭の中には、まだ一面のお花畑が咲き誇っていたが、私はもはやそれに関与する事を諦めた。

「それにしても、アイス・エイジ……あの砂漠をまた歩くのか。黒い呪文に追い掛けられながら、逃げ帰ったため、前は距離をさほど感じなかったが、車で行きたいな……」

そこで閃く。

というか、こいつの能力を忘れていた。

私は甘名の顔を見る。

「こういう場合、お前の能力が本当に役に立つんだよな。頼むから正気に戻ってくれよ。私はこういう時のため、お前の能力を期待しているのだからな」

「馬鹿か？　オレはいつだって正気だ」

彼は嘲笑うように言った。

甘名の姿が霞ゆく。ゆらりゆらりと幻影のように。

私は白昼夢に襲われた。記憶の残滓に引き摺られる。

十

.....

残像。.....

ネオのBMWがアイス・エイジの砂漠を走っていた。

彼は顔にボディピアスを付けていた。鼻に一つ、右眉に三つ。下唇に四つ。

「生きて帰ってこれたらバンド組もうぜ」

ネオは言う。

「俺はギターやるからさ。お前はヴォーカルでいいから、やらないか？」

「お前一人で弾き語りした方がいいんじゃないかねえの？　歌も上手いしさ」

「いや。お前と一緒に組みたいんだ。ヴォーカルやれよ。俺が発声練習とか教えるからさ。シャウト、ファルセット、グロウル、ホイッスル。全部、マスターさせてやるよ」

「別にいいけどさ。私は音痴だぞ」

「気にしない。気にしない。他の楽器陣は俺が探すから、やれよ」

「私はまず人前に出る事が出来ない」

「慣れだよ。最初は駄目だっていい。糞みたいな歌唱力でもパフォーマンスでもいい。それでも俺はお前とバンドを組みたいんだ」

.....。

十

砂煙が頬に当たっていく。小さな竜巻が所々で起こっていた。

干乾びて、骨だらけになった動物の屍骸。

もしかしたら、屍廊人の成れの果てであるのかもしれない。

仙人掌が大量に生えていた。ぶよぶよと膨らんでいて紫に近い色をしていた。

大蜥蜴がトゲごと仙人掌を食い荒らしていた。やがて、その蜥蜴は小さな子猫達に食い殺されていく。体長三十センチ程の蠍が子猫のような生き物を毒針で突き刺していた。その蠍は人の顔をしたコンドルに食い殺された。

生き物達の身体は瑞々しかった。

そういえば、この世界に雨は降るのだろうか。

ネオに聞いた。放射能物質を少量含む、濁った黒い雨が降る事が多いという。

そう、ここは世界の終わりに似ていた。

甘名は貧民街も初めてだろう。

これから、私達が向かうのは歓楽街だ。

どのような街になっているかはよく分からない。

私達は、屍廊人の歓楽街へと歩く。ここで、テトラ・フォビアとの約束を果たさなければならなかった。

歓楽街に入ると、水商売風の姿をした少女に見える者達が歩いていた。

そいつらは、どう見ても、女にしか見えないが。

「あいつら全員が男なんだよな」

私と甘名は呆けながら、歓楽街を散策していた。

アイス・エイジ歓楽街。

此の世界の在りとあらゆる醜さを表現したかったのかもしれない。

炎猫からは、強い世界に対する憎悪があるように思えた。

炎猫はこの街を愛してなんていやしない。

それだけは確かに確信出来た。

街中ではよく白昼堂々と、強姦が行われている光景が眼に映った。とくに路地裏などを覗き見

れば、それは顕著に現れていた。

陰惨な光景なのだろうな。私は少々、うんざりして余り人気の少ない場所へ行く事を止めた。
ここは何処もかしこも、異常者と奇形ばかりだった。

顔はぶよぶよと膨れ上がって、横長に広がった醜い女が綺麗な美女を連れていた。美女、つまり肉体手術により男性器を除いて限りなく女性に近付けられた男達は、これから、醜女達の性行為に付き合わなければならない性玩具だ。

最後には屍姦されるなり、生きたまま標本にされて飾られるらしい。

甘名は頭からすっぽりとマントを被って、気持ち悪そうな顔で私を見ていた。

「心配するな、いざとなったら、私が守ってやるから」

ふん、と彼は憎悪の籠った悪態を付く。

ネオがテトラ・フォビアによって連れ去られたため、ネオを救出すべく私達は歓楽街に向かわなければならなかった。

そのためには、まずはブラック・スペルに会わなければならなかった。

甘名がアイス・エイジの男達を、何だか複雑そうな顔で眺めていた。

アイス・エイジの男娼は俗に、『ニンフォ』と呼ぶ。

性玩具ニンフォと真性女性の区別を教えてやる。

明白だ。

真性女性はほぼ例外なく、人形型をした美女では有り得ないし、多くは正常な人間の姿もしていない。

腹の膨張した女が私に声を掛けてきた。男を買わないかと。私はむっとした顔で睨み付けて、それを断る。

色々な店に入ってみる事にした。

店の中の女達は、解剖された美男の内臓で性交していた。

別の通りでは両手両足の無い者達がたむろしていた。

全身に包帯を巻かれていたり、檻褻切れを纏ったり、あるいは極めて高級品だと思われる衣服を身に纏っている者など様々だが、その誰もが同じような、何だか誇らしげな微笑を浮かべていた。

彼女達は、炎猫の狂信者らしい。

ある種の畏敬の念を払って、彼女達にはうやうやしく祈りを捧げる者達もいた。まるで、自爆テロで大量殺戮を起こした結果、名誉の負傷を負った者達にでも対峙するように。

しばらく歩いていると、甘名は近くの店に入りたいと言った。

甘名は用足しがしたいと言って、店主にトイレを借りた。

彼はトイレの中に入ると、何かを叩き付けるような激しい音を鳴らして、すぐに引き攣った顔で戻ってきた。

「べ、便器の中に異物がいる……」

私はそのトイレの中に入ってみた。

便器の蓋は甘名の蹴りで少々凹んでいた。

便器全体が何だか、体温を放つ生きた皮膚で出来ているように見えた。天井からは無数の内臓で出来た装飾品なのか何なのか分からないものがぶらさがっていた。私は便器の蓋を開いてみる。中にはぬるぬるとした腕が蠢いていた。

店主は呆れた声で笑いながら説明した。

お客さん、本当に無知なんだね？ さては貧民街育ちだね？ こいつは、貴婦人の用足しの際の、性具なんでさあ。たくみな指使いで淑女様の赤い下唇を愛撫して、快楽の絶頂を満たしてくれる。ほら、そこにある直腸型の紐を引っ張ってご覧くださいよ。こいつに好きなように命令出来ますから。……醜い豚と狒々を混成させたような顔をした店主は丁寧にそう答えてくれた。

私達は不快な気分になりながら店を後にした。

甘名は半分泣いていた。

淀んで歪んだ空気が外には相変わらず溢れていた。

大通りでは、ニンフォ奴隷を値切りに値切って買い取っている女を見かけた。鱗が生えた爬虫類のような女だった。そいつは車に乗って、そのニンフォ達を轢き始めていた。血の輪っかがアスファルトに出来始めていた。半裸の妖精達は必死で許しを扱っていたが、女は上擦った歓喜の声を上げながらますます車の速度を上げて、大通りを走っていた。手馴れたもので、奴隷達の身体が他の住民にぶつかる気配は見られなかった。

……完全なまでの反世界が、そこには広がっていた。

私は嘆息しながら甘名に告げた。

「炎猫が作り出した。性と奇形の悪夢を私達は見ようと思う」

彼女が何を思い。何を表現したかったのか。

彼女が冷凍装置によってインスパイアされたものは、どのようなものであったのか。

炎猫は自身の中に眠る欲望を、余す事無く、この世界へと齎した。

さてさて、彼女は今、この世界についてどれ程、満足しているのだろうか。

ストリップ劇場とポルノシアターばかりが並んでいる。

劇場のチケットを買って入ってみる。

背中に白い翼を縫い付けられた美少年の頭が開かれていく。頭蓋を電気ノコギリで切り開かれていき、露出した脳味噌に死なないように幾つもの針を突っ込んでいき、次第に針で開けた穴を拡張させていく。その中に、男性器を突っ込んで射精が行われた。

女達の下半身には男性器があった。手術で取り付けたり、取り外したりする事が簡単に出来るらしい。別料金で脳味噌の中で胎児を育てる事も出来るようだ。生まれた子供は、育てて性玩具にするなり、二束三文で貧民街に廃棄するなり御自由なのだそうだ。

貧民街と歓楽街、どちらで暮らしたいかと訊ねられたら、こう答えるだろう。

私と甘名の意見は満場一致した。

どちらにも住まない。餓死や脱水症状、疫病、熱射病の危険性がどれだけあろうが、砂漠の荒野へ出て、そちらへ住む。

私達はどうしてもアイス・エイジを好きになる事が出来そうになかった。

ここに、私達の居場所なんて何処にも無かった。

食堂では、人体のどこどこを食したいか。イラスト付きで描かれていた。

私はもはや、笑いが止まらなかった。腹を抱えながら、声に出してメニューの朗読会でも始めようかどうか思い悩んでしまった。死にやがれ。

まあ、冷静に考えてみれば、こんなものはただの動物性蛋白質の塊に過ぎないのだが、不快なのは代わりがないので、私達は店を出る事にした。甘名は早く帰りたい、と呟いた。

もう私も物見遊山で、アイス・エイジ見物をするのに飽きていたので、素直に、黒い呪文と邂逅を果たすための場所へと向かう事にした。

フレイム・タンを通して、私の元には一枚の地図が渡されていた。

私は歓楽街の奥地にある、その場所へと向かった。

十

腐った木材の臭いがする建造物だった。どろどろに黴が生えている。

カウンターの奥では人が死んでいた。

頭が異様に変形していた。

「相手の哀願の悲鳴こそが、俺の怒りを静めてくれる。ヒーリング・ミュージックだ」

「最高に趣味がいいな、と言ってやりたい所だが、私にはサディズムの趣味は無いんでね」

黒い呪文は、くつつつ、と銃のグリップを叩きながら口元に笑みを浮かべていた。

「顔を潰すのが気持ちいい。出来るだけ未来のある奴の人生を奪うのが心地良い」

全ての綺麗なものに汚物を擦り付けてやりたい。

そう呟きながら、彼の含み笑いは強くなった。

「銃のグリップで頭を殴った。何度も。何度も。何でもするから、助けてくれ。と願う。後は嗚咽だけになる。もう一度、殴る。もっと声を出させるために。楽器は弾き手によって変わる。俺は一流の演奏家だ。殴りながら凌辱するのが心地良い。俺が俺でいられるし。俺は生命を支配出来る」

はあ……、私は嬉々とした声で演説する彼の性的サディズムの吐露には、何の感慨も抱けなかった。

「俺はここで生まれた」

ブラック・スペルは暗い目をしながら、こちらを眺めていた。

「お前らは身体を売って、生計を立てた事はあるか？」

スペルは聞く。

私達のいる空間は、汚い屋敷だった。

何だか排水溝の中のような臭いを放ちながら、それでいて、甘ったるい花のような香りがする。

「無いな。もっとも皮膚や臓器とかならば、すぐに売り捌いてもいいぜ。心臓だって売る」

私はにやけた笑みで返す。

「俺はな。ずっと、そうやって暮らしていた」

黒い呪文の瞳は憎しみが溢れていた。

「あらゆる体位。あらゆる性技を覚えさせられた。同性行もさせられた事だってある。内臓もぼろぼろにされたよ。何度か治療のための手術を受けている」

がつん、と破壊音がした。

一本の銃が叩き壊されて、部品が床に散乱していた。

「俺はな。お前ら女を激しく憎んでいる」

「そうか、なら私は関係が無いな。私は女じゃないんだから」

人間を止める際に、女性器は切除されてしまったからな。

私の額から血飛沫が舞った。どうやら、スペルはスレイブに命じて、私に銃弾を撃たせたらしい。

「聞け……だが、女以上に憎んでいる存在が出来ちゃった。それがお前だ」

逆恨みか。甚だしい。

こいつは本当に知的障害にしか見えない。

「インソムニア。俺はお前を殺してやる。お前は、本当に汚す事が出来ないように製図された肉人形だ。俺はそれが赦せない」

「うるせえよ。お前の不具結合した劣等感には興味が持てねえんだよ。それよりもネオを返してもらおうか」

私はらしくもなく少しだけ苛立った。自分語りをする奴は大嫌いだった。

「ああ、あいつな」

黒い呪文の両目が細くなる。

「テトラ・フォビアがばらばらに解体して、あらゆる店に売り払っちゃった」

……！

ジャック・ダニエルの瓶を数分で空にするネオの顔が頭を過ぎった。

ブラック・スペルの左の首筋から、一筋の血液が流れた。

同時に甘名の左脚がスペルの右の首へと伸びていた。

「待てよ。話は最後まで、聞くもんだぜ」

ブラック・スペルはくっくっ、と下卑た笑いを浮かべる。

「うるさい。このまま、私のダンス・マカーブルで首を落とされるなり。甘名の蹴りで首の骨を叩き折られるなりすればいい。死ね」

「だれが、ネオ・ロギスムが死んだと言った？」

……………。

彼は店の奥から毒々しい薄青色の容器を取り出した。

中には、白く変色して。切断面から磯巾着の触手状のものが伸びている腕が一本だけ入っていた。

「この容器に入っている腕は、ネオ・ロギスムの左腕だ」

大鎌を持っている腕に少しだけ力がこもる。

「何か交換出来るものがあればいいんだけどなあ」

くっくっ、と黒い呪文は裏返った声で笑っていた。

「へえ？ たとえば？」

「そうだな。お前の命……と言いたいところだが、駄目だ。お前は新約言語ごときのために命を投げ出さないだろう？」

「よく分かっている。まだ出会って、数週間の仲なんでな」

「じゃあ、こうしよう。そこのド汚いフードを被っている奴……」

ああ、そう来ると思ったよ。

「甘名、行くぞ。ネオには悪いが死んでもらおう。ブラック・スペル、お前は必ず殺す。じゃあな」

私は甘名の手を引っ張ると、入り口に向かう振りをして、マカーブルの鎌でそのままブラック・スペルの首を落としにかかった。

黒い呪文はそれを寸でのところでかわす。

彼の首筋から右胸に掛けて、大きな裂傷が走った。

「話が先に進まないじゃあねえかよ！ 頭に蛆が湧いてるド低脳が！ 俺が死んじまったら、この腕の持ち主の身体が復元すると思っているのかよおお」

ブラック・スペルの操作するスレイブ達が現れ、一斉に私達の周囲に銃口を向けてきた。

「お前の能力はもう私には通じない。分かっているだろ？ いい加減」

「お前の生命のストックは何重かもしれねえが、そっちの連れは違うんだろ？」

「ああ？ やってみろ。その前にお前を寸刻みにしてやるよ」

「……、否睡」

「いつもより腕の動く速度が遅いぜ。傷が完治してないんだろ？ 甘名に銃弾を打ち込む前にお前の首を落とせるって言っているだろ」

「……よく分かっている。今の俺はお前にやられた傷のせいで全身ズタボロだ。一応、治療は行ったんだが、この街の医療機関なんてたかが知れている。本当に科学力の方向性が歪な街なんでな。……実は腕を実体化させているだけでもかなりキツイ。引き金を引かせるエネルギーがあるかどうかはわからねえ。……それにそいつ、それなりの使い手だろう？ 発射位置さえ分かっていたら、銃弾ぐらい避けるなり出来るんじゃないかあ？」

「まったくその通りだ。だから、お前は今、死ぬしかないんだよ」

どうも、私の感情は少しだけ高ぶっているみたいだった。

余り、感慨などわからないものだと思っていたのだが、私にとって、ネオはそれなりに興味深い人種であったのかもしれない。

まあ、それだけだといえば、それだけなのだが。

「どうやら、新約言語に人質としての価値は無いらしいな」

「ああ、そうでもないぜ。気に入った画家の、二度と手に入らないプレミア品の画集ぐらいの価値はある。私はそのためなら、お前の命ぐらいなら奪うぜ」

私の大鎌は拳銃を握ったスレイブを。

拳銃ごと一瞬にして輪切りにした。

「わかった。この左腕の持ち主の命は保証するよ。もっとも、適当にそこら辺に売っちゃったが。実は初めから、こいつを人質にするつもりは無かったんだ。お前って、仲間見捨てるタイプだろう？ 冷酷非情って顔しているもんなあ」

こいつは私を挑発して面白がっている。

神経を逆撫でするのが目的なのだろうが。

「結局、お前は何がしたいんだ？」

私は唇を強く噛み締める。

「再戦しようぜ」

黒い呪文は言う。

「次で三度目。どっちが上か白黒付けよう。俺は手前にやられた傷で、今、戦えない。どうしても反応動作が鈍って、さっきみたいに簡単に命を取られてしまう。だから、俺の傷が完治した後の再戦だ」

「ほう？」

「新約言語のパーツを全部揃えたら、言っておいてくれ。炎猫が直々に処刑したいそうだから、その前にもう一度、挑んでこいよ。ってな。このまんま処刑しちまっても良かったそうだが、お前にどれだけの心身的打撃を与えられるか知りたかったんだとさ」

「本当に、ネオのパーツはちゃんと揃うんだろうなあ？」

「ああ、バラしただけで個々の部位は生きているよ。それがフォビアの能力だ。それにしてもあいつの拷問はすげえぞ。尋問用には最高だ。一部一部を細かく分けていってだな。細かく細かくしていったって、どこまでバラせるのか……」

「ヘイト・クライムって、お前の仲間の一人のフロスト・マンサーの肉体も奪われたんだってな？」

黒い呪文は、黙った。

そして、わなわなと、怒りとも恐怖とも。何とも云えない感情の塊を放出している。

負の形状が不思議だ。

「ヘイト・クライムか……、俺はその名前は知らない。知っていない。なあ、お前に警告しておく。フレイム・タンの言葉に余り耳を貸すな。敵ですら、同情したくなるんだよ」

もういいだろ、と彼は手を振る。

私達は店を出た。

空は、暗く淀んでいた。何だかよくわからない魑魅魍魎の群生が、たまに渡り鳥のように飛んでいた。たりした。

交渉なんてものほどろくな事はない。

確かに、私はネオと出会って一ヶ月程の付き合いでしかないし、これまでもパートナーが死んでいくのは普通だった。

……だが、やはりどこかで嫌なんだ。

いつも自責の念に陥ってしまう。

「……ブラック・スペル、テトラ・フォビア。絶対に殺してやる」

私はフレイム・タンの携帯に電話を掛ける。

十数秒のコール音の後、甲高い舌っ足らずの声が聞こえた。

私はこれまでの詳細を話す。

炎舌は苦々しい笑い声を上げた。

「あのですねえ。単刀直入に言いますね。黒い呪文の奴、性格悪すぎですよ。ネオ・ロギズムさんの身体のパーツなんですけれど。思いっきり、宮殿の中で炎猫が飾っていますよ。だから、歓楽街中を探そうとしたって無駄無駄、ですよ。完全な嫌がらせですね。一応、まだ生かされているみたいなんですけれど、処刑されるのは時間の問題ですね。というわけで、宮殿を襲撃して取りに行ってください」

「おお、そうかそうか。やはりな。じゃあ、頑張っ、一緒に黒い呪文とテトラ野郎をぶち殺そうぜ。気違い蛇女もな」

「了解です。ヘイト様のためにもね」

.....黒い呪文の言葉が、妙に引っ掛かる。

ヘイト・クライムなど知らない、か。

「しかし、奴は何のためにあんな嘘を？」

「不眠症さん達が、歓楽街巡りで少しでも嫌な思いをしてくれるのが彼らの目的なんじゃないですかね。すごいドサドさんばかりの変態ばかりなんであんまり気にしないでやってくださいよ」

「あっそ、私はマルキド・サドが大嫌いだね。悪徳の栄えを半分ぐらいまで流し読みした後、火を付けて灰にした事があるよ」

携帯ごしに聞いていた甘名は嘆息する。

「オレは、もう充分過ぎる程.....嫌な気分になったんだが。トラウマになるかもしれん.....」

彼は此処に来て以来、いつになく弱気だ。

そういえば、彼の性質の一つである、性的なものに対する気持ち悪さが肥大化しているのだろう。

まあ、私にはどうだっていいのだが。

携帯ごしに彼の苦言が聞こえた。

フレイム・タンは、甘名に向かって話す。

「ですよ。私も大嫌いなんです。あそこ。貧民街の比較的安全区域で育っていた頃は憧れみたいなものがあつたんですけど。やっぱり貧民街にいと妄想が膨らんできちゃいますからねえ」

アイス・エイジ全体では大体、日本国の北海道程度の広さだ。貧民街は鹿児島、歓楽街は種子島程度の面積であろうか。かなりおおざっぱだが。

貧民街の人口は四十万。歓楽街だと六万。

貧民街の住民は、歓楽街に行って生活する事を夢見ているが、どっちも八寒地獄みたいな場所なんだって事をどうも自覚していない奴らが多いらしい。

私と甘名はネオのパーツを探すため、炎猫の宮殿へと向かった。

老生艶魚の照明は落とされていた。

忍び込んだのは、すっかり日が沈んだ時間帯だった。

炎猫の兵隊達は一人もいなかった。少しだけ不審に思ったが、余り深く気にしない事にした。

最初に異変に気付いたのは、甘名だった。

何か、聞こえない音が聞こえる。と呟いた。

しゅる、と音が聞こえた。

どうも、私の首半分がざっくりと切り裂かれた音みたいだった。

私は攻撃を放ってきた方角を適当にあたりを付けて、キルリアン・ストリームを放った。

爆音の中から、悲鳴と共に、一人の痩せた男が現れた。

「青い悪魔のせいで、貴様には触れる事が出来なかったが、今度こそ、殺してやる」

男は両手が、音叉のような形をしていた。

「俺の名はバイオリズムだ。夜寝る時、いつも悪夢にうなされるよ。ディザスターはいい奴だった」

私はすぐに、死神を召喚する。

死神の大鎌を追撃として、バイオリズムと名乗った男へと向ける。

すると。

“ダンス・マカーブルの大鎌”が私の肩をかすめた。

私は背後を振り返った。

すると、何故か私のダンス・マカーブルの死神を同じように召喚している男の姿があった。

「セイムセイム。そう呼んでくれ」

おそらく、相手の攻撃をコピーする能力者なのだろう。私は一瞬、啞然としたが、すぐに毒を捲くし立てる。

「呼ばない。どうせお前は、すぐ死ぬよ。どけよ、屑が」

私はダンス・マカーブルの鎌を投げ付けると見せかけて、即座にキルリアン・ストリームを放った。

すると、巨大な鏡が現れると同時に、向こうからも、キルリアン・ストリームの放射が打ち返されてきた。

私は、紙一重でそれを避ける。

砲撃が命中した宮殿の一部が瓦解していった。

しばらく、私と男二人は睨み合う。

二人共、甘名には関心を払っていないようだった。

私は目で、甘名に合図を送る。

甘名は大降りの蹴りを放った。

その後、何度か、甘名は空中に向かって、蹴りを放つ。何度も。何度も。

それは、いつの間にか、一つの舞踏のようだった。

二人の男は呆れたように、甘名を見ていた。

次の瞬間、めきり、ばきり、という音を立てて、二人は崩れ落ちた。

「やはり、お前の能力は便利だよな」

私は笑った。

十

炎猫の前には、数人の人間達が呻きながら地面に膝を下ろしていた。

彼らは皆、頭蓋骨を破られて。

生身の脳を剥き出しにされていた。

頭の中には、幾つもの異物が生えている。

針や短剣などが多かったが、中にはスプーンやアイスピック、ドライバーのようなものまであった。

どうやら、生身の人間で、また、ヘッド・レスを作っているらしい。

その前には、散々、脳をいじくって、苦痛を与え続けるようだ。

炎猫は時折、喚起の声を上げる。

悪いが、私は彼女の前衛的なアールブリュットには何も興味を見出せない。何が楽しいのやら。

「奥の部屋に、あんたの仲間はいるよ。持っていくといい。あたしはあいつには興味が無いんだ。どうでもいいのよ、本当に。殺す価値も無い」

「そうかい、すんなり渡していいのかい？ お前の手下がわざわざ持ち帰ってきた戦利品だろう？」

「その手下は、勝手に殺す価値も無い奴を持ち帰ってきただけの話さ」

私は少し苛立った。

そして、毒づく。

「今度こそ、殺してやるよ。それとも頼みのフロスト・マンサーはこの部屋の何処かにいるのかい？ あるいは、朽闇がすぐ近くに来ているのか？ その前にお前の首は取らせてもらうさ」

「あたしは強い。フロスト・マンサーやアイシクル・ナイツに頼る必要はまったくないぐらいにねえ」

そう言うと、ようやく炎猫はこちらの方を向いて、挑発的に微笑む。

「ところで、バイオリズム、死んだ振りをしているんでしょう？ 起きたらどうだい。……あんたは二度も失敗するとはねえ」

いつの間にか、他の部屋で倒した筈の二人が、この部屋の床に転がっていた。

炎猫は何の感慨も無さそうに、二人を見る。

バイオリズムは震えながら、立ち上がった。

「地獄でディザスター・ロアー達が待っているよ。仲が良かったんだろう？ そろそろ、あいつらの元へ行ってやったらどう？」

炎猫は赤い眼球をバイオリズムの瞳と合わせた。

殺害音波バイオリズムは震えている。

彼の身体は痙攣し始めた。

バイオリズムの全身が炎上する。

皮膚が溶けて、筋組織が剥き出しになる。

数分の間、阿鼻叫喚の悲鳴が上がると。

やがて全身が炭になって、男は絶命した。

「セიმセიმ……あんたは使えると思っていただけだねえ」

炎猫は頭を開かれた者達の脳から、一本のナイフをくわえて、抜き取った。

まるで、吹き矢のようにそれを飛ばす。

セიმセიმの口腔へとナイフは飛んでいき。閉じた唇や前歯を破壊して、そのまま後頭部から突き出した。

「やっぱり、アイシクル・ナイツは役に立たないねえ。また、新しいのを揃えとするわ」

「ああ、まったく、無駄に生きていたって仕方無い事ってあるよな。そう言いたいんだろ？ まったく、せめて、彼らもブラッド・フォースに殺された方が報われただろうな、なあ、お前に一言、言っておきたい事がある」

「へえ？ 何かしら？」

「マキャベリの君主論を何度も読め。取り敢えず、使えないからといって、簡単に部下を切り捨てるな。本当に粛清していい配下は、裏切り者だけだ。せめて、解雇程度にしておけよ」

「悪い？ あたしは実は部下が一番、大嫌いなものよ。近付く者程、不快になる。こいつらはあたしの下について権力の汁を吸りたいだけよ。ブラック・スペル以外にあたしの理解者なんていないわ。絶望しているのよ」

「お前はまるで、ヨセフ・スターリンだな。せめて、アドルフ・ヒトラーになれよ」

「いいのよ、スターリンでも。確かにアイス・エイジの一部の人種はあたしに対しての個人崇拜状態ね。でも、スターリンと呼ばれるのは心外ね。アイス・エイジは共産主義ではないわよ。ついでに言うならば、あたしはマキャベリをまったく支持していないわ」

炎猫は人体椅子の後ろに首を伸ばした。

様々な腕達の中に、何かが挟まっていた。

するり、と何かが抜ける音がする。

炎猫はそれを噛み締めていた。

全長二メートル半くらいはあるだろうか。

それは刀剣だった。

どうやら、何かの骨で作られているようだった。

「龍型奇形蜥蜴の骨格で作られた柳葉刀だ。貴様らを一刀両断にするには十分な得物だろう？ 解剖図にしてやるわ」

甘名の身体から炎が上がった。

炎猫の邪眼にやられたのだ。

炎猫は首の筋肉と腹筋だけで、身体を動かしていた。

回転しながら転がるわ、飛び跳ねるは、信じられない機動力を見せてくれた。

私の右太腿が切り裂かれる。

甘名は全身を炎上させながらも、必死で力を行使して、炎から逃れる。

がりがりがりがり、床が削れていく。

何故かよく分からないが、床から死臭の臭いと共に、血飛沫が上がった。

どうやら。

この部屋は死体を加工して、床や壁の材料にしているようだった。

ごきり、という音がして、大量の骨が粉塵のように宙を舞う。

悪趣味な宮殿の素材達は、まるで意思を持っているかのように、槍の雨となって私達へと降り注いできた。

私は、骨の槍を後ろに飛んで交わす。

すると、既に背後には炎猫の姿があり、巨大柳葉刀を私の胴体へと向ける。

甘名が放った蹴りが、炎猫の即頭部を打ち抜いていた。

炎猫は回転しながら、地面へと叩き付けられ、骨の散乱した床へと転がっていく。転がりながらも、彼女は得物を私の顔面へと投擲してきた。

私の全身は揺れる。

巨大柳葉刀は壁へと深々と突き刺さっていた。壁から、ポンプのように大量の血液が噴出していく。

気が付くと、私は甘名に抱きかかえながら、寸での所で、刃で脳髓を撒き散らされる事から避けられたみたいだった。

私の額がぱっくり割れて、どくどくと流血していた。

炎猫はすぐに持ち直したみたいで、壁に刺さった大刀を口で引き抜いていた。

私は死神を即座に召喚する。

ダンス・マカーブルの刃と炎猫の刀が交差する。

バランスを取る両足も無いのに、どこにこんなパワーがあるのか不思議なのだが、私は完全に彼女の動きに翻弄される。

風車のように回っている。

鋼鉄製の壁を切り刻んでいく。

私は喉に線を引かれた。

物凄い勢いで、赤い噴水が飛び散っていく。

炎猫はくっくっ、と嘲弄する。

「ブラック・スペルがやけに貴様を殺したがつているから。あたしは貴様を殺しはしない。……命拾いしたねえ。屈辱かい？」

「……いや、願ってもいないことだよ」

か細い声で私は囁くように呟く。

「今あ……頃、私の……仲……間が、ネオをお……の肉体を見つけているはず。私の役目は終わ

ったんだよ。私達は、つまりは囧だ、残念だったな」

「強がるのは見苦しいわよ。先に言ったわよね。あたしはあいつに興味が無い、って。だから、始めから返してやるつもりだった。それで悪態をついているつもり？」

「…………ネオはやはり、返してくれるのかい？」

私は潰れた喉を必死で再生させて、どうにかまともな発声へと変えて確認する。

「適当に身体をくっ付けてやればいいわ。そうすれば、テトラ・フォビアの断片も消えるから」
炎猫は、巨大柳葉刀を玉座の中へと閉まった。

「そうそう。フレイム・タンにも言うておいて。ヘイト・クライムの肉体は返してやるってさあ。あいつらがどう足掻こうが、あたしにはまるで興味が無いのよ」

「奴が獅子身中の蟲だって、とっくに気付いていたんだな。しかし、それになあ、やっぱり、あっさりネオを返していいのかよ」

「構わないわ。交渉は成立しているからねえ。インソムニア、あんた、あたしをただの肥大化したサディストとしか見てないでしょ？ なるほど、確かにあたしはサディストだ。しかし、あたしにはあたしの哲学があってね。フレイム・タンを生かしているのは、私は明確に私に害意のあるやつは、私の目的の邪魔にさえならなければ好意を持って歓迎するが、あたしは部下や信者の癖に無能な連中が本当に赦せないのよ。フレイム・タンは私の命令に対しては、何の役にも立てはくれないが、私の信者ではないから、それでも好きなのよ」

「そうかあ、……お前、本当はすげえ、いい奴だったんだな」

少しでも悪意と毒と皮肉を込めた言い方をしたかったが、既に私は彼女に惨敗しているため、そのような気力はもはや無かった。

単純に今の私は精神的にも肉体的にも疲労困憊している。

「どうもあたしは貴様が気に入っているらしい。ブラック・スペルもある意味で気に入っている。あんたを取り巻く圧倒的な負のオーラに惹かれているのかもしれないわねえ」

「スキゾ・フレニアの能力だよ。そうか、これは人を誘惑し、惑わせる毒婦の魔力も持っているのかもしれないな」

「そうかもねえ、だから、未だ貴様はあたしに生かされている。そうだ、何か、あんたの望みを叶えて差し上げようかねえ？ 何がいい？」

「リフリジレイターについて、もう少し、詳しく話してくれないか？」

「ええ。いいわよ」

リフリジレイター。

それはメビウス・リングと対局する存在だと言っていい。

メビウス・リングという概念が秩序を表すとすれば。

リフリジレイターは混沌。

炎猫はリフリジレイターに関する資料を幾つも集めていた。

リフリジレイターは道化師の姿をしていると言われていたらしい。

「一つだけ分った事があるのよ。リフリジレイターを召喚するために必要なもの。それは、想像力の外側に向かう事だという説が有力。誰かが人間の持てる想像力の限界を超えた時、そいつを

呼び寄せる事が出来る。結果、混沌が行われ。世界が変形していく。あたしはその実験として、アイス・エイジに歓楽街を作り出した。究極の悪徳、というコンセプトでね。……でも、失敗だった。この程度ではまだまだ人間のイマジネーションの範疇のままだった。あんたにはそれを見て欲しかった。自身の作り出した美術品の失敗作の感想を聞きたくてね。どう？　吐き気をもよおした？」

「いや、ゴミだと思った。私の尊敬する美術家は、もっと崇高で、何の不純物も混じらない、純粹な想いで作品を作り出すからな」

「嬉しいわね。そう言われたかったのよ、あんたのようなどれほどの残虐行為も異常性交にも何の感慨も抱かないタイプの人間にね」

「これだけは云っておく。私はマルキド・サドが生理的に大嫌いだ。ソドムとゴモラの町の盤上の上に、更に裸のランチ的なエッセンスを継ぎ足したこの街は、ジャンキーの悪夢の体現と同じだな。程度が知れているって云っているんだよ。程度の低いバスケット・ケースには興味がねえんだ、私はブラッド・フォースのような完成体に美を感じるんだよ」

「あんたとは、どうも美意識について対立しているようだね。でも、聞いて欲しいわ。どうやったら、人間の限界の想像力を超えられるのか？　あたしはそれが知りたいんだ。そして、あたし自身がリフリジレイターと邂逅を果たす。そのためには、どのようなファクターが必要なのか？」

「人間の限界ってのは何なんだ？　私には分からない。そんなもの存在するのかよ」

「あなたに理解出来るようなものじゃないわ」

もう。帰れよ。

炎猫はそう告げた。

「ブラック・スペルは回復次第、あんたと再戦したいそうよ。それまでは待つて上げてもいいんじゃない？　そこにいる、えっと名前なんだっけ？　あんたももう帰ったらどう？　ネオ・ロギスムのパーツは見つかったんでしょ？」

「甘名、もう出てきていいぞ。隠れていないでさ。多分、炎猫はこれ以上、私達に危害を加えるつもりはないぞ」

甘名は罰が悪そうに、そっと物陰から顔を出した。

彼は途方に暮れたような顔をしていた。

彼の両腕には、いくつもの瓶が握り締められていた。

何だか、彼は本当にこの街に来て以来、いつもの彼じゃなくなっている。

「首だけが無いんだよ。……いくら探しても見つからない。宮殿中を探した……………」

炎猫はくつつ、と笑った。

「生首だけが無いのは、ブラック・スペルが持っているからよ。また彼に会ってきたらどう？　交渉次第ではすぐに返してくれる筈。でも、すぐに殺しちゃったら、生首の行方が分からなくなるかもねえ。土中に埋めたりしていたりしたら、お手上げでしょう？」

「おいおい、マジかよ。また、あいつに会いに行くのか」

「身体を手に入れたら、首も渡すように言っているわ。元々は彼が計画したのよ。何考えている

か分からないけど」

お前の男だろう、思考回路ぐらい把握しておけよ。

「なあ、本当にこれでネオ・ロギズムを生き返らせられるのか？」

「切断面と切断面をくっ付ければ。それで再生する。テトラ・フォビアの肉体は、やがて憑依体の肉体と一緒に同化する」

「ありがとよ。しかし、ネオは生き返ったら、またお前を殺しにくるんだろうぜ。私としては、奴に付き合っただけだから、もうどうでもいいんだけどな」

私は戸惑う甘名からネオのパーツの半分以上を奪うと、彼の手を引いて部屋の外へと向かう。そして、ふと、思い立って炎猫に告げた。

「そうだ。料理美味かったぜ。お前が作ったんだろう？」

炎猫は、少し驚いたような顔をした後、微笑した。

「十七種類の薬草を使って、香辛料にしている。念入りに味見もしたりして、匙加減も見ているわ」

「どうやって調理しているんだい？ また、頭の無いあの連中を使っているのかい？」

「いや、口でよ。調理具を持って、全部自分でやっている。あたしの器用さを先ほどその目で見たお前なら、理解出来るだろう？」

「ああ、あんたは一流のコックだ、認めるよ。何かを調理するのが巧いんだよな。そうやって、他人の人生も調理してきたんだろうな」

「今度は、あなたを調理してもいいのよ？」

「遠慮しとく。料理になる将来の予定は今のところ無いんでな」

そうだ、と炎猫は唐突に告げた。

「戦争しましょう。フロスト・マンサーとアイシクル・ナイツ全員と、貴方達で」

「遠慮願いたいな。私はとっとと引き上げりたい。お前にもお前の情夫にもまるで何も興味は無い」

「あたしはアイス・エイジを徹底的に破壊する相手を探していたのよ。そこの両性具有は、どうでもいいけど、あんたの方は気に入っているわ。殺し合いをしましょう。そっちには、何名いるのかしらね。ヘイト・クライムとフレイム・タンの二人にも言うておいて。全力で殺しあいましょう。そして、その末に、アイス・エイジは滅びていくわ。夢のような光景が見れる」

私は振り向かなかった。

何考えているか、分からねえよ。間違いが。

「あの人は何を云っていたの？」甘名は私に訊ねた。

「言語障害らしい。声帯のパーツにも欠損があったみたいだ。脳かもな」

私は返答を返した。

十

「いいか、よく聞け」

ブラック・スペルは紫煙を吐き出しながら言う。

「俺はここアイス・エイジの最底辺で生まれた。アイス・エイジで生まれた男が歓楽街で生きていくためには、娼夫になるしかない。女は俺の肉棒を下の口と上の口で吸るための吸血鬼の豚だった。腹の膨れ上がった餓鬼だよ、奴らはな」

彼の足元には黒く変色した元は灰褐色であっただろう肉片が転がっていた。

絨毯のように、入念に床に擦り付けられて、デザインの悪い靴で描いた曼荼羅を作り上げていた。

「いいか、この店の地下室に來い。見せてやるよ」

彼は木戸を蹴破る。

地下室へと続く階段があり、そこに降りていくように告げた。

鼻を嘗め尽くすような、臭気が漂っていた。

香料と悪臭の混在した臭い。

一人のニンフォが裸で両手首を縛られて、吊るされていた。

彼の全身には、大量の鞭で打たれた傷があった。

鞭には鋭い棘のようなものを付けられていたらしく、傷口は激しく裂けており、所々が膿み始めていた。

彼の腹は殺人的な金属製のコルセットで締め上げられていた。

おそらく内臓はぐちゃぐちゃに損傷しているだろう。尻の方から赤黒いものが垂れ下がっていた。

彼の男性器は膨れ上がっており、筒状の物で縛り上げられて、赤黒く変色していた。

両足は酸か何かによって溶かされており、剥き出しの骨が覗いている。

助かる見込みは無さそうだった。

衰弱しきっていて、どう考えても、数時間以内には死亡するのだろう。

「そいつをこういう風にした者は、俺の傍で転がっている女だ。性奴隷ニンフォ販売員の従業員こそしているが、歓楽街の標準的なパーソナリティーを持っていて、例に洩れずニンフォを拷問に掛けて翫っていくのが趣味なようだ。俺がこの女を銃で脅して十数回ぐらい強姦した後、思わず頭を砕いて殺しちまったよ。その後、脳味噌の中へも突っ込んじまったな。気持ちよかった」

向こう側の部屋も見てみろよ、と黒い呪文は指差す。

甘名は泣いていた。

ただでさえ、今の甘名は鬱病が酷くて、精神不安定だ。

以前のような力強さと、敵対心が無い。

何とか治って欲しいと思う。

.....

隣の部屋は、更に惨憺たる光景だった。

地獄絵図だ、と甘名は言った。

彼は頭を抱えていた。

一人のニンフォは両手両足を切断されて、代わりに腸を縫合されていた。背中には金属製の羽

を埋め込まれており、剥き出しの肋骨には幾つものピアスが通されていた。

背中に巨大な女性器を移植されて、その中に何本もの回転する刃を差し込まれている少年。頭部を割られて、おそらくは性欲中枢らしき場所を電極で刺激されている少年。

みんな、まだ生きていた。

生きながら、作品と化していた。

快楽と苦痛に身悶えながら、皆で唱和するように嘆き、叫んでいた。

それは原初の獣の咆哮などではなく、まるで妖精や天使を汚辱していたような、か細い金切声。

中央には、自分の男性器で妊娠する両性具有の少年がいた。

彼の男性器の先には、管が繋がれており、それはすぐ下に作られた女性器へと繋がっている。しばらくすると、受精を終えて、彼の腹は膨らみ出して、しばらくすると、胎児を産み落とす。

産み落とされた胎児は、他の少年によって、彼の口の中へと運ばれていき、それが済むと、彼は快楽中枢を刺激されて、射精する。すると、彼はまた妊娠する。妊娠すれば、胎児を産み落とす。その胎児は、彼の口へと運ばれていく。

彼は女神みたいに美しいな。

私はブラック・スペルにそう告げた。

そうだろう、とブラック・スペルは答えた。

お前にこの造形美が理解出来るのかよ、と彼は眉間に皺を寄せた。

お前の糞壺と化した頭蓋の中身よりは、芸術を理解しているつもりだよ、と私は答えた。

彼は女神の腹に蹴りを入れた。

何度も何度も蹴りを入れる。

芸術品の口からは、大量の汚物、肉片が吐き出されていく。

「アイス・エイジは早く滅びちまった方がいいんだよ。こんな場所、人類の想像力の汚物以外の何物でもない」

黒い呪文は上着を脱いでいく。

身体ラインにフィットした、ブラウスのボタンを一個一個外していった。

彼の肉体は、古い傷が幾つも幾つも目立っていた。

そして、ごつごつした装飾を施したブラウスを脱いだ彼の身体はまるで甘名や、ニンフォのように青白く、そして、同性にすら欲情を掻き立てられそうな程、艶かしかった。

「おい、そこのカマ野郎。俺もお前と似たようなもんだよ。女装こそ多くは行わなかったが、いつも顔に紅を塗られて、白粉をふられて、男達と寝たもんだ。俺の身体は、もしかしたら、女よりも男の方を多く知っているのかもしれない」

「オレは……男も女も、どちらも経験無い……………」

「そうか、それは羨ましい限りだな。お前も俺と同じ目に合わせたくなったよ。そのクソ死神をぶち殺した後、お前を味わってみるのも悪くない」

「やれるもんなら、やってみろよ。ヘンリー・ルーカスとジョン・ウェイン・ゲイシーを交配させたサイコパスが。電気椅子に座るべき人間が何で、のうのうと生きられるのか不思議で仕方が

無いな」

甘名は侮蔑にすらなっていない侮蔑を吐く。もっと捻りを利かせようぜ。褒め言葉になっているんだよ。

私は齒噛みする。

甘名の鬱が酷くなければ、彼はもっと強く立ち向かっていったのに。

甘名は強いんだ。

友人である、私は彼をそう信用しているというのに。……。

黒い呪文は身に付けているズボンを開いた。

まるで、全身から官能的な匂いを発しているようだった。

彼の性器は肥大化し、天を向いて、伸びていた。その先端からぬめぬめした液体が溢れてくる。

彼は吊るされているニンフォの背後に回る。

絶望と恐怖が織り交ざった声音が聞こえた。虫の鳴くような声だった。

彼は、ニンフォを犯し始めていた。

何度も全身を揺さぶりながら、ブラック・スペルは絶頂に至った表情を見せる。

もはや生きていくだけの体力の全てを消耗したニンフォは、零れ落ちそうなぐらい両目を見開くと、そのままショック死してしまった。

それでもなお、黒い呪文はその肉体を犯し続ける。

「お前にもぶち込むときを夢見ているよ」

「ああ、やってみろ。やってみせろ、お前の全身全霊を持って、挑んできな。私は私の全力でお前に答えてやるよ。お前の貧弱な性的衝動をへし折ってやる快感はサディストを真性マゾヒストへと変えていく快感そのものなんだろうな」

私は左手の中指を立て、右手の親指を勢いよく、地面へ向けて振った。

楽しかった。

はは、もっともっと中傷して、挑発してみろよ。どうせ二度も私に負けている奴が言う台詞だとは思えないのだからな。

私は嘲笑う。

しかし、私はサディストではない。すぐに、それも空しくなり、軽く舌打ちする。馬鹿馬鹿しい、こういう奴に感化されて堪るものか。

「取り敢えず、お前の負を教えてくれ。私はお前の言葉に耳を傾けてやるよ。勿論、私はお前に大した興味なんてないけどな」

「ああ、教えてやるよ。聞かせてやるために呼んだんだ」

ブラック・スペルが語り出した彼の半生は陰惨なものだった。

まず彼はアイス・エイジの出身ではなく、現実にある貧民街の出身者だった。

彼は物心付く前から、同居していた彼の伯父に犯されながら育った。

十になる前から、男性器の味を覚えさせられ、十代の初め頃から男娼として身体を売るはめになった。太って脂の乗った伯父が彼に性交の技能を教えた。どうすれば、男を喜ばせられるか

を叩き込まれた。

百人近い男と寝た後、アイス・エイジに捨てられてからは、今度は女に犯される日々が続いた。アイス・エイジの女はアンドロギュノスの出来損ないみたいな奴が多い。ここでも、彼は男性器で弄ばれた。女性の性玩具ニンフォ達に混じって、毎日、彼は身体を売った。

しばらくは、強いサディズムの持ち主に彼は飼われていた。

首輪を嵌められて、いつも下半身を舐めさせられた。

腰周りから、足の指先までだ。両腕は後ろへと、枷で締められて、つねに性器を剥き出しにして、暮らしていた。

やがて、炎猫に飼い主が処刑され、たまたま炎猫に気に入られるまで、彼にとって人生とは他人に肉体を提供するためだけに存在するものだとはばかり思っていた。

二十六歳という年齢で、両目はどんよりと曇ってしまい、此の世界にある全ての希望を見る事が出来なくなってしまった。

やがて、髪の毛はストレスにより真っ白に変わってしまい、黒いブリーチ剤で染め上げている。ぽりぽりと、彼は髪を掻き毟った、黴のようなフケが多量、カウンターの上へと落ちていく。

炎猫に拾われて、数年立つが、三十近い彼の顔立ちは未だ童顔であり、成長が止まっていた。でも、髪は白髪だった。

「俺にとって、女性とは炎猫だけだ。後は腐った大量の残飯で育った豚ばかりだ」

黒い呪文は、ニンフォの一人の身体に何度も蹴りを入れる。

骨の折れる音が響いた。

「お前らにはこのアイス・エイジの実態を知って欲しかった。俺は俺の存在意義のために人を殺す。俺自身の弾丸でな」

「去勢された男性原理を取り戻したいだけなんだろう？ お前に高尚な殺人衝動は無いよ。笑い物なんだよ、お前は」

彼は、新たに煙草を啜えて、火を付ける。

煙草を吸い終わると、ぷっ、と吸殻を私に向かって、吹き捨てた。私は悪意の侮蔑を、小馬鹿にしたように軽く首を反らしてかわす。

彼はネオの生首を差し出した。

「持っていけ、繋げれば元通りになる」

ネオはまだ生きているらしく、目蓋を閉じたまま、瓶の中で時折、口から呼吸をしていた。瓶の中には、どういう液体が入っているのか。

酸素のようなものはあるのだろうか。

あるいは、この液体自体が、テトラ・フォビアの肉体の一部なのかもしれない。ネオの首の切断面は磯巾着のような小さな触手が何本も生えていた。

「傷が治り次第、俺はお前を殺しに行く。俺はお前が嫌い。何故、嫌いかわ聞きたいか？」

「いや、お前が私を嫌い理由は私自身で考えてみるよ」

「ああ、そうしてくれ。俺はてめえと違って、うまく言葉にする事が苦手なんぞでな」

彼はそのままニンフォ達の拷問室へと向かうと、奇形交へと戻った。多分、この部屋のニンフ

ォが文字通り死ぬまでやり続けるのだろう。

彼にはおそらくそれしか無かった。

心理学の俗説を信じているわけではないが。

拳銃は彼にとって、彼の男性器の象徴そのものなのだろう。破壊された男性像を取り戻すために、彼は劣等感コンプレックスの銃弾を撃ち込む。

そして、彼は徹底して女が怖いんだ。だから、男色に走る。

「ブラッド・フォースとブラック・スペル、どっちがヤバいと思う？ 単純な実力の差とかじゃなくてさ。実力の差は答えるまでも無いからな。そうだな、衝動の強さ、というかその身に纏っている殺意の意志みたいなものがさ」

私は甘名に訊ねた。

私の友人は、どうも悪夢的なフラッシュバックに襲われていたようで、しばらくの間、苦悶の表情を浮かべていたが、やがて精神安定剤を何錠も一気のみすると、うってかわって、ハイテンションになって饒舌になっていく。

少しずつ、いつもの彼を取り戻していく。

早く彼が戻って来て欲しかった。

不遜な彼が……。

「決まっているだろ。ブラッド・フォースに決まっている。でも、対峙していて気持ち悪くなってくるのは断然、ブラック・スペルだ。……オレは直接、ブラッドに会った事はないのだけれども、話を総合して聞く限りでは。でも、何ていうか、黒い呪文は滑稽だな、情けないというか、どうしようもないというか。貧弱過ぎる気がするな？ 精神的に弱いし、それを補うための反動行為が性的凌辱だろ？ コンプレックスの塊そのものだな。おぞましいし、反吐が出る」

「ブラッドは殺意なんてまるで感じないからな。何でもないように、極めて自然体で人を殺す。だから、怖いっていう部分もあるんだけど、気があってしまえば、そんなに害は無いよ。淡々としていて感情が欠損しているけれども、いい奴だよ。自分自身をよく理解していない奴なんだけれども、殺意や敵意の無い奴は殺さないんじゃないかな？ 多分。私は彼と対峙していて恐怖を感じた事はないんじゃないかな。何だろうな。言葉以上に、しぐさとか空気とかで心地よさを感じるんだ」

「黒い呪文の話をしてたんじゃなかったのか？ 嫉妬するな。否睡はオレに対しては、陰口しか言わないだろ。この差は一体、何なのだろうな？」

「まあ、お前は一緒にいると苛々が募る点が多いからな。躁鬱病、パニック障害、自律神経失調症、境界性人格障害、自己愛性人格障害、別にそれでも構わないんだけど、コンビを組むと実害が生じる時があるからな」

話がどんどん脱線していくが、構わず私達は会話を続けた。

そう、私達はいつものように“議論”を交し合っていた。

人類、生命体、という実存、意志そのものについての対話をしていた。

「でもまあ、一応、正常に見えるだろ？ まともな事を言える回路はある。君の完成されたニヒリスティックな人生哲学に比べれば、正常に見えると思うな？ 君は狂っているんだよ、真性異

常者だ」

「褒め言葉だ、それは。勿論、褒めているんだよな？ でも、私は皮肉主義なのかな？ それはよく分からない、いつもいつも感じたままの事を口に出しているだけなんだけどな。冷淡だ、冷酷だ、クールだ、クレバーだって言われる事もあるし、感情欠落者だ、って告げられる事もあるが、私は私で旺盛に喜怒哀楽を表現しているつもりなんだけどなあ」

「だから重病なんだ。お前の思想の上では、全ての価値が逆転しているんだ。君にとって、背徳は美德だ。悪意は正義感なんだ。君の網膜から見た、この世界、アイス・エイジはどのように映っているんだ？ 極楽浄土なのかな？」

「いや、ここはダンテの地獄の底だよ。ソドムの市をもっともっと完成させた八寒地獄だ。糞を煮込んだ釜なんだ。居心地が良い訳が無いさ。私は炎猫が嫌いだよ」

「でも生き生きしている。生きている充足を感じられずに入られない、って声質と両の眼が物語っているよ」

「そうなのかな、グロテスクな物を目にする時、生の不確定さを理解出来る。生の可能性の多くを理解出来る。多分、動機はそうなんだろう。あるいは、負の意志に宿る神秘性のようなものを感じ取っているのかもしれない。いいか、世界から切り取ったもので、皆が美しい、素晴らしいと感じ取っている認識はみな勝手に規定して、共同の幻想を作り出しているものに過ぎないんだよ、それらが破壊されていく光景を目にする時、生きる喜びを感じるのかもしれないな」

「君のその、世界に対する敵意の意志はどこから来る？ タナトス願望って奴なのか？ お前は何よりもまず死を願っているな。存在の死を願っている。生命の死を願っている。形而の死を願っている。精神の死を願っている。あらゆる負の物質は、結局のところ、死へと収束していく。お前の両目の先には、死への憧憬しか映っていない。自分の死だけでは満足出来ない。他人の死だけでは満足出来ない。世界の終わりが見たくて見たくて仕方無くて、仕方なく生きているって気がするんだよな」

私は苦笑した。

何度となく彼から告げられた、私の感想だった。

毎回、毎回、同じような事ばかりで収束しやがって。

まあ、私に対しての苛立ちなんだろう。無意識の内に会話を切り上げたくなくて、そう収束するのもかもしれない。

少し考えて、私は切り返す。

「そうか、私に対するお前の評価っていつもそうだよな、ずっとそうだ。変わらない。そして、私もそれが真実だと思う。否定する材料が無いし。ただ、何かな。言い当てられるのが嫌なんだ。私自身の内面をさ。だから、何度も告げなくたっていいだろう？ じゃあさ、聞くけどな。ブラック・スペルとブラッド・フォースのどちらが、私に近いと思う？ あるいは、お前は黒い呪文と血液支配のどっちにシンパシーを感じるんだ？」

「どちらも君に似ているし、どちらもオレに似ている。が、」

「似ている事が、快いわけでは決して無いな」

「オレは人を殺せる人間の気持ちが分からない。殺そうと感じた瞬間に、トラウマのようなもの

が襲ってきて、トリガーが引けなくなる。だから、殺せる人間の気持ち分からないんだ。そして、人を犯せる人間の気持ちも分からない。だからこそ、オレは二人共、正直、怖い。自分の持っている部分とどこかで共通している部位があるから、本当に怖い気持ちになる」

「殺意か敵愾心の部分が私と似ているし、劣等感のようなものがお前と似ているんじゃないのか？ ブラッドの劣等感のようなものに、会えば特にシンパシーを感じるかもな」

「劣等感？ あのブラッド・フォースが？ 空前絶後の殺人鬼だろ？」

「劣等感の塊だよ。自分自身の感情を壊す程のな。医療機関に頼って、脳を弄って感情回路を潰した、って話は多分、嘘だ。だって、奴からは押し殺した感情が滲み出るように出ているんだよ。私は彼の殺人行為は、自身の感情に対しての殺意とそのまま直結しているんじゃないのか？ って推理している」

「本人と会ったわけじゃないから、今度、紹介しろよ。もしかしたら、オレも何か感じ取れるものがあるかもしれない」

「そうだな、時機に合わせるさ。じゃあ、今度は黒い呪文の事はどう思う？ 怖い以外でな」

「指摘された通り、劣等感の部分が何だか分かるよ。女性に対する恐怖感。屈折した女性観というか」

「ああ、お前、そういえば餓鬼の頃、女に虐められて育ったんだっけ。それが原因で女性性を征服するためにおかしな性嗜好に走った、と。お前、そう言ってたっけ？ なら、確かに、通じるものがあるのかもな。なんだ、あれだ。母親に対する、コンプレックスでもあるのかよ？」

「それが全てではないんだけどな。まあ、それでいい」

甘名は顔を顰めた。

触れていけない傷口に触れるな、と憎憎しげな眼だった。

「黒い呪文と君は、サディスティックな部分が似ているけどな」

切り替えされた。今度は私の方が少し苛立ちを覚えた。

「私は加虐主義者だって言われたり、思われたりするのが嫌なんだよ。知っているだろ。マゾヒストだって言われるのも嫌なんだけど、サディストだって言われるのはもっと嫌なんだ、知っているだろ？」

「じゃあ、謝れよ」

「……………ああ、悪かった。なあ、私は皮肉主義者ってのが近くて、本質は破壊主義者なんだ。アイデンティティーなんだよ。加虐趣味と破壊願望は違うと思っているんだよ。サディズムは性器へと直結した快楽だと思うが、破壊への憧憬は創造への昇華へと繋がっていると思っているんだ」

私にだって、トラウマはある。私は幼少期の頃の酷い家庭環境の記憶が反復していき、こんな人格を形成してしまった。

具体的な事実を上げれば、冷蔵庫に詰められて捨てられた。

私はサディズムを赦す事が出来ないし、自分自身がサディストへとになっていく事にどうしても耐えられないみたいだ。

「ああ、えっと、ブラック・スペルの話だったな。私達とは切り離して考えよう、奴は、サディ

ストでエゴイスト。男性原理主義者で性器コンプレックス。フロイト言うところの、男根期に憑依されたセクシストってところなのかな？」

「あれだろう、口唇期じゃないのか。露出狂だろ。気持ち悪かった」

「奴をカウンセリングするとしたら、どうする？」

「重度の境界性人格性障害。パラノイアを併発している。治療の余地無しなんで、措置入院にして、出来れば、保護室に一生、入ってもらう。暴れるだろうから、電気ショックで脳細胞を焼いて、ロボトミー治療も強行する。それがあいつの結末に相応しい」

私達二人は、持ち前の毒舌を持って、それから、更に二時間に及び、延々と黒い性的未熟者に対する悪口を繰り広げていた。楽しかった。

そして、私はふと思って笑い転げた。

アイス・エイジは、ドグラ・マグラに出てくる施設に似ている。ベドラムに似ている、サンテに似ている。違っているのは、正常なものが異常なものに異常なものが正常なものへと変わっている、って事なんだろう。

さすが、実験場、ってとこだな。

此処はあらゆる狂気と悪夢が詰まっていて。あらゆる狂気と悪夢が正常だ。そう、まさに私達二人の映し鏡のような場所だな。

ここは、ぶち壊そう、甘名は云った。

フレイム・タンからのメールが合った。ここを破壊したい。そう書かれていた。

私の想いも同じだった。

【ブラック・スペル】

絶対に殺してやろうと思った。

俺は銃口をそいつの頭部にのめり込ませる。

確実に脳内に達しているだろう。

そこで、そいつが事切れてはいけない。

絶対に助かる筈が無く、なお。万に一つ助かったとしても、障害が確実に残るであろう身体を
慈しみながら、哀願し、助けを請う。許しを請う。それを見ているのが溜まらなく面白い。

そのデブはそこで事切れた。

何となく、グリップで何度も、何度も頭を叩き割ってやった。

「本当にサディストだな」

俺の相棒と言っていた。ナイト・クォーターという奴は囁く。

俺は目の前の柘榴に蹴りを入れてやった。

「なんで、そんなに死体を損壊したがるんだ？ 殺し屋は速やかに仕事を成し遂げるもんだぜ」

俺は頭から血を拭う。すると、毛髪がまた、何本か落ちた。

白髪だった。畜生。まだ、黒髪は生えてきやしねえ。

俺は廃城となった、くすんだビルのエレベータへと向かった。

「おいおい、何処へ行くんだよ？ まだ死体処理は終わっていやしないぜ」

「ブリーチ剤を買いにいく。あるいは美容院を探す。美容師が気に入らない奴なら、そこに転が
っている肉塊と同じ形状へと変える」

ナイト・クォーターは死体処理に掛かっていた。

両手から何か糸のような物が出ている。ご丁寧にそれで包んで、死体を持ち運ぶらしい。

俺は背後からそのまま、ナイト・クォーターの脳天付近へと銃弾を発射させる。

「お前は異常者だよ、何が理由で俺に攻撃を仕向けてくるんだ？」

「おい」

難なく、銃弾を避けたナイトは、振り返りもせず、死体を包んでいる。死体がまた小さくなっ
ていった。

「これから女を犯しに行くぞ」

「ああ、欲求不満ってわけね。じゃあさ、隣のビルの別荘にでも、この“物”の愛人、娘でも住んで
いるんじゃないかねのか？ そいつが美人だといいな」

「何でもいい。俺は女を犯しに行く」

振り返ると、死体は跡形も無く消えていた。

血痕は愚か、臭いすらも掻き消えている。

ナイト・クォーターは、奇妙な身体をしていた。

蜘蛛みたいに手足が細長い。というか、背中に何に使うか分からない、パイプのようなものが

、いくつも直接に皮膚に刺さっている。顔は蝙蝠を思わせた。髭は無く、髪型は刈り上げられて、所々が妙に長い。

俺はエレベータに乗ると、隣のビルのそれらしきアパートを探した。

スラム街。何処もかしこも、似たような場所だった。

エレベータを降りて、空を見上げると、汚い布団が大量に干してある中で、ベランダ越しに、一角だけ、高級そうなブランド物のカーテンが見えた。あそこか。

俺はそのアパートのその階へ生活廃水パイプを伝って、よじ登った。四階だった。

その部屋の中に入ると、小さな少女が小奇麗な画用紙にクレヨンか何かで気持ちの悪い絵を描いていた。頭を打ち抜いた、台所から悲鳴が上がった。

男だった。

ていうかオカマだった。

薄っすらと髭が見えてやがる、三十路、いや、四十路を過ぎて安いドーランでも塗りたくったピエロのような顔の不細工な奴だった。

俺は躊躇無く言う。

「あの手抜き工事の入ったビルの屋上に住んでいたお前らのとこの、ボスだけどな。先ほど、俺が撃ち殺した。今、ポケットにそいつの大腿骨の一部が入っているんだが、見るか？」

「……な、何？ アンタ、あ、あたし達のメシアを殺したの……？ この貧しい街ではね、あの人がいないとみんな、生きていけないのよ。残飯を食べて生きていた人達に、恵んでくれて……」

「マフィアのボスも表向きは慈善事業が趣味らしい。いや、引退して宗教に目覚めやがって、自己弁護のために偽善行為という道楽を楽しんでいたんだったかな？ どっちにしろ、あいつの首を狙っている奴は無数にいた。だから、今日、俺の手によって処刑された」

俺は頭部が潰れた子供の首から下に、なおも銃弾を浴びせる。

「お、鬼。き、鬼畜。この人間の屑の下種野郎が。あ、あたしはね、あの人にあの人の子供を任されているんだよ、返しな。その子をあたしの子として育てているんだ」

錯乱してやがる。目の前で大切な人間が徹底的に蹂躪されているのと、言葉の上で、別の大切な人間がすでに事切れてしまった事を告げられて、支離滅裂になってやがる。

「いいな、お前はまだ救いがあるよ。あのデブは糞尿を漏らすだけ漏らしといて、何の命乞いもしなかったんだぜ」

「ああ、ああ、ああああああ、ああ、あんた何よ、何なのよ、おかし、おかしいわ」

「俺か」

俺はオカマの腹に銃弾をぶち込んでやる。

「俺の名はブラック・スペル。黒い呪文。冥土って奴があるんだったら、せいぜい幽霊にでもなって俺を呪ってくれよ」

俺は髪を掻き毟る。また毛髪が数本程、抜けた。白かった。

「なあ、此処にブリーチ剤って無いかな？ あるいは、美容院、床屋でもいいか。探しているんだが、また、髪の色が落ちてしまってたな」

オカマは事切れていた。銃弾の衝撃で特に致命傷でも無い部位に打ち込んだにも関わらず、ショック死したみたいだった。俺はそのまま台所にいくと、ビスケットと生肉、オレンジジュースを見つけて、それをそのまま一緒に貪り食う。

ガスコンロを付けて、そのままそれを傍に置かれていたトイレトペーパーにあてる。燃え盛ったそれを、絨毯へと放り投げた。

俺は四階から地面へと飛び降りる。降りた後、足に少しだけ違和感が残ったが、振り返らずに美容院を探しに向かった。

十

「お前がいかに人間のクズだって事がどれだけ素晴らしいか、俺は今日、とっても語りたい気分なんだよ」

ナイト・クォーターは言った。

そいつの背後では、黒服で紫の気色悪いカッターシャツの男が待機していた。

こいつらの組織の幹部か何かだろう。

「いいか。暗殺者はな。悟られてはいけないんだよ、素性をな。なるべく根拠も残してもいいねえ。それは何だ？ お前は街の四分の一くらいを放火して、標的で無い人間を二十数名は殺っちまったそうじゃねえか」

「いいだろ、別に標的はブチ殺せたんだし」

俺は煙草に火を付ける。しかし、中々ライターから火が出ない、こいつはもうダメだ。

俺は煙草を口に入れて、がりがりがりがり噛み砕くと、ぺっ、とゴミ箱の中へと吐いた。

「テッド・バンディだってなあ。ネチャーエフだってなあ、徹底したルールを守りやがるんだぜ。ああ？ 例えがおかしいか。まあいい。とにかく、お前はクビだよ」

「お前、この俺が何者か分かっていたのかよ？ 大体、暗殺者ってのはな。三十パーセント殺せれば優秀だよ。俺は七十パーセント殺している」

「俺だって、五十パーセント以上の成功率は納めているさ。ていうかな、成功率ってのは、任務を遂行した後、失敗した後も如何にリスクを伴わずに依頼者を知られずに逃げ切るか、って事なんだよ。そういう意味では、俺は九十パーセント以上の打振だ」

ナイト・クォーターは歯軋りをする。らんぐい歯が見えた。

「とにかく、お前はクビだよ。もう俺達はお前を雇わない。さっさと帰れよ。あのクソツタレのスラム街中のスラム街、溝の中の溝、アイス・エイジによ」

「その前にいいか？」

俺は銃身を握り締める。

「俺はお前を殺してみたい。標的のデブを殺す前にも、散々、俺に対して文句を言ったよな。それでイライラしているんだ。だからな、お前を殺して、すっ、とした気持ちになりたいんだよ。上質のLSDでもコカインでも味わえない、最高の快樂が得られるだろうぜ」

ナイトの顔が一瞬、蒼白になった。

しかし、にやにやと上機嫌そうな顔になる。

「お下がり下さい。上官殿。こやつめを私の全力を持って処刑してお見せ致しましょう」
趣味の悪い黒服の男は、数歩下がる。

ナイトは背中から生えたパイプの一本を引き抜くと、そのまま俺に突進してきた。
蜘蛛野郎の長い右腕が伸びる。

それが俺の横腹を掠める。パイプはコンクリートの壁に深々と突き刺さった。

「上官殿、部屋の修理代は私の給料から差し引いて下さい」

「いや、私の自腹を切る。その代わり、そいつを徹底的に屈辱を味わわせて殺せ」

ナイトはパイプを引き抜いた。すると、綺麗に割り貫かれた黒穴からは、砂塵は一抹も飛んでいなかった。それどころか、破壊物の煙の臭いすらない。

彼らのお喋りを数秒程、聞いてやっていたのは、俺の脇腹が少々、出血していたからだ。

いつの間にか、彼は左腕からもパイプを引き抜いて、俺の側頭部へと回転しながら狙ってきた。一瞬の隙も無い。素晴らしい具合に、敵の致命傷を狙ってきやがる。

俺は拳銃を引き抜く余裕すら与えて貰えないらしい。

勿論、第二撃をかわし切れている筈も無く、俺は床に叩き付けられていた、
頭部が大量に出血を始めている。脳挫傷くらいは起こしているかもしれん。

「上官殿。こいつを吸い込んでやりますか。もう死んでいるでしょうが、もしまだ息があるのなら。小さな穴の中に生きながら潰されていく苦痛も味わわせてやろうかと思えますよ。吸引力を弱めてね。……………」

目玉、が転がった。

ナイト・クォーターの目玉だった。

天井から発射された俺の弾丸だった。

蜘蛛野郎、いや、掃除機野郎は、今、慌てふためいていた何をされたのか、を。

ただ、顔半分が無くなっている、ついでに丁度、角度的にもぴったりの位置だった、太腿にも穴が開いている。最高に素晴らしい展開だった。

紫色の趣味の悪い黒服のクズは、腹を抱えて蹲っていた。

俺の射程距離に入るヤツの方が悪い。

「ナ、ナイト、……わ、私は、違う部屋に行きたいんだが、おま、お前を見守っていた、方がいいかね？ ………………幸い、……ち、致命傷ではなく、出血多量さえ気を付ければ、治る怪我なんだが……」

クズは上着で必死に出血部位の止血に取り掛かっていた。

「ブ、ブラック・スペル。……こ、この、……奇形が。フリークス。俺らの中からでも、そうフリークス、って言われるのはお前らアイス・エイジのクソ共にとって屈辱なんだってな……死んでしまえ、いや、今すぐ殺してやる」

痛みに耐えながら、掃除機野郎は背中から、大量のパイプを引き抜く。

腕を潰したかったんだが、不可抗力ってヤツだ、仕方が無い。

俺はまだ倒れている、意識も少しだけ朦朧としてやがる、だが勝利を確信していた。

「今すぐ死ねよ、ああああ！！！」

どぐうじゅん。音が鳴った。

紫色のシャツの男の肩が砕かれていた。

「お、お、お、お、お、お前な、……私の護衛をする方が先、だろ……？」

掃除機は両手から大量の掃除機を地面に落とす。殺し屋のプライドからか、左手に一本だけは、残してやがった。そこだけは評価してやる。

「じょ、上官どのおお、……こいつ、一体、何処から攻撃してきているのか、分からないんです……すいません、今、シールドを作ります」

彼は右手を振り上げる。すると、糸状のようなものが、上官殿を隔てて、四方八方へと突き刺さった。どうやら、指先から出ていたらしい。

「四分の一の夜。それが、俺、ナイト・クォータだ。なあ、黒い呪文。お前を残虐に殺してやるのが筋、ってものだがやめた。もう黙らせる。お前は数十秒後に絶命する。どうだ？それが、プロの殺し屋ってヤツだ。私情を一切挟まない、あの世まで覚えておくんだな」

糸を出しながら、余った左手で御丁寧に俺の側頭部の傷口をパイプで吸っていた。頭蓋が割れている可能性が高いから、このまま数秒以内に脳の内部を全部、吸い込んでやるのだろう。

甘いフルーツ・ジュースの匂いを思い出した。南国の楽園。

ココナッツの味。あのシャリシャリしていて、果肉が筋っぽくて食い辛い。

三秒くらいは、遅かった。

上官殿様の頭部は見事に割れたカボチャと化していた。

シールド何て初めから意味が無かった。

既に、あいつの射程内に俺の弾丸が飛び込んでいたのだから。

四分の一の夜、とかいう掃除機は口を半開きにしていた。

それでも俺を殺す、という任務は遂行させたかったようなので、俺は勝手に転がって、頭のパイプを振り払った。

立ち上がる気力が無かったので、俺は別の拳銃を取り出して、掃除機の胸元へと撃ち込んでやった。その後、回復に二十分。いや、記憶があったのは二十分、正確には三時間でも、四時間でも昏睡状態にあったのかもしれない。立ち上がった。

部屋一面を見ると、二つの死体が転がっていた。

俺が生きている、という事は、この二人以外に此の部屋付近に潜んでいたこいつらの仲間はいなかったらしい。俺は紫のクソ趣味悪いシャツを剥ぎ取ると、頭にぐるぐると巻いた。パイプの一つを杖代わりに引手繰る。

何で、俺が生きているのかしばらく考える。そうか、救援を呼ばれる前に、二人を始末したのと、先ほどのスラム街の付近で、二人のボスと会っていた事だった。

それから、マフィアのデブを殺した褒賞金代わりに、上官殿の財布をパクる。

俺は俺の宮殿、アイス・エイジへと向かう事にした。

俺の、いや俺のボスの目的はただ一つ。「他の組織の奴らになるべくぶち殺して、我らの悪名を広める。畏れを生み出す」。

襲った奴らから、ついでに武器だの財宝だの命と引き換えなどの人材などを拾ってくれば重畳だ。

小さな廃工場だったので。そこから出る。そういえば、紫や掃除機の組織の名前は何だったか、でかい組織に寄生している下部組織だった筈。

外に出ると、二人の男女がいた。

俺は頭を抱えて、腰を地面に付けた。

「逃げ切っていいか？ 今はせめて」

「お前が招いた事態だろ？」

男の方が言った。

「頼むよ、今は女の下の方に突っ込む気力さえ無いんだ。俺の場合は和姦じゃねえもんで、尚更、無理だ」

男の方の姿は、両手に細長い剣を持って、顎鬚を生やした男だった。

女の方は鎖から飛び出た鉤爪を振り回していた。

「名前、教えてくれるか？」

時間稼ぎをする。

「まず、お前からだな」

男の方が告げる。

「ブラック・スペル。次はお前らが教えてくれよ」

「水晶ミキサー」

男の方が名乗った。

「.....サザン・クロス」

続いて、女の方が名乗った。

「.....今、此处でお前ら二人を殺せる、と言ったら？」

面倒臭いから、速やかに死んでくれる事を願う。

俺は銃身を握り締める。女の方が動いた。

すると、何かが飛んできて、俺の肩を焼いた。

俺は転がりながら、建物の中へと入る。部屋内に閃光が走った。

畜生な事に、俺は目が霞んでいて、男と女の顔形すらちゃんと見えない程、視力が弱体化していた、というか身体全体の機能が勢いよく衰えていた。

数時間が経過していただろうか。

毎日のように、話す声が聞こえてきた。敵よりも、なお優しくない声。

「見えないドリル状の剣と、星屑のような花火を使う奴らだったみたいね、あー、貴方、そのまま死んじゃってくれないかなあ。そうしたら、私が貴方を助ける理由が無くなるんだけどなあ」

目の前に、頭にフードを被った少女が立っていた。

そいつは、口から黒煙を吐き出していた。

口から火を吹く女が目の前にいる。俺はその糞を知っている。

「フレイム・タン.....、俺は自力でそいつらを殺せたんだよ。.....お前はいつもそうだな、

お前は俺のお守り役なのか？」

「いいえ。刺客よ、まだ殺さないだけ」

フードの奥には、大量の悪意が充満していた。

彼女の傍には、半径10メートル以内で、二つの炭が作られていた。

炭化し切ったそれは、人であったものの残骸をしていた。

「さあ、帰りましょうか。故郷に」

俺はまた、少しだけ、意識を失った。

十

「お前らに、サディズムを、私は教えた」

炎猫は他者の生によって積み上げられた黄金の曼荼羅、と彼女が呼んでいる玉座に座りながら俺達に告げた。鋭く尖った刃のような顔立ちで、怖い美形だ。

そいつの街に立つ宮殿の配下として、俺達は生きている。そして。

こいつは俺の女だった。そして、手足が無かった。

ダルマってヤツだった。

そして、彼女が座る玉座は、幾人モノ彼女の狂信者達によって自ら捧げられた手足によって作られていた。手と指の群生に、様々なポーズを焰のように広がらせて取らせていた。

白と黒の格子模様で彩られたパーカーを羽織った女、フレイム・タンは言う。

「炎猫さま。失礼ながら、貴女はサディストを育成する為の教鞭は取りますが、貴女本人は、ただ強い虚無主義者のように見えますね。本当は願って止まないのかもしれませんが、貴女に手足が生えていく事を。何故、義手義足をお付けにならないのです？」

「此の身体で満足しているからだ。紛失したわけでも奪われたわけでも無いからねえ。生まれ付き持たなかった物に対して、どうして憧憬を抱ける？ 嫉妬の念を抱ける？ それよりも、フレイム・タン。お前の本来の主の代弁者としてお前がいるわけだが、言葉に気を付けろ。一応ながら、あたしは此の世界の支配をしている。独裁だ。今は、三人での会話だが、他の奴らがその場にいたら、あたしはお前に罰を与えねばならない。そうしなければ、示しがつかなくなるからね」

「御意。分かっているからこそ、貴女に言って差し上げているのですよ、本当は私は貴女の頭と胴体が離れる事を切実に胸に焦がれるくらいに望んでいます。胸に溜めるのは良くない、溜まり溜まったものは血反吐となって貴女の顔を黒い痰壺へと変えてしまいますからね」

「畏れも躊躇も無いな。まあ、いいだろう、それよりも」

炎猫は俺達の傍にいる、それらを見る。

男が三人だった。

「こいつらはあたしのクビを狙っていた。あたしには多額の賞金が賭けられている。アルファベットの最初の数字のランクが付けられてやがるのさ。愛すべきお前達に切り刻まれて、肉塊へと変わるのはまあいいとしよう。しかしね、こいつらはどうなの？ 愛せると云う？ あたしは愛

すべき祖国の者達の、更に純度の高潔な存在に首を絞められるのはいい。でも、下賤で汚い豚。かつてユダヤ人、黒人、インディアンを大量にホロ・コーストして毒ガスのオーブンに蒸し上げたように、あたしはこいつらを赦せない。汚いものは浄化すべき、ねえ、そうでしょ？」

ファシズム、と呼んでいいのだろうか。

頭の悪い俺には分からない。

だが、どうも俺の女はその狂った鉤十字のナチ公共の思想に執心している節があった。こいつが、自覚しているかどうかは分からないが。

「だから、やれ。あたしはお前達にサディストである事を望んでいる。苦痛による涅槃を与える事それ自体を楽しむ人間になる事を望んでいるのよ」

俺達は数日掛けて、三人の男を殺すように命じられた。

殺すんなら幸福そうな形状に顔を歪めた女や生まれた世界を間違えた事を即座に教えるために赤ん坊が面白いんだが、拷問の苦痛を覚悟している精神力を持った男三人の虐待は、別に面白い作業では無かったし、フレイム・タンの方も特に面白そうでもなかったが、俺の女は、一応、名目上は俺よりも偉いので従うしかなかった。

彼らが生きたまま骨を削り、血を抜き取り、腹や胸を裂いて、脳皮質を開口させる行為はもはや、単純作業の業務と化していたので、つまらなくて下らなくて仕方が無かった。

炎猫はサイコロを振るように命じた、彼らが運が良ければ殺す。

運が悪ければ、フリークスとなった肉体のまま、俺達の故郷の住民にしてやる事だった。

フレイム・タンは云う。

「黒い呪文、お前に耳があるのか私には分かんないけどね。此のゴミ捨て場の中の生活はね、私はダンテの神曲の地獄篇で私が今いるのは煉獄。これから天国篇へと続くページが必ず存在すると思っているのよ。私は此处を出たい、炎猫のあの脳がただのソーセージの渦巻きと化した女の下から離れたい。そこから、私の人生は始まる」

三人の男は不運だったらしく、フリークスとなって、此の世界に捨てられる事となった。

あらゆる産業排泄物が垂れ流される街、此の、アイスエイジに。

「俺はお前の言っている事がわかんねえ。俺はただ、女を犯して殺すだけだ」

「やっぱりお前に鼓膜は無いのね。ねえ、あの男達は生きられると思う？」

「ああ？ 二人は互いの身体をくっ付けて。もう一人は、溶接して煉瓦や鎖を入れて放してやったからな。誰かが拾って育てるんじゃないの？ 我が子を欲しがるヤツは幾らでもいるからなあ」

「生きる希望はあるのよ。仏教では、地獄での試練は億だの兆だのの年月。私が耐えられない筈が無い、試練を乗り越えた後、極楽浄土に向かい、仏の一人となる。お前は議論するに値はしないけど、私の思考回路の反復作用、ボールをぶん投げる壁としては優秀」

俺達は三人を放つ為に、炎猫の宮殿を出た。

すると、そこには快樂と苦痛によって生かされた、フリークス達の歡樂街があった。

手や足の形状が変な物、両目や脳が複数あるもの、二つの身体が一つのもの、そういった奴らで埋め尽くされていた。

いつも思うんだが。

こいつらは何故、生きていやがるんだろう。

黒いビニール袋に詰めて、残飯が大量に置かれている場所に彼らを置いた。

中でまだ、蠢いていて唸り声を上げていたが、俺達はいつものようにそれを無視した。

街の方に出歩くと、街頭で“生きた人間の生首”を売っている男を撃ち殺した。理由は無かった。フレイム・タンがしかめっ面、をしていた。何故、殺った？ と訊ねたいらしい。こいつは、いつもそうだ。

ゴミ山に来てさ、何となくそこら辺の壊れたテレビとか冷蔵庫とかの電化製品がぶすぶすと煙を上げてうざったらしいから、蹴り飛ばした、その何処が悪い？ と答えてやった。生きた人間の生首は、主と買い取り手を失って、哀しそうに此方を眺めていた。

フレイムは、同情か何かなのか。スイカ割りを始めた。火葬されていくスイカは、やたらと喜悦に震えた声を上げていた。

「炎猫の宮殿ってさ。血の池地獄の上に聳え立っているのよね」

彼女は、振り向いて、炎猫の家を見る。

血と油とコールタールと糞尿か何かの生活廃水で出来た池が、炎猫の宮殿を囲っていた。

「人間は、何にでも慣れる、ものらしいの。死の家の記録って本をパラ詠みしたら書いてあった。私は初めて此処に生を受けた時、外の世界が余りにも違う、ユートピアの地だったとは知らなくて。だからなのか、自分自身が監獄で地獄に誕生した獄卒の鬼だった何て事実を受け入れる事がやっぱり、今も慣れない」

「俺は外からこっちに来たよ。外の世界、ってのもアレだよな、胸糞悪いもんだぜ。幼少時に輪姦されまくってさ。男にも女にも、お陰で性行為、ってのは相手の意思を封じ込めて、此方があちらを支配する為に行うイニシエーションなんだとインプットされたよ。しかしなあ、最近、思ったんだが、どうも他の奴らの文化と俺の生きていた文化ってのは違うらしいな」

彼女の顔が何故だか、少しだけ曇っていた。さっきのスイカがちゃんと燃えてくれなかった事に対する苛立ちだろう。パイロマニア、ってのは女に多いのかもしれないが、やはり情熱とか情念の炎を滾らせるのは、敵で無いとな。無力なヤツを焚いて浄化してもつまらなかったのだろう。

「.....考えてみれば、お前もかなり可哀相なヤツなんだけど、オツムが弱いのも含めて。負は負を増やし、生の根源的な情動として負から逃れる事は出来ない。お前は怖いだよ。去勢される事の恐怖が。お前の生に対する認識は、ただ自分の受けた負を他者に伝道する事のみに置いている。人の悲しむ姿を、人の苦しむ姿を見て、生きる喜びを実感出来る。お前がフロイトの患者だったら、きっと彼をととても喜ばせる事が出来るでしょうね。ベドラムに突っ込んで、鎖で縛り上げて見世物にしながら、様々な精神科医のサンプルにされるのが生涯の最高の栄華になると思うよ」

「本当に、女ってのはよく喋る生き物だな。だから、歯を一本一本、全部へし折った後、口にブツを突っ込んで全部搾り取らせるように、飲ませるのがいい。いつか、お前も殴りながら、女陰に俺の拳銃を突っ込んで、死のエクスタシーを味わわせてやりたいよ」

「本当に貴方、って白痴なのよね。そちらが此方を殺したい以上に、此方がそちらを殺したい、

という欲望ははるかに強い、というのに。お前が思っている以上に、私はお前もお前の女も、此の街も、全てを焦土へと変えて、無人の荒野へと作り上げたいと云うのに。あ、あれあれ、あのバーよ、昼食も取りましょう」

俺達は、炎猫から次の指令を下されていた。

汚い街でやたらと小綺麗な場所の一角で、地下には監禁趣味用の運動器具が売られている店だった。

パイナップルのワインで乾杯した後。運ばれてくる、四足チキンのバニラアイス炒めを貪り食いながら、糖分と肉の精度について語り合った。食事ってヤツは、批評、つーもんに俺も参加させる権利を与えてくれる。

肉は素晴らしい。野菜よりも素晴らしい。

しかし、フレイムは肉と糖分は適度な方がよく、砂糖よりも果肉から取る方が優れている、と答えた。

しばらくすると。

全身に包帯を巻いて、目も鼻も口も隠したヤツが現れて、俺達に標的のリストを渡した。ちなみに今回の任務は、前回の件で、気まぐれで外の世界のマフィアン・コミュニティと共闘してみようとしたら、俺が奴らの幹部や部下を大量に殺っちまった為、その組織の尻拭いとして、その組織のボス、幹部全員をキリストのいる世界に導いてやる、という事だった。

炎猫は哄笑しながら、やったわね。

絶望的にあたし達に勝ち目は無いわよ、ドラッグの貯水タンクみたいなヤツらで、あらゆる組織ともコネクションを持っているという、どうも巨大組織みたいだから、殺せば殺す程、刃を向けてくる。

今度こそ、此の街もおしまいなんじゃないかしらね。と云っていた。

「お前ら、馬鹿だろ。私にはとても理解出来ない。計画性も殆ど無いし。しかも、今回のお前が平気で仲間？ の足を踏んで殺してやったのって、絶対、あの脳皮質が回虫の巣になっている女が煽ったのも強いだろ、どうせ言われたんじゃない？ “面倒臭くなったり、一緒に何かやる相手にムカついたら、思い切ってそいつも蜂が蜜を溜め込みやすいように変えてやれ”とか何とか。総統が腐っているから、此の国も腐るのよね。いや、逆か。それだけは認めないわけにはいかないなあ」

俺は涙を流して笑い転げた。

「やったぜ。また流血が出来る。獲物が無限に増える。死体が増える。外の世界のヤツらを沢山、潰せる」

椅子からも転げ落ちた。フレイム・タンは、冷たい微笑を浮かべながら追加のワインを注文していた。

これだから、女って奴は。

「さて、どうしようか。此の機会に乗じて、私は此の国のスパイだった、という事で、あっちに寝返るか。しかし、こういう世界で生きていく事にいい加減疲れているし。望んでいないからね。私の首にも懸賞金が掛かっている事だし、逃げられないか。はあ、……誰もいない処に、ロッ

ジを建てて、庭に薬草を植える暮らしが早くしたいなあ」

三リットルでアルコール度数五十五パーセントのワインを一気、飲みした後、フレイム・タンは立ち上がった。

「炎猫に真剣に掛け持ちしてみようか。“お前の首を切り落として、彼らに捧げれば。赦されるんじゃないですか？ ついでに首の懸賞金も全部、渡しますよ。そうやったら、アイス・エイジも助かるし、私も助かって新しい人生を歩めるんじゃないですか？”って。良い取引だと思うんだけど、相談に行ってみようかなあ」

「うひゃひゃひゃひゃ、くふう。笑いが止まらねえよ。リストを見てみろよ、Aの数字が並んでやがるぜ。楽しいなー。俺は実力が無い癖に、殺人数と迷惑数だけで怒りを買っちゃって、Aにされちゃったけど、本当はDクラスなのにな。こいつら、名前見る限り、知っている、知っているよ、神だの悪魔だの王だの、何か凄い二つ名が付いている奴らばかりだよ。全員、撃ち殺してやる」

「じゃあ、私は宮殿の玉座に向かって、炎猫をテロってくるね。真面目に死んで貰う事の相談に行かないと。その際に、仏教かキリスト教か、どっちかに帰依するのかしら？ 自害して貰うのと天誅を下される、というストーリー、どっちがより納得して貰えるのかの相談も兼ねて」

俺達は、店を出た後、別々の方向に向かった。

十

フレイム・タンは、骨折した左手を鬱陶しそうに見ながら、全身包帯塗れで俺の前に現れた。「残念だが、奴を殺し損ねた。良い口実と機会だったのに。やっぱり、強いな。炎猫は。お前と違って、サイコだけど頭は悪くはないみたいね。良くもないけど」

「惨敗かよ、馬鹿だよな」

俺は拳銃に弾を込めながら呟く。

「宮殿の一部を半壊させた後、気持ち悪い玉座を燃やして、火達磨にしたまでは良かったんだけどね。奴の“眼”を視てしまった。火遊びはあっちの方が上だ。あの女は、邪眼で相手の眼を視ただけで、火達磨に出来るからね。そういえば、私に火吹きによる攻撃方法を教えたのも奴だったのを忘れていたわ。骨折は、上空十数メートルを跳んでいる最中に、焼かれて、地面に落とされた時に付いた。しかし、久々に全力で暴れられたわ」

「炎猫はどうしてる？」

「あっちも重症みたい。肉体の方は軽症だったけど、メランコリー状態に陥ってしまって。他の側近の者が代役で政治？ やってんじゃないかな」

「炎猫が鬱病？ 珍しいな。しかし、お前はよく奴に処刑されないよな」

「“信者達の肉体を削り取って捧げてくれた貢物に何て事をしてくれるんだ、奴らはこれから何を生き甲斐にして生きるのだろうか。”と、珍しくへこんでいた。奴の哲学はやはりよく分からない」

「だから、何でお前は処刑されない？」

「一度だけはあるよ。されかかった。お前を半殺しにした時だっけ」

「ああ、そうだったな」

俺は思い出して、舌打ちをする。こいつは俺よりもそれなりに強いんだった。

おそらく、こいつが処刑されないのは、アイス・エイジ中で一番、頭がキレるからかもしれない。

こいつ曰く、私はマキャベリストだ、と言っていたのを思い出した。

神の不在証明だとか言う事について、よく炎猫に説教していて、彼女が狂わないのは、フレイム・タンが妙な関係でカウンセリング行為らしき事をやっているからかもしれない。

炎猫との夜伽の時、そんな事を言われたような覚えがある。

「私は取り敢えず、この機会に乗じて、アイス・エイジから逃げる算段を立てている。私の代役の死体も作成しないと、ダメね。こういう時の為に、いつでもコピー・キャットを作って置いた方がいいかも」

夜だった。

俺達は、すでに戦場にいた。

今、敵の邸宅付近のビルの屋上に潜んでいた。

まず、ドラッグの作成工場に爆弾を仕掛けて、敵を更に煽った後、一気に一網打尽に仕留める、というのが彼女の表向きの作戦で、実はその情報を事前に敵に告知して、俺と炎猫に全ての濡れ衣を着せて、アイス・エイジを滅ぼして、あわよくば敵の懷に飛び込んだ後、逃げる。

という事を、俺に対してぺらぺらぺらぺら喋っていた。おそらく炎猫にも。

「前向きに俺らを生かす方向に考えてくれないのか？」

「いや、お前らにはやっぱり、死んで貰わないと私が自由を勝ち取れない」

「血の酩酊、だっけ？ お前にはそういうものは無いのかよ？」

「いや、別に人殺しに美学とかなくて」

そう言いながら、フレイムは右手の指先で何か円を描いていた。

そして、俺の手から拳銃を奪い取ると、くるくるからからと弾装を回転させる。そして、息を吹き込んだ。

弾丸が発射されて、三百メートル離れたマンションの、丁度、玄関のドアを開けて出てきた禿頭のオヤジの側頭部を黒焦げにする。

「まず一人……、後、リストには何人残っている……？」

「……………、ちょっと待て。お前、何、俺の武器使ってんだよ。…………… 19人。AとBの奴がな。後は数えるのも面倒臭い」

「お前の能力を、“貸せ”。私が全員、始末してやるから」

空気が変わった。

フレイムの眼の色が、漆黒の黒から、緋色に染まっている。

ああ、炎猫と同じ色の眼だ。そうだ。

「本当は、火を吹けるだけの女、って思われるようにしてるんだけどね。今回ばかりは、そう

は言っていない。元々、火炎があの女の力で、私は“口を奴の眼に見立てて”，口の中に舌と同じ色の眼の刺青を施して、バレないようにして変則的に使っているが」

アイス・エイジって奴は、ある意味で言えば何でも揃ってやがる、

こいつは、“ヴァンパイア”だった。

本人の自称を信じるならばだ。

吸血鬼の中には他人の血の味を覚える事によって、他人の能力を一時的にコピー出来る種族が存在するらしい。

希少種らしくて、絶滅も近いらしいが、こいつはその末裔らしい。

俺にはよく分からない。

何となく、彼女のでまかせのような気がしないでもないが。やはりいるのだろうか。しかし、この女は、どこかこの世界が嫌で嫌で、頭の中がお花畑になっているような節を感じた。

「全力で、私の力を使わないと。私が生き残るには」

こいつは、更に何の許可も無く、銃のグリップで俺の頭蓋の、負傷している部分を殴った。血が溢れ出てくる。彼女はそれを爪で弄る。彼女の爪が真っ赤に染まっていった。

俺は、やはりこいつを殺してやろう、と誓った。

「お前には、今此处で、命を散らせてやる」

俺は、銃を彼女の腕からもぎ取ると、そのまま此の引き金を鳴らす。銃弾は、あっさりとかわされていた。というか、俺の身体の方がよろけていて、明らかに銃口があらぬ方向へと向いていた。

「畜生が」

「ああ、そうそう。言い忘れていたけど」

反吐を何度も塗りたくってやりたい女の背後に、何か男が立っていた。

「お前に復讐したいってさ」

手足の細長い、隻眼の。眼帯を付けた男が彼女の背後にいる。

ナイト・クォーターは、生きていた、いやおそらくフレイムによって生かされていたらしく、残った眼が空ろに、俺を見ていた。

「まあズンビーなんだけど、もう脳死状態だったのを頑張って復活させて。ヤク漬けにして私の命令だけを聞くように仕向けて、そのまま帰らせて。あちら側の情報を大量に得たのよね。こいつはお前にやられるぐらいに弱いが、能力自体は、私なら有効活用出来る、って思って生かして置いたんだけど」

フレイムはフードを深く被る。闇の中に消えていく。

「使えなかったから、お前にやる。そいつの背中のパイプはアイディア次第で使えるよ、文明の利器。勝てたら、よろしくやってくれ。“勝った者が使用人”っていう暗示を与えておいたから。せいぜい、生き延びる事ね」

俺は苛立ちながら、引き金を引いた。

十秒程、周囲を見渡したがフレイムは本当にどこかに行ったみたいだった。

ナイト・クォーターが動かなくなるのを確かめると、俺は血塗れの額を押さえながら、階段を降りていた。ナイト・クォーターの死体は、屋上の中央に置いてあった。

こいつを生かして利用するやり方など出来ないのを知っていてフレイムは、渡した。俺は掃除機の上半身の服を引っぺがして、元々、紅く滲んだ頭の包帯の上から巻いた。

二本のパイプを持って行く。

重いので、やっぱり一本は階段から落としてやった。

どうもこのパイプは念じると、対象物を食らう擬似生命体のようだった。階段は歩くたびに、軋む音がした。鉄板で作られていた。

背後から、叫び声が聞こえた。

苦悶に呻く声だった。早い。

俺は急いで物陰に身を潜めながら、ナイトの死体を目にする。

ヘリが置かれていた。

プロペラの音がした筈なんだが、耳が少しイカれちまっているらしい。ヘリの操縦者は、肩に、俺が掃除機野郎の体内に仕掛けた弾丸によって肩を貫かれていた。ダークグレーのスーツを身に付けた、肩まで伸ばした長髪の男だった。他に、同じ色のスーツを身に付けた者が数名。計五名の男達がいた。

俺は纏めて始末に掛かる。長髪の男の肩が破裂する。その後、その男は頭を吹き飛ばしていた。他の四人が慌てふためく。更に、男の一人の胸から血が流れた。

五人全員が死亡するのを見届けると、俺は新たな獲物が来るのを待った。

死体はそう、目印だ。死体により死体が作られる。

俺は笑いを抑えるのがとても辛かった。

此の屋上が全て死体の山と化すのを待ってみたい。

だが、経験上、今度は別の場所から何かを突っ込ませるのは分かっている。

俺は一通り見届けると、ビルを降りる事にする。

エレベーターの方へと向かった。

十二階の高さから、一気に下降していく。

三階で止まる。

俺は窓に近寄り、階下を見下ろす。

人気は少ない。女が二人と、犬が一匹いるくらいだった。

一応、携帯していたサイレンサーを銃口に装着すると、俺は拳銃を握り締めて、窓を静かに開き、女と犬を殺した。間違えて、粉微塵にしてしまった。

誰の悲鳴も聞こえなかった。それが逆に不気味だった。

此处は確か、比較的人通りの多い酒場が並んでいる場所の筈だった。

頭が悪い俺だが、その辺りの戦闘経験はある程度は積んでいる。

これは拙い、という奴は経験的に勘付いていた。

一階に降りたら、一斉に襲撃されるかもしれない。

俺は急いで、エレベーターに戻る。そして十階で止めた。

幸運な事に無人だった。窓の方を見る、やはり階下には誰もいない。

遠くを見下ろすと、街明かりが見え、車が走っていた。金の掛かってそうな高級車だった。たまたま、車の一台が、ビルの真下を通り抜ける、おれはそれも襲おうとしたが止めた。車から男女が降りると、近くの酒場に入ってしまった。

皆殺しを行う前に、俺の命が先に絶たれるのはまるでごめんだった。

俺は数十秒思考を巡らせた後、階段へと向かった。そのまま屋上に戻る。

屋上にはやはり、死体があり、人は増えていなかった。

増えていなかったのはいい。だが。

減っていた。数は二人だ。

.....殺し損ねたのか？　だが、間違いなく俺は奴ら全員を二度と女の味を知る事が出来ない身体にしてやった筈だ。しかも、ヘリが残ってやがった。

俺は焦りながら、十階へと引き返す。やはり無人だった。

ビルの内部から、出られない。

俺はまた、髪の毛を執拗に弄り始める、白髪がぱらぱら、と落ちた。

便所へと向かい鏡の前に立つ、改造した穴だらけでピンで留めまくった軍服のようなシャツをズボンに付けた、女みてえに虚弱体質でクマだらけの見慣れた男がそこにいた。

俺の白髪は更に増えているような気がした。俺は鏡を蹴り始める。鏡は割れた。

そういえば、美容院に行くのを忘れていた。掃除機野郎のせいだっけなあ。

俺は持っていたパイプを床に叩き付ける。パイプが奇声を上げた、生き物みたいだった。

俺は思い付いて、このパイプを皿にしようかと考えたが、やはり無駄だと思うのでやめた。便所を出る、出る前についでに壁と便座の一つを蹴り壊してやった。

拙い事に、エレベータの明かりが点滅していた。

三階で止まっている。

俺は階段の方へと向かった。慎重に、銃を構える。

そして、一段、一段、降りていった。

困った事に、六階の方を見ると、中央に“腕”が置かれていた。

その腕は、スーツの裾を羽織っていた。つまり、俺がさっきぶち殺した奴らの身体から取ったものだ、と敵は言いたいらしかった。

俺は慎重に、部屋中を見回してみる。何もいなかった。

物陰らしき場所に試しに打ち込んでみた、やはり何の反応も無かった。

しかし、これが“罠”だ、って事ぐらいは頭が悪い俺にも検討が付いていた。

腕に近付いたら、あるいは手に取って見たら、何かが発動する。

俺は階段を更に降りて五階を見た。

五階には、腸が束になって置かれていた。

俺は引き攣りながら、四階を覗く。

四階には、目玉が二つ。

先ほど、エレベータは三階で止まっていた。俺は階段を昇る。

七回には、脳。八回にはもう片方であろう腕。九回には皮靴を履いた片足。十階まで昇ると、更にもう片方の足が置かれていた。俺はその足にブチ込んでやる。

その後、しばらく待つ、何も起こらなかった。しかし。

寒気がした。俺は更に頭を引っ掻く。白髪が落ちた。

俺は持っていたパイプを突き出す、そして念じて、その足を吸うようにした。

ゆっくりと、足は近付いてきた。ぺきゅり、という音を立てて足は穴の中へと飲み込まれていく。

やはり、カモフラージュだったのか？　だが、.....寒気が止まらない。

俺には、俺には分かる。本当にヤバイ奴、ってのはいる。

それが、禍々しい殺気って奴となって俺の前に現れる。

何故か知らないが、このビル内に奴は、あるいは奴らかもしれない、は隠れている。

下手を打てば、俺は酷い方法で殺される。

炎猫を思い出す、先ほど鏡の前に立ってみた顔は、炎猫を前にして今からサディスティックに拷問されていく瞬間の奴らの、あの表情に似ていた。

本能的な恐怖。死ぬのは怖くないが、こいつにだけは殺されたくない、というおぞましさ。俺は奥歯が、かちかち、と鳴っていつの間にか銃口を自分の額にあてていた。

エレベータにはおそらく行けない。

なら、階段を使うしかない。しかし、それを分かっている、奴は止まった三階の階段前で待機しているに違いない。俺はとっさに思い付いた。

壁をパイプで殴った。何回か殴るうちに穴が開く。

俺はパイプを穴へと突っ込んでやる。

すると、崩れた壁を少しずつ少しずつ、パイプの奴が吸い込み始めた。

二十分程したくらいだろうか、小さく貫通して、夜の暗闇が見えた。

俺は貫通面に顔を近づける、真下は相変わらず無人だった。真横を見ると隣のビルへと移れそうな取っ掛かりがあった。隣のビルは有に三階分程、下にあったが、それを踏み台にして飛び移るつもりだった。

跳躍力にはまあまあの自信があった。

俺は更に穴を広げる準備をする、すると。

眼が、あった。

俺とそいつは、お互いの視線を見ていた。

穴の向こうから、奴は俺を覗き見ていた。

俺が銃を取り出して、その眼を打ち抜く前に、そいつは落下していった。

俺は拳銃を取り落としていた。

さあ、小便がしたい。だが、ズボンの中ではしたくないな。

俺は三階までそのまま向かうと、チャックを開いて、三階の階下めがけて勢い良く小便の噴水

をしてやった。

そして悠々と、三階のホールへと入る。

そこには、何もいなかった。

俺は腰を下ろして蹲る。

そのまま、一階に向かうか。礫にして、下半身から上半身に掛けて引き裂きながら殺してやろう。俺は拳銃に弾を詰め込んだ。

どしゃり、と何かが振ってきた。俺の背中にだった。

俺は地面に這い回りながら、落ちてきたものが何だったかを確認する。

それは、ダークスーツの男達の一人だった、ただし、腹を裂かれて巨大なロープがぐるぐる吐き出されており、両眼は飛び出していた。俺が損壊したらしき痕もちゃんと残っていた、しかし、全身が揃っていた。

「……………！」

上等だ、やはり俺は一階でヤツを迎え撃ち、ぶち殺す事を決意する。

何かが、裂けたような音がする。

耳、だった。

頭の辺りが、痛い。負傷が響いてきたのか。いや。

落ちていたのは、俺の耳だった。

死体は動かない。

何故、俺の耳が落ちてしまったのかがまるで分からなかった。

「なあ、出てこいよチキンやろう。鶏肉のバーベキューにして俺の胃に収めてやるよ」

俺は耳を拾うと、服中に縫い付けられてある安全ピンやらなにやらを千切って、耳に刺す、そしてそれを俺の元あった辺りへと団子みたいに刺し込んだ。

そして、走りながら窓ガラスに蹴りを入れる。

叩き割ったガラスから、地面へと着地した。

ぶらぶらと、垂れ下がった耳をどうにかくっ付けようと、服に付いたアクセサリからまたピンを引き抜くと、耳に刺す。

「ぶっ殺してやる、まずは、その眼球をスプーンで引きずり出してだな、お前自身が食うんだよ、それからな……」

どしゃり、と背後で音がする。

死体だった。何故だか、落ちてきていた。

俺は怒り狂って、その死体を撃ち始める。

そして、走った。

何故だか、他の追っ手はいない。ビルを出れば、一斉射撃や爆弾か何かで俺を襲うと思っていたが、どうも違うらしかった。

「組織に牙を向いたんで、存分に恐怖を味わわせたいらしいな、だがな、」

俺は酒場の一軒に入る。

すると、中は血塗れだった。

全員が全員、何かで引き千切ったような後をしていた。

その数は、百名を超えていた。

「まさかな。周辺の住民皆殺しにして、予め此処に詰めていたのかよ？ ああ？ 無差別殺人はなあ、いけないと思わないのかよ？ ああ？ 何の罪も無い一般市民を殺すのはよくない、って思わないのかよ？ おかしいだろ？」

持っていたパイプをへし折る。断末魔の悲鳴がした。

俺は何の罪も無い一般市民の一人の千切れかかった頭をもぎ取ると、そのまま切断面を嚙り始める。

ちゅうちゅうと、苦い鉄の味がした。

俺はその生首を持ちながら外へと出る。

今度は、走らなかった。ゆっくりと歩きながら、周囲を見回す。

空を見上げれば、半月だった。俺は月に向かって発射する。

「俺を殺しにこいよ、ああ？ 俺を殺したいんだろ？」

もう一度、俺は月に向かって銃弾を浴びせた。

「こっちにいる、つつってんだよ。ほら、ぶっ殺しにこいよ」

もう一度、弾丸を発射する。

しばらく歩くと、人通りが多い繁華街に来た。

もう、深夜になっていて、車の数も少なかった。俺は車のタイヤの一つをパンクさせる。

車の中からは、中年の女が出てきた。俺は近付くと、その女の頭を思いっきりグリップでぶん殴って、路上に口付けさせた後、何度も何度も頭を蹴って、蹴り潰して、最終的には汚らしいカボチャの中身へと変えてやる。

車のエンジン部分を叩き割る、ガソリンを取り出して道路に撒く。シートの方に運良く、煙草のケースが置かれていた。俺はすぐにライターを見つけ出す。100円ライターだったので、ババアの服を引き裂くと、それに火を付けて道路に放った。

街が炎上を始めた。俺は片っ端から、車を襲撃すると、ガソリンを盗んで街に撒いて行く。火の海が広がっていった。近寄ってきた警官はみんなパンプキンケーキになった。

「おら、こっちにいる、つつーんだろうが、ああ？ 出て来い目玉野郎」

俺は更に火の海を広げてやった。

「お前を殺した後、19人！ フレイム・タンの数も入っているんだよ。それとも、やっぱり20名か？ お前はただのチキンだから、高いランクに入っている筈が無いもんなあ、脅しだけで俺を此処までコケにしやがってえ！！！」

背中に、何かが刺さった。

振り返ると、炎の渦の中に、一人の少年が立っていた。

俺はすかさず、そいつを撃つ。

少年は持っていた棒状の物で、いとも簡単に俺の弾丸を弾いた。

「てめえか。やっと見つけたぜ」

俺はにやり、と笑う。

「お前か、ブラック・スペルは……」

「お前の目の玉をまず割り貫くんだよ、その後、……」

「俺はランクBのスピアーズ・フェイト。この変幻自在の槍がお前の相手ってわけだよ。やっと見つけたぜ、アイス・エイジの豚が」

「上半身だけ巧みに残してだな、俺は執刀医の経験は無いが、激痛ですぐに死なないように麻酔でも何でも使って、お前の皮を剥がして肉を捲って……」

俺の肩に刺さった物は、そのまま貫通してヤツの手元に戻っていった。

蛆虫野郎は、この俺の背中を踏む。

「『奴隷のごとき凱旋門』って組織の一員だよ。てか、運命を司る大審判だ。つまり、組織のボスだよ。わざわざ出向いてきてやった」

俺の右腕に穴が開く。

「何でお前のようなヤツがAなんだろうな。俺はBってのは納得がいかない。殺し足りないからか？ まあ、弱小组織ででかい組織の下っ端みたいな事してるんだけどなあ」

そいつは俺の左腕も貫く。

「今、お前を殺せないんだよなあ。上からの命令で、寄生しているもんなあ。でかい組織にな。なので、このまま連れていく、生きたまま。五体満足で両目両耳に鼻に口、手足に指に至るまで揃えてこい、て言われてるんで、これ以上、行動不能には出来ないが、まあ、そのまま失神してくれ」

十

鎖を巻かれて引き摺られていたみたいで、俺は小さな会議室代わりの病院の手術室らしき場所で、確かに耳にした。

「はあ？ ……アイス・エイジ討伐隊として集まった組織の首領、ボスが半数以上、帰ってきていない？」

何とか、フェイトってヤツの呆れたような声だった。

「工場も燃やされた。俺の方はおしまいだよ。資金源が尽きた。組織は解散だ」

ぶるぶるぶるぶると、縮んだ陰部のようなその男は丸い体躯を更に丸めながら頭を抱えていた。

「終わりだ、終わり。俺の名声もこれからの生活も……それよりも。俺は殺される。お前、消えた奴らの名前を言ってやろうか？ そいつらの栄光も。何でだ？」

「知りませんよ。そういえば、貴方は能力者じゃなかったですね。逃げるのも一苦労だ。俺は取り敢えず、こいつ連れて来ましたからね。拷問でも何でもしてやればいいんじゃないですかあ？

じゃあ、俺は帰りますよ」

フェ、……何とか、ってヤツは何処かへと消えていった。

残ったのは、恥ずかしく涎を垂らしながら存在しない世界の住民に祈っているコレステロールの塊のようなヤツだけ。

部屋には包帯があったので、俺は鎖を解くと、出血している場所を包もうとした。というか、すでに手当てされていた。

耳の傷も、いつの間にか縫われていた。

親切なヤツだったな、ちゃんと名前くらいは覚えておくべきだった。

巻かれていた鎖を引き千切った。

俺は立ち上がると、その部屋を出る。

背後では呻き声を泣き声が聞こえていた、殺しても仕方ないので無視する事にした。

此処はどうも病院内みたいで、普通にカルテだの何だのが置かれている。

昼間は普通に機能しているのだろう、夜は裏社会の黒幕共の集会場に使われているのだろうか？

俺はポケットを確かめる。拳銃が確かにそこにあった。

俺はくるくる、とそれを回す。

まず、殺さなければならない奴は二人いた。

フレイム・タン、と……。

怖気、がした。俺は溜まらず、口に手をあてる。

あの感覚。耳と眼の中に風を通されたような、不快さ。

奴を仕留めるまでは帰れなかった。

フレイム・タンが何をしたか分からないが、既に俺達の任務は完了していたみたいだった。ひょっとしたら、奴らが同士討ちをするように仕向けたのかもしれない。

いつもの彼女の手口だ。

権謀術数。

奴の言葉にまともに耳を傾けた奴らの成れの果てを俺は知っている。

しかし、今回はやけに仕事が早かったな。

ひょっとしたら、身体の傷は炎猫と戦ったものじゃなくて、既に敵の半数を仕留める作業に掛かったからかもしれない。俺が戦う前から終わっていたのか？

炎猫は言っていたっけ、彼女はジョーカーだ、と。道化者の振りをしてよくやってくれるよ、やり過ぎてどんなカードも勝てやしない、と。

「ちょっと待てよ？ てすると、俺の殺す分が……」

本当に嫌な女だった。

俺は嘔吐感に見舞われて、蹲る。

そういえば、耳朵が、灼熱のように痛い。

何か、蟲が這うような。

俺の耳は、吹っ飛んでいた。

そのまま、壁に張り付く。

ざわざわ、と巻き散った血と共に、そいつは現れた。

俺は呆然と佇んでいた。

耳から、磯巾着のようなぬめぬめとした、蝸牛の眼のようなものが生えている。

耳はゴキブリのように天井を這いずり回ると、そのまま物陰へと消えていく。

「おい、俺の耳……！」

とるるるる、と電話が鳴る。俺は携帯を持っていない。

院内の電話だった。俺は無意識にそれを取る。

回線の向こうからの声を聞き、知った声だった。

「ブラック・スペル、生きてる？」

「ああ？ お前、よくやってくれたよな。奴らの半数を倒すなんて」

「いや、私は裏切ったつもりなんだけど。このまま、アイス・エイジと炎猫に消えて貰おうという好機だったんだけど、ダメだった。っていうか、運命の槍、フェイト辺りにかけたつもりで聞いたんだけど、まさかもう予定なら此の世にいない筈の本人が出るとは……。あんたが生きて、って事は、フェイトを倒したの？ 私は奴と協定を組んだんだけど」

「いや、どっか行っちゃったよ。俺らの敵対者のボス達の半分以上が帰ってこない、おそらく死んだって」

いつも以上に話が噛み合わない、何を言ってやがるんだ……？

「……こっちも同じ情報が入った。運命の槍さんに警告しておこうと思って。絶対に逃げろ、って。今回も私の負け、最低ね。あのね、黒い呪文。奴ら側が、私達が手を下すまでもなく、勝手に共喰いを始めた。元々、麻薬組織同士、抗争の冷戦状態だったのを私達が一気に火を付けてしまったみたい。自滅よ、自滅。事情はある程度、分かっていたんだけど。早過ぎる」

「おいおい、俺に分かるように説明してくれよ」

「二人、最悪な奴なのが生き残って、一人と今、私は戦っている。そっちにももう一人、行っている筈。賞金なんていらなくて。ただ、潰したいから潰した、口実が欲しかっただけだった、ってアイス・エイジ並にイカれている奴らがあちら側にもいたってわけ」

「なあ、俺、耳切られちゃってよ。こう、すっぱりと切断されて……」

「ご愁傷様。ヴァン・ゴッホになれるわね。夜のカフェテラスだったかなあ？ 家を建てて部屋を持てたら額縁に入れて飾りたいんだけど。絵でも描いたらどう？ 創作っていいものよ」

ぶち、と電話が切れやがった。

その後、とんとん、と俺の肩を叩く奴がいた。

少年だった。

背中には、大振りの槍を持っていた。

そいつは俺を見ずに、手に持った携帯を弄ってやがる。

「なあ、ブラック・スペル。メールになあ、お前と共闘しろって書かれてやがるんだが。ああ、やっぱり死んじゃった、みたいだな。俺を扱き使っていた奴ら。伸ばし上げられる場所を全部、ぶっ壊しやがって」

「お前、名前何だったっけ？」

「フェイト、……運命。どっちでもいい、取り敢えず、俺達が殺し合ってもいいけど。一人よりも二人の方がいいぜ。やっかいな奴が生き残りやがった」

フェイト、と名乗った少年は、自身の左腕を見せた。

綺麗に、その左手は無くなっていた。

切断面から血が流れていない。

グロテスクな肉と骨の断面が覗いている。

「お前は運がいいよ。俺の方は、左手を持っていかれた。しかも、動いてるんだぜ、俺の左手がよ。外に出ようとしたが、出られなかった」

「俺達を狙っている奴は、どんな奴なんだよ？」

「“恐怖”」

フェイトもまた、俺と同じように震えた声をしていた。

「恐怖、と俺は呼んでいる。名前なんてねえよ。懸賞金も掛けられていやしねえ。ただ、組織の組合の中で、噂だけは尾鰭を付けて聞かされていた。実態は分からないが、とにかく怖い奴がいて、身体の一部、時には全身を奪っていく奴がいるってな」

「そいつは強いのか？」

「強いだろ？ 何をされたか分からないんだぜ。なあ、数字ってあるよな。数字だよ、数、一、とか二、とか」

「ああ」

「四、って何で怖いんだろうな？」

「知らねえよ、死に繋がるからじゃねえのか？」

「6、13でもいい。9、とか。何でもいい。曰く付き、って概念があるだろ？ だから別に他の数字でもいいんだ、でも俺は奴の事をこう呼んでいる。“テトラ・フォビア”、そう四恐怖症、ってな」

「はあ？」

「つまり、死ぬのが怖くなるんだよ、どんな殺され方をされるのか分からねえから。拷問者よりやっかいだよ、あいつに喰われた者達は、どんな気分なんだろうなあ？」

運命の奴は、窓を見ていた。夜景が見えた。

何かが、空に浮いていた。それをそいつは俺達に見せ付けている。

カーペット、のようだった。旗のようにも見える。風か？

「あれ、何だと思う？」

「撃ち落して確かめてみるか？」

「目が悪いのか、運がいいな。あれ、生きている」

俺の目はいい。浮かんでいる、それを確かめた。

それは、大量の生首だった。薄ら笑いを浮かべて、此方を向いている。

一斉に、げらげらと笑い出す。何かを叫んでいて、俺達の仲間に入れよ、かな？

「何だ、スイカかあ。あれ、アイス・エイジによく売っているよ」

「おい、あれな。組織のボス達や幹部達の首だよ、畜生が。俺の部下も混ざってやがる。ひでえよ。どうやったら、あんな神経を」

「スイカなあ。夏になると、よく繁殖していて。俺、わざわざ割るんだぜ。売る奴も売る奴だよな、何であれって売れるのかなあ。観賞用に買う奴がいるからかな」

フェイトは、口を引き攣らせて俺を眺めていた。そして舌打ちをする。

「左手は義手でいい。俺は降りるよ。お前も、おかしいよ」

窓が勢いよく割れていた。

フェイトが槍をぶん投げていた。

それは、尻に命中する。

弾けて、尻は落ちていった。げらげらげらげら。

笑い声が耳にこびり付いて離れない。

「殺人鬼ブラッド・フォースって知っているだろ？ 俺はそいつに憧れていた」

「？ 都市伝説じゃなかったっけ？ 神か悪魔、ってのは俺は信じてないよ」

少年は携帯を弄っていた。しきりにメールを眺めている。

「フレイム・タン、……あっちも相当、参っているらしい。相手は俺達の社会中で、いや全ての殺人者の中で最悪の伝説を持つ、ブラッド・フォースに最も近い存在と言われている奴だよ。こっちと合流したいってよ。何て事してくれやがるんだよ、あのアマ」

「あの女は、何と戦っていやがるんだ？」

「闇すら裂く者だ、……また、知らねえって顔しやがって。お前、本当に無知なんだな」

「何しろ、育ちが育ちなもんで。俺は故郷と人生以外の常識は何も知らねえよ」

ぽりぽり、とフェイトは何かを貪り喰っていた。

「じゃあな、俺は幸福に行く」

運命は何か、とろん、とした目をした。

なおも、ぽりぽり、と何かを貪っている。錠剤だった。

「おい、それLSDか？ 俺にも分けてくれよ」

「気持ち良いぜ。楽になるってのは、ほら、見えてきた」

フェイトの右手から錠剤の入った瓶を取ろうとする、彼の身体から急速に体温が失われていく。

。

俺は錠剤の一つを口に入れて、違和感を覚えてそれを吐き出した。

「お前……、」

少年はぽりぽり、と口に新たな錠剤を突っ込む。

「自殺、するつもりか……。ちっ、分かったよ」

睡眠薬の味だった。以前、舐めさせられた。すぐに致死量に達する奴。

俺はポケットの拳銃を握り締める。

俺は耳を取り返しに向かった。くっ付くかどうかは分からなかったが。

十

病院を出て、数分程度した後だろうか。

蹂躞の音が聞こえた。

その建物は、粉塵に変えられていた。

俺の腰でぴらりらり、と趣味の悪い音が鳴り響く。

メールだった。あの槍使いの少年の携帯。フレイム・タンからのメールがあるかもしれないんで、持ってきたんだった。案の定、メールは来た。

酷い内容だった。

《和解した。条件はお前らの命と引き換え。じゃあね。》

余りにも酷過ぎて、文字が霞んで見えた。

なあ、炎猫。とっとと処刑しておくべきだったと思うよ。

俺はただの瓦礫と化した病院跡地を眺めながら、雑木林の中に横たわっていた。

俺は死にゆく友人から分けて貰った錠剤を一粒口にして、眠りに入る事にした。

俺も幸福に行くかあ。

三対一じゃ、勝てねえもんなあ。

額に、ひやり、と冷たい物が当たった。

その女は、にやり、と口元を三日月に歪めていた。

「アイス・エイジは伝説になったわね。マフィアの大半を壊滅に追いやった。まあ、どうせまた奴らは増えてくるでしょうけど。油虫ってのは幾らでも沸く」

「俺はこういう生き方しか出来なかったからな、お前もどうせ、こういう生き方しか出来ねえよ。ほら、撃てよ」

「お前はいつでも殺せるのだけど、困った事になった」

「困った事ね。何が困った事だよ、困っているのは俺の……」

「奴ら、二人共、アイス・エイジの住民になりたいそうよ」

「はあ？」

「ただ、争っている。一応、二人共どちらが強いのか、強者を決めたいらしい」

十

炎猫は新たな玉座を創っていた。

信者がまた、新たに増えたいらしい。以前よりは少ないが、生きた人間が自ら捧げた手足で作成された椅子が、届けられていた。

「あら、そちらの二人は何？」

俺とフレイム・タンに向かって、炎猫は訊ねた。

炎舌は、笑った。

「お前ら二人を倒せる機会が、今、完成した」

フレイム・タンは何故か、笑う。

俺はいつの間にか、地面に伏していた。

それから先の、記憶が曖昧だった。ただ、こいつと交わした会話ばかりがフラッシュバックしていやがる。俺は、冷え切った水の中にいるような気がした。

俺は身体を動かせない。記憶が曖昧だ。俺は只、何も感じずに、撃って。理由なんて、情婦か

らの指令を受け取ってあればそれだけでよいのに。それが楽しい。が……。

この女、フレイム・タンは、やはり特殊だった。

「黒い呪文、女の味ってのはどんなものなの？」

「ああ？ いいもんだぜ。ただし、俺が犯る方にはな。犯られるのはまっぴらごめんだよ」

「炎猫との営みはどんな？」

まあ、これはただの好奇心なのだけど、とこいつは付け足した。

「いい。ヤツはスポーツって言ってしきりに誘ってくれてよ。優しいんだ。そうだな、どの女よりも優しい。別に俺は奴以外の女も勿論、知っているぜ。凌辱以外にもな、まあ、女は買う事も出来るんだけどな」

「うーん、分からないなあ」

「おいおい、もしかして、お前、やったこと無いのかよ？ だとしたら、物凄く不幸だよなあ。何なら、俺が……」

チィ、とフレイムは舌打ちする。

「お前はやはり幸せなのかもね。いや、とてつもなく不幸なのかも。私は主を愛しているけども、情愛じゃないからなあ。親子愛に近い。ねえ、黒い呪文、女は美しいと思う？」

「気色悪い汚物みたいなもんだよ、俺の汚物の便所だと思ってやがるよ」

「お前があんまりにも散々、女性蔑視的な事ばかり吐くもんだから、私も調子に乗って、色々と言っちゃおうかなあ。ねえ、もっと言ってよ、私も沢山、吐き出すからさ」

この女はいつもそうだ。俺がどんなにムカつく衝動を言っても、それを上回る破壊的な言葉で俺の言葉を叩き潰していく。

「同性が大嫌いでね。かといって、男言葉でも意識して使ってみて、男っぽい動作でも行ってみて、“平凡で一般的な女だ、っていうアイデンティティから脱却したつもりでいる”行為を行っても仕方無いし。性同一性障害でも無いしさ。女同士で愛し合いたがる人々もとっても恥ずかしくてさ、男に振り向いて貰えないから、同性に対して男像を作り出しているのよ、しかも、同性だからそういった性質も理解し合えて何と素晴らしい。同性はねえ、何であんなに嫌気が差すのかなあ。やっぱり性器の事しか頭に無くてさ、もっと分かりやすく言うと自身の裸体にプライド持っていて、お腹がポップコーンの袋みたいに膨れるのを待ち望んでいるのよ。子供がそんなに愛しいか、凄いなあ、私にはとっても真似出来ない。逆に、ボーヴォワール辺りにでも触発されたりして、女優先社会を実現したいっていうフェミニストって奴には死んでも為りたくないんだけどね。下だった体位を上にしただけだって。家に入れて貰うよりも、むしゃむしゃ食べる方が気持ちいいって事よ。それを感情に任せて議会進出しちゃうもんだからさ、やられるよりもやる方を選びますって言いたいだけなのにさ。男に媚びる方の事話そうか。私、ちょくちょく時間を潰しに面白がって遊びに行くんだけど、あの売春宿に在住している人達って、よく避妊失敗しちゃって、風船みたいにお腹膨らませているんだけど、私はこうアドバイスしているのよ。“此の児に、貴女はちゃんと言うのね、こんな失敗した世界に誕生して、残飯と有害物質を選んで食べる方法と世界の愛し方を教えるんだ、凄いなあ”って。私ってほら、本当に優秀なカウンセラーだからさ、みんな涙を流して、喜んで中絶しちゃうのよ。何人かその後すぐ子犬のように蹲って

急に泣き出して、首に短剣を引いたり、丸めた縄に頭部を入れたりするパフォーマンスをしてくれるんだけど。小銭投げるなあ、いつも」

俺は、苛立つべきなのか？ 何故だ？

俺以上に怖い、何が何だか分からない、念のような。俺は反吐が出る。

「何で私は自分がこんなに狂っているのか笑えてくるな。なあ、お前が気に入っているよ、黒い呪文。恋愛感情こそ無いけどね。いや、お前を本当に嫌っているんだけどさあ、此の物凄くアンビバレントな感情は何なのだろう？ 色々言いたい事は沢山、あるけども、まず、ムカついている、かなあ。サディスティックに支配したいんじゃないくてさあ。当たり前だけど性行為したいわけでも無くてさあ。……ああ、そうか分かった。投影しているのよ、色々と分析したんだけど。そうか、分かったわ、私は私を愛せないのよ、自己愛の補完行為としてお前が好きなんだ。弱い人間は愛しいもんね。自分よりも劣っている人間は指差して声援を送りたくなるからね。カタルシスが起こる。やばいなあ、これは私の方がフロイト先生やユング先生に見てもらわないと。夢の中で暗い水族館にいて水槽に深海魚ばかりが出てくるんですが、此れはどういう意味のリビドーの現れでしょうか？ やっぱ、私はサディストであって鞭で出来た他人の肉の裂けた痣を見るのが大好きで水槽の中で飼育されたグロテスクな生物を嘲笑したいって事なのかなあ？」

こいつはいったん、話し出すと止まらない。

「男ってさ、何であんなに男性器崇拜が多いのかなあ。それから処女崇拜。一日中、女体について語れる思考回路が尊敬しちゃってさ。何であんなに女が好きなんだろう？ 皮膚の表面一面ノミで捲ったら、神経組織しか見えないし。感情が自己コントロール出来ない生物で迷惑だし、顔と身体でしかヒエラルキー作れない生物だし。あの尿漏れが酷くてアンモニア臭い雑菌ばかりの箇所を妄想したがるのかなあ？ どっちも一人で上下させたり、一人で出し入れの繰り返しをしておけばいいのに。女の子に性の事を話したり、性について褒められたりすると生殖器を大きくして妄想が強くなるのかなあ？ そんな事を男の前で実際に話してさ、大抵、拳や凌辱で黙らされるらしいよ、女の子って。その後、男の方は震えてがくがく、と何か主義主張を起こした後、もう言葉が封じられるのよ。男は身体で犯して、女は感性で犯すもんね」

完全に、狂ってやがる。俺は何かを言おうとした、黙らせる為に、他の行動に移そうとした。だが、なおもこいつの語りは続く、こいつが一体、何を言いたいのか分からない。俺には全然、分からない。

「黒い呪文、私は悪か？」

フレイム・タンは饒舌過ぎる発言を終えた。

「悪、なのだろうか？ お前よりも、私の方が悪なのかな？ お前、何人殺したっけ？ 私は、思想を与えて、人を殺せるんじゃないかって気がするの。現に、もう何人も死んだ。国家単位なら、どうなんだろう。ねえ、黒い呪文、私はお前よりも、悪なのかな？」

知らねえよ。

俺は断末魔のような声を上げる。

気付くと、炎猫の胸に赤い色をした花が咲いていた。

宮殿が崩壊している。何故かは分からない。

俺は拳銃を手取るべきだろう。

【フレイム・タン】

如何にして、私は幸福になれるのだろうか？ それは重大な命題だった。私は今、深くて暗い穴倉の中を歩いている。それが此の組織のアジトだからだ。カタコンベを加工した工場で、所々に過去の聖遺物である髑髏が壁に埋め込まれていた。成る程、合理的だ。死体を増やす場所には持ってこいだろう。展示物が一体や二対程、増えてもおかしくはない。此処も極めてアイス・エイジ的な場所であって、私には見慣れた風景だ。問題は、此れが本当に威嚇になるのだと思っている処がまた、呆れてくるが。

三階分程、地下の階段を降りるとホールがあった。柱が大量に並んでいる。真ん中に大きな扉があった。私は其処に入る。私は大量の視線を浴びた。だが、それは一瞬だ。すぐに、連中の興味は私から失われた。

巨大テーブルがある。椅子に座っている人間と、壁に背をもたれている人間。武器を抱えている奴も楽器を弾いている奴もいる。

私はテーブルの、一際、年老いた男に告げた。

「私が炎猫の使いの者です。アイス・エイジを売りますよ。あそこにいるのは、もう飽きた」
ぴくり、と男の一人が眉を動かす。

そいつは、黒服で小汚いネクタイを付けていた。

「今、此処で額に穴を作ってやってもいいんだぜ。此処が何処だか分って言っているのか？
小娘。神聖な会議場を穢しに来たのか？」

顎鬚を生やした男が言った。やれるもんなら、やってみろ。

「マフィアン・コミュニティの集会場。貴方達はええっと、……お名前なんでしたっけ？」
ざわり、と空気が変わった。

かしやり、と金属を動かす音が聞こえた。

「アイス・エイジに刺客を差し向ける相談をしていたんでしょう？ 売りますよ、情報全部。
一人、一人、死んで貰えますよ。炎猫様の首も早く外れて貰わないと」

「どうやって此処に入った……、というか見つけた。お前の顔は知らないな、お前はどの組織のメンバーだ？」

「だから、アイス・エイジだって言っているじゃないですか。私は裏切りに来たんだから」
連中は、私の言葉の意味を掴み兼ねている、といった顔をしていた。

本当は此処で適当な暴力でも示して見せて、認めさせるべきなのだろうが、私にはその力が無い。まともに戦ったら、此処にいる中心人物の誰一人にも、勝てそうにない。だが、私はやる。

「私はアイス・エイジっていう最底辺スラムのボスである女皇帝、炎猫の直属配下、アイシクル・ナイツのメンバーであるフレイム・タン。ランクはD。今、此処で貴方達に裏切りの証明として、私が持っているだけの情報を全部、売ります。炎猫の能力とか、人員の数とか、居城の攻

め方とか。他にも色々、アドバイス出来ますよ」

お前らがどんな能力者で、どんな攻撃方法をしてきたとしても、私にはまるで関係無いのだから。

「お前は我々に取り入りたいんだろう？　だが、お前は一体、何の才能があるんだ？」

男は言う。

「才能なんて物は私には何にもありません」

「本当の目的を言え、お前は嘘を付いている。お前の本当の目的は別の場所にあるんだろう？　目がそう言っている」

「嘘を付いている？　私は本当の事しか言っていませんよ。何も隠してないし、馬鹿正直に正面切って話している。だから、アイス・エイジ所属で裏切り者ですってば」

「違うな……、お前の本当の目的だよ。……」

「マフィアン・コミュニティの結束」

私は舌打ちして、本音を話した。もう少し、後に持ち出す予定だったが。

室内はざわついている、金属音が増える。あからさまに私を侮蔑する言動が増えた。私はそれらを見捨て、目の前の老人にのみ話し掛ける。

「……何だと？　……」

「此の組織もそうなんだけど、今、至る処のリストに載っているマフィア共は、もう虫の息なんです。限界だ。此のままじゃじきに、ハンターに狩られ尽くされるでしょう。もう、資金源も底を尽きている」

「お前は眼がおかしい」

顎鬚の男が言う。三十代くらいで、やけに長い顎鬚を生やしていた。

「知っている。見た事ある、お前の眼は、なあ、身体検査してもいいか？」

「何で、そんな事を？　性的な意味ですかね？」

「ふざけやがって、爆弾を隠し持っていないかを確認したいんだよ。お前はスーサイド・ボマーの臭いがする、ぷんぷんするよ、悪臭ばかりだ。持っているんだろう？　身体に。身体検査しても無駄か？　身体の中に埋め込まれているのか？　爆弾じゃ無ければ、毒ガスだろう？　アイス・エイジを潰す計画を我々がしている？　ああ、まったくその通りだ。今ここで、誰を差し向けるか、誰から差し向けるか計画を練っていた処だ、なあ、誰でもいいから、こいつを早く追い出してくれよ。こいつ、眼が言ってやがる。死ぬなら、一人でも二人でも多くの奴を道連れに、ってな。なあ、誰かこいつから嗅ぎ取ってくれないか？　火薬の臭いがするってな。臭いよ、本当に臭い。殺すに殺せやしねえ、死んだら発動するのか？　じゃなかったら、こんなにくっちゃべってないで、とっくに導火線を引いているもんな？」

「癪癪を起こさないで。まったく、疑り深いですね、何を根拠にそんな。私は余りにも正直者だから、国のトップに向かってはっきりとお前が嫌いだからいつも死んでくれる事を願ってます、って言うような性格なんです。だから、私に隠し事なんてありませんよ、ただ、」

私は一気に畳み掛けるように言う。

「もう、二つ程、他のコミュニティの方々に同じように言いましたね。貴方達には連合して貰

わないと。その象徴として、共同作業を行って貰おうかと。それが、アイス・エイジの破壊。どうです？ 悪くないでしょう？ 恨んでいるでしょう？ 炎猫とブラック・スペルのカップルに。どっちもランクAだ。倒せば、名が上がる。しかも、スラム中のスラム、アイス・エイジ。

マフィアですら、ゴキブリのように忌み嫌っている。それを潰せるんだ、悪い筈が無い」

「此処の場所を知ったのは、……」

「そう、他の組織のボスに吐かせました」

「どこの奴らだ？」

「名前は……えっと、何だったかな。後で思い出しますね。ただ、物凄いキリスト教徒だったんですよ、みんなクリスチャン。マフィアってのはアレですね。意外に信仰を持っている奴らが多い。売春とドラッグを推奨しながら、父の前で接吻の話をするんですよ、あれは物凄い笑える。汝を赦そう。そう、父から救済の言葉を戴きたいんですよって。老人になれば成る程、それは顕著だ。やっぱりみんな、死後の世界が怖いんですよ」

「話を煙に巻……」

「もう一つの組織の方は。同属に対する愛がとっても深かった。私は見せて貰ったんですが、無垢な少女を何人も強姦して何人も辱めて殺した男が美人の妻の前でそれを武勇伝として語っているんですよ。食卓に御一緒させて戴いたのですが。妻の方は、真面目な会計士か何かをやっていて、表の世界で生きてましたね。トルコ料理のキュウリスープと、タイの肉料理を戴きました。ドラッグは絶対にやっちゃいけないよ、身体と頭脳をダメにする。健康な若者にはよくない。あれをやるのは乞食と卑しい身分の者だけだ、我々はそいつらを家畜として支配する権利をちゃんと使わねばならない。って御高説をおっしゃっていました。そっちの方とは仲良くなっちゃったんですが」

もう、誰も聞いていないのかもしれない。けれども。

スイッチ、が入った。

もう、ダメだ、と思った。理性のトリガーをどうにかする事が出来ない。

歯止めが効かない。だから、私は駄目なんだ。

だから、もうそのままやる。

私は一同全員を一瞥した後、咆哮する。

「いいか、てめえら、言わせろよ！ 世界はお前らの物じゃあないんだよ。思想？ 思想がどうした？ 理想社会？ 信仰？ 友愛の素晴らしさ？ 馬鹿馬鹿しい。都合が良過ぎるな、お前らは悪だ、悪を為してそれを正義に変えた後、神に帰依するのはどうなんだ？ もう何をやってもいいから、反省だけはするな。それは絶対に赦されない。私は虚無主義を切実に願っているが、本質的にはむしろそれを超克したい。私は、ドストエフスキーの悪霊という小説に登場する、ニコライ・スタヴローギンを崇拜している狂信者で、ピョートルに為りたいと切に願っている。しかし、スタヴローギンは自身の中に神を見出して罪惡を背負う事となりニヒリズムは赦されないのだと自ら絞首台へと昇り、十字を切った。だが、私は神の不在を証明したい。お前らの社会の中で、私はお前らを赦さない。反体制的な物にしながら、体制と反体制の両方に嫌悪を感じる。人間は動物と自然に比べてそんなに偉いのか。何故、我々は優れた遺伝子だ、の名の下に他者を

支配出来るんだ。そういえば、犬猫は赤子のメタファーだ。だから、犬猫は人間よりも優れている。赤子は自然。自然的なもの、そう、文明から離れたものは畏敬を持って接するべきだ。それからお前らは弱者？ 弱者だって自らを規定するのね。性的に虐待されていたから人を殺した。社会に適応出来ないから畑を焼いた。罪悪感で自殺しない為に神を作成した。いやいや、私には何も無い。だから、これは断罪じゃないの。ルシファーもキリストも否定している。どっちの善にも意味を見出さない。いいか、私には思想なんて物は無いし、思想なんてものがあるなんて信じていない。私は多分、思想を持っていない、それが思想。自分でも何言っているか分らないのよ、私は何も信じられない。だから、スタヴローギンに帰依した。幼い少女時代、世界は私を受け入れてくれないんだという観念に満ちていた頃、文学が私を救済した。他者、の世界を認識させてくれた。天国の存在を証明した。けども、スタヴローギンは少女の凌辱を持って、私の心に喪失感を与えてしまった。どちらの善であり、どちらの悪である事も止めて、神の前で敗北した。失恋だったのよ。本当に架空世界の登場人物に恋愛感情を抱いてしまった。しかし、英雄はどちらの世界観をも拒絶した。彼が少女を凌辱しなければ、私は彼をキリストに見立てたであろう。彼が罪悪に苦しみ自ら命を絶たなければ私はサタニズムを信望したのだろう。私は、どっち付かず、だ。しかし、唯一、与えてくれたのは裏切りの魅力。反逆者を血祭りに上げる事の魅力。集団潜在意識の破壊性だ。私は今、持っているカードを明かしている気がするな。けども、今、物凄く楽しくって仕方が無い。聴衆がずっと欲しかった。だが、私はお前らを愛さないだろう。たとえ、お前らが私を愛したとしても、私はお前らの愛に敵意を捧げるだろう。そう、裏切りは最高の美学だ。接吻に対して、失望を持って答えよう。むしろ誰かを裏切り者に仕立て上げよう。それで事が済まされるから。しかし、不思議な事に私はやはりもっと随分と捻くれているみたいで、やっぱり裏切りを認めてしまうと、裏切りたくなってきた。自らが作り出した魔女裁判を自らの告発によって幕を閉めたくなる。マッチポンプ。美しいと言われている物を破壊したい。醜いと言われている物を荒廃させたい。永遠に続く不毛の大地、枯渇と砂漠を与えよう。人々は飢えと乾きに苦しむが、しかし神は永遠に来ない。たとえば、私は一つ善を為したとしよう。しかし、その後で一つ悪を為したとしよう。それを繰り返す。どちらも同じ量と質だ。そうすれば、やがて善と悪の基準が入れ替わる文明の進化と破壊が行われ、信仰が別の信仰によって喰われ、満月と太陽が入れ替わったとしても、神と悪魔が入れ替わったとしても、私はどちらの寵愛をも拒絶する事によって、私はどちらの寵愛をも手にする事が出来る。神の不在証明をしているのよ、今。お前は正しい事を知っているのか？ という問いに私は答える事が出来ない、悪魔の作成が出来ないまま、私は神を殺し続けるだろう。生きる事に意味を見出せないまま、死ぬ事にも意味を見出せない。しかし、私は自身の思考回路が美しい、という事を信じているのかもしれないな。病的なイデオロギーだろうか？ お前ら、理解出来ない、って顔をしているな。聞いていないのが分かるよ、私がどんなに訴えてもお前らは私の存在を透明にした。それは別にいい。けどもね、私は存在しているのよ。私は実在している。フィクションのキャラクターじゃあない。人は言語に対して、それが相容れられない物の場合、フィクション性を求めるが、しかし認められないものも、こうして世界に実在している。追放し、権利を剥奪し、流刑に処しても私が消える事は無いだろう。私は私に好意を抱く者を発狂させるのだろうか？ 無の

作成を示したら、その者は首を括るのだろうか。しかし、首を括りたいならばやはり首を括るべきなのだろう」

全力で、ひたすらこの場にそぐわない感情の掃き溜めとしてのアジテーションを行ってしまった。ああ、私は本当の本当に、ぶっ壊れてしまってやがる。

そのまま、私は蹲った。息切れした、喉が少し痛い。

肌で感じる、私にはカリスマ性が無い。だから。

大抵の場合、私に帰ってくる解答が、呆れるか、怖がられるかのどちらかだ。

正義を信じない者にカリスマは宿らないだろう。

「嘲笑か、罵詈雑言か、無視か。どれかに着地するんですよ、大抵、しかしまあ、私にはイデオロギーがある。此处で断言しましょう、私は皆様を動かしますよ。まあ、弁舌が下手で申し訳ありません。全部、戯言だ、って捉えて貰おうかと。思想と戯言。此の二つの世界性の共生こそが、私の内在世界なんです、全然、理解して貰えないかと思われませんが、ただ、貴方方は私を信じて貰いたい。しかし私は貴方方を裏切る。裏切らない、という意味でも裏切る、私は気分屋ですからね」

私は自分で、気付いた。

私は唯の淋しがり屋だ。サディストには為れなかった。

認めて欲しくて、ナイフを刺す。

コミュニケーションに生きている価値の素晴らしさを見出せない。しかし、困った。気付いた時には全員、敵に回っていた。だが、私は生き延びるつもりだ。絶対に殺してやろうと思った。

「勘違いして欲しくないのは、私は身勝手では無くて、むしろ貴方達の忠実な番犬に為り得るのかもしれませんが。何か御質問は？」

「精神科医に見てもらえ」

ぽつり、と誰かが言った。

室内から、全ての金属音が消えていた。

誰も、私を殺そうとする者はいなかった。

「いつも、そう言われます。……」

私はにやり、と心の中で笑みを浮かべた。それを隠せず、口元にも微笑が浮かんだ。

十

悪夢に魘されていた。自分でも意外だった。

私はいつも一人で眠る。

一人の時間が長過ぎた。誰かといると落ち着かない。会話の楽しみ方も知らない。

生体機能の調整の為に睡眠は訪れる。では、夢は。どうなんだろう。

精神の調整か。私はいつも悪夢を見る。フロイト的に見ればどうなのだろう。

最近、現れ始めた。心が崩壊していく。私は闇なのだろうか？

光を、私は知らない。そこで育った。生きる喜びを知らない。

それは影のようだった。最初は仮面を被っていた。それは現れ始めた。

顔が塗られていた。腹から下の箇所が、血に染まっていた。濡れている。

女だった。女達は次第に増えていった。私は彼女達を知っている。

私は自分に罪悪感なんて無い、って思っていた。私は女が嫌いだった。娼館の者達に、色々な愚痴を聞かされたり。歓楽街の住民と、談笑したり。特に理由は無かった。会話相手が欲しかっただけだろう。しかし、私は好奇心からか、或いは何かへの憎悪からか、囁いて、彼女達を死地へと追いやった。私は言葉で人を殺せた。私がやった事はいいいんだ。だから、夢に現れる、暗い森の中に私がいて、夢に現れる女達は、私の言葉の犠牲者なのだと思っていた。最近、ようやく気付いた。こいつらは。

黒い呪文が殺した女達か。

彼女達は声も言わず、唯、呻き出した。泣いている者もいた。私は中心で見ている。手を伸ばして、私を掴もうとしている者もいた。私は振り払った。

虚無主義者が犯した少女は私の目の前に現れた。罪悪の証。

私は震えていたのだろうか。私は怖い。怨霊の幻影を何故、見るのか。

黒い呪文が殺した少女達だ。私の目の前で凌辱されて、死んでいった。着ていた服とか、覚えている。同じ服を来ていた。私が、責められているのか。がたがたがた、と私は虚無の花嫁に為ろうと誓ったのに。私は私を追い詰める。二重の相反する感覚。私は此の世界を愛せない。私は私を愛せない。フードをいつも間深く被る。髪で顔を覆う。化粧はした事が無い。化粧毛のある女は羨ましくない。殴り蹴りたくなるのは私も同じ。

化粧をしない女。少女はどうだろう？ 黒い呪文は、それも犯して殺した。私は唇を噛む。奥歯が鳴っていた。殺したい、殺したいだって？ 死ぬ覚悟の無い奴がそんな事を吐くな。殺人は自己の命がいつ失われても構わない、という前提でのみ赦される。私はそう信じている。心は沈黙する。

ああ。

私の思考は濁流のように、流れてくる。止められない、どうしようもない。

言葉、言葉、言葉、言葉。

言葉の羅列が、頭の中をぐるぐる、ぐるぐると回っている。

「クズはクズとして死んだ方がいい。やっぱり私は間違っている。というよりも、我々が死んだ方が一番いい。生きる事は赦されない。だから、私は一人でも多くの私に似ている者達を道連れに消えたいの、か……？」

会話がしたい。

私は誰にも理解されないまま一生を終えるのだろう。

「愛さない者は神を知らない。だが、私はいつか訪れる幸福を思い描いていた。私は私の理解者を探しているだろうし、理解者か。私は私自身を理解出来ないのにそんな者を探しているのか。滑稽だな」

寒くなり、震えた。

元々、身体は小さく。拳も、とても人間を殴り殺せる程の腕力も無く。

武器などを所有してしか、殺せない。

正面切って、戦うよりは。

不意打ちや、小細工をした方がやりやすい。

体制に対してだけでなく、反体制的な物に対しても反抗的な私は、呼吸音と自身の体温を確認しながら、秩序たる者も、新たな秩序を求める者も肅正すべく、しかしやはり自身の理念に何の信憑性を抱く事も出来ず。迷いながらも、腹立たしい物は確かに存在しており。私は腹立たしい物を殺す為にナイフを刺す。

周囲の信頼を勝ち得た後、一気に潰しに掛かる。

少しずつ言葉に毒を盛る。情報を操る。その後は、相手を自滅に追い込む。フロイトやマキャベリなどを悪用して、誘導していく。暴力的なタームを連発して、本質、実存的なものを見失わせていけば、人は観念世界に迷い込み、自爆する。反復して言えば、嘘も真実に変わる。……私自身に向かっているな。言葉、思想というものは強い。性的な物や情念的な物、倫理的な物は人のトラウマを引き摺り出せる。他の誰もマフィアやアナーキストや宗教家の大ボスに向かって、丸腰で平気で暴言を言えない。別にこっちは殺されたって構わないんだから。精神的に不安定な人間は付け込みやすい。

安定している相手なら、不安定な要素を探す。作る。

トラウマはある筈だ、誰にでも。そこを探し当てる。……。

私は心の傷が形として見える程、感受性が特殊だろう。

此れは“能力”とかじゃあない。生まれ持った生存の為に獲得した術。

……空しかった。

鉄格子は下ろされて、虚空は増える。

「私は……、」

小さな、子供のように弱いから、ナイフを刺す。震えながら。私は唯、死ぬ為に生きている。巨大で腐食している虚空を内面に抱えて。哄笑は消える。せめて、何か信念と信仰と思想の為に死ぬるなら、此の上なく幸福なんだ。私はそれを知らない。信じられる物を何一つ感じず。埋葬されていく。顔の輪郭や森の樹木もよく映す硝子の水面のような無垢は知らず。

冷血、氷付けの感情が噴火、炎上しそうだ。

言葉。言葉。言葉。言葉。

様々な言葉が、濁流と化して、頭の中を巡っている。

古典文学、哲学書を無理やり、頭に詰め込んだせいだ。

詰め込んだまま、誰とも文章の内容を、共有出来なかったせいだ。

観念と化した世界が、頭の中でめまぐるしく回る。

回る、回る。

そう。そうだ。

もう、誰にも支配はされない。私は自由を生きたい。思想、理念、法、倫理、体制、反体制、過去、未来、天国、地獄、神、悪魔、全てを捨てて、私は一人、立ちたい。それまでは唯、死がすぐ目前にあり。夜が幾ら深くても、此の世界から離反して、やがて唯、一人生きる事によって

、此れまで積み上げられてきた血塗りの墓標を払って。罪、穢れを贖罪を捨て、私は新たな生が欲しい。淋しく、言葉を投げ返してくれる相手は誰もいない。俗世は鬱臭く、悲しみは落涙によって拭われない。光と闇との基準に怯え、此の世界は不条理以外の何物でもないのだという事実。誰も信じられない、孤独という苦悩。誕生してしまった実存的な意味の葛藤と、捏造してきた論理構築が暴発して凍結の牙城を破断して。

生きて、いたかった。此の世界を愛して、生きていたいよと静寂を笑う陽気な者達に、憧憬を抱いて。パンとサーカスでは生きられない。私は、闇になった。此の世界を少しでも破壊したいんだ。私は生きられない。此の、実存的な悪夢の中で、遍く苦しみが存在しているのを。ラスコーリニコフ的英雄願望ではなく、肥大化した自意識のサリンジャーや、コンプレックスで世界認識を下品にしていく劣等感満載のロートレアモンなどではなく。マルキド・サドの欲望に嫌気を差して、ワイルドの快樂主義に失望し、ボードレールの退廃から離反して。ショーペンハウアー的厭世観、キルケゴール的自虐観ともやはり違い。世界の中心に私はいなく、それ処が、どの感覚にも属さず、私という記号は消えていく。ニーチェの選民思想、安易なフロイト的心理分析を投げ捨てて、世界の記録に私はいなく、アカシック・レコードは私の名を消しながら文字を刻み。ゾシマとソーニャにナイフを突き立てて。カントの普遍的倫理観を全力で攻撃し。苦しみが確かに存在している此の世界において、無力、なのであると。黄昏に喰われ、しかし、今、私は存在しており、だが此の世界への未練を捨てて。瓦礫。内在世界と外在世界が分裂して。人を愛せず。人を信じられず。世界は全力で死んでいた。

十

詩集も好きだった。

様々な作家の。

私は詩的な情感で、世界を見る。

詩の言葉。

それで、今の情感を何とかして言葉にしたい。

ああ。

引き裂かれた喉から発せられる声が、薄赤色の夕焼けに染まりながら。

モラル、という言葉の存在を知った。塹壕の薄汚れた土埃に酔う、黄塵の舞い上がる戦場跡を想起させる。私は美しい物を知らない。硫黄の渦に吞まれたソドムとゴモラ。黒く濁った腐敗臭が漂い、蛆が嬌声を奏でるサバトの凱歌。

私は美しい物を知らない。

「貴方の下にさえ、就かなければ、私は大成したのかもしれませんがね」

「アイス・エイジに生まれたんだ。諦めるしかないね」

人の肉の臭いが漂う宮殿の奥。君臨する。

グロテスクな曼荼羅を広げる、人間の手足を縫い付けて作り上げた椅子に鎮座して。毒蛇よりもなお、毒蛇らしいその両眼は、何処か憂いを帯びて、冷酷そうな微笑と相反して、深淵の王は

、地獄の王ヘルのような炎猫は謳う。

「マニュキアを塗って、フォークでパスタを食べたり。球技をしている連中が羨ましいとは思わないさ」

炎猫には、手足が無かった。生まれた時かららしい。

「特権階級だと思うから、質が悪い」

「特権だよ。だから、私は羨まれる」

「身体障害者が嫌いでした」

それに限らず、だが。

私に禁忌などは無い。信じる者よ。倫理など実体として無い。

「弱者はそんなに正しいんですか？」

「あたしは強者だよ。いや、お前が何を言いたいのかは分かるさ。とっても分かり過ぎるくらいに分かる。それでも、あたしに言いたいのなら言うがいいさ。なんとなく、あたしがその代表みたいな感じにお前は見えるんだろ？」

私は頷く。

「精神薄弱者は言う、性的マイノリティーは言う、差別国出身者は言う。犯罪の被害者だっていいさ。お前らの主張はそんなに正しいのか。お前らが迫害者と成り得ない保証は何処にある」

弱者がそんなに正しいのか。

「別にあたしに話し掛けたいわけじゃないだろう？ でも、聞いてやるさ。お前は、友達いないからねえ。淋しそうな顔をするなよ、これはお前得意の皮肉じゃなくてね。会話が出来ないと、酷い離人感に襲われるんだろ？ でも、ある意味で言えば、此処程、人間の理想社会を実現された社会は無いと思うぞ？ 曰く、全ての民は平等だ。唯、苦痛と快樂が同程度存在しているだけさ。サディズムとマゾヒズムの極致」

こいつが王座にいるせいで、身体欠損症願望の奴らが年々、増え続けた。しかし、あれだな。たとえば、同性愛者が王座に就けば、同性愛者が増えるだろうし。性同一性障害者が王座に就けば、性同一障害者が増える。

差別人種が王座に就けば、人民は差別を美德とする。

身体障害者とかってのが一番、ナイーブでカント的、キリスト的倫理観によって持ち上げられるか、差別されて本人が捻くれて強いニヒリストになるかのどちらかか。弱者ってのは、単語やレッテルに過剰反応して、障害を障がい、とか言ってアイデンティティを満たして、生き神のように祭られる。あるいは、タブー視されて闇に葬られる。どちらにせよ、弱者は大抵の場合、己を弱者というアイデンティティで生きようとする。

しかし、この女は此のアイスエイジにおいて、逆説的な不条理として君臨していた。

炎猫は他人の苦痛を見るのが大好きのサディストで自分達以外はどんな拷問や差別も行っても構わないというファシストだ。

「道徳と差別、の話が本当はしたくて。貴方の御身体とか、実は物凄くどうでもよくて。ごめんなさい、やっぱり私は貴女という対象物を無視して、独白の演説になるかもしれないけども。話さないわけにはいけないんです。ある意味で言えば、貴女は知があると想いますし。それだけの

頭脳を持っているのだと」

「あたしだって、毎晩、魘される時はあるさ。けども、あたしにはブラック・スペルがいるからねえ、けども」

「私には私しか、いない」

「お前の思考が好きだよ。哲学が。お前は拷問者としてもサディストとしても、ブラック・スペルには劣るなあ。けども、何かを、お前の中にある何かをあたしの中に見出しているのかもしれないねえ」

「勿体無いお言葉、嬉しいです。……では、何を話しましょうか。本質的な問題がいいかもしれませんね。此のアイス・エイジについて。外の世界と、此のアイス・エイジは、その倫理道德、について逆転している、という事を知っておられますか？」

人肉を食らう習慣。娼館の住民が高い地位。性的や肉体的に解放されまくっていて、人体改造、性転換が一般流通しているアイス・エイジ。女が男を犯す女性社会。

ソドムの市場だ。私は此処の、貧民街に生を受けた。

「配下になるものから、幾らでも。でも、不思議だね。あたしはこんなに幸福なのに。皆がこぞって、普通とは何か、普遍的とは何か、についてもう数千年前とか位前のテーゼであるかのように、思い悩みたがるのさ」

「黒い呪文は、その本質は、強姦者でもなく。殺人者でもない、赤子みたいなものじゃないかと私は思っていて。あいつ、本当に頭悪くて。もしかしたら、無邪気に世界から受け取る行為をそっくりそのまま、正しい認識として真似ているだけなんじゃないかと」

炎猫は私を、テロリストなのだと知っているし、それでなお、腹心に付けようとする。その虚無性は何処まで広がっている、というのか。

テロリストと支配者は、二人、本質的には敵対しながらも、談笑してするかのよう。

革命。体制と反体制との。イデオロギーの反復。

アイス・エイジを滅ぼしたくて、滅ぼしたくて、仕方が無い。

炎猫の首を落としたくて、落としたくて、仕方が無い。

炎猫はそれを知っている。私は隠すどころかはっきりと告げる。

「苦しみは何の為に存在しているのか。私は此処を受け入れられなかった。炎猫さまは、此処を受け入れている、炎猫さまが玉座に就く前から、此処はそうだった。貴女は何故、此処を受け入れられるのですか？」

「此の場所はね。もう本当に、どうにもならない奴らのゴミ捨て場だから。スラム街の住民とかマフィアの奴らですら嫌がってさ。とにかく、何でも捨てやがるからねえ。あたしは、何だったかな。歓楽街で娼婦やってたんだけどね。まあ、それなりに優雅な方でもの暮らしをしていたと思うよ。不幸とは思わなかったな。黒い呪文は外の世界から、捨てられてしまって。あいつの過去、聞いたか？ あたしの口からは言えないねえ」

幼い頃の性的凌辱。酷い虐め。倫理観の排斥。アイス・エイジに捨てられた後は、ひたすら男娼として、男達、女達の道具にされ続けた。

強姦は去勢への恐怖、心理的な不具者へ、物へと変えられていく事への恐怖の抵抗の発露と

して。犯して殺す。

「あたしは、此処の先代の皇帝を屠って。今の玉座にいる、お前らが幼少期の頃なんじゃあないか？ 前よりは、マシだと思っている。少なくとも、あたしは“思想”を彼らに与えたから、苦しみだけではなく、此の世界に快樂が存在しているのだと。お前は、あたしを殺した後、此の国をどう作り変える？ あたししかいないさ」

「私なら、やっぱり此処を全て破壊しますよ。私の命を持って。余りにも穢れ過ぎた。人や美しい物が穢れ過ぎた。だから、私の命と共に、此の世界を破壊したい」

「無駄だね。言っただろ？ 此処はゴミ捨て場なんだって。外の世界の奴らが全て悪いんだよ、此処に不都合な物を捨てる馬鹿共が確かにいて、此処は存在している。それだけの事だ。あたしを殺しても、お前は命を十字架に掛けて、此処を硫黄の炎に変えても。どうせ、此処はまた復活する。なあ、あたしを今、殺してもいいんだよ。お前の好きにするようにすればいいんだ。なあ、フレイム・タン、あたしはお前が愛しいよ。人間がこうやって、きちんと苦しむのは、お前のような奴がいるからなんだろうな？ 私だってさ、正義について語っているつもりだ。だが、お前も正義についてきっと語っているんだろうな。だが、空しくもなるだろう？ 空しいだろう？

普遍的な正義なんてないのさ。倫理って言葉大嫌いだよ？ あたしも大嫌いだ」

反論が出来ない。だから、私だって空しさを抱えているのだから。

「私は人を愛せないんです……」

「好きな男とか女でもいいけど、いればねえ。まあ、どちらにせよ、お前はいつか何かを破壊するのかもね。ただ、救われる事は期待しないほうがいいわね」

「救われない、……ですか」

炎猫は腰を捻って、玉座を回転させた。

「生きる事は苦痛だけだよ。あたしはそうは感じない。あたしは悟ったんだ、生きている事に喜びを見出した。サディズムも正当化した。お前は出来ない。お前は本当はあたしを殺せないよ。だって、あたしを殺してもお前の心を癒せやしないんだから」

春の草の匂いは好きか。私は草原を歩きながら、地が祝福の歌を歌う事を想像する。ライオンが食い殺した動物の死骸は酷暑に晒された後、虫の集る骨となった。

私が生きる意味を見出す為にはどうすればいいのか。

お前を赦す、という言葉によってその人間はどれ程、赦されるというのか。

生きていこう、という言葉によってどれ程、死を願う者を足を止める事が出来るのか。

何も救われない。

十

マフィア達は、呆れながらも私の話に聞き入っていた。

そして、何人かは私に賛同したようだった。私は会堂を出た。

次は、どの組織に向かうか。私は思案する。

私は汚い小屋に潜伏して、次の計画を練っていた。

氷付けの殺意が、私の背筋を舐めた。いつもよく感じる、凡庸な寒気。すぐに体温が戻る。その程度。

此処は、武器庫だった。私はその隅に蹲っていた。

二人の男達が、私の前にいた。

私は興味を示さず、思索へと戻った。

「おい、お前。何のつもりだ？　うちの組織を騙したいんじゃないのか？」

男の一人がいう。死亡フラグ。こいつは、死ぬな、と決めた。

ごちゃごちゃ、とまた私に何か言っていた。

見た処、確かに強そうだった。二人とも筋肉質。ランクはC以上、って処だろう。

こいつらを始末するのはそう難しくない。しかし、兵隊を殺されたとなったら、せっかくの先ほどの交渉もパーだ。

またも、何か言ってきた。彼らのうち、一人が、続いてもう一人が、置いてある大斧と散弾銃を手にする。

私は、躊躇は無かった。

腰にある拳銃を取り出す。

「.....アイアン・ランス」

パイプ野郎との戦いで、数時間もの間、昏睡状態であった、大馬鹿物の。

ブラック・スペルから奪い取った拳銃だった。黒い呪文から、借りた能力。

一瞬のうちに、拳銃が三つに分かれて、同じ照準に向かって槍のように、散弾銃を持った男の肩を打ち抜く、彼の肩が吹き飛んだ。

死体は、海にでも沈めるか。面倒臭いな、事が終わるまで隠しておくか。

そうだ。ナイト・クォーターから奪った、パイプがあるんだった。私とした事が。

違和感、私に不審を持ったのは二人ではない、ということは、今の奴らは噛ませ犬。

「十数名、は後ろに隠れているわね」

私は笑った。

天井からだった。潜んでいやがった。私の脳天に向かって、刃が振り下ろされる。

私はそれ以上、動かなかった。そいつの頭がひしゃげるのを待つだけだった。

黒い呪文の能力すら、見破れない間抜けが。

部屋の外に、隠れていた者達が、数人、入ってくる。

私は手にした、拳銃を投げ捨てた。敵は驚きの表情を見せる。

灼熱のような、時間だった。

部屋に入っていた、全員が蜂の巣へと変わっていた。

「黒い呪文の能力ぐらい、見破れ、馬鹿が」

私は倒れている男の一人に蹴りを入れる。

私は無傷だった。

落ちている拳銃を手にとると、まだ生きている者の頭に向ける。

「私に従うか、これが発砲されるかを選べ」

私はポケットから、粉薬を取り出す。

「お前らの処で、扱っているドラッグだ。これ、全部、飲み干したら助けてやるわ」

「おい、そんなに一度に吸引したら、廃人になっちま……」

「だから、いいのよ」

私に戸惑いは何も無かった。

そいつは、人としての人生を終えた。

武器庫を出た。通路だった。

連中のうち、何名かは助かる道を選んだ。後々、有効に使えるかもしれない。

私は思索に耽っていた。次は、どんな手を打とう。

階段の方まで来た処で、また、冷氣を感じた。

気付けば、私は膝を地面に付けていた。

首から、血が溢れている。

「随分、勝手にやってくれるじゃないか、ええ？」

私は口から、血を噴出している。気配から感じ取るに。

二人、いるみたいだった。

私を切った方は、喋ってない。

話しかけてきたのは、先ほど会堂で見た顎鬚の男だ。

私は振り返らない。振り返れない。

「お前の魂胆は、おそらくコミュニティの殺し合いだろ？」

「……何を、アイス・エイジの壊滅ですってば」

また、私の首が切り裂かれる。

「始末した方が、いいって俺の判断だがな。俺の名は、傷無。能力者で、組織の幹部だ。爆弾よ、お前、今、始末してやるよ。お前が自爆してもいいような奴を呼び寄せた。俺らの組織の隠し玉だよ、なあ？ 朽闇」

足音が。一瞬だけした。

私は振り返れない。

腰の拳銃にも、手をやれない。また、私の首が切り裂かれる。

「爆弾ごと、内面の火薬ごと、バラバラにしちまいな」

私は躊躇が無かった。

口を広げて、咆哮する。壁に向けてだ。

喉が引き裂かれていたので、声が巧く出なかった。

しかし、口の中から炎猫から借りた能力である焰が飛び出した。

爆風が私を襲った、私の全身は火達磨になる。私は服の下に、灯油、ガソリンを仕込んでいた。そのまま、顎鬚の男に抱き付く。

男は悲鳴を上げていた。

私は燃えながら、その男を見ていた。

細長い、枯れ木のような男だった。

朽闇、と顎鬚の男は呼んでいたっけ。

身体中から、何やら風を発していた。こいつは、間違いなくヤバイ、と私は思った。

さて、どうするか。私は顎鬚に抱き付きながら、考えていた。

顎鬚は燃えている、私も燃えている。二人して、火焙りの刑になっている。

服は特殊素材で加工する入る為、燃えないが、皮膚や肉は確実に焼け爛れている。

抱き締めた男はぐったり、としていた。私は動けない。

「このまま、二人で地獄に行きましょうか」

「ち、畜生、お、おい、朽闇、俺を助け……」

朽闇と呼ばれた変な身体が細長い男の方も、判断を決めかねているようだった。

敵を何らかの方法で、切り刻む能力らしいが……。

私は、交渉に移る。

「私を信じればいいじゃないですかね？ この人、貴方の上司？ 依頼主？ どっちでもいいけど。………」

私は朽闇に向かって、顎鬚の火達磨をぶん投げた。

彼はそれを受け止める。

私は思いっきり、地面を蹴り飛ばした。

そして。

朽闇の喉下に噛み付く。

掠り傷、だった。浅い傷程度だった。だが。

どんな能力か知らないが………。

私は瞬時に、それを“借りる”。

風の音が鳴った。

私は自然と手を振り上げていた。

朽闇は、一瞬遅れて、それに対抗していた。

壁や柱、地面が切り刻まれていく。朽闇が、自身のその能力で対抗する。

私は身体中の炎を風に乗せて飛ばす。

決着は、付かず、しばらく膠着状態が続いた。

顎鬚の男の身体に移った炎もやがて、消えかかっていた。

彼は、呻いていた。おそらく、重症だろう。何故ならば、私も重症だからだ。

だが、これも予め、服が耐火性だったのと、事前に鎮痛剤を服用していたので、痛みが幾分か麻痺している。

「妥協案、を考えましょう」

私は朽闇、と地面に蹲っている男に告げた。

「妥協案、というと？」

「私を今、殺すよりも先ほど提案した、アイス・エイジを潰す方が良くと思うのですが。どうでしょうか？ 確かに、私は貴方達に少々の損害を与えましたが。どうせ、死んだのは使えない兵隊ばかりでしょう？ 私ごときに屠られるのだから」

帰れ、と朽閻は云う。

顎髭の男は蹲りながら、ひゅうひゅう、と声を上げていた。

「そう、帰れよ。赦してやる。だから、これ以上、俺達、いや、俺には関わるな。アイス・エイジは俺達で勝手に潰す。俺は怖いんだよ。朽閻程の男を前にして、何の動悸も動揺も起こさないお前がな。その、タナトスの衝動は、理解が出来ない。……だから、帰れ。今はまだ、アイス・エイジと戦いたくない」

剣を鞘に収める。せっかく、ぎりぎりの殺し合いが出来ると思ったのに。

十

血塗りの墓標が漂いながら増え続ける。

黒い呪文は無垢ゆえに強姦魔となる。殺人者となる。

世界存在から受け取った返礼として。破壊された精神は反射鏡のように破壊を構築し続ける。本人すらも、何故、破壊衝動が続いているのか分からないのだろう。

「炎猫さま。黒い呪文との子供は作らないんですか？」

炎猫は困ったような顔をした。

私は少し戸惑って、慌てて取り繕った。

「……そう、ですよ。アイス・エイジに生まれて欲しくない、と。貴方の口から、言わせるわけには確かにいけない、か」

「……気にするな」

炎猫は淋しそうだった。

生まれた時から、全員、死んでいる。

「あたしはね、黒い呪文とは別次元でお前を愛しているんだよ」

黒い呪文の犯した少女の胎盤から、漏れ出る。胎児。哀しそうに、祝福される事無く、此の世界に生を受ける事となる。

私は、……私の母親は、男に、男達に……集団で、やられて。私を、……生んだ。

ソーニャ、……みたいな、女だった。母親、は。

何度も、何度も、母親像を突き立てて、刺殺する。

元はただの食事当番をずっとやっていたらしい。しかし、穢れに穢れたから、その後、娼婦をやり続けた。

「フレイム・タン、聞きなよ。あたしはお前が子供だ、って思っているのよ」

私は涙を流していた。拭う事無く、止まらない。

それが、伝染したのか。炎猫も、泣いている。

蒼褪めた、虚無の世界が見えた。

滅ぼそう。穢れに穢れた大地、アイス・エイジを。私自身の命の焰と、花と共に。

私は泣きながら。戦闘の体勢に入っていた。

面と向かって。慎ましく、愛、を接吻を。抱擁を。返上する。

「すみません。……貴女の愛は、重い。受け取れない。私は貴女を殺さずにはいられない。私の人生は初めから、無い、のだから。貴方は神なのでしょう。此の世界の。でも、お返しするのです。貴方の愛の造物には、為れない。本当に、すみません、でした」

炎猫の眼球を覗き込んでいた。凝視する。彼女の能力、邪眼、に触れる。自ら。

私の身体から煙が出始めていた。

私は白と黒のパーカーの下に隠し持っている、暗器を取り出す。まずは、小さなダガー・ナイフ。私は全身を捻って、回りながら。炎猫の脇腹に、ナイフを刺した。服と、皮膚のみを掠め取っていた。避けられた。炎猫はとても哀しそうだった。

私の哀しみは、かつて、殺した。今日も殺す。明日があるならば、明日も殺す。

私は炎猫から借りた、能力を行使する。口腔を開いて。

炎の吐息を彼女へと、噴き付けた。

炎猫の手足の曼荼羅の玉座が、火刑台のごとく針葉樹林を繰り広げていた。

炎猫に手足は無い。しかし。

彼女は、腰や脊髄、首を捻りながら。身体を移動させる事が出来る。

炎猫もまた、諦めたように。まだ、泣き止まない顔を拭う術は無く、玉座の背後に隠し持っている、巨大、柳葉刀を口に咥えていた。

私はパーカーの中から、小さな金属製のタンクを取り出す。その中身に全身に付いた、火を発火させるべく。タンクの中身はガソリンだ。それを床に撒いて行く。少しでも、炎猫へと近付く。間合いを詰める。

「炎猫。お前はキリストのつもりか？ 私はそんなものの存在を信じない。消えてくれ」

炎猫の柳葉刀は、私の肩を狙っていた。心臓とは逆の位置。甘いな。

私は、彼女の刀に蹴りを入れる。靴の裏に、金属性のバネ。スプリングを仕込んでいた。炎猫の肉体が、壁に力強く、叩き付けられる。脊髄に痛みが走ったみたいで、彼女が少しだけ、呻いた。数秒くらいは、行動不能に出来るだろう。十分過ぎる。

私は腰の下に携帯している。もう少し、大きめのナイフを取り出して。彼女の胸を狙った。首を切るのがいいが。やはり、胸の方が性格だろう。彼女の胸から鮮血が迸っていた。狙いが少しだけ反れていた。

駄目だ。焦っている。

神よ、存在するのならば。もう少しだけ、私に時間を。……何で事だ。存在しない筈の神に私は祈っている。馬鹿が。私はもう一度、口腔を開いていた。彼女の顔面に向かって、炎のブレスを吹き付ける。炎上する。

私は、十数秒くらいだろうか？ 意識が無い。

気絶していた。

上空に叩き付けられているのが分かった。背中を強打している。

炎猫は、強過ぎた……。

私はそのまま、腕から着地して。嫌な音がする。受身を取り損ねた。

炎猫の刃が、私の全身を二つに分けるべく、迫る。

刃は、壁に深く。めり込んでいた。

思考停止。

私達二人は、そこで沈黙する。

しばらくの間、言葉が無かった。

ただ、私は負けたのだという、事実だけがそこに、あった。

全身が麻痺している。行動不能。

炎猫はがちがち、と唇をかみ締めていた。そしてそのまま。

這いずりながら。私から距離を置いた。そこにもう、対話は無かった。

殺意によるコミュニケーションすらない。

そのまま。数分が立った。宮殿が燃え続けている。誰か、兵隊か何かが消化に入っている。私の全身に付いた炎はとくに消えていた。炎猫の顔に付いた焰もまた、消えていた。

能力、の解除。そこに、沈黙だけがあった。

気付けば、私は炎猫の元から逃走していた。

黒い呪文の元へと向かった。理由は無い。ただ。しくじった、という事実だけがそこにあった

。

十

全ては赦される。

何によって、か？ 神によってか？

私は、ひたすら。ひたすら。

ぼろぼろの鉛筆で、くすんだ紙に自分の頭の中の観念を書き続けていた。

詩なのか。哲学なのか。何なのか、まるで分からない文章。

.....。

.....。

腐りに腐った自虐の蔓が寒い夜の空へと伸びていく。深淵が、更に深い。

私の精神世界は音を立てて、崩壊する。生きているだけで、寒かった。

私は凍えている。火傷の傷が、重症な筈だが。余り感じない。全力で手首を切り刻む自傷者のごとく、心の傷口を身体の傷に変換、昇華して。私はマゾヒズムの妄念に憧憬を抱く。もう、言葉が死ぬ。エクリチュールが消失しようと、迫る。

シーシュポスとイクシオンを夢想する。思考回路の無間地獄が始まる。スコップで頭を殴られながら生き埋めにされていく、農奴を思い浮かべる。誕生してしまった苦しみがフラッシュバックをツァラトゥストラが断末魔の悲嘆を。殺人はテロリズムは赦されない？

反逆が。反逆によっては、生きられない？ 私は手首を掻き毟っていた。傷口が深く。抉っても抉っても。膿は取れないだろう。

阿鼻、紅蓮の豊饒する泥土となって肉が引き裂かれていく。私はなおも、爪を掻き毟る。

誕生してしまった、生きる悲しみよ。生きる苦しみよ。せめて、空高くナイフを突き立てて。

神からの自由を。

私は知っている。私には解答が無い。問題への解決手段が無い。自由が無い。全てが、無い。虚無の世界という場所は。不毛の砂漠は。永久凍土はそういう場所で。愛、思想、価値、意味。其の名に置いて、救済が無い。自由とは救済の事であるのだ、と。富や快楽や名誉によって自身の自由を勝ち取れる者は天国が約束されているのだろうな。信じる、.....信仰、そう信仰、共同幻想こそが自由であり、天界か。

私はそんなにおかしいか？ 私には矜持が無い。客観性が無い。他者がいない。言葉を伝道したい相手の存在が思い浮かばない。ただただ、刺殺、斬首する事のみを望んでいる。絞首と。銃殺と。火刑とを。ただ、切望している。漆黒の馬が、天秤を持ち上げながら。傾くべき理想と理念を、しかしどちらにもやはり傾かない。死の後に、虚無の後に、何が来る？ アリョーシャには成れない。イヴァンにも成れない。スタヴローギン程の力も無い。スメルジャコフ、か？ せめて、私はピョートルでありたい。

私は何によって、生きていける？

テロリズムは赦されるが、快楽殺人は赦されないのか？

.....私は、誰も好きになれない。現実には、誰も私にはいない。

.....。

私は書き物を止めた。

自分でさえ、何を書いているのか分からなかった。

とにかく、情念だけで文章を書いて。それが果たして意味を為しているのか、まるで分からない。ああ、分からない。

私は溜息を吐き尽くすと、蹲っていた身体を起こして、立ち上がる。

私は少なくとも、まだ生きている。

私はポケットに入っている携帯電話を取り出して、電話番号のリストを使う。さて、どれから壊すか。

そうだ、思い付いた。世界から飢餓と貧困を無くそう。共産主義闘争を試みるのも面白いかもしれない。まあ、それによって倒される人種は権力者とかブルジョワジーであって、そいつらを倒して、マフィアをのさばらせるのも面白いかもしれない。マフィアン・コミュニティの奴らにやっぱり連合して貰って、妥当権力を目指して革命組織を結成する。私は英雄に祭り上げられる。ジャンヌ・ダルクとかの類かな？ まあ、ジャンヌのように火刑になりたくはないが。

という風に、共産主義を謳いながら、やっぱり破壊が見たい。あー、やっぱりこう考えちゃうから、私は何処までもアイス・エイジ的なんだよなあ。

私は愛する者がいない。

私は愛する人がいない。

だから、私は生きる実存を。証を見つけられない。

分かっているのは、私はドストエフスキーのスタヴローギンが好きなのは、彼に自分自身の自己愛の全てを投影している事だ。モデルのバクーニンに愛憎を抱くネチャーエフ。

私は一人のピョートルなのだ。

悪質な権謀術家の、詐欺師なのだ。

秘密組織の五人組すらもあざむき、社会に牙を向く。

詐欺師のペテン師。屑が。

私は黒い呪文から、奪い取った。拳銃を。手に持った。穢い思考回路をした反吐のような男の身体の一部の一部のような。私は、今、殺しに行く。

私は今一度、マフィアン・コミュニティへと向かっていた。

携帯電話を、二つ持っている。もう片方は、渡した。

さて、どうするべきか。電話の相手は顎髭の男だった。私は率直に告げる。

「朽闇を貸してください。何なら、彼を使って私を始末したって構わない」

交渉はイエスだった。条件は、顎髭の男の支持ではなく、あくまで朽闇の独断で暴走した、という事にするつもりだ、という事だった。

さて、私は黒い呪文の事を思い出す。殺してやろう。決意した。

私は、黒い呪文の元へと向かった。

片腕を負傷している。さて、どうするべきか。

私は携帯電話を取り出して。いくつかの番号をプッシュする。

先日の会議で、私の意見に賛同した人間がもう一人いた。

槍使い。名前は忘れたが、そいつに協力して貰おう。

処で、先ほど抗争の際に、傷無という名の上司が敗れた事を朽闇から伝えられる。

もう一度、彼と再戦しようと考えていたが。まあ、いい。

私は、携帯で運命の槍とかいう奴にメッセージを送る。運が良ければ、大嫌いな男の元へと通じるかもしれない。

それから、マフィア組織が共同で飼っていた殺し屋、というよりも魔獣。

肉と肉の塊を操る能力らしい、知能がアブサン酒みたいに狂っている。

四つの恐怖、とか云う奴も、帰る場所が分からなくなって、私の元へ行きたいそうだった。私はそいつも使う事に決める。電話をする、やはり黒い呪文と繋がった。

適当な話を垂れ流した後、私はチェス盤を頭の中で思い描く。

抜けられない苦しみから、一条の光が、差し込むのだろうか。分からない。

十

アイス・エイジ。

炎猫の居城の中央部にいた。

私の目の前には、ブラック・スペルがいて、その隣に炎猫がいる。

私はにこり、ともせずに告げる。

「マフィアン・コミュニティは壊滅させました。任務は終わりですね。少なくとも、残党も貴方達に牙を向ける力は残っていないか、怖ろしくなって逃げていますよ。これで、黒い呪文の尻

拭いが出来ますね、ところで、」

私は首の骨を鳴らし、両手を結んだまま勢いよく上に伸ばす。軽い柔軟体操。

にこりともせず、告げた。

「今度こそ、死んで貰います。二人とも」

誰も笑わなかった。怒声すらも、無い。

「二対一、で馬鹿か？ オマエは？」

黒い呪文が何かをほざいた。

「やはり、お前はそろそろ消えて貰う事にしようか？ 俺は大嫌いなんだ、お前が……」

「炎猫さま、残念ながらですね、そちらが此方を裁きたい、という欲求以上に此方はそちらを裁きたい。そちらが此方を赦さない、という欲求以上に此方はそちらを赦さない、というわけなんですよ。ブラック・スペルは嘲笑の対象でしかないな、殺す殺す、殺して殺しまくっても、哀れで、その」

「お前を裁く事も無いし。赦さない事も無い。……何故、私はお前を」

救ってやれないのだ？ と炎猫は呻き声を上げる。

存在していないかのように扱うな、といった顔を白髪の子はしている。

「お前は数に入れていない。弱いし。炎猫さま、ご覚悟は出来ていますか？」

「そうねえ。横の二人は、私を狙っている獲物達？」

「ええ。ちなみに、その黒い呪文の馬鹿が引き起こした事件。そのせいで、敵に回した組織の殆どがぶっ潰したか、味方につきましたよ」

「……上出来だな。お前はやはり優秀だ。何故、私に牙を向けるのか。私はお前を理解したい。……哀しいな」

「ええ、でも私は哀しくない。貴方はスタヴローギンになれなかった。理由はそれだけです。だから、死んで、下さい」

朽閻が、風を切って現れる。宮殿に獣の爪痕が大量に生まれた。

天井からは、どろどろの肉体を持つ。テトラ・フォビアが現れる。

「私は、私の中に、スタヴローギンを召喚する事にしました。悪しき罪人。そう、私は、……」

私は虚無の心を宿し尽くす。何も無い。世界の崩壊。

私は焰。私は闇。私は虚無の意志。

「ヘイト・クライム、それが私のニコライです」

朽閻が、炎猫を切り付ける前に、私は鉄性のブーツでブラック・スペルの頭部を砕いた。生きていても、深刻な障害が残るだろう。彼は倒れる。

そして、テトラ・フォビアが黒い呪文を喰らう前に、女皇帝の胸元に掌を入れる。彼女は血を吐いて、崩れ落ちる。

二人の魔物は、一瞬にして沈んだ標的を前にして、困惑しているみたいだった。

「任務完了。貴方達は、二人の死体を始末してください。まだ、生きているかもしれない。全力でね」

私は、宮殿にガソリンを撒く。めらめら、と焰が咆哮を上げていく。しばらくすると、先ほど

の戦いのせいもあり、天井が崩れ始めた。

「これから、アイス・エイジの住民も皆殺しにするつもりですけど、どうします？ 二人とも」
二人とは、誰の事を云っているのか。今、叩き潰した相手なのか。それとも、刺客二人か。
まあ、両方なんだろうなあと。

私の頬を、弾丸が過ぎる。私は冷や汗が垂れた。

振り返ると、テトラ・フォビアが穴だらけで呻いていた。ブラック・スペルは地面に伏している。息はしていないかもしれない。

朽閻の胸には、大きな切り傷が生まれていた。彼は血を吐いて倒れている。

炎猫は巨大な刀を咥えていた。

「……アイス・エイジは、滅ぼすわけには、いかない」

彼女は、何故だか、泣いていた。

私は歩みながら、黒い呪文の頭部を蹴り飛ばす。何度も。何度も。頭蓋骨がへし折れる音がある。彼の額は血塗れだった。

私は何も感じなかった。炎猫を前にして。黒い呪文に対する、強姦魔に対する怒りのみは存在していたが。

炎猫の刀は、ついに、私を切り刻む事は無かった。炎猫の瞳も、赤くない。私を燃やすつもりはないみたいだ。

私は、何も感じなかった。

やがて、宮殿は更なる崩壊を引き起こした。

十

私は、生きている。

生きている、と呼べるのだろうか。

フリークスとなった私。表面的には、何の問題も無かった。

私は、私自身の意志で奇形となった。

私はカタコンベの地下要塞からもぎ取ってきた髑髏を組み合わせ、一つの人体を作り上げている。

「……あれはもう駄目だろ……」

ブラック・スペルは何とか一命を取り留めながら、街から装ってきた寝台に伏している。

炎猫も、急所ぎりぎりの場所に穴を開けたので、しばらくは再起不能だと思う。

私は、髑髏を積み上げている。

「ねえ、ニコライ……、ヘイト・クライム様、あの二人をどう思います？」

「そうじゃのう。炎猫は、また御主を赦すじゃろう。奴の愛は深いからの。黒い方の男は、御主に対する憎悪がまた増えるじゃろうて」

朽閻とテトラ・フォビアは、命と引き換えに。炎猫直属の親衛隊になる事を選んだ。というか、すでに彼らの使えるべき主人も戻るべき場所も無くなっていた。

私は徐々に、心が崩壊していく。

私の意識は、二つになった。

私の中に、ニコライ・スタヴローギン。ヘイト・クライムが誕生した。強過ぎる魔王。

私は、ぼろぼろに崩れ落ちた祭壇の下で、今もなお。愛する者に語りかけている。

今日も。

「私はこれからどうすればいいのかしら？」

「そうじゃのう。また、時期を待つのが良い。運命とは余りにも残酷な物じゃ。しかし、お主は虚空の心を儼に転化しようとしている。それは前進ではないか」

骸骨はけたけた、と笑った。

哀れむような視線が、最近、周囲から突き刺さる。一人でずっと会話している、一人で喋って、一人で答えている、と云う侮蔑の声を聞かされる。どうでもいい。

虚無より、一輪の花を見つけた。それは確かに咲いていた。

私は、希望を持ち続けるだろう。この先も、ずっと。……………。



「壊すですよ、アイス・エイジを。それで私の目的も達せられる」

夜のカフェテラスに私達二人はいる。

フレイムの。大好きな画家の絵画に、よく似ている場所らしい。どうやらそこは彼女のお気に入りである場所のようだ。

彼女は、ひときわ、他の者より強い。邪悪なオーラのような物を放っている。

私はそれに少しだけ、怖気づく。

「フレイム・タン、お前、凄いな。マジでブラッド・フォースやメビウス・リングとも闘える、と思っているだろ？」

余りにも面白い。

こいつの人間性に私は晒いを隠す事が出来ない。

「……、その、フォリ・ア・ドウは他人の心まで読めるんですか……？」

「いや、読めない。でもお前の負の形を見るとさ。凄過ぎて。ブラッドの負の形知っているか？」

あいつ、あんまり実際は無いんだよ。ただ。敵の悪意や害意に反応して能力が発動してしまうんだとさ。お前は凄い。本当に敵意と殺意の塊だ。此処まで酷い人間は初めてだ。絶対にブラッド・フォースに近付くな。即座にバラバラにされる。お前の酷い部分言ってみようか？ どんな相手でも意気込み次第で勝てる、って思っているだろ？」

「思っていないですよ。勝てない者には勝てない。負ける勝負はしませんから」

「お前の勝敗って概念は何なんだろうな？ お前、多分、死ななければ負けてない、って思っていて、やってみれば、出来る、って本気で考えている。いや、努力で何とかなるってマジで信じているのか？ 多分、お前、能力者としての実力はそれ程、高く無いけど、本当に意気込みだけで差を帳消しにしてきたんだな？」

「……どうでしょうね？ まあ、負ける勝負はしませんが。ポーカーでも何でも」

フレイムは舌打ちしていた。殺意のベクトルが私に直球で向かってくる。

私は枯渇していた負のシャワーを浴びて、回復していく。

「今のお前の気持ちがよく分かる。多分、お前が今、考えている事を答えてやるよ。お前、今、私の殺し方について考えているな？」

「そんな事は無いですよ」

「いや、考えている。……おい、そんな眼で見るな。私はもうお前とは闘うつもりは無い。どういう能力者か知らないけど、私にそんな事は関係無いし。お前みたいな奴と殺人能力バトルで遊ぶつもりは無い、ってば」

私は宥めるフリをして、必死で彼女をコケにする方法を思い描く。

フレイムは唇を歪めている、そんな私の態度にも気付いている。

お互いがお互いを騙し合える。

こいつは駆け引きの人間の眼をしている。

ギリギリの綱渡りが楽しくって仕方が無い、って顔をしている。

私とじゃまったくそれが詰まらないのだろう。こいつは、一体、今までどんなゲストと対談してきたんだ？

「Aランクのバカ共を結構、闇に葬ったのは実は私なんですよ」

フレイムは私の聞きたい事を、口にする前に察して答えた。

「ドーンって名付けているんでしたっけ？ 貴方達の連合ギルドだか何だかが迷惑にも首に賞金を掛け捲っている。モンスターだとか何だとか名付けて首を刎ねる事を正当化している奴らのトップ、最近のは大体、私が全員倒してますから。名が知られたくないんで、表沙汰にされないように配慮してますけど」

成る程、誠実な態度を取りにきたのか？ 当たり前のように凄い事を聞かされている気がするが。

「お前、私とお前、どっちが強いと思う？」

「貴方でしょうね」

「それは殺人能力バトルでの殺し合いの話だろ？ 私はもっと違う次元で聞いているんだけど」

「私のやり方は……」

フレイム・タンは、にやり、と満面の笑みを浮かべる。

「思想で人を殺せます」

自分の手札のトランプを捲ったように、一瞬だけ無邪気な顔になって彼女は言った。

「煽動、混乱、情報誤認、情報操作、権謀術数、後は人質とか。卑劣な事でもやりますね。取り敢えず、死んで貰う事を決め込んでいるので、手段は自殺とかが実は一番よくて。良心に訴えかけて自殺して貰う、っていう手段も使っていますよ。情報操作で貴方の子供は殺められたとか。組織は瓦解したとか。誰々は裏切ったとか。ターゲットは絶対に殺してやろうと思っているので。私は自分の手を汚して、ナイフとか火薬使うよりも。もう、首吊って貰うとか服毒自殺させる方が得意で得意で」

「凄いな？ 話聞いていると。つまりは、こう？ 殺害方法は自殺して貰う事なの？」

「ええ。正確には、自滅して貰う」

「いない！ 私は初めて見た、お前のような酷いの。本当に酷い！ 標的の子供でも親でも殺すの？」

「殺します。しかも、罪は他人に擦り付ける」

「良心の呵責とかまるで無いのか？」

「神の裁きだと信じて行使しています。悪性の遺伝子は抹殺するべきだ、と。私のイデオロギーで捏造した神の名において、審判を下すんです」

「最低だな？ 人間のクズだろ？ お前は人間のクズだ！ 素晴らしい」

私は猛烈に熱烈な声援の拍手喝采をプレゼントする。

「まあ、真面目に思うんですがね」

負が一瞬だけ、鋭利な刃のような形状をする。

「殺人礼賛のバカ共の子供も親も死ねって思いますよ。本当に。あんな人達を放っておいたバカも全員死ね、と。世界はそういう人達によって構成されている。だから、私のようなのが誕生

した。歴史を振り返れば、当たり前法律でしょう？ 一家根絶やし。でもまあ、私も屑だって
実際思いますし。災厄と飢餓と疫病と火種と戦争と反逆と処刑の嵐を撒き散らしてやろうと。い
つもいつも壊れたクラシック・レコード機のように、繰り返し繰り返し考えていて。やっぱり。
この世界って、血で血を洗い流す浄化しかもはや考えられないと思いますし」

満開の散った桜のような天空の星々を眺めながら。

不思議で透明な、澄んだ眼のような顔で。

「メビウス・リングも倒せると思っているかあ……それは流石に自分でも気付きましたよ
。なので、今、決めました。メビウス・リングも倒します」

フレイムは当たり前のように私に告げた。

「理由は？ 何のために？」

「この世界が憎いから」

畳み掛けるように。殺意が急速に膨れ上がるのが分かる。

「私にはメビウスとリフリジレイターの両者がどういう関係になっているのかなんて、どうでも
いい。神話か何かを形成しているのかも関係が無いですよ。取り敢えず、私にとって重要なのは
この世界を少しでも多く破壊したい。ルールとかストーリーとかを破壊したい。それだけなん
ですよ、それだけの為に私は生きているんです。たとえば世界存在が物語だとして、アカシック・
レコードが本当にあったとして、思うに、私は刻まれていないんですよ。きっと。私の名前は書
かれていないか、あるいは名も無き者として闇に葬られる存在で。そんなのは屈辱以外の何物
でも在りえない。なので徹底して世界に反逆します。私は能力者として余りにも弱い。しかも、能
力が進化せず伸びない。これは、最悪ですよ。なので、能力に頼っていない。私は私の言葉に頼
っているし、言葉によって生きています。いいですか？ 人は言葉によって死に、言葉によって
生きる。言葉は他者との関係性によって変幻自在に姿を変える、生物なんだ」

私は、何も言葉を返せない。

私に思想などというものが存在するのだろうか？

「私の眼球は夜を見ている。私は世界が絵画のように見えて。美しい物を手に掴めない」

フレイム・タンは哀しそうに呟いた。

私には、彼女の孤独など分からない。しかし。

私は笑いながら果肉ジュースを啜った。

「いいか。世界は滑稽だ。世界は嘲笑に値する。そんなに深く世界について考え過ぎるなよ。病
気はギャグなんだよ。殺人もギャグだ。自殺もギャグ！ 死なんてものが、壮大な冗談なんだか
らな。お前はな、考え過ぎなんだよ。世界はこんなに笑えるアトラクションなのにそれを楽しも
うという努力が足りない。

「……本気で云っているんですか？」

「当たり前だろ？ こんなに世界が発狂しているからこそ、美しいんだ。そうだ、世界は美しい
」

「ニヒリズムですよ。虚無主義。ふと思ったのですが……成る程、我々、どちらも実質上は、人
間が陥りやすい観念に入っていて、そこから一歩も出てない気がしますね」

甘名よりも、やっぱりな論争相手。こいつは、決して譲歩というものをしないだろう。

なので、会話をズラした。

「お前、能力名はあるのか？ 何なら、私が名付けてやろうか？」

「能力名は……、」

両眼がよく紅い。覚えている。それは。炎猫の眼。

「『シャドー・フレア』。今、名付けました。黒い呪文と炎猫の墓標より生まれる影の焰」

「どういう力なんだ？ 私に試してみろよ」

一瞬の間。

フレイム・タンは隠し持っていた短刀で瞬時に、私の顔を切り付けた。

鮮血が咲く。彼女は短刀を翳している。その切っ先に付いた血を撫でている。

「吸血鬼能力、カニバリズム能力、って揶揄していますよ。血を奪って、他人の力を食べる。他人の能力を借りる力ですね」

彼女の手から、小さな宝石のような者が生える。それはどうやら幻影のようなヴィジョンだった。

ホログラフのように透明。周囲の思念がそれに収束されていく。

「ちなみに“火吹き”は、炎猫の能力を借りているんですよね」

収束された、思念がやがて情念となり収束されていき、光の奔流となる。

「キルリアン・ストリーム」

彼女の翳した手から出た光が、私の右頬を高速で爆撃する。

私の背後は爆破炎上して、建造物が崩れていった。

「惜しい……。頭部を吹っ飛ばせると思ったのに」

「使い方、教えてやろうか？ そもそも、ちゃんと周りに充満している負を集めないと威力が出ないぞ？」

私は真面目にその後、数十分程、私の能力の真髄について彼女に高説し。

たとえば、私の殺し方などについて熱心に教えた。

貴方に、本当の事を教えましょう。私の主は、私自身なのです。彼女は、そう囁いた。

その意味を理解して。彼女の性格の、本質のような物に触れた。

ヘイト・クライムなど……存在しない。

あれは、只の髑髏だ。

全ては彼女の演技だ。

何処までが嘘かは分からないが。取り敢えず、私は彼女を信用する。

十

「私の世界に対する愛は凄まじい物だろ？」

「全ては君の前では赦されているんじゃないのかな？ ブラッド・フォースもフレイム・タンも、ブラック・スペルでさえも。まあ、オレからしてみたら、世界をコケにしているだけにしか見え

ないけどな。オレはお前が優しいとも、ましてや善人だともとても思えない。シリアル・キラーもテロリストも強姦殺人鬼も等しく同じだ。普通って奴らとな」

それは、飯時前の甘名との会話だった。

少しずつ、鬱状態だった甘名は元気を取り戻していつている。

彼は、元気な時は。ひたすら性格が悪い。

「というわけで、徹底的にぶっ壊して、ぶち殺して、浄化しよう。そうしよう」

『裏原宿』にあるレストランで、私達は食事をしていた。

円卓上の席には、私の他に甘名、ネオ、ブラッド、フレイム・タンの五名がいた。

まず、ネオが口を開いた。

「なあ、ヒスイ。単刀直入に言う、俺はそこの白黒のパーカーの女が不可解で仕方がない。俺らの敵なんだろう？ そいつはあの骸骨の副官だろう？」

「ああ、別に一緒にメシ食うぐらいいじゃねえか。なあ、甘名、どう思う？」

甘名は陰鬱な顔をして周囲を見ていた。

「オレは.....正直、言う。ネオ・ロギスムもまだ信用していない。加えて、このメンバーは何なんだ？ そこにいる水色のロリィタ服を着ている奴が一番、怖くて怖くて仕方がないんだけどな。何だよ、この尋常ではない負のオーラ。殺意は。こんな奴からは、今すぐ離れてしまいたいんだ」

甘名は完璧に怖いものを見る恐怖の表情をしていて、完璧なまでに何の恐怖も無くブラッドの傍で暴言を吐いていた。

私は少し呆れていた。

甘名は鬱であるのにも、関わらず。

やはり、彼の持っている不遜心は無くなっていない。

「そいつはそうだ。ドーンS級殺人鬼の頂点にいる異常人間の中の異常人間の殺人狂で解体魔なんだからな。でも、私の友人だ。用件があって連れてきたのさ。そこのネオ・ロギスムと共に戦いに備えるためのな」

「インソムニア。僕は一体、何のために連れて来られたんだい？ そこにいる大剣の両性具有者は先ほどから僕に何かを言いたがっているという目をしているんだけど」

「あの、不眠症さん。私はそこのニンフォみたいな奴が信用出来ません。今、ここではっきりと宣言しますね。私は歓楽街の奴らが大好きなんです。心の底から軽蔑していますとも、ええ。私は貧民街出身で、のた打ち回って這いずり回って生きてきましたが、ニンフォ達ははっきりと軽蔑してきましたとも。そこのカン.....名前忘れましたが、出て行ってもらえませんか？」

.....終わった。

かなり駄目だ、この組み合わせは。

信用というものが、絶滅してやがる。

ブラッド・フォースは一見、飄々とした気分屋に見えるらしいが、実はかなりのポリシーを持っている奴だ。

私は挙手する。

「なあ、誰か話し合いをしようって意見が同じな奴はいないのか？ それに同意する奴は私と同じように手を上に挙げてくれよ」

青い悪魔以外は片手を上に上げる。ブラッドの方も、腕こそ動かしはしなかったが、目でそれに応じていた。

そして私以外の全員が全員、相変わらず誰かに対して嫌悪感の表情を浮かべていた。

「さて、一応、纏まってくれた事に感謝する」

何も纏まって無いが、何もかもが纏まった事にして、会話を進める事にした。

「まず、計画を話す前に、それぞれの不満を言っておいてもらいたい。その話し合いの上で、気に入らない相手がいる場合は抜けたってかまわない」

私は甘ったるいパフェからメロンを突付き出し、それを口に頬張る。

「まず、四人全員の話を聞いた限りではだな」

そしてメロンの皮ごと食べて。今度はパフェの奥にある大量の蜜柑にスプーンを伸ばす。

「それぞれが反目し合っているものを解消すべきだと思うんだな」

ここのパフェは最高だった。

私はお代わりを店員に注文する。

「何からがいいかな。そうだな、ネオ。お前から、まずフレイム・タンを厭う理由は何だ？」

「こいつは裏切ると思う。以上」

「もっともだ。私は裏切られる事も前提に置いて彼女を招き入れているよ。裏切る素振りがあれば、容赦なく切り殺してやってくれ。以上」

ネオは、舌打ちすると。イヤフォンで聞いているナイン・インチ・ネイルズの音量を上げた。

「じゃあ、ヘイト・クライムの部下、お前の方は甘名を軽蔑していると言ったな？ 安心しろ。こいつはニンフォじゃない、ただ綺麗な顔をした双剣使いの美少女顔の男だよ。ほら、外見は似ていても、独特のオーラは違うだろ？ それに、それを言い出したら、ブラッド・フォースだって、同じじゃねえか」

フレイム・タンは大きな炎の溜息を吐いた。

露骨だった。

「……確かに……。分かりました。……では、ネオ・ログスムさん、不眠症さんの言ったとおりです。私の事は、裏切ると思ったら。ただちに殺して下さいね」

フレイム・タンは飄々とそう告げる。

……まあ、裏切りますけどね。と、小さく呟いたような気がした。私は聞かなかったフリをした。

甘名は渋面を作り、パスタにフォークを突き立てる。

「じゃあ、最後に。甘名、知ってのとおり、そこの金髪サックス・ロリィタ服の男はドーンS級クリミナル、青い悪魔・ブラッド・フォースだ。紛れもない本物だ。何で、私の知り合いなのかはこの際、どうでもいい。お前らはこいつを警戒しているし、怖れ惧えているみたいだが、気にするな。こいつは、無益な殺生をしなくなったそうさ。メビウス・リングの影響でな。たとえ、お前らがこいつを殺しにかかったところで、お前らが殺される事は無い。もっとも、お前らじゃ

こいつに傷一つ与えられないだろうがな。というわけで、この件は終了。本題に移ろうぜ」

「……即効でまとめましたね」

フレイム・タンは呆れた顔で携帯を弄っていた。

趣味でやっているコミュニティサイトの日記に書き込みをしているみたいだった。

「殺すと思うよ。彼らが僕を殺そうとしたら」

ブラッドはあっさり私のフォローを叩き潰した。

もう、私は指揮官、まとめ役なんて金輪際やるものか、と心に誓った。

本当に、どいつもこいつも、協調性やら調和とやらが、一切無い。

「もういいよ、お前ら、それよりトランプしようぜ。大富豪でもポーカーでも。賭けとか無しな。また、殺伐されるのはごめんなんだよ」

それから、しばらくの間、沈黙が訪れた。

何で、私の周囲に集まってくる奴らは馬鹿ばっかなのか、と思い悩んだ。

世界には馬鹿しか存在しないんじゃないか、と真面目に考え始めた。

こいつらに、コミュニケーションという概念は存在していないんじゃないか、と。

そして、思い出した。そういえば、いつも私達、特に私と甘名の関係なんてそんなものだった。

。

甘名はネオに断り、ネオのアクアリウムを触ると、色々と構造を調べていた。

綺麗な音色が鳴り響く。

「オレの方が楽器を弾くのは巧い。ギターを弾いているし、剣士だから、これも似た構造だから。もしかしたら、オレにも使えるかも」

ネオは嫌な顔をする。

「はあ？ ちょっと待て、聞き捨てならねえ。本当に、お前に俺のアクアリウムは使いこなせるのかよ？」

「君以上に巧く使いこなせると思うよ」

二人はそれぞれ、頭がイッていた。

片方は、酒。片方は、安定剤の飲み過ぎで。

「使ってみろよ。俺が相手してやるからよお」

「じゃあ、君にはこれをあげるよ」

甘名は、ネオに愛用のツイン・ソードを投げて渡す。

強めの向精神薬でオーバー・ドーズ気味の甘名に対して、アブサン酒の飲み過ぎで完全に陶酔しまくって。

あっちの世界に旅立たれている、アルコール依存症気味のネオ。脳のストッパーが外れている人間を見るのは、この上もなく楽しい。

二人の狂人の戦いは始まった。

彼ら二人の手にはそれぞれ違う獲物が握られていた。

甘名の両手にはそれぞれ右手にアクアリムと左手に緑のエレキ・ベースが握られてる。エレキ・ベースの方は、相変わらず、彼の能力で、どっかから出現させたみたいだった。

ネオの両手には、特殊樹皮で加工された大型のアコースティック・ギターが握られていた。両手剣なんて、使えるかよ、って投げ捨てて、甘名の愛剣をそこら辺に放り投げて、彼の怒りを買っていた。

甘名はともかく、ネオの方は、ギターをどっかから持ってきたのかな、と考えていると、そういえば、このカフェは、ライブ・バーになっていて。楽器が大量に置かれていた。

店の楽器を勝手に武器にして二人の第二ラウンドは始まる。

ギターとギターを手に手に何やら、仲間内で殺し合いが始まっていた。

「ねえ、不眠症さん。どうします？」

フレイム・タンが訊ねた。

「……いや、まさかあそこまで馬鹿だとは。私の計算違いだ。好きなだけやらせておけばいいんじゃないのか？ 内ゲバぐらい、別に。だってさ、馬鹿には馬鹿の流儀ってものがあるんだろ」

フレイム・タンは、携帯を閉じる。

「そうそう、また情報収集してきましたよ。そういえば。炎猫の宮殿の地下にね、かつて彼女とアイス・エイジの覇権を争って敗れた女性がいるんですよ。そいつを、炎猫は解き放つみたいですね。護衛として」

「へえ、そんな奴がいたのか、そいつはどれくらい強いんだ？」

「多分、朽閻さんぐらいじゃないですかねえ。詳しくは分かりませんが、何か、度々、拷問されまくって、身体中の損傷が激しいらしいですよ。でも、そうでもして弱らせておかないと、いつ炎猫が寝首をかかれるか分からないみたいなんで。……今まで生かしておいたのは、秘密兵器として使うためだんじゃないですかねえ。今回みたいな時のために」

「ああ、そうかあ。じゃあ、そいつはブラッドに殺してもらうさ、何も問題無いな」

まあ、そうですね。とフレイムは苦笑した。

何故、此の店を選んだのかは、別に店の内装が好みだったからじゃない。

ブラッドの情報経由で、メビウスが此の店にいたからだった。

メビウスは店の奥に鎮座していた。

私はメビウスに何も話掛けなかった。

メビウスの方も、私達を気にしている素振りは見せなかった。

私はメビウスの座っている席の前に座った。

誰が誰と戦うのかは、もうある程度は決まっていた。

少なくとも、私は決まっていたし。ネオも決まっていた。

ブラッドと甘名は、流れに任せる、といった風情だった。

それでいい、と私は思った。

メビウス・リングは静かに私達全員に告げた。

「世界は終わるな。炎猫はリフリジレイターの召喚を成就するだろう。お前達はお前達の出来る事をやるといい。私はそれまで、しばしの間、向かわない」

寛大なな、と私はメビウスに言った。

メビウスは何も答えなかった、ただ、紅茶を飲んでいた。

そして、夜が明けた。

皆、好き勝手に、好き勝手なルートで。アイス・エイジへと向かっていった。

十

アイス・エイジの全景を見渡せる場所が果し合いの場となっていた。

濁った大地の上に、私達は立っていた。

空は禍々しいまでに、青く晴れ渡っていた。

砂塵が吹き荒れ、身体に砂粒を叩き付けてきた。澱んだ大地の色、何処か哭いているようだった。

そうだ。空も大地も涙を流している。

アミュレット・コーティングした白黒格子色のラバーソールで硬い大地を踏みしめる。

私は最後の決着とか云うものを付けるべく、そこにいた。

先に此の場所に辿り着いたのは、私の方だった。

しばらく暇だったので、私は相手を嵌める用意を取り敢えず、して置いた。

私としては非常にどうでも良い事ではあったのだが。相手からしてみると、違っているみたいだった。

顔が病んでいた。人目で分かった。

殺気、殺意とかではない。暗い、支配を望む加虐性。

圧倒的な、支配の意志。

自身の全存在を掛けて、相手を凌辱しようとする決意。

ブラック・スペルは傷の完治もままならないまま、そこに立っていた。

殴殺され、頭蓋が陥没していくような錯覚。私は嘲笑を持って、それを返した。

お前はもう既に、負けているんだよ。

こいつには、コンプレックスしか無い。

さあ、私を殺してみろ。

私を犯してみろ。

お前の敗北は目に見えてやがるんだ。

お前の言葉は、もう敗北しているんだ。

どっちが負けるかぐらい、もう分かっているだろ？

さあ、私の頭蓋へ弾丸を撃ち込んでみろ。

そいつをシルバー・ブレードにしてみろよ。

出来るわけが無いんだ。

単なる実力の差なんてもんじゃない。

私達の実力はおそらく均衡しているだろう。

だが、お前に勝ち目なんてものは無い。

執念の塊のような奴ならば、私に勝てるだろう。だが、コンプレックスを剥き出しの奴が、私に勝てるわけが無いんだよ。お前はもういいんだ。

どちらの殺気が上なのか。どちらの殺意が上なのか。勝敗を決しよう。私達は似ているようで、おそらく似ていない。私達の悪意はきっと、似て非なるものだろう。私は世界の不条理さに対して毒づいてきた。こいつは、自身の劣等感の代償として、他者を貶める事を願った。さあ、戦おう。殺しあおう。少なくとも、私が負けるなんて微塵も思っていない。悲しいかな。お前は既に死相が出ていたんだ。

私は岩場の巨石にもたれながら、座っていた。

数メートル前で、頭を掻き毟りながら、鷲のような髪型のガンマンは佇んでいた。

「そういえば、お前の住んでいる表世界では男が女を犯す事が出来るらしいな。羨ましい話だ。となると、……ふと待て。その話が確かならば、俺はお前を凌辱出来るんじゃないか？ いい考えだな。俺は今から、お前を犯してみるよ。ぶち込んでみる。そうすれば、お前は俺と同じような屈辱を味わってもらえるのかな？」

私は哄笑した。笑いが止まらなかった。

「私もなんだ」

私の身体に貼り付いている、二つの刺青は、今、私の身体から離れている。

黒い呪文のスレイブ達は、私の周囲を取り囲んでいた。どれかは、拳銃を持っているのだろう。

先に動いてから、数秒で決着を付けるつもりでいた。

黒い呪文は動く。

彼は、ポケットから拳銃を引き抜いていた。

私の大鎌は、既に彼の背後に周っていた。

私の三つ首竜は、変形して、いつでも私の身体を守れるように私の周囲を取り囲んでいた。徹底的なまでに、私は彼に対して、何の勝機も与えるつもりは無かった。

「お前は弱い。私がお前に言いたい事は、ただそれだけなんだよ」

黒い呪文の拳銃が私のこめかみに狙いを定める前に、私の大鎌は、彼の腹に刺さっていた。負傷していた場所を狙った。

これで、彼の心を完全に折るつもりだった。

大鎌の刃は彼の身体を貫き、私の元へと向かっていく。鎌の先端は、私の顔のすぐ横にある岩へと深々と突き刺さる。

「お前の負けだよ」

私は無情に、苦痛で全身を痙攣させている男に告げる。

「お前の負けなんだよ。急所は微妙に外した。なあ、もう分かっただろ？ 私はお前よりも強い。三回やって、三回とも私の勝ちだろ？ 私はお前の命に興味が無いんだよ。私は正直、アイス・エイジを引き上げたい。最初からずっと云っているだろ？ お前らの世界になんて、興味が無いんだよ。お前らのやる事にも興味が無い。ネオが炎猫を倒したい、ってのにも、正直、もう呆れている。面倒臭い。ただ、私は私の中の、何かを解消したくて、ここでお前らと関わった。い

い加減、ウンザリしているんだ」

私は立ち上がる。

「お前の命なんざ、興味が無いよ」

私は他のメンバーの動向を探るべく、アイス・エイジの街へと向かう事にした。

黒い呪文は、無言のままだった。もう、会話をする体力など残っていまい。

致命傷にしてしまったかもしれないな、と思った。おそらく、また腕達で傷を塞いで、生存を図ろうかと思っていたが、もしかしたら、私の言葉は、彼の生きる意味までも砕いたのかもしれないかった。でも、やっぱり、どうでもよかった。

私はオブジェとなって動かなくなった彼を後にする。マカーブルの鎌はまだ引き抜いていない。屈辱だろうな、と思った。

何かが、私の腹の中を通り抜けていた。

どうやら、私は負傷したらしかった。

地面を見る。

すると、そこには腕が生えていた。

私は動けなかった。動けた筈だろうが、動けなかった。

多分、彼の執念に感服したんだろう。そういう事にしておこう。

腕は拳銃を握っていて、弾丸が放たれて、私の頭部へと向かっていった。

私の頭の一部が、柘榴へと変わった。

もう一撃、銃を持った腕へと変わった弾丸から放たれた弾丸が、私の頭部を通過させる。

私は地面に倒れていた。動けなかった。指一本すら、動かせそうになかった。

酷く、遠い場所で呟かれたような気がした。何か言っていた。

「……………性器にさあ。命中させたかったんだよ……………。腹じゃなくてなあああ、悔しくて、悔しくてさ、でも軌道がそれてやるのよなあああ……………」

ブラック・スペルは私の前に立っていた。勝ち誇ったような顔をしていた。

「ああ、そうだそうだ。実はな。傷口の中に、拳銃を持った腕を隠していた。罨、張ってみようかって思ったんだよ。ずっと痛かったぜええ。異物を傷口の中に押し込めて隠匿し続けるのはなあああ……………」

ブラック・スペルは。

ブラック・スペルは、無理矢理、私のダンス・マカーブルの大鎌を引き抜いて。腹から、大量の内臓を吐き出していた。肋骨も見えた。口からは大量の血を吐いていた。かろうじて繋がっている、背骨さえ無ければ、上半身と下半身が分断されていたかもしれない。

私と彼との距離は、わずか、一メートル半、程度だった。

“最後の最後に、相打ちに持ち込みやがったな。”

私は思った。

お互い、致命傷らしかった。

すぐに、黒い呪文も、地面に崩れ落ちた。腹の中身がバケツを零したような音を立てて、転がった。

それから、数十秒。

あるいは、数分、数十分程度の時間が流れていた。

「運が無いよ。お前は。最後の最後まで」

私の頭部の傷口は完全に再生していた。

「頭蓋骨だけ、正確に削っているよ。脳組織を破壊してないんだよ……。何でかな、人生、ってのは。……私はもう、何も言いたくないんだ……」

もう、死体なんじゃないかな。私は転がった黒い呪文の肉体を眺めていた。

私は腰を下ろす。

こんな時、泣けばいいのかな、と。

でも、私は涙を流す事を忘れてしまっていた。

そして、何で泣きたいのか分からなかった。

だから、代わりに、私は彼に、私の素肌を曝け出す事にした。

「なあ。私もメビウス・リングと同じなんだよ。見せてやるよ」

私はスカートと下着を脱いで見せた。

私の足の付け根から先には何も付いてはいなかった。

体毛も無く、肉の裂け目など無かった。

「まあ、こういう事だ」

ついでに、上のTシャツも脱いでみせた。曲線状になり、少しだけ隆起こそしているが、その中央には、本来女性が有しているべき突起物が無かった。

「不死の身体にされる際に、私は女性器を切除した。性欲も性感帯も無いし、勿論、妊娠する事だって不可能だ。私もメビウスと同じように女性の姿形を持っはいても女性では無いんだ。強いていえば、無性だ。私は男でも女でもないんだ。なあ、私は性交不可能な対象を凌辱する事は出来ないと思っている。穢せる、穢せないとかの概念にすら踏み込めないと思っている。お前が私を犯したところでそれはお前の自慰行為でしかないんだよ」

私の声は酷く冷淡だった。

「羨ましいな……」

ブラック・スペルは涙を流していた。

私は服を着る。

黒い呪文は放心していた。

歓楽街には、存在しえないものだった。

これが、私なのだ。

私はまず、生と死の先を踏み越えるためには、性別という概念を破壊するべきだと考えていた。甘名やネオとは違うベクトルだが、私は性という概念を超えている。

異性装の甘名、ブラッド。両性具有にしてどちらの性別にも変形出来るネオ。そして、私は性を持たない生物だ。

私は体力を完全に消耗していた。否、精神力かもしれない。

しばらく、岩陰に身を潜める事にした。

私はそっと、スキゾ・フレニアを飛ばした。他の者達の現状を見るために。
スキゾ・フレニアは低空飛行をしながら、貧民街を越えて、歓楽街近くまで向かっていった。
そして、私は歓喜に震えた。
私の好きな最高の殺人鬼は、私に向けて最高のアートを提供してくれた。

十

どんなグロテスクな世界も、崩壊の前では終わる。そう、ブラッド・フォースは、社会を切り刻む破壊者なのだろう。

彼は何処までも優雅だった。

人間の四肢を切り刻む時、ばらばらにして、その存在が持っていた元々の意味を解体する時、彼からは圧倒的なまでの光のオーラが放たれて、彼は輝いていた。

彼が踏み締める世界は、何処までも何処までも美しかった。

まるで地上に降り立った楽園の断片のような。

歓楽街の中央に、彼は佇んでいた。

そして、私のスキゾ・フレニアの姿を見かけると、それを合図に、彼は実行した。

針、針状のものすら、彼にとっては、刃物、所謂、ナイフ、と類似するものと認識されるみたいだ。だから、試しに私は彼にこんな事は可能なのか？ と訊ね、要望した。

可能かどうか分からないけれども、やってみる、と彼は答えた。

私がリクエストした殺し方だった。ブラッドはそれを忠実に実行してくれた。

まさか、ここまで鮮やかに出来るとは思ってもいなかった。

ずっしりと重い、巨大な箱。

女の姿形に似ている、箱だ。

……………。

歓楽街の住民達は。

青い悪魔の能力で、病原菌が広がるように。

次々と。

“鉄の処女”になってしまった。

阿鼻叫喚の嵐が吹き荒れる。

鉄の処女は次々と増えていった。

さながら、伝染する黒死病のようだった。

次々と、連鎖していき、複製、増殖していき、鉄の処女は生まれていく。

鉄の処女の数、数十、数百、数千と数を増していった。

ああ、栄華を極めた炎猫の国が滅んでいく。

ブラッド・フォースは歓楽街の人間を片端から、鉄の処女へと変えていった。その素材として使われるべく、街にある家々や様々な施設などがばらばらに解体されていって、ブラッドの能力として使われた。

瞬く間に、鉄の処女の数は一気に広がっていく。

銃弾の音が響いた。

誰かが、彼をライフルで狙撃したようだった。スキゾ・フレニアで目視する。何やら、肉体が幾つも幾つともくっ付いている女達が、何十本もある腕から、大型の銃を持って、ブラッドへと向けていた。次の瞬間、彼女達は、巨大な赤い噴水へと変わっていた。私は微笑みながら、その光景を眺めていた。

アイス・エイジには様々なものが廃棄される。スクウェアという物体がそうであったように、欠陥品の戦闘マシン達もブラッドの元へと次々と集っていく。

肉眼では確認出来ないが、おそらく一秒間に数十発、数百発程の弾丸がブラッドへと降り注いでいるのだろう。それは流星のようにも見えた。

ああ、無駄。

足を持った戦車が、大砲を撃った。空中からは甲虫のようなフォルムをした巨大戦闘機が現れて、爆弾を撒いていく。人類の一万分の一ぐらいは軽く抹殺出来そうな兵器が、彼一人のために注がれていた。

それらは悉く、彼に一つの傷も負わせられる事は無かった。

まるで、膜でも張っているように、弾丸や爆弾やミサイルは彼の肉体に行き着く前に溶けていった。金属である限り、彼へと届く前に、どれも爆発する事なく、宙へと分解していく。勿論、副次的に発生する衝撃波なども、消滅させられるみたいだった。

巨大なレーザーサーベルが伸びた。金属による襲撃は無駄だと機械達も理解したようで、エネルギー物質による攻撃に変えたのだ。

ブラッドは軽く、両手を振った。

網状の刃が、装甲をサイコロへと変えていく。網状の刃は変形して、ドリルとなった。回転するドリルが砲台を破裂させていく。

四方八方にいた全てのマシン達は、粉微塵に粉碎されていった。

あるものは、溶かされて、変形され、ブラッドの新たな殺戮兵器へと変えられていく。

誰も、彼を止められるものなどいなかった。

そう誰も。

それは、余りにもあっけの無い殺戮行為だった。

馬鹿みたいに、映像だけが早送りで流れていったみたいだった。

.....

アイス・エイジの歓楽街は、炎猫の居城を残して、全て消滅していった。

私は彼に賞賛の声を上げる。ごくろうさま。

美しい姿をしたニンフォ達。優雅な醜悪さを誇る歓楽街の女達。奇形性具。ホモセクシャル、レズビアン。彼らの全身は赤く染まり、血肉へと変容していく。

さようなら。

綺麗なもの。醜いもの。全て。全て。

さようなら。

冷凍装置に憧れた、独裁者が作り出した子供達。

たった一人の異常者によって、みんなただの鉄の塊へと変わっていくんだ。

丘から見える世界は美しかった。

凄惨な光景は、そう、美しい。

一通り、殺戮が終わると、ブラッドは酷く安堵したかのように、胸を撫で下ろしているかのようだった。彼はきっと、本当は怖がりなんだろうな、と私は分かっていた。

十

刀を携えた男と大斧を背中に背負った、身体中が縫い目、継ぎ接ぎだらけの大女。まるで、フランケン・シュタイン・モンスターのような怪物だ。

朽闇とアース・シェイカー。

フロスト・マンサー以上の実力を持つアイシクル・ナイツ。

ブラッドが殺戮を終わらせ、己の使命は全て果たしたと思った矢先に現れた二人だった。

何故、ブラッドの殺戮を止めに入らなかったのか。

殺戮を最後まで見届けた後、現れたという事は。

この二人も間違いなく、アイス・エイジの住民には何の敬意も払ってないであろう事が分かった。

まあ、今更、こんな街滅んでも困る奴なんて支配者である炎猫と、故郷である事に執着しているネオぐらいかもしれないが。

「黒い呪文は弱い。女皇の慰め物だから、側近をやってただけだ」

大女、アース・シェイカーは広い肩幅の上に、大斧の柄を置く。

大地が振動した。

そして、地面に亀裂が出来て、大量の岩石が空を舞った。その岩石達は、奇妙な鎧と化して、シェイカーの全身へと付着していった。

「俺はブラック・スペルを秒殺した事がある。十二・七秒だった。あいつの全身を切り刻んで半殺しにしたよ」

「もう既に聞いたよ。その話は。自慢話は見苦しいぜ」

私は野次を飛ばす。が、スキゾ・フレニア越しの発音なので、どうにも音声が不明瞭だった。二人は、堂々と浮かんでいる私の分身である朽ちた翼竜に対して、何の興味も示していないようだった。

「これから、炎猫を殺しに行くんだろ？」

と、思ったが、朽闇は私のスキゾ・フレニアを見て質問を投げ掛けた。

「まあな」

「じゃあ、死んでもらう。こいつを始末したらな」

出来るもんなら、やってみろよ。私は嘲笑った。

彼の右手には細身の剣が握られていた。

凝縮した大気が彼を覆っていた。しゅうしゅう、という呻き声のような音を放ちながら、朽闇は近付いてきた。

どうするかなあ。

私は頭を抱える。

「ブラッド・フォース、頼みがある。あいつらを殺してくれないか？」

私は茶化して云う。

ブラッドを殺そうとする者をブラッドが殺さないわけが無い。

だから、こいつは本当に最高の奴で。

映画館でダイエット・コーラを注文して、氷が欲しいかどうか？ のノリだ。まるで、理解出来ない。

「別にいいけれど」

青い悪魔は、あっさりと頷く。

朽閻は不機嫌そうな顔をした。

「おい、お前、俺は……」

彼は何かを言おうとしていたが、最後まで言う事が出来なかった。

朽閻は切り刻まれていった。

もう一人の、斧使い。彼女を覆っていた岩石はぱっくりと割られる。

アース・シェイカーはバラバラになった。

本当に簡単に二人を始末してしまった。

フロスト・マンサー以上の強さを持つ二人を。

それはもう、どうしようもないくらいに、簡単に。

簡単に、紙でも引き千切るかのように。

「さすが、我らがブラッド・フォース、感動したよ」

「アイシクル・ナイツとかいう人達もさっき僕に襲ってきたんだけど、全員、刻んだよ。何人だったかな。ああ、それよりも炎猫のところに向かったらどうだい？ 多分、冷凍装置の召喚はもう、完成したんじゃないかな」

「あのな……今の私の姿を分かって言っているのか？ ……再生に必要な栄養が必要だ。甘名かネオのどちらかに取ってきてもらいたい、なんなら、お前がやってくれないか？」

ブラッドは首を横に振った。

「僕は、人を殺す事以外の事なんて出来ないよ。君の口に合う料理を探して運びに行けるかどうか」

私は溜息を吐いた。

もう、私は動けないかもしれない。

「取り敢えず、私の所へ戻ってきてくれ。お願いだ。肩を貸してもらっただけでいい」

十

スキゾ・フレニアの眼から見える視界を遮断して、私の眼から見える視界へと移し変えた。というのも、私の居場所が突き止められたからだった。

ブラック・スペルは血塗れで佇んでいた。

既に肉体は死へと向かっていた。両腹に孔が開き、頭蓋骨は割れて中身が流出している。

だが、彼はまだ戦う意思があるようだった。

彼の傷口を幾つもの腕達が抑えていた。握り締めていた。銃を握る事と、引き金を押す事しか出来ない腕達だ。彼らが黒い呪文の傷口を止血出来るような機能は持ち合わせていない。

黒い呪文は精神力だけで私の前に立ちはだかつていた。

もしかしたら、もはや痛みなどは感じていないのかもしれない。

「止め、刺してやろうか？」

私は訊ねた。

「今度こそ、お前を殺してやるよ」

黒い呪文は答えた。

無数の腕達が私に銃口を向ける。

何回かの引き金が引かれた。

何発か私の身体に命中した。

額にも正確に命中していた。

それは頭蓋骨を突き破る事なく皮膚の上で止まり、弾かれて、地面に転がり落ちた。

「銃弾は本物だが、銃身自体はお前のエネルギー物質だったんだっけ。お前にはもう、銃弾を命中させて殺傷させる精神力が残されていないんだよ」

腕達は銃を取り落とす。

黒い呪文はそのまま地面に崩れ落ちた。

ブラック・スペルは膝を落して、両手をだらんと下げ。まるで祈るように、天に向かって、焦点を合わせていた。もう、彼に闘う気力は残っていないみたいだった。

どうやら、私は焦って身を隠し、回復を待つ必要など無かったみたいだった。

私は彼の元を去る事にした。

後は、ネオと炎猫の決着を最後まで見て、此の地を後にしようと思った。

正直、私に闘う力など残されていなかった。

とくん、私の胸が脈動した。不思議な体験だった。私は。

感覚としては、何と言うか、寒気ではなく、かといって歓喜でもなく。

そう、何と現せばいいのか。おそらく、この感覚を言葉にする事なんて出来はしないのだろう。どういった意思であるのか。私は哲学者ではないから分からない。

ただ、存在感だけがあった。

私は覚えている、この気配を。けれども、

いつもの、そいつとは違っていた。どこまでも、どこまでも違っていた。

黒で黒を塗り潰したような服。なのに、何故か、金色に光り輝いているかのような衣装。

縦ロール。一見、淑女風。

そういう風に、見える。

上品な女って奴なのか？ 分からない。

しかし、やはり、何か違う空間を形成している存在。あるいは貴婦人風であるが。やはり、似て否なる。それはそういった女性的でファッショナブル性を意識したモノではなく。不思議な螺旋状の振れとなっていて。

この姿こそが、そいつの完成体。これ以上のフォームなど存在しない、といったような、説得力があった。そう。そいつの名は。

魔王メビウス・リング。

ドーンのトップにして、ドーン最悪の殺人鬼ブラッド・フォースに好かれ、纏わり付かれながらも、何の興味も示していない中世ヨーロッパの貴婦人のような意匠を纏った、神のごとき力を持つ存在。神、という次元を圧倒的なまでに体現した。それは。

メビウスは一言だけ私達、二人に告げた。

「逃げろ」

伶俐に、円環は告げた。喜怒哀楽など何も無い。

私達、いや、少なくとも私は首を横に振った。

「悪いな。私は最後まで、見届けさせて貰……………」

背後から、咆哮が聞こえた。

黒い呪文だった。

何処に、まだ生きるエネルギーが残っているのだろう。この時、私は驚愕していたのだと思う。ブラック：スペルの両腕には、それぞれしっかりと拳銃が握られていた。

黒い呪文は何も迷っていなかった。

迷う事無く、そして、それが原始的本能に従うかのように、ただ行動を起こしていた。

ブラック・スペルはメビウス・リングに向かって、あらん限りの銃弾をぶち込んでいた。そう、ブラック・スペルは射精していた。権威に向かって射精していたのだ。放出した鉛の粒は流線を描いて、魔王に打ち込まれていた。

勿論。

彼の放った弾丸はたった一つもメビウスには届く事が無く。宙へと散乱し、死滅していった。円環の魔王は黒い呪文に対して、何の興味も抱かなかった。

ふと、ブラック・スペルの横に、一人の影が立っていた。

そいつは青い色をしていた。全身、青尽くめだった。蒼褪めた死神。

青い悪魔、ブラッド・フォース。

「すまない。やっぱり、見苦しいと思うんだ僕は。メビウス様は君の力でどうこう出来るような相手じゃないんだよ」

淡々とした口調で彼はそう告げる。

黒い呪文の顔には、絶望の表情が浮かんでいた。

次の瞬間、彼の顔が変形し始めた。

ブラック・スペルの顔半分の皮は剥がされ落ちていた。口が醜く裂け、大量の血を吐き始めた、両目からも血が流れ始めた。

身体を激しく上下に揺さぶられ、頭はぐるぐるとヘッドバンキングでもしているように回っていた。

……デス・ダンス。黒い呪文は死の踊りを踊っていた。踊らされていた。

真っ先に喉を潰されたのだろう。彼は抵抗するどころか、悲鳴一つ上げる事も出来なかった。赤い色をした花が咲いていた。

スキゾ・フレニアは、勿論、とっくの昔に私の元へと戻っている。

気付けば、私の右手は、ブラッド・フォースへと向けられていた。私は全エネルギーを振り絞って、ブラッド・フォースに対してキルリアン・ストリームを放っていた。

血液支配は私を一瞥する事なく、傘を回転させてキルリアン・ストリームを弾いた。

「待てよ、そいつとはまだ話したい事がある」

「助けたいのかい？ でも、彼は既に君との戦いで致命傷を負っていたし。僕が今、止めを入れてしまったから。これ以上、延命させるのは酷いと思うよ？」

よく言うぜ。必要以上に切り刻みやがって。気違いが。一撃で殺す事も出来るだろうに。

「いや。黒い呪文には少しだけ思うところがあった」

もはや、ただの赤い色をした肉の塊の傍まで来て、蹲り、私は彼の耳元で囁いた。

どう考えても、偽善を塗りたくったとしか思えない言葉を、私は吐いた。

「お前の人生はきっと価値があるもんだったよ」

鼓膜もブラッドが潰したかもしれない。

私は彼の腕を取って、口で言った内容と同じ事を指の先で書いた。

もしかしたら、彼はもはや既に絶命していたのかもしれない。

私は大鎌を振り上げると、彼の胸に向けて勢いよく振り下ろした。

「ブラッド、お前に頼みたい事がある。……メビウスはやってくれないだろうからな」

「なんだい？」

ブラッドは不思議そうな顔をしていた。

私は黒い呪文の胸から大鎌を引き抜くと、ある提案をブラッドにした。

彼は快く、それに応じてくれた。

メビウス・リングは立ち止まって、街を見下ろしていた。

「インソムニア、ブラッド。炎猫は宮殿の中央にて、リフリジレイターを召喚しようとしている様だ」

私はニヒリスティックな顔でメビウスを見る。

「ああ、倒そうぜ。お前の宿敵である冷凍野郎をな」

「だから、逃げろ、と言っている。私はお前達全てを認めている。それゆえ、私はお前達を護らなければならない」

メビウスは瞳には、確かな意志が宿っていた。私が、おそらく、ブラッドには一度として見せた事の無い、メビウスの感情。

「リフリジレイターが齎すものは混沌。混沌とは何の信念も主張も意志を存在しない。そこにはどんな価値も意味をなさないのだ。私は善悪という概念があるとして、そのどちらをも尊重しよう。どちらも進化という可能性の芽なのだから。だが、混沌から可能性は生まれない」

そう告げると、メビウスは炎猫の宮殿を目指して向かっていった。

私達二人は取り残されてしまった。でも、すぐに魔王の後を追った。

私は私達の後ろに取り残された者について思った。最初、十字架の形状をした物でも作ってもらおうかと考えたが、すぐに止めた。キリスト信者じゃないんだろなあ、いや、勿論、どの宗教も信じていないのだから。

きっとそうなのだろう。

彼は信仰などというモノはきっと憎しみの対象でしかないのだろうから。彼は何も信じられなかった。自分自身でさえも。

黒い呪文の肉体は。

粉微塵になる程、切り刻まれ。灰のように、風に漂いながら、空を舞っていた。

柄にも無い、と私は思った。ブラッドは本当に私に対して、不思議そうな顔をしていた。

せめて、最後ぐらいは美しく。華々しく消えて行って欲しい。

私はそう願う。ブラッドに黒い呪文の風葬を頼んだのだった。

十

「ブラック・スペル、死んじゃいましたね」

フレイム・タンは。

ぱたぱたと、小さな蝙蝠の使い魔から詳細を聞いて、口を開いた。

「テトラ・フォビアもどうせもう倒されているか、どうせすぐに誰かに倒されるでしょうし。

まあ、万々歳って所じゃないですか」

そこは歓楽街へ入るゲートの前だった。

甘名とフレイム・タンが二人、何かを話していた。

私は傍観する事にした。何で、この二人が一緒にいるのか考えを巡らせる。ああ、そういえば、二人は一緒に次元　　砂漠を超えとか言っていたっけ。

フレイム・タンは、アイス・エイジに戻るのが面倒だから、甘名に頼んだのだった。

二人は遠目から見て、余り仲が良さそうには思えなかった。

というか、明らかに殺伐としていた。

逆に、それが愛くるしい。

「私達が覇権を得ようと思うんです。ここ、アイス・エイジの」

フレイムは吹いた火を指で操りながら、くるくる、と旋回させる。

彼女は私の存在に気付いて、甘名に話していた言葉を止めると、私に向かって会釈した。

そして、彼女は、今度は私と甘名。

二人に聞かせるために話を進めた。

「黒い呪文は死んじゃったし、生きる命の灯火を失った炎猫はこのままだと、不眠症さんか新約言語さんかの誰かに倒されちゃいますね。まあ、どうせある意味、殆ど死んでいるような人でしたけど。まあ、もしかしたら、止めを刺すのは青い悪魔さんかもしれません。まあ、もし生き残っていたとしても、私の主が倒してくれるでしょう」

炎舌は嬉しそうだった。

本当に自分自身が天下を奪えるかもしれない。

まあ、ヘイト・クライムの側近として仕えるつもりにはなるだろうが、.....そもそも、その闇の王は彼女自身のもう一つの人格なのだが。

自分は自分で。

そのもう一人の自分の側近という立場を利用して好き放題やってやる、という意志。

彼女はやはり、心が壊れてやがる。

「私達は彼女が、冷凍装置リフリジレイトの召喚に成功するとはとても思っていないから」
「お前、裏切らない、って言ったんじゃないかったっけ？ 今から、その甘名と闘って仕留めるつもりだったんだろ？」

フレイムは何の動揺もせずに、悪びれもせずに告げる。

というか、こいつはそういう奴だ。

「炎猫を倒す際には裏切らない、って誓いましたよ。私もヘイト・クライム様も。でもそれ以外で敵対しない、とは言っていないじゃないですか。でもまあ、私は貴方と敵対するつもりは微塵もありませんよ」

そう言われて、私は何だか面倒臭くなった。

もう好き放題やってくれ。

どうせ、アイス・エイジがどうなろうと私には知った事では無いんだ。

いっそ、今より劣悪な社会を築き上げたとしても、部外者の私には一切、何も関係が無い。貧民街の住民は残っている事だし、きっと何やら新しい社会を築いてくれるさ。

何とでもなるに、達しない。

それが、あの住民全員が鉄の処女へと変えられてしまった歓楽街より、酷い場所になったとしても、私には何の関係も無い。

どうだって、いいんだよ。

「ああ、そういえば。ヘイト・クライム様は貧民街の者達を食い潰すそうです。適当に、食料を量産される数のみを残してね。間近にある歓楽街方面は、ブラッド・フォースが殲滅させちゃいましたからね」

「ああ、そうかい、頑張ってくれ。特に応援もしないが、邪魔もしない」

「ヘイト・クライム様はヴァンパイア。血肉を食らう程、強くなります。支配出来る程の力は、まだ私達にはありません。いつ不穏分子によって寝首をかかれてしまうか分かりませんからね。だからどうせなら、少しでも力を付けてから玉座に君臨したい」

「お前にとって、お前の主の吸血鬼、って結局何なんなの？ お前さ。仕えている主人も平気で利用していない？」

どっちが、主人格か、割り切っているんだろう？

「そんな事は無いですよ。私はヘイト・クライム様に忠誠を誓っていますよ」

「お前の思考回路って滅茶苦茶だな」

そんな私の悪態を、フレイムは平気で聞き流す。

.....私は、ヘイト・クライムの事を知っていた。彼女を通して。

彼はどうなのだろう？

「不眠症さんには恩があるから、貴方は殺しません。それに私は貴方相手には裏切らないという約束を実は可能な限り守りたいので。でもそこに立っているニンフォみたいな方と新約言語さん

には、ヘイト・クライム様の血肉になってもらいます。既に、アイシクル・ナイツの内、青い悪魔さんに殺された方々の屍骸をヘイト・クライム様は食べました。炎猫により削ぎ落とされた肉体は完全に元通りになってしまいました。もう、精神、ガイストのみの存在ではない」

甘名に対して、ひたすら嘘をまくし立てている。だが、フレイム・タンが強力な力を得ているのは確かだった。

さっきは平気で敵対しない、と言っておきながら、今度は私には危害を加えないが、やっぱり、私の仲間は殺すのか。

こいつは自分で発言した事を平気で忘れたり、無視したりするかタイプだ、狡猾に、言語表現をうまく操作して、抜け道を探しやすくする。勿論、後者に決まっているだろうがな。……私は、彼女の発言を改めて思い出す。

ずっと話を聞きながら、何も言葉を返さなかった甘名が、ここでようやく口を開いた。「否睡は疲れているし。あの癖の強いアルコール依存症患者は、もう一人のフロスト・マンサーを倒すために何処かに行ってしまったし。だから、オレがお前らを倒すよ」

意気揚々と、今か今かと、出番を待っていたかのようで。

「そういえば、お前達二人して今まで何やっていたんだ？ 殺し合いは今からなのか？」

私は訊ねる。

「君の友人が余りにも暴れまくるから二人して見惚れていた。ついでに言うならば、巻き添えを食らわないように、君が黒い呪文とかという奴と闘っている最中、遠く離れた景色が綺麗な場所で、そこの今からオレを殺そうとしている女と談笑していた」

「お前も奴と友達になれば、あんなの見飽きるぜ」

「遠慮しておく。命が一万分あって、一万種類以上の能力を持っていたとしても嫌だ」

甘名は丸腰だった。

それを見て、フレイム・タンは眉を顰める。

「ではそろそろ、私と戦いますか？ まずは私がお相手をして差し上げますよ。まあもし、私を倒す事が出来れば、私の主と戦って下さいね」

「言っておくけれど。アイシクル・ナイツ程度の実力の奴なら、オレは負ける気はしないな。お前の主相手に勝つ自信も、実は結構、あったりする」

甘名は自信満々だった。そして、私は突っ込みたかった。

甘名は。衝撃波などを和らげるアミュレット・コーティングのされていない、甘名の大好きなロリィタ・ブランドのイノセント・ワールドで全身を包んでいた。つまり、防具無しの丸裸みたいなものだった。

「馬鹿ですねえ。私は吸血鬼の花嫁。ヘイト・クライム様とは一蓮托生なんですよ。ヘイト・クライム様の御力は私に祝福として注がれていきます。私はずっと炎猫をぶっ殺す事を考えて生きてきたんですよ？ 私が何のカードも無しに、挑むとでも思っていたんですか？」

フレイム・タンが右手を軽く振った。

すると、近くの鉄屑が細切れのサイコロ・ステーキへと変わった。炎舌が左手を振った、バラバラにした鉄屑は岩石に包まれて、マリア像のようなオブジェへと変化した。

「炎の吐息に加えて、今の私には朽闇の鎌鼬、アース・シェイカーの岩石津波があります。それでも、私に勝てるとでも？」

「勝てるさ。他人の能力なんだろ？ それ。使いこなせるのは本人だけだと思うよ。それにな。威力。威力が明らかに劣化しているんだよ。それはもう、壊滅的に」

フレイム・タンの全身から血が噴き出していた。

彼女は意表を突かれたようだった。何をされたか分からない、といったような顔をしていた。そして、その直後。

一瞬だった。

甘名はフレイム・タンの鳩尾に、渾身の蹴りを叩き込んでいた。

「ヘイト・クライム。そういうわけで、オレはお前自身の等身大の能力と戦いたい」

気絶した炎舌の口から、大量の血液が噴出される。やがて、それは人の形へと凝固していき、全身が影のように黒い。翼を持った大男の姿となった。

ヘイト・クライムが私達の目の前に姿を現していた。

「まず、儂の能力であるが。他人の血肉を吸収して、無限に強くなる、というものではない。炎舌に貸した能力も違う」

.....

フレイムの口が、ぱくぱく、と動く。

見ていて不気味だった。

甘名はまだ、武器を出さなかった。炎猫相手には散々苦戦したが、目の前にいる敵相手には、まるで手を抜いているように見えた。

「血と記憶、だ」

勝負はおそらく、簡単に決するだろう。

「血より記憶を読み込み、その者の能力の一部を拝借する事が出来る。だが、これはあくまでわしの本来の能力の副産物だと思って戴きたい」

すなわち、ヘイト・クライムと甘名。どちらかがより、自惚れていたかによって、勝敗は決定される。

「血と血の同化だ。そうやって、吸血鬼を増やし続ける事が出来るのだ」

「やっぱり、そんな程度の能力か。何故か、簡単に勝てる確信があった。ブラッドが一瞬で解体した奴らには勝てる気がしなかったけどな。お前ごときになら、オレは勝てる」

「自惚れが強い事は好い事だが、安易に破滅を招くぞ？」

「質問するんだが。話している間に、お前は何かやっているのか？」

甘名は、大胆不敵に吸血鬼を見据える。

「お前はオレの能力は知らない」

くくっ、と彼は蔑むような声になる。

既に、吸血鬼は何やら、能力を使用する算段を始めていた。巨大な血液の渦がヘイト・クライムの周囲を取り巻く。それは、地面に倒れて気絶しているフレイム・タンの全身から流れ出しているものだった。

甘名はなおも動かなかった。

膨大に膨れ上がった血液の渦が、巨大な竜巻上へと変わっていた。

やはり、おそらく朽闇の能力と融合させているのだろうか。風の刃が飛んできて、時折、私の肉体に無数の切り傷を付けた。

甘名はなおも、動かなかった。

一、二秒程の間だっただろうか。

甘名がいた場所に、ヘイト・クライムがいた。

そして。

ヘイト・クライムのいた場所に、甘名がいた。

そして、黒い。花嫁の口から噴出された。吸血鬼の胸元には、長い剣が深々と突き刺さっていた。吸血鬼は胸の傷を塞ぐべく、まずは刺さった剣に手を伸ばした。

首。

首に深々と、甘名のもう一本の剣が刺さっていた。

ヘイトは、もうそれを無視して、甘名のいる場所を見る。すでに彼の姿は無かった。

胸元に突き刺さった剣がいつの間にか無い。ヘイトが抜いたわけではなかった。

そして、その剣はヘイトの片翼を切り落としていた。そしてそのまま、太腿に刀身が深く潜り込む。

ブラッド・フォースには遠く及ばないが。

甘名もまた、デス・ダンスの踊り手と化していた。

「もう分かっただろ？ オレの能力は次元転移なんだな。物体を移動させられる。瞬間移動を知っているから、気付くに決まっている筈なんだけどな？」

その言葉を吟味する前に、甘名は背後から逆袈裟切りに、ヘイト・クライムを二つに分けていた。

彼の肉体は勢いよく、地面に落下していく。

それは、炎猫のいる祭壇だった。

「人じゃない相手を斬るのは、本当に楽だな？ ちゃんと、今度から。人も殺せるようになりたいものなんだけどな」

彼は冷笑を浮かべた。

私はスキゾ・フレニアの眼で宮殿の内部を覗いた。

儀式を邪魔された怒りに触れて。

ヘイト・クライムは炎猫の邪眼の焰により、灰へと変えられていった。

邪眼の能力は彼女の怒りの度合いによって上昇するのか、それとも私達相手には、小馬鹿にして、手を抜いてレア状に焼いてきたのだろう。

神聖な儀式を邪魔された吸血鬼の場合は、独裁者の本気の怒りを買ってしまったようだった。

「フレイムはさ。権謀術数に長けたマキャベリストとしての素質が高かったから、オレの情報ぐらい知っている、熟知している筈だったんだよ。でも、炎猫に対する警戒心が強過ぎて、オレみたいな奴に対する情報収集を怠っていた。それが、お前達の敗因かと思う。……っていうか、フ

レイムの奴、オレの事、ニンフォ、男娼と勘違いしていたからな。屈辱的だったな。しかし、それが一番の問題だったと思うな」

フレイム・タンとヘイト・クライムを倒した際。

甘名は、纏っている服も含めて、完全に無傷だった。

そして、彼は地面に腰を下ろして言った。

「ああ、オレ、もう闘えない。面倒臭くなってしまった。後は、好きにやればいい」

勿論、甘名は自惚れから、彼らと闘っていたわけではない。

彼はすぐにフレイムと吸血鬼の能力を把握した。

そして、フレイム達は甘名の能力を知らなかった。そういった優位に立ちつつ、甘名は敢えて愚鈍に振舞う事で、一步間違えれば、あっさりと死んでしまう闘いにおいて、集中力を限界まで研ぎ澄ませて。短期決戦に挑み、勝利を得たのだろう。

私は、次はネオを探しに向かった。

十

下水道だった。巨大な下水道の中で、ネオ・ロギスムとテトラ・フォビアが戦っていた。朽ちた配水管から、汚水が流れ出して、それがどす黒い深淵の竜のように渦を撒きながら、水飛沫を上げている。汚水を浴びたネオの身体は、所々に炎症を引き起こしていた。何だかよく分からないが、有害な物質がかなりの量、汚水の中には含まれているのだろう。大量の骨の魚が、汚水の中を蠢いていた。パイプ管は、まるでヒドラのように大量の首を廻しながら、毒液を吐き続けている。

テトラ・フォビアってのは、ばらばらにして、そのものが本来持っていた意味を破壊していく存在なのだろう。まるで、クトゥルフ神話の神々のような姿をしたそいつは、あらゆるおぞましきよりも、ブラック・ユーモアのような滑稽さを醸し出していた。

ネオの試練はまず何よりも、この魔物から受けた恐怖を拭い去る事だった。

ネオは、まず男の肉体になって筋力を上昇させて、ギター・エッジ大剣「アクアリウム」でテトラの顔面へと振り下ろした。

テトラ・フォビアの頭は吹っ飛んでいた。激動の電気球体によって、四肢も弾け飛んでいく。ネオはすぐに、女の姿へと変形する。

ネオは更に叩きつけるように、ゴーストを放って、テトラ・フォビアの肉片を汚水の中へと沈めた。その後、何度も何度も電気を水の中へと流し続ける。

ネオは憔悴して、そのままパイプを背に倒れた。彼の目は何かに打ち勝ったような顔をしていた。テトラ・フォビアにばらばらにされた時、一体、どんな光景を見たのだろうか。四肢が離散している間、どのような感覚の中で生きていたのだろうか。彼から何も聞かされなかったし、訊ねようとも思わなかった。きっと、地獄の光景を見たのかもしれない。無限の苦痛の中へと沈んでいく阿鼻地獄へと堕ちていくもの達の悪夢。あるいは、天国だったのかも。醒めない永遠の夢の中で、安らかな寝息を立てて、生きられる。

幸福、恍惚、快樂。それらの全てを見せてくれる力を、テトラ・フォビアという奇形体が有しているのかもしれない。

ただ、どちらのベクトルへと向かう感覚も。ネオは今、打ち破ったようだった。

精神的にはテトラ・フォビアを退け、倒した。

だが、目の前に立ち塞がる異形の怪物を、ネオはまだ倒す事が困難のように思えた。

ネオの疲労は相当の物だった。

早朝、といっても、もう昨日の事になるが、誰よりも早くネオは店を後にしてアイス・エイジへと向かった。今度は、しっかりとカスタムしまくってスピードが出せるようになった、キャタピラの付いた車を買って向かっていった。

私はそれから数時間を過ぎてから、スキゾ・フレニアに跨り、半日かけて街付近へと辿りついた。次元砂漠を平気で簡易移動出来る甘名とブラッドは更に、遅れてアイス・エイジへと向かったみたいだった。

ネオは真っ先にこの街に付いて、ずっと、このテトラ・フォビアと闘っていたのかもしれない。となると、少なくとも、半日近くは激戦を重ねてきたのだろうか。

私は気付けば、三時間近く、黒い呪文と闘っていた。肉体はぼろぼろで、もう再生速度が追いつかない。意地の張り合いの消耗戦だった。だが、私は充実していた。

ネオとテトラ・フォビアの闘いはどうなのだろう。

炎猫と戦う前に、勝てる気がしない。そのような表情が、ネオの顔から浮かんでいた。

ネオはきっと。

劣等感の塊なのかもしれない。心の底に押し込めて、表層には出さないだけで。

おそらく、ネオ・ロギスムの実力、戦闘力は私や甘名よりも低いのだろう。

ネオはおそらく、此れまでの人生の間、炎猫に復讐を誓う事のみで生きてきた。

たった一人の存在を殺すために、生きてきた。

その事に関する善悪は私には何も興味が無い。

だが。

ネオは凡才、としか言い様が無かった。

ブラッドを出すまでもなく。私か甘名ならば、テトラ・フォビアを安易に倒す事が出来るだろう。なあ、ネオ、そいつはブラック・スペルよりもヘイト・クライムよりも、弱いんだよ。おそらく、こいつの能力は精神に影響を及ぼす物なのだろう。精神攻撃において、私は此の程度の敵に負ける気がしないし。甘名も、おそらく打ち勝てる。

加勢しようかと思ったが止めた。

私は見守る事にした。結果として、ネオが敗北する事になったとしても、私はその運命を受け入れるだろう。

ネオは叫んだ。

「また、溜まった。お前にまた、喰らわせてやるよ」

ネオは男性姿でギター・エッジ「アクアリウム」を使って、剣を振りながら音を発する事によって腕力などや敏捷力などの威力を底上げする。

ネオは女性姿でトランペット「カロン」を使って、霊体エネルギーを集め、ゴーストを操る。

ネオの通常の肉体は両性具有体である。普段は、男性形態の電気を操る力と、女性形態のゴーストを操る力は微量にしか操れない。ある程度まで能力を使わないと、片方の異性の形態へと変形出来ない。

更に、片方の性になりエネルギーをマックスまで引き上げて消費させないと、両性具有の肉体へと戻れない。

なあ、ネオ、この際だからはっきり言いたいんだよ。

お前の能力は効率が壊滅的に悪過ぎる。

しかし。

片方の性から、もう片方へのシフト・チェンジの繰り返し、それを短期間の内に繰り返すと、両者のエネルギーが融合した能力が生まれる。

これは、ネオがあっさりと私に教えてくれた、ネオの最強必殺技だった。

ネオの最強必殺技は、音とゴーストを組み合わせる事によって、何故か奇妙な科学変化らしきものが生まれる。科学、何ていう学問が此の魔術や異常な能力者達が溢れる世界の前にどれだけ説得力を持ち得るのかは不明だが。

ネオは私にこう告げた。

幽霊と電気は著しく酷似していると。

それは俗説だ、と私は言ったが、少なくともネオはそれが類似していると考えて、それをそのまま能力にしてみた、と言った。

音という媒体を組み合わせる事によって、どうやらネオはゴーストを更に進化させる力を有しているみたいだ。

テトラ・フォビアは怖いようにも見えた。

だが、肉体を変形させて、またネオを喰らおうとしていた。

ネオの肉体は、異常に発光していた。そう、何度かの変身を繰り返し、戻す手順を踏んで、この状態に持っていったようだ。

「これでお前との闘いの最中、四回目になるよな。この技を使うのは」

やはり、相当、消耗している。

テトラ・フォビアの周囲に、発光する魚の群れが現れた。

ネオの周囲、一面に光を帯びた魚が出現している。

水族館。私はそれを想起した。

竜宮の使い、鮫、鯨のような形状をした魚も現れる。

ネオはそれを従えて、アクアリウムの切っ先を槍のように向けると、テトラ・フォビアの口腔へと向かっていった。

嫌な音が響いた。

そう、わざわざ、下水らしき場所へ誘い込んだのだろう。

電気と水の浸透性によって、テトラ・フォビアの全身に大量の電流が流れた。

そして、ネオの肉体にも。

しばらくすると。テトラ・フォビアの黄土色をした肉片が大量に散乱していた。
それらは、しばらくの間、ぴくりぴくり、と動いた後、すぐに動くのを止めた。
ネオは下水の上に浮かび上がり。まるで、死んでいるかのようにだった。
心臓は動いているみたいだった。私は勝敗の行方を見終えると、そこを後にした。
「炎猫のそこにはお前が行けよ、私はスキゾ・フレニアの目を使って見ておいてやるから。まあ、今は少しだけ休め、急いでいった方がいいに決まっているが、お前自身が決着を付けるべきだと思うからな」

正直、下水の臭いに耐えられなかったので、ネオを置いてその場を後にしようとする。
すると。私達二人に対して呟く者がいた。
「まだ、生きてますよ」
ぼんやり、まるで異世界の物、映画の出来事でも眺めるように、ネオの闘いを見守っていた私に対して告げる声が聞こえた。

フードの付いた、白黒のパーカーを着込んだ女だった。
「フレイム・タン……。甘名は、人を殺せるような奴じゃないんだよ」
「そうみたいですね。だから、私は生きていますみたいですね。どうも。………もっとも、肋骨は無茶苦茶、へし折られてしまいました」

フレイムは口から血を吐きながら、苦しそうに言った。
「折れた肋骨が肺に突き刺さっているのは分かるな」
「いいえ、あの、人傷付ける度胸無いんですかね。ただ、地面に落ちた時に、口の中から出血するような落ち方しただけですよ。どうも、全体的にあばらはイッテいるみたいなんですけれど、肺に突き刺さらない折り方をしている」
「まあ、下手すれば肺は死ぬからな」

これから、どうする？ と私は彼女に訊ねようとした。
だが、彼女の瞳を見ると、どうやら彼女の今後の未来はもう決めたみたいだった。
「まだ生きてますよ」

「ああ、………そうか、お前自身の事を言っているんじゃないんだな」
私達の足元では、ぴくりぴくり、と気色の悪い色をした肉片達が、また動き始めていた。
「ネオ・ロギスムは理解していたみたいですね、こいつの能力は人の恐怖を媒体として、変形、能力を発揮する事が出来る事を」

「そうみたいだな。まあ、私の能力も似たようなものだ」
「負のエネルギーを吸収して、砲弾に変えるんですってっけ？」

ああ、そうだ。と私は両手から瘴気に満ちた光を生み出す。が、すぐにそれを収めた。
フレイムは大きく息を吸い込んだ。

そして、勢いよく散らばった動く肉片達に吹き掛ける。
もはや固定物の状態を維持出来なくなっていたテトラ・フォビアはそのまま焼け爛れ、消滅していった。此処はいい加減に、臭いから離れましょう、と彼女は私の手を引いて歩く。しばらくすると、噴水が置かれている公園らしき場所に着いた。歓楽街周辺では珍しい場所だった。珍

しく、破壊の後も少なかった。

「ネオの手柄を横取りするなよ、私はせっかく思い留まったのに」と私は苦笑した。

フレイム・タンは滔々と述べた。

「貴方のようなタイプも嫌いで、私、いつか殺してやろうと思っていました」

「私はお前の性格が本当に分からない。もしかしたら、初めてあった人種のタイプのタイプなのかもな。

本当は、もっと何かを話してみたかった気がするんだけどな。覚悟は決まったのかよ？」

決まりましたよ。と彼女は少しだけ、微笑した。

「ええ、吸血鬼の花嫁として、虚無の代弁者として。主が死ねば、己も死ぬべきなんです。そう

、私は、神の不在証明の為に、自らを神とすべく、キリー口フに為る為に今、死ぬ」

フレイム・タンは持っていた短剣で自身の喉を突く。

彼女の喉から赤い、赤い花が咲いた。

私達二人は、しばらくの間、お互いの両眼を凝視し合っていた。

沈黙に耐えられなくなり、私は独り言を始めた。

「アイス・エイジ、っていい場所だと思うか？」

そんなわけないでしょう。彼女は口から大量の血を滴らせながら、答えた。

炎猫が出現する前から、此処には主が必要だった。此処を統べる主がね。

「もしかしたら、お前の主は良い世界を作ってくれたのかもな」

かもしれませんね。

「お前とはもっと話したかったよ。ネオともな、もっと話したい。いや、後は炎猫だけだ。もう疲れたから、やっぱりブラッドに倒してもらおうよ。あいつって良く分からない殺人の美学持ってやがるから、殺してくれる時と、殺してくれない時があるんだけどさ。今回、もうここまで殺しまくったんだ。炎猫ぐらいぶち殺してくれるさ。……ネオは、炎猫との因縁を捨てるべきだろうな。まあ、一般的に見たら、その方がいいのかもしれない」

貴方は意外と仲間思いなんですね。意外過ぎますよ、もっと冷淡だと見ていました。

「いや、私には分からないんだ。友情とかさ、実は物凄くどうでもいい。考えようとも、思わないな。私の性格についてはどうでもいいんだ。私はただ、素直に生きているだけだ」

なる程、ただ正直に生きているだけですか。

なあ、アイス・エイジの奴ら、って何でこんな顔すんのかなあ。

私は不思議な感覚で彼女を見ていた。

彼女は既に事切れていた。

私はずっと本当にただの独り言を喋っていた。

私は彼女の遺骸を噴水の傍に寝かせたまま、後にした。

もう、此処で生きている住民は殆どいない。みな、重い鉄の針によって、潰されてしまったのだから。

私はネオを起こそうかと思ったが、やめた。しばらく休ませる事にした。

代わりに私は、ブラッドの元へと向かった。

……あの、フレイム・タンが。ブラッド・フォースですら倒す、と述べた彼女が。

自殺などという行為を行うとはとても思えなかった、が。

十

宮殿を破壊して、彼は中に入っていた。私は私の使い魔の眼でその光景を観賞していた。

「炎猫。後は君だけだよ」

ブラッド・フォースは言った。

「君の配下はみんな死んだ。残るのは君だけだ」

「いいのよ、いいのよ、ブラック・スペルに止めを入れたのはあんただけ？　アイス・エイジのこの惨状も、彼に対しての壮大で荘厳な鎮魂歌になったわ。あんたには感謝している。朽闇もアース・シェイカーも殺してくれてせいせいしているわ。もう、本当に死んで欲しかったのよ、あいつら全てね。でももはや、あたしには、そんな事はどうでもいい」

炎猫はブラッド・フォースへ振り向こうともしなかった。

ブラッドは持っていた処刑傘「スケアクロウ」を下げる。

傘の先端から刃が現れていき、やがてそれはドリルのように回転していった。

ゲームオーバーだ。私はそう思った。が。……。

「ブラッド・フォースあんたに言いたい事がある。あんたはそれに答えてくれる？」

「興味無いよ。君を始末すれば終わるだけだから」

ブラッド・フォースは無視して続けた。

炎猫の方へと近付いていく。

「肉体に意味は無いって思った事はある？」

炎猫も彼を無視して喋り続けた。

「肉体に意味は無い。私は手足が無いまま生を受けた。ずっとそればかりが、劣等感だったわ。私は被差別民の中でも、特に差別された。奇形片輪ばかりのアイス・エイジですら、あたしは価値が低かった。……」

……そう思っていた。

炎猫は金切声でそう叫んだ。

「人間が意味を持つものは”脳”だ。それだけが絶対的な真理であり、無数の腕達に囲まれながら、あたしは想像の世界の海へと飛び立っていった。五体満足でも白痴だった、かつての夫のようにはなりたくない。そうなるぐらいなら死ぬ。あたしがあたしという価値であるのは、この頭蓋骨の中身だけなんだ」

ブラッドは私の方を見る。困惑しているようだった。私自身が困惑しているため、その感情が彼にも伝わったのだろう。

「ブラック・スペルにはこう言ったわ。

あたしがあたしの誇りを失った時にはあたしを殺せ。

銃で脳を吹っ飛ばせてね」

今すぐ、炎猫を処刑すべきか。ブラッドと私は思い悩んでいた。

どうせ、彼女の発言なんて聞く意味なんて無い。少なくとも、初めから私はそう決めていたし、その意思もブラッドに伝えていた。

「ブラッド・フォース、貴様には感謝しているのよ。貴様の疫病鉄の処女、あれを見て、あたしのイマジネーションは完成した。再び、絶対的な殺戮を見て、あたしは扉を開く事が出来た。リフリジレイターが何によって召喚されるのか、あたしはずっと考えていた」

私の友人は今、思い悩んでいる。私が思い悩んでいるからだ。

こういう違和感に対する疑問。何か理解出来ないものに対する戸惑い。

それこそが、私達の人間らしい部分なのかもしれない。

「ブラック・スペルのいない世界になんて価値は無い。私は、リフリジレイターの世界へ行く」

ブラッドはそれを聞いて、歩みを止めた。

私とブラッドは今、初めて“彼女の何かを理解していた”。

「君はル・マルシャンの箱を開けたというわけだね」

ブラッドは、映画ヘルレイザーのネタを引き合いに出して。静かに言った。

「お前にはわかるまい、今、あたしは最高に幸福なんだ。お前は心が死んでいる。お前は永遠に幸せにはなれないのよ」

炎猫は楽しそうに答えた。

アイス・エイジには数万の鉄の処女が並んでいた。

炎猫、私、そして、それを作り出したブラッド。その光景を眺めて、三者三様とも、共に感銘の想いを共有していた。私と炎猫は素晴らしい美術品に触れ、感情の洪水に触れた感動。ブラッドは芸術家として、素晴らしい作品を大成した後の精神の浄化。

どじゅぶう、という音が聞こえる。

炎猫の喉元には小さな針が二つ程刺さっていた。犠牲者の悲鳴を好まないブラッドの、いつもの流儀だった。針はそのまま彼女の下顎を貫き、舌を半ば引き裂いていた。

炎猫は、あっ、と邪眼の赤い瞳を見開いた。

じゅぶりっ、という音がして。彼女の両目にも二つの針が突き刺さる。

クラシック・ホラーは無情に彼女の機能を潰していった。

ブラッド・フォースは炎猫に向かってスケアクロウを振りかざした。

彼女の耳元まで傘は伸びていく。

ぼじゅん、と音がした。

どうやら、二つの鼓膜が破れる音だと思われる。

ドリルは回転して、彼女の肉も骨も粉碎していく……筈だった。

炎猫の唇は笑っていた。

歓喜に満ちていた。

血は出なかった。

ブラッド・フォースは怪訝そうな顔をしている。

炎猫の身体が、映像となっていたのだ。

彼女自身も、自身に今、起こっている現象を理解する。

「そうか……君は別次元に飛んだのか。……もう手遅れなんだね」

“何が手遅れなのか”。無論、手遅れなのは、彼女の方ではない。私達の方だった。

彼女の肉体は消滅していく。

「あたしはイマジネーションそのものになるのよ。ねえ、ブラッド、お前は……、」

羨ましいよ、と聞こえたような気がした。気のせいだろう。彼の口から、そんな言葉が出る筈が無い。私はそう信じたかったし、そう確信したかった。ブラッドは何をもって羨ましかったのだろうか。本当に徹底した意志、幸福とは何かを手にした彼女こそが、まさしくブラッドの深層心理が望んだものだったのだろうか。

最後に、炎猫の言葉が何度も何度も残響していた。

お前は負けているんだ、何故ならお前は心が死んでいるのだからな、とブラッドに告げた言葉が。

残響していた。

数分の間、私は一体、何が起こったのか理解が出来なかった。

ただ、黒い。何か酷く黒いものが渾然一体を生き埋めにし、埋め尽くしていた。

森羅万象が遍く黒く塗り潰されていく。

大宇宙。光輝も酸素も何も無い、大宇宙からの無数の鉄槌。

流星群だったと思う。

降り注いでいた。

ブラッドの芸術品も無残に粉々に粉碎されていった。

貧困街の周辺にまで向かっていった。

爆裂していく巨大建造物。世界中のあらゆる全てよりも美しい。

アイス・エイジはぶち壊れていった。

世界は滅びていった。

第七章 冷凍装置

肅清の裁きは下された。全ては無へと還る時なんだ。もう、此の世界に存続価値なんて無い。だから、消えていくのよ。炎猫が、そう告げているような気がした。

最初に飛び出して行ったのはネオだった。

私達、二人に遅れて、炎猫の元へと辿り着いたのだった。

ネオは大剣を振るって、変形していく炎猫を、或いは炎猫を纏う周囲を薙ぎ払った。

多分、それが拙かったのだろう。

ネオの身体が、幻影のようにぼやけていく。霞のように、肉体が空ろに。

私は少しだけ、混乱した。何故ならば、ネオの方も、私を見て、驚いているようだったから。微かながら、耳に届いた。ヒスイ、お前の身体が消えていっているぞ、と。勿論、私の肉体には何の異常も見当たらなかった。

「お前も見たんだな。前に一度、リフリジレイターの姿を」

メビウスは言う。いつの間にか、私とブラッドの隣に魔王は立っていた。更にその後ろには、甘名もいた。

炎猫を包む空間が変形した後。

最初、何が起きているのか分からなかった。

ただ、天空がとても綺麗だった。

まるで花火。とても綺麗な花火がこちらへと迫ってきているようだった。

ネオは、一度は、テトラ・フォビアに解体されたにも関わらず復元した。

ネオは。巨大な花火に包まれていた。

何が起こったのだろう。大きな赤色をしたものが、辺りを覆い尽くしていた。

確かに、私の目には焼きついてた。ネオの身体が、落ちてきた灼熱の太陽によって、焼き尽くされ、消滅していくのを。

嗚呼、本当に死んだのだな、と理解した。死んだんだな、という事実が私の思考を多い尽くした。

「ネオは死んだのか……？」

私はメビウスに訊ねた。

「私には救う事が出来なかった。ネオ・ログスムは、リフリジレイターの影響下にあった。私には無理だった、済まない」

表情にこそ変化は無いが、メビウスは、泣き叫んでいるようでもあり、怒り狂っているようでもあった。

「お前らはせめて護ろう。私の力が及ぶ範囲内ならな」

メビウス・リングの周辺で、小隕石が発生する。

天変地異。

大竜巻が巻き起こる。

地盤が震動して、岩石が空へと舞い上がる。

大地が崩壊していく。溶岩の海が顔を出した。

なおも、隕石は飛来していく。

マグマ。大量に噴出していく破壊的な赤いエネルギーが大地の飲み込みながら侵略していく。絶対的な裁きのような惨状。生きとし生ける何物をも埋め尽くす侵略の帯。

やがて、天空も引き裂かれていた。隕石の名残のように空が割れると、次の瞬間に、稲光が線状に蠢いていた。次々に、稲妻の神であるトール神ごときの鉄槌は落ちていき、灼熱の上を放電していた。

ブラッド・フォースはあれに巻き込まれたら死ぬかもしれないね、と淡々と呟いた。

世界の崩壊は続いていた。

アイス・エイジだったものは、かつてない蹂躪を受ける。

住民達にとっては、世界の崩壊そのものだ。

それでも、何故か私達は生きていた。

私達三人。私と甘名と、ブラッド・フォースは、呆然としながら、あるいは無感動に、世界の崩壊を眺めていた。

「この様相は一体、何なんだ？」

私はメビウスに訊ねる。

「おそらく、炎猫が願った事なのだろうな。混沌を齎すりフリジレーターに願った事が、今、起こっているんだろう」

「そうか。……。何もかも、全て消えて終わればいいのだと」

願っていたのだ。炎猫は。

こんな世界なんて滅びてしまえばいいのだと。たとえ、此の世界の主になったとしても、炎猫にとって、此の世界は憎むべき対象でしかなかったのだろう。

分かりやすい世界の終末の情景。それを私達は眺めていた。

目の前で、確実に天地が崩壊しているというのに。私達には、何の影響も及ぼしていないようだった。ただ、ネオは死んだ。その事実だけが私の脳裏を過ぎった。

メビウスが私達三人に告げた。

「お前達の空間を今、ずらしている。物理的な攻撃からは、私の力でお前達を護れるだろう。だが、空間の崩壊が少しずつ、起こり始めた。こればかりは私にはどうにもならない。お前達の力のみで逃げろ。お前達の命はお前達で護れ」

メビウスの肉体は、振れていく。それと同時に、やがてその姿は消失した。

私は遠くにいる、甘名の顔を見る。彼は顔面を蒼白にして、がたがたと震えていた。

気付けば。

暗黒空間の只中を、私達三人は漂っていた。

私と。甘名と。ブラッドの三人だけが。どこまでも広がる無限の暗闇の中を浮かんでいた。それぞれが、遠くに離れているために、やがて三人が三人とも別々の方角へと消えていくだろう。私は、とっさにスキゾ・フレニアを出現させる。このまま、二人の処へ向かおうとした。おそらく、片方くらいは、腐敗竜によって救う事が出来るかもしれない。

瞬間。甘名の顔が、近くに現れた。どうやら、次元を転移する彼の力を使ったようだった。そして、私達二人は、そのままブラッドの方へと向かった。

ブラッドは、今、どんな気分なのだろうか。

最強の殺人鬼である彼にとっては、すでに最強、であるという自負、世界の全てを支配出来たかのような優越感など、当に価値など無く、そんなものなど殺してしまった。

では、そんな彼が更なる最悪なるもの、巨大な破壊者と出会った時、どんな感覚なのだろう。きっと、彼の事だから、どうでもいいのだろうと思う。

彼にとって、世界の階層などどうでもいいのかもしれない。あるのは、他者か自分か。

だからこそ、彼にとって己より強大なるモノ、概念との出会いはあるいは、崇拜の対象なのかもしれないし、やはり無関心の対象でしかないのかもしれない。彼にとって出会った更なる最強はメビウスだった。リフリジレーターはどちらなのだろう。

ブラッドは、やはり何の感情も宿らない表情で暗黒空間を漂っていた。生きる意思、生き残る意思はあるのか、混沌が生み出した負のエネルギーを自身の能力によって、どうにか掃っていた。

巨大な流星群の一塊が、私達三人を襲った。甘名の瞬間移動は間に合わなかった。

私は肉体が四散し、死ぬ、と感じた。私の不死はまったく完全じゃあない。再生が間に合わなかったり、脳を叩き潰されたりしたら、簡単に死んでしまうのだ。

しかし、どうもまだ、私は生きているようだった。

気付くと、轟音と共に、ブラッドが巨大な傘、スケアクロウを広げて、小隕石を押さえ込んでいた。めりめり、と嫌な音がする。スケアクロウの回転音じゃあない、ブラッドの両腕の碎ける音だ。

甘名は、ブラッドの肩に手を掛けた。

私達三人は、別の場所へと移動していた。

ブラッドが、甘名がいなければ、私は死んでいた。私は、.....何処までも無力だった。

ここには、金属の成分があるよ。だから、僕は安心した。

ねえ、否睡、此処でもオレの能力が使える。だから、何とかなるよ。

二人は、私の顔を覗き込むように見ていた、何だか私は、そんなに酷い顔をしていたのだろうか？ 今は、彼らの励ましが。とにかく。

私は唇を血が出るほど噛み締める。

そして、スキゾ・フレニアの腕で、二人を抱き締めた。

「珍しいね。否睡がこんなに素直になるなんて。あんなに捻くれていて、歪んでいる君が、分かりやすく、.....」

「捻くれていない。私はいつも素直なだけだよ。ああ、今、照れてもいないからな」

はいはい、と甘名は笑う。

幾つもの、黒い渦が周囲を取り巻いていた。

ブラック・ホールだね、と甘名は唇を引きつらせた。あの渦に飲み込まれれば、何処に行くのだろうか。永遠に、闇の中を放浪するのもかもしれないし、リフリジレーターの世界の中に行くの

かもしれない。

今、私達は宇宙誕生の物語でも見ているのだろうか。

私のスキゾ・フレニアの翼で三人を持ち上げて、甘名の次元転移の能力で黒い穴から逃げ回り、ブラッドのクラシック・ホラーで、防護壁を作っていた。

生き残れないかもしれない。私はその時、ふと感じた。

陶醉だろうか。あるいは酩酊かもしれない。何処か懐かしい、生まれた時の記憶のようなものを感じた。嗚呼、もしかしたら死ぬ瞬間というものはこういうものなのかもしれない。生まれる事と死ぬ事。その両方は、同じ感覚なのかもしれない。誕生して不可解な世界に投げ落とされた時の感覚と消滅していく瞬間の何にも勝る喜びのような。

違う世界に行くのだと、違う世界に来たのだ、という感覚。

ブラッドの防護壁が壊れた。

灼熱の焰を纏った岩石が私達の元へと向かっていった。

甘名は次元転移をしようと私達三人に手を置こうとした。隕石の方が私達に命中するのは早そうだった。

スケアクロウが回転していた。

嫌な、そう嫌な音を立てて回転していたのだった。

ブラッドは、巨大な傘を隕石にぶつけていた。

傘の柄を持っている彼の手は、奇妙に振れていき、血飛沫が舞っていた。赤、赤、赤。

甘名は一瞬、呆気にとられていたが、すぐにブラッドの肩に手を置いて、次元転移を試みる。

転移した場所もやはり暗黒空間だった。甘名の能力の限界だった。彼は自身の視界で見える場所にしか生物を移動出来ない。私達は途方にくれた。どうすれば、ここから抜け出せられるのか分からなかった。

痛いか？ と私はブラッドに訊ねた。

分からない、と彼は答えた。

それから、何時間、もしかしたら、何日かもしれない。漂っていたらどうか。

闇の終わる場所に着いたようだった。そこで終わりだ、と私は確信した。

私達三人は見た。

リフリジレイターの姿を。

そいつは、道化師の姿をしていた。

端正な顔に、酷く歪な嘲笑を浮かべた顔。

その顔は、隣にいるブラッドや甘名に似ているようでもあり、私自身に似ているようでもあった。いや、もしかしたら、本当に同じ顔をしているのかもしれない。

混沌を撒き散らす主の姿は、道化師か。私は合点がいった。

何もかもが、世界の全てが馬鹿馬鹿しい遊び道具にしか過ぎないのだろう。全てが娯楽で、全ての価値も、意味も消滅していった時、おどけた道化でしか無くなるのだろう。

誰からだったのだろう、その像を憎しみを持って壊したくなかったのは。

気付けば、私は全力でそいつに向かって、キルリアン・ストリームを放っていた。

ブラッド・フォースは、大量のナイフをそいつに突き刺していた。
甘名は、何処からか取り出した双剣を、そいつに向かって投擲していた。
にたにたと憎たらしい笑みを浮かべながら、そいつは何処へと消えていった。
私達三人は顔を見合わせる。三者共、どうやら同じような気分を味わったのだろうと確認し合う。

†

メビウスによって助けられたのだろう、私達は。
魔王がどうやって、混沌を倒したのか、あるいは追い返したのかは分からない。
分からないし、もう興味も無い。ただ、私達は助かって、どうやら息をしている、その事実だけがればいい。とにかく、私達は生きて、あの暗黒と世界の崩壊の世界から抜け出してきたみたいだった。でも。
結論から言おう。
アイス・エイジは完全に滅んでしまった。
おそらく時間にすれば、数秒から数十秒の間であろう。あるいはもっと短い時間であったのかもしれない。
大量の隕石が降り注いだのだ。
クレーターだらけになった大地を私は眺めていた。
混沌。混乱。無秩序。
メビウス・リングは言った。何が起こるか分からない、と。
街はほぼ完全な廃墟と化して、生きている者などいないようであった。
最初に見つけたのは、水色の服を纏った人物だった。
「どうやら、生き残ったみたいだよ。僕達は」
ブラッド・フォースは、さも、どうでもよさげに言う。
私は彼の両腕を見る。骨のへし折れた手が、とても痛々しげだった。
「痛いかな？ ブラッド」
「うん。痛いよ」
相変わらず、その表情には何の感情も無く、深い虚無を湛えていた。
「本当は、心の方が痛いのか？」私は訊ねた。
初めて、ブラッドは、表情らしき表情を見せる。それはとても、困惑しているかのような、思い悩んでいるかのような。
「お前は、心が死んでいるか」
ブラッドは呟いた。それは、炎猫が、最期に彼に告げた言葉、呪いだった。
彼は彼女との戦いに負けたのかもしれない。何よりも、一番、彼に刺さるナイフを、炎猫は見つけ出してしまったのだろう。
人形の肉体故、表情を表に出す事は出来ないが、深い感情の起伏を醸し出すメビウスと。

人の肉体を持ちながらも、感情が死んでしまい、人形のようにってしまったブラッド。

私は、どちらの方に似ているのだろう。私もまた、感情を巧く表現しない。余りにも、負を両目に焼き付け、体内に取り込んできた。私もまた、感情を少しずつ、失っていったのかもしれない。

生命の始まりにして、生命の終わり。破壊にして創造。

メビウス・リングは、この世界の構造の全てを理解しているのかもしれない。

秩序と混沌。

二人はこれからも戦い続けるのだろう。私には関係の無い事だった。

私は私のままで生きていくのだろうし。これからも変わりはない。

醜いものと美しいものを突き詰めていけば、結局の処、同じ物に行き着くのかもしれない。誕生と死が同じ物であるのなら。きっと、世界は何処までも幸福であるだろう。

静寂の中に私達はいた。何も無い静寂。

かつて巨城だった場所はただの一個の丘陵へと変わっていた。町並があった場所は、何も無い無の砂漠だ。

地平線が広がっていた。何処までも何処までも広がっていた。

車で駆け抜けたいな、と思った。けども、車を駆る人間はもういなかった。

丘陵には。

何か、肌の白い、長い黒髪をした裸の一人の人間がそこにいた。

女だった。何か、嘆き悲しんでいるようだった。

顔を見る。炎猫だった。

彼女には、四肢があった。

リフリジレーターを召喚した代償だったのだろう。

冷凍装置は、彼女から彼女のもっとも大切なものを奪っていった。

彼女の両目は黒かった。あの赤く濁った、焰の邪眼も失われていた。

今の彼女はただの人間だった。

新しく生を受けた彼女は、とても惨めで。私は強く唇を噛み締めた。

彼女はブラッドに向かって、殺して欲しいと告げた。

ブラッドはとても悲しそうに、ナイフを生み出して炎猫へと向けた。けれども、空中に静止したナイフは彼女の喉に突き刺さる前に地面に落ちた。ブラッドは首を横に振った。

彼女は泣き叫んだ。

しばらく、泣き叫ぶ彼女を私達は眺めていた。一体、何を言えればいいのだろう。

彼女にとって、彼女自身の此れまで生は一体、何だったのか。

私は、彼女の肩にそっと手を置いて、彼女の“負”を読み取った。

私は、小さく溜め息を吐くと。首を振り、彼女の傍を離れた。

そして、彼女はしばらくして絶壁へと上った。そして、そこから飛び降りた。

酷い音と共に、悲鳴が上がった。しばらくして、何も聞こえなくなった。

ブラッドはとても、悲しそうだった。

彼は泣いているようだった。彼に人間らしい感情なんて無いのだと人は言う。私は人間らしい感情とは何だ、と思った。私は彼に対して何もしてやれないだろう。そして、炎猫は何処までも救われなかったのだろう。

私はブラッドに何かを告げようとした、けれども、きっと彼を苦しめる事だから止めた。

彼女の四肢を、切り落とせばよかったんだ。

彼女は自身の肉体が、奇形である事を何よりも誇りにしていた。

心が死んでいる、と炎猫はブラッドに告げた。その言葉に、彼はこれからも苦しめられていくのだろうか。

大切な物って何だと思う？ 私は甘名に訊ねた。

甘名は言い淀んだ。

私には炎猫の気持ちがよく分かる、と呟いた。

もし、私がただの少女に戻ってしまったら。ただの少女として、新たに生み落ちれば。あるいは、少年かもしれない。いや、ただの人間に戻ってしまったら。

私は深く、絶望して、もはや此の世界では生きられなくなるのだろう。

別に、キルリアン・ストリームもダンス・マカーブルもスキゾ・フレニアもいない。そんなものは別に私の存在の証明じゃない。

けれども、私の無性の身体。それは、更に云えば、私の不死の肉体よりも、もっともっと大切なものなのだから。

私はまるで私の死体を見るかのように、心の中で、それを吊った。花でもあれば、手向けていたのかもしれない。花。女の香りによく合うもの。

私は首を振った。何だか、とても酷い寂寥感に襲われた。

ネオの笑い顔が、脳裏に浮かんた。そして、消えた。

私は、酷い喪失感に苛まれながら、此の場所から今、少しでも早く、離れたかった。

†

それから、しばらくした後の事だ。

私と甘名は次元砂漠アイス・エイジへと赴いた。

花が咲いていた。

風が少し、吹いていた。

空は青かった。

大地に少しずつ、緑が増えていた。

炎猫が飛び降りた崖も。沢山の緑に包まれていた。

ああ、ここは私のいるべき場所じゃない。

ここには、死の匂いがしない。

ここで私は生きられない。

私は強い諦観と共に、目に見える景色の全てを見据えた。少しだけ、強い郷愁の想いに襲われる。

「どちらだと思う？」私は甘名に問うた。

「此の世界を此のような形に変えてしまったのは」

もう少しだけここにいたい。甘名はそう言った。

ただただ、風が吹いていた、荒廃の地に吹く風は、どこまでも清々しく、そして、眩しい太陽とよく合った。髪が揺れる。

緑の丘が広がっていた。花々が咲き乱れている。燦々と照り付ける日差しは、まるで祝福の歌のようだった。閑散としている長閑な午後だ。

夜には、天蓋となった星々が煌めくのだろう。

私は悲しみに打ちひしがれた。嗚呼、あんなにも美しかった景色達が、何故、このように変わってしまったのか。

私は生の中では生きられない。

私達は、かつてアイス・エイジであったものを後にした。

賛美歌の唱和のように、小鳥達が囀っていた。私はもはや、何も耳にしたくは無かった。

甘名はこれらの景色がとても綺麗だと告げた。

私はこれらの景色を何もかも全て壊してやりたいと呟いた。

私は、ここでは生きられない、と強く念を押して更に告げた。

でも、世界の終わりに相応しい景色だよね、と甘名は言った。

確かにそうだな、と私は呻きながら、少しだけ笑った。

【シャドー・フレアとフェンリル】

一つの。

世界が滅びる前の、対話。

一人一人のしている世界が余りにも違い過ぎた。不眠症のしている光景と。

我々がしている光景は、何処までも違っている。それは紛れもなく、間違いがない。

「冷凍装置を最初にアイス・エイジに召喚したのは。おそらく、ネオ・ロギスムだったと思うんですよ。ネオの思念が。冷凍装置を此の世界に召喚した。私の幼少時の頃だったんでしょうけどね」

「オレの次元を飛び越える能力は、『フェンリル』と名付けている。お前のは？」

「シャドー・フレア。名付けるのが嫌だったのだけど。インソムニアさんと話していると、何となく自分の存在の証として、能力に名前を付けてみてもいいと思った」

白黒格子のフードを被った女は。何だかとても詰まらなそうな声だった。

地底だった。腐った臭いが充満している。ガスの醜悪な。景色が歪んでいる。

「炎猫にイマジネーションを与えた電波ジャック事件ってのが存在していて。炎猫はクレイアニメーションって云っていたけども。調べたんですが。あれは、幼いネオ・ロギスムの能力の暴走が引き起こした現象。彼？ 彼女？ 両性具有のネオ・ロギスムの持つ。幽体と電気エネルギーを混合させた能力がアイス・エイジの電線。電波中継装置に乗って、ネオのイマジネーションがそのまま映像美と化して中継された、のだと。私は考えています。それが、炎猫の思想に大きな影響を与えた」

「だから、ネオ・ロギスムと炎猫は因縁が強いのか。オレは結局、分からなかった。否睡にも語らなかったみたいだ」

「ネオは炎猫の思想で大量の仲間を失いましたからね。自ら手足を捧げたりして。まあ、因果というものには本当に分からない」

皮肉過ぎて、笑いも涙も出ない。

「リフリジレイトは、誰の心にも存在しています。私達が能力、と呼ばれる物、が暴走した現象の事をリフリジレイト。永劫の零度の孤独なのです。その世界に私は行くつもりは無い。炎猫の能力が暴走して、巨大な精神のブラック・ホールに飲み込まれますよ。思想と思念の中に押し潰されていく。ブラッド・フォースの弱点は、思想が無い事ですね。彼が一番、生き残れないかもしれない。彼が一番、脆いと私は思っていて」

「本気でそう云っているお前は、本当に怖い……」

「覚えておいて下さい。フェンリル。甘名。次元を超える能力者。世界はカフカやカミュの文学そのものなんです。不条理。それだけなんです。我々は何故、存在しているのか。貴方とは敵対していますが。実は私にとって、それはどうでもいい」

フードの下から、顔が現れる。

「最初から、テトラ・フォビアの能力の影響下には無かった、とだけ云っておきます。ヘイト・クライム様と私とで、欺いていた、というわけです」

「お前とは。そういえば、一晩中。酒場で。文学の話をしたな」

ふと、そんな言葉が漏れた。印象深かった。

「私達の気持ちはブラック・スペルやインソムニアなんかに、分かりませんよ。分かって欲しくなどない。貴方も、そうなんでしょう？」

その少女は、酷い陰影を抱えていた。

少女といっても、オレよりも十歳以上は上だと云う。

特徴的な程、顔色は悪い。

どうやったら、こうも汚くなるのかと思う程、髪は錆のようにくすんでいる。

際立って醜い、という顔のパーツ、あるいは身体のパーツを有しているわけではない。

しかし、全体的な印象として何処か醜女な印象を与えてきた。

「私は自分に女を感じる時が無いんですよ」

彼女はオレが云いたい事に気付いたようで、それを返してきた。

「インソムニア。否睡さんはとても綺麗だと思います。人形みたいな、というよりも人形そのものの顔ですし。球体関節人形が歩いているというか。多分、男女共々、人気があるのかなあ」

「いや、あいつはあいつで結構、嫌われるタイプだって。あの皮肉が性根の悪さがさ。何で、長年友人やってるんだ。いつも、雰囲気や遊女や風俗嬢みたいだって悪意の悪口言われるんだけど。おかしいだろ、似てないだろ。全然、違うだろ」

はあ、と彼は溜め息を吐く。

「私程じゃないですよ。私は本当に男にも女にもモテませんからね。まあ、多分、性的対象のターゲットングから完全に外されていやがる。非合法で危ないスナッフ・ビデオ作成した表向き風俗ビデオ専門店の、精力旺盛な脂みたいな豚野郎からお前は女としての魅力が根絶している。不細工なシーメールや糞尿、デブ、老婆が大好きな異常倒錯者がいても、お前を好きになる男はいない。どういう人種の性欲も何故か刺激しない、ってまで言わせましたから」

「それはそれで凄いな。それも何かの能力なのか？」

「.....いや、何故か普通に.....。あんまり他人を賞賛するのは屈辱ですが。貴方は中性、インソムニアは無性って感じだけど、私の場合は無機物くらいに、思われていそうで。最高な事にそんな自分が大好きなんです。とにかく、性的対象に出来ないそうです。私、女性からも男性の代替品として、好意を持たれませんし」

「確かにお前からは、女独特のこう何と云うか。よく分からないけども、所謂、魅力、というものが無いんだと思う。オーラが出ているというか」

「私は糞尿以下で、屑以下で、コクローチ以下ですからねえ」

くっくっ、と邪悪で暗鬱な笑い。

「気持ちの悪いマゾ女だったら、ある種の男が喜びそうな言葉を吐くなよ。お前の場合は強い悪意となって響くんだな。なんだ、そのハイテンションな声音は。しかも、お前、そんな自分が好きで好きで溜まらないっていう感じもするしな。マゾヒズムというか、ニヒリズムを感じる」

「糞尿も屑もゴキブリもまさに豊穡を象徴していると思うんですよ。糞尿、堆肥によって泥土が栄えて植物が生長して。屑の山より文明が生まれる。ゴキブリって知ってますか？ フリークなペット好きの間では、生殖を司る神のごとく崇められている。育てると面白いように増えに増えて楽しいそうで。私がそんな高尚な者にされてはとても困るなあ。ねえ、甘名さん。私は外れているんですよ」

強烈な影が。負の渦潮が渦巻いている。

そいつの周囲には。黒い翼を持った影が幾つも現れた。

「これも、能力の一部に決まっている。もう、分かってますよね？」

「簡単に、倒せる相手だとは思っていない」

「私は人肉を喰らって、幼少時代を過ごした。食べる物が無かったから。その嫌悪感から、私の力は生まれた」

フレイムは呟く。涙すら流しかねない、嗚咽。

「貴方ごときに、本気の私が負けるとでも？」

「だと、思った。だから、オレは汗をかいている」

これから、炎猫討伐の際に、二人だけでアイス・エイジの次元砂漠を歩いていた。オレの空間を飛び越える能力『フェンリル』で。

「貴方は容姿がニンフォ。まあ、アイス・エイジのニューハーフで性玩具の奴らに似ていますから」

「ああ、ニンフォは見た。酷い鬱状態になってさ。あの街は凄いな。女が男を犯すのか、サドの夢見た情景なのかもな。否睡と同じように、何故だかオレもサドは読めない」

穢い排水工場の廃液の悪臭がする工場内部で、オレとフレイム・タンは第二ラウンドを始めていた。此处には、否睡のフォリ・ア・ドウの視界も、ブラッド・フォースのクラシック・ホラーの眼も届かない。オレ達は、似ていない。憎んでいる。

「甘名さん。ブラック・スベルが死んだ事を知って。私は不思議な気持ちなんですよ。あれ程、忌み嫌っていたのにね。分かっている、私の醜惡な部分を現存在として行動に移し、代弁していましたから」

「お前の能力を教えろよ。お前は、本当にヴァンパイアなのか？」

「違います。私は.....他人の能力を借り、奪い取れるカニバリズム能力『シャドー・フレア』。黒い呪文や、炎猫から借りた力を使っているんですね」

「ヘイト・クライムってのは？」

「私に決まっているでしょう？ 私が孤独の中で作成した人格。対話する為に作成したね。でも、甘名、否睡。私は貴方達ともっと早く出会いたかった。そうすれば、敵対せずに、生きていたのだろうけど」

「オレもそう思う。しかし、もう、駄目なんだろう？」

「ええ。もうじき、炎猫も死んで、アイス・エイジもぐちゃぐちゃになる。私の目的も達成される。けれども、私は.....私自身の穢れは拭えない」

汚水に混じって、時折、肉片が排出される。それから、機械の残骸。ゴミ捨て場。

まさに、此処がアイス・エイジそのもの、アウトサイドされた者達の掃き溜め。

ハンター達が競って賞金を掛けた。秩序の復活の為に。しかし。

ドーンはほぼ、壊滅状態だろうなあ。青い悪魔や影の炎には勝てないんだから。

「私は、今日、死にます。貴方に殺される」

「オレは殺人が、嫌いだ。人なんて殺した事が無い。ブラッドかインソムニアを選べよ？ 何で、オレだ？」

「綺麗な顔したその顔ですよ。その顔が赦せない。貴方はそんな安全圏にいるのが。……違うか。単純に、貴方を憎悪しているから」

「ドストエフスキーはお互いに大好きだ」

「そうですね。私はニコライ・スタヴロギーン」

「そうか。ドストエフスキーならば、オレはイワン・カラマーゾフが好きだ……」

「戦いましょう。答えは、そこにある」

リフリジレーターとは何なのか？ とフレイムに訊ねた。メビウス・リングは世界の調和みたいな概念だから、何も答えなかった。フレイムいわく、リフリジレーターとは、つまり、人間を超える思想、神を超える思想より召喚された混沌。ではないのか？ との事だった。つまり、その大宇宙は、炎猫の精神エネルギーの産物なのだ。何処までも滑稽劇を繰り広げる道化。知の総体を超えた存在。

オレ達は戦闘態勢に入っていた。フレイムの先ほど、手を抜きまくった。戯言交じりの、ふざけた。構えとはまるで違う。何も動かない。オレも、何も動けない。

彼女は、片手を上げた。光弾。それは。

キルリアン・ストリーム。負を生体エネルギーの奔流に変換した力。こいつは。

排水溝の入り組んだパイプの奥にある、巨大タンクに命中した。大量の汚物が、また広がる。オレはすでに、空間転移を起こしていた。

「アイアン・ランス」

いつの間にか、フレイムは片手に複数の拳銃を召喚していた。弾丸は発射されている。能力は、否睡から聞いている。弾丸は、何処に行った？

オレはフレイムの斜め背後に着地する。そして、廻し蹴りを入れた。無駄だった。オレの足に、三本の弾痕が生まれている。痛みが……。再び、右手に剣を転移させる。

「私、ブラッド・フォースにも匹敵すると思いますよ？ 情念だけは。インソムニアさんに言ったら、笑われちゃいましたけどね」

彼女の背中から、蝙蝠の翼が生えている。シャドー・フレアの実体存在としてのエネルギー。黒い翼の吸血鬼の君主達が、オレを取り囲んでいた。こいつら一体、一体は弱い。本物の王は。

「世界が残酷過ぎて、何故、私は貴方を倒さないと行けないのかが分からない。虚無の花嫁に身を投じてから。私は考え続けた」

アルコールの匂いがする。気付くと、オレは浴びていた。

「お前、よくもオレの服に。好きなブランドなのに」

「今から、燃え上がる。覚悟はいいですかね？」

オレは空間転移をする。そしてそのまま、フレイムの背中を切り付けた。彼女は無傷。

沈黙。金属が折れる音。

オレは。剣をへし折られていた。負けた。

「本物のヘイト・クライム様を、今、私の中で降ろしています。私は、今や主がある。それだけで、私は生きていける。私は神を自らの中で作成した」

「強いな。だから、お前は強いのか」

「最強の青い悪魔にも。神である円環にも勝つ自信がある。少なくとも、青い悪魔さんの方は、敗北するんじゃないですかね？ 処で、……」

彼女は、周囲にある。自身の分身である影達を掻き消す。

戦いは終わった。結局の処、負けたのはオレの方だった。

「処で、私は。此の世界が終焉した後、私は死んだ事にしますよ。インソムニアの、ダンス・マカーブルとフォリ・ア・ドウをお借りしたので。自害して。また復活する」

「そうか、処で。オレの負けだよ」

「私はブラッド・フォースに為れると思います？」

「思わない。お前はお前の生きるべき道を探すべきだ」

「そろそろ、炎猫が死ぬ間際でしょうね。それまでに、私の死の証明として。誰かに立ち会って貰おうかと。否睡さんがいいかなあ。不死能力まで借りる事に成功した事は知っているかもしれませんが。まあ、あの人なら。私が生きていても売らないでしょうし」

十

リフリジレイターの暗黒の渦の中に飲み込まれた。

これは、炎猫の情念なのだろう。

リフリジレイターという実体存在は、実は存在しない。

只、世界の不条理と。自身のエゴが融合し。実存の崩壊が起こった事により発生する現象の事を、冷凍装置、と誰かが名付けたのだろう。

あの、殺人鬼すらも。不眠症すらをも、飲み込んで。

夢の中の世界だったのかもしれない。

現に皆、生きていた。インソムニアの友人を除いては。

ウロボロス。円環を見た。オレは暗黒の。氷の世界の中で。

メビウス・リングの正体は、世界。時間そのものなのだ、という事を理解する。

リフリジレイターとは、時空に生まれる亀裂なのか。

二つの神を同時に見て、オレ達は正常に生きている。

炎猫は死んだ。狂ったからか。それとも、正常だったからか。

春風の荒涼が見えた。

オレは手足の在る、炎猫の飛び降り自殺の死体を見る。

彼女の思想が何であったのか。オレには、理解する事がまるで叶わない。

手足の無い、選民思想。只、少しだけ。無情さよりも、淋しさを感じた。

何故、我々は分かり合えない。

炎猫が何によって生きていたのかは、知らない。何を美德として。何の意志の元に。

殺人者と革命家の思念の残骸が。草原に咲いていた。オレはその場所を後にする。

オレとフレイム・タンは友人に為れたのだろうか。よく晴れた情景が広がっている。オレは、炎猫の飛び降り死体を目撃している。オレの思想が崩れ去る時、オレもまた。死を迎えるのだろう。不眠症は世界をなおも、嘲笑していた。馬鹿で頭がプディングの黒い呪文に共感出来る、と云っていた。

神話は崩壊していく。アイス・エイジという。思想そのものの都市。

穢い泥土より。只、綺麗な小川と。夕立と。そして、花々が生まれていた。我々は何処までも違う。

世界の終焉の情景を、オレは見ていたのだった。

十

私は死から再生する。

土砂の中から、私の肉体は這い上がった。まさしく、一度死んでから生き返る、ヴァンパイア、そのものだな、と思った。

インソムニアの不死の能力、ダンス・マカーブルを借りていた。

不可思議なまでの感覚。まるで、新たな誕生の儀式のような瞬間。

死んでから、生き返った後。目の前にしたのは。炎猫の自殺だった。

私は笑う。

私の前に立っていたのは、不死と殺人鬼の二人だった。

ブラッドの方は、何かを理解しているようだった。不眠症の方には、分からないだろう。

二人は、私を見て。呆然と立ち竦んでいた。

「ブラッド・フォース、お前の負けだ。炎猫は生の存在証明の為。思想の為に自殺した。お前の方がまさしく、手足の無い人形そのものだな。何が、最強の殺人鬼だ。そして、私は勝った。炎猫も黒い呪文も死んだ。私は自由だ」

「お前とは、いずれ。決着を付ける」

不眠症は呟く。

「テロリストが。アイス・エイジは滅びた。炎猫が。お前が、ブラッドに与えた傷は拭い去れないだろうな」

強者と弱者が回転する。炎猫はブラッドに勝利し。そして、私は炎猫に勝利した。

不死も出し抜いた。

クラシック・ホラーの能力は私までは届かないだろう。

キルリアン・ストリームも、無駄だ。

「手足が在るなら、自殺する。それが、炎猫の意志だ。彼女は、手足が無い事によって、エリー

ト足り得る。神なのだ。リフリジレーターを発生させて、手足を獲得した。それを確認して、自殺した。彼女は彼女の存在の証明の為に自殺した。つまり、そういうわけだ。感情の無い殺人鬼、死を嘲笑う不死、お前らの存在は、お前らの生は。これから、炎猫の自殺、という概念で、どう折り合いを付けるんだろうな？」

十

「世界の終焉の情景、そのものだな」

オレは告げた。

アイス・エイジの王、炎猫の死体を前にして。不死と殺人鬼は思考停止し。影の炎は晒っていた。オレにはどうする事も出来ない。

「炎猫の思想とは一体、何だったんだ？」

「弱者と強者の回転。そして、私はその思想を吸収し、炎猫に克った」

「ネオ・ロギスムが死んだ」

インソムニアが吐き捨てる。

「お前の思想は、テロリズムなんだろう？」

オレは影の炎に確認する。

「で、どうする？ 空間。炎猫が自由意志の証明で自殺したから。不死と殺人鬼は、敗北感で一杯なんだろうな。そして、私はお前達を利用して。アイス・エイジを滅ぼした。一番、勝ちを手にしたのは私だ」

彼女は、服の中に閉まっていた拳銃を放り投げる。それは空中分解して、バラバラの部品となった。黒い呪文の、銃の形に酷似していた。奪った物なのだろう。

「私はもう行くよ。私は私の生きる目的を新たに探す為に」

オレは世界の終焉の情景を眺めていた。

E N D